現代アジアの肖像 ASIA 6

金日成と金正日

革命神話と主体思想

徐大粛 著
古田博司 訳

朝鮮民族の抗日パルチザン運動を革命神話に変えて、数度の粛清とソ連・中国の支援によって北朝鮮で絶大な権力を掌握するに到った金日成(一九一二～一九九四)。朝鮮戦争は今に到る南北分断をもたらし、中ソ紛争によって国際的孤立をよぎなくされたため、金日成は主体思想を掲げて自主路線へと乗りだした。父の死去に伴い権力を継承した金正日(一九四二～　)は、人民に忠孝一心を強要する思想に、主体思想を改造したものの、飢餓と経済破綻の危機にさらされている。

新アジア創世記
20世紀各国のリーダーによる苦闘の軌跡と未来像

朝鮮民族の受難の世紀のなかで,
金日成はいかにして
主体思想を構築したのか?
父の絶大な権力を継承した金正日は,
難局を打開し,民族統一の悲願を
達成するために,何をなすべきか?

岩波書店

定価2500円(本体2427円)

現代アジアの肖像 6

金日成と金正日

革命神話と主体思想

徐大粛 著
古田博司 訳

岩波書店

刊行にあたって

二一世紀はアジアの時代といわれています。日本もアジアの一員として大きな可能性と役割が期待されています。しかしながら、いったい日本人はいまのアジアをどうとらえているのでしょうか？　目前の経済不況を打開する新市場、あるいは半世紀前に自壊した「アジア主義」のイメージが重ねられてはいないでしょうか。

戦後のアジアは、厳しい冷戦体制に縛られ、朝鮮戦争、ベトナム戦争などにみるように、しばしば冷戦が熱戦に転じ、日本の豊かで安定した生活とは裏腹に、貧しくとも栄誉ある孤立か、大国への従属に耐え忍ぶかの、苦渋に満ちた選択を迫られました。

この現代アジアの「創世記」ともいうべき苦難のドラマを正しく知ることによって、私たちは初めて近隣諸国との友愛と共存を構築し、「アジアの時代」を展望できるのではないでしょうか。このドラマの演出者は、解放・革命・独立の栄光を資産として、民族自決の悲願に燃える国民を総動員し、新たな国家の建設を企図したリーダーたちです。

シリーズ「現代アジアの肖像」は、近現代の東アジア・東南アジア・南アジア各国を代表する指導者に焦点をあて、禁忌とされた事実をも掘り起こし、神話化された歴史の実像に迫ります。

現代アジアは独立から開発にいたるステージをへて、いま二一世紀にむけた新たな課題と取り組んで

います。

民主と人権を求める国民の欲求にいかにこたえるか？

発展と環境保全のジレンマをどう解決するのか？

ナショナリズムの魔性を超えていかなる地域的国際的共存をはかるのか？

そして日本はいかなる役割を果たすのか？

小社は、本シリーズの刊行を通して、新世紀アジア発展の未来像を読者諸賢とともに考えてまいりたいと願っています。

岩波書店

目　次

装幀　戸田ツトム＋岡孝治

序章

金日成は、二〇世紀の朝鮮の政治指導者として、確固たる地位を占めている。たとえ朝鮮半島の北半部に過ぎないとしても、そこに住む朝鮮人民を半世紀にわたり統治した政治指導者として、朝鮮分断の歴史に巨大な痕跡を残した人物である。おそらく、李朝末期の朝鮮国王を含む今世紀の朝鮮の政治指導者のなかでも、金日成は朝鮮政治史に最も大きな影響を及ぼした人物といって過言ではないだろう。

金日成は、二〇世紀を力強く駆け抜けた。朝鮮王朝が亡び、日本が朝鮮を植民地化した後に生まれ、弱冠二〇歳にして抗日運動に参加し、初志一貫、日本人に屈服せず武器を取って戦った。朝鮮国滅亡後、朝鮮民族の独立運動を担ったすべての独立闘士たちがそうであったように、金日成もその抗日運動において、外国人からの多大な支援を受けていた。彼は中国人・ソ連人と手を結び、日本の満洲侵略時から朝鮮解放のその日まで、満洲の原野で不屈の武装闘争を貫いた。満洲の厳冬酷寒をものともせず飢えと闘い、朝鮮独立のために強大な日本討伐隊に立ち向かったのである。その抗日遊撃戦は日本軍に打ち破られ、ついにはソ連沿海州に後退することになったのだが、そこでも金日成はソ連軍の訓練を受けつつ抗日闘争を継続したのであった。

第二次世界大戦終結後、朝鮮が解放され、南北に分かれてソ連が北半部を占領することになると、金日成はソ連人により選出され、三三歳という若さで北朝鮮の指導者となった。この時から一九九四年七

月の死亡に至るまで、ほぼ半世紀の歳月、彼は北朝鮮を一人独裁の形で治めてきた。彼は国家の主席であっただけでなく、北朝鮮に住む朝鮮民族の首領として、全朝鮮民族の三分の一に当たる二千余万の北朝鮮人民を率いてきた。

金日成は分断朝鮮を統一するべく戦争もし、解放された朝鮮に共産政権を打ち立てるべく社会主義政治体制をも樹立した。その間、自己の政敵を無慈悲に粛清し、彼なりの政治思想も造り上げ、外勢を排除し、朝鮮人民の衣食住問題を解決せんとした。自主的な国、朝鮮の正統性を保持する国を造り上げようと努力したのである。このような一連の事業を、当代に自力更生で完遂することができぬと予測するや、長子金正日を後継者に選び、自己の事業を継承させようとした。

現代アジアの他の指導者に比べ、金日成は自己の業績に関する多くの著作を残している。彼の『選集』、『著作選集』、『著作集』などを総合すると、五〇巻を優に超える。北朝鮮の政治・社会・経済・文化などいかなる分野でも、金日成が言及していない部分はない。しかし自分自身の私的な記録に関しては、彼は多くを残すことができなかった。八〇歳になった年、すなわち一九九二年から回顧録『世紀とともに』の執筆が開始されたのであるが、一九九四年までの二年間に全部で五巻が出版された。金日成が死亡する二カ月前に、第五巻が出版され、第六巻は死後七カ月が過ぎた一九九五年二月、世に出たのである。

生前に刊行された五巻の回顧録は、金日成の家族の背景、出生、自分の少年時代を回顧し、やがて抗日闘争に立ち上がり、遊撃戦を盛んにしていた一九三六年までを記録している。ここには金日成の抗日

遊撃運動のうち、最高の抗日遊撃戦とされる普天堡戦闘は含まれていない。回顧録はこの時点まで、北朝鮮の公式発表の歴史と食い違わぬよう書かれている。金日成の死後出版された第六巻は普天堡戦闘のあった一九三七年を回顧するが、これはもはや、金日成の述懐をもとに書かれたものではないように思われる。一九三七年は、金日成がパルチザン遊撃戦を盛んに行っていた時期であり、いわゆる「共匪」の頭目として満洲の原野に名を轟かせていた時期であるが、回顧録第六巻にはすでに金正日を偶像化しようとする痕跡が顕かに見て取れる。当時、まだ金正日は生まれていなかったばかりか、金日成は将来の妻、金貞淑と結婚もしていなかった。亡くなった金日成の回顧録第七巻が、一九九六年七月に継承本として出版されたけれども、それは、第六巻の内容からして既にかく不充分なものなのである。これはもう既に金日成の回顧録ではない。

このようなわけで、金日成は自己に関する私的な記録を、多く残すことはできなかった。一九四〇年代の初め、ハバロフスクにおける野営時代、解放と帰国後の活動、朝鮮民主主義人民共和国の建国過程、朝鮮戦争、北朝鮮における派閥闘争、中ソ紛争時の北朝鮮の立場、主体思想の成立過程、そして自己の後継者に対する党内論争など、自分が過去に行ったことについての深い回想があったはずである。それだけではない。自らの抱いた希望と抱負に対する自己批判、やりきれなさ、それらを回顧することもできずに彼は死んでいった。金日成の業績、そして朝鮮に彼が造り上げた政党、政府、経済建設、文化発展などはある程度は知られてはいるが、彼の採ってきた政策が鎖国的な閉鎖政策であるために、金日成の過去五〇年間にわたる政治史は容易に解読し難い。

はたして金日成は、いかなる国を造ろうとしたのであろうか？　彼の造らんとした国と、現在朝鮮の北半部に屹立する朝鮮民主主義人民共和国とはいかに異なるのか？　彼の行ったことどもは、どの面で成功し、どの面で失敗に終わったのだろうか？　彼が選んだ長男金正日は、父の後継者として北朝鮮を、はたしてどのように率いていくのであろうか？　父の志を継ぎ、父の為し得なかったことを代を継いで遂行すると言うならば、それは何なのか？　父ができず、子ができることとは何か？　金日成が二〇世紀の朝鮮の政治指導者であるとすれば、朝鮮人は彼の指導力にいかなる評価を与え、追従したのか？金日成は全朝鮮民族の首領であると自称し、北朝鮮人民は彼の領導力に従い、自己の一生を捧げて支持してきた。他方、韓国人たちは金日成の指導者像はもちろんのこと、彼の過去の革命の歴史まで認めず、民族分断の責任を追及する。しからば金日成をいかに評価すべきか？　彼が半世紀のあいだ懸命に努力し、造り上げた国と国民たちをどのように評価すべきであろうか？　はたして彼の後継者は彼の志に従い、北部朝鮮にいかなる変化を巻き起こし、いかなる国家を造ろうとするのか？　また金正日は、はたして自分の父親に認められるに足る、指導力と政治手腕を有する人物なのであろうか？

このような一連の問題を取り扱うことにより、金日成の指導者像が明らかになり、彼が造り上げた朝鮮民主主義人民共和国という国についてもさらに理解が進み、また我々が今後、金正日に何を期待することができるかについても理解することができるであろう。また、二一世紀の朝鮮民主主義人民共和国とその国に暮らす朝鮮民族が、どのように発展し、どこへ向かっていくのかということも予測できると思われるのである。

この本は金日成や金正日の伝記ではない。また北朝鮮の政治や経済の発達を学問的に記述したものでもなければ、学術的な歴史記録でももちろんない。金日成という指導者が、所与の朝鮮半島の政治環境のもとで、いかなる政治を行い、朝鮮の国土の半分を占めて暮らす朝鮮人民をどのように導いてきたのかということを平易に叙述しようとするものである。そして金日成が造り上げた政治思想を引継ぎ、五〇〇〇年という長い歳月に成就しえなかったことどもを、彼の息子がいかに解決していくのか、主体思想は将来、北朝鮮の発展にいかなる指針となるのかについても考察する。

いずれの国の民族であれ、その民族の指導者はその民族史の流れのなかで、その与えられた環境のなかで評価されねばならない。いかなる民族指導者もその民族が作り出したものであり、英国のチャーチルやドイツのヒットラーがかくあったように、朝鮮の金日成もまた、朝鮮民族が作り出した指導者である。そして彼は、自分が生まれ呼吸した二〇世紀という所与の歴史の流れのなかで活躍した人物である。我々が金日成や、二一世紀へと渡りゆく金正日の指導者像を素描するとき、彼らに与えられた環境と与件において、彼らがいかなる政策と思想によって朝鮮民族を導いてきたのか、また、導いていくつもりなのかという点を考察しなければならない。

このような朝鮮民族史の流れからみると、二〇世紀は朝鮮民族の受難期であった。朝鮮民族は五〇〇〇年の悠久の歴史と伝統を誇っている。朝鮮民族の歴史記録が、はたして五〇〇〇年に達するのかという点には論争がありうるが、朝鮮民族史には燦爛たる文化遺産と固有の民族伝統がある。このような朝鮮民族史において、二〇世紀はまことに不幸かつ受難の時代であった。五〇〇年間の朝鮮王朝が終末を

万寿台公園に集う，金日成の逝去を悼む人々

迎えたかと思うと、日本の侵略により植民地となり、日本帝国主義を代表する総督が朝鮮の地に総督府を開き朝鮮民族を弾圧した。そして三五年という長い歳月、日本統治下にあった。第二次世界大戦で日本が敗戦した後には、今度は戦勝国だという米国とソ連が朝鮮半島を二つに分断し、南には米国が大韓民国という政府を、北にはソ連が朝鮮民主主義人民共和国という政府を建てた。このように分断されたまま、朝鮮は半世紀を越えた。二〇世紀に生じた朝鮮王朝の終末、日本の侵略、朝鮮の植民地化、そして分断の歴史は朝鮮民族の哀史である。

この間、朝鮮民族は朝鮮王朝から共和国に変わったのだが、このような変化も自己意志だけによるものではなく、半ばは他者の意志によってなされたものだった。朝鮮民族には、なぜ王朝の復古より西欧式の共和国の方がより適合的なのか、という思想的な支柱も説明もなかった。日本の帝国主義と軍国主義はアジアを席捲し、朝鮮民族の粘り強い独立運動も成功しなかった。日本を破った米国とソ連は朝鮮半島を二分し

て軍隊を駐屯させ、自分たちの政治思想に合致する政府を建てた。朝鮮民族は南に民主主義政府、北には共産主義政府を建て、第二次世界大戦以後に繰り広げられた米ソ冷戦では、最前線の突撃隊の役割を担った。

朝鮮民族にとっては民主主義も共産主義も、みな朝鮮の思想ではない外来思想である。このような政治思想の真意も把握できぬまま、これらの外来の思想のために朝鮮民族は同族相食む戦争を惹き起こし、自分の兄弟を殺害し、依然として分かれたまま、南北の分裂はいっそう確固たるものとなった。南で民主政治が円滑に実施されたかといえばそうでもなく、軍人たちが政治をする。かと思えば、北では共産主義政党が政府を建てはしたものの、無産者の天国ではなく、一人独裁の階級社会に「発展」していった。

我々が金日成や金正日の指導者像を素描するには、このような朝鮮民族の苦難を認識し、彼らが与えられた環境と朝鮮半島の情勢のなかで、はたしていかなる指導力を発揮し、いかなる国を建てようとしたのか、またどのように苦難を克服しようとしたのかという点が検討されねばならない。金日成はこのような朝鮮民族の受難の世紀に生き、分断された朝鮮の北半部を半世紀にわたって導いてきた人物である。彼は党を造り国を建て、民族を統べようと戦争し、その間政敵を退け、自分なりの思想を造りだし、朝鮮北半部の政治的経済的発展を試みた。しかし彼は、民族統合のために、法や政治制度を確固として打ち立てようとはせず、自分個人の偶像化を企図した。このような過程で彼は自分の過去や業績を捏造し、民族団結のための指導者像を造りだそうと苦心した。

このような試みは北朝鮮を治めるのに必要だったのかもしれないが、史実とは異なる。朝鮮半島の南では、金日成と北半部のこのような政策を酷評し、金日成と彼の業績、そして北朝鮮の発展過程をことごとく非民族的変化とした。このような南北間の葛藤は、金日成の過去や業績、彼の成就した事業の客観的な評価をいっそう困難にしている。もちろん彼らは、金正日への継承も異常なことであり、息子が父を継いで指導者になるということは封建社会の因習であり、二一世紀を志向する朝鮮半島にふさわしくないと批判している。

いまや金日成は逝き、今世紀もほぼ過ぎ去ろうとしている。はたして金日成の後継者、息子金正日は、次の世紀の指導者として、いかなる役割を果たすのであろうか？　金日成と金正日が、今世紀、朝鮮民族の苦難をどのように克服してきたのかをまず考察することにしたい。

第一章　革命神話

一般的に神話といえば、ある国の建国神話や、ある民族の発生起源に関する物語が思い浮かぶ。朝鮮の檀君神話や、日本の天照大神の神話にも見られるように、史実や世俗的論理としては説明することも納得することも難しい事柄である。しかしこのような神話からは、その国と民族の特殊なる思想と民族の性格描写がほのかに映えいづるものである。

たとえば、朝鮮民族の建国神話は天地開闢の創世神話を欠き、宇宙生成の世界観がない反面、天人合一の現世的な地上天国の国家建設理念が存在する。朝鮮の神話は易姓革命を前提とした中国の天命思想とは異なり、おおどかで民本的であり、現世主義的思想のみがあるという。また、キリスト教や仏教とは異なり、朝鮮民族の建国神話には前世観念や死後を思う来世観もなく、地上天国の建設理念がただ存する。伝統と伝説における建国説話には、征服や革命的闘争もなく、自主的な開拓精神が形作られ、平和愛好心が朝鮮民族固有の特性となったのだともいわれる。すなわち、朝鮮民族の「弘益人間」の概念は、平和愛好心の思想的発露であり、非侵略的伝統である、と。韓国で喧伝される「弘益人間」の倫理観は、友愛に依り他者の為を思う「依愛為他」の風習であり、自分より他人を優先する「先他後我」の姿勢へと発展したともいう。すなわち、このような思想的基盤は檀君神話に顕現し、朝鮮民族が志向するところは階級なき社会の建設であり、政治的には民本主

義思想を生みだしてきたのだと往々言われているのである。
朝鮮民族が歩んできた過去数千年の歴史を振り返ってみれば、神話や伝説をこのようには理解し難いのではあるが、朝鮮民族のみならず、日本民族の神話にも民族の基礎をなす思想についての解釈を読み取ることは可能である。時にそのような伝説の解釈は、その民族の愛国心と結びつき、強力な民族主義へと発展しうるものである。宗教的に発展すれば、その民族の祖先を崇拝する民族的宗教へと発展することもありうる。朝鮮の場合には檀君を宗主神として崇拝する大倧教、日本では国家神道へと発展した神道などがそれに該当するだろうが、このような神話がその国の民族に及ぼす影響は、まことに莫大なものであると言いうるであろう。神話や伝説は史実ではないが、その国の基盤をなし、その民族の政治的かつ思想的団結を企図するには大きな役割を果たすものと考えられる。このような側面から見れば、朝鮮の歴史では余りにも長い歳月、仏教や儒教などの外来思想が支配的思想であり続けた。近代に至っては、また別の西欧思想、すなわちキリスト教や米国の民族自決主義などが朝鮮の独立運動の後押しをしてきた。また解放と分断の後には、民主主義と共産主義のような朝鮮民族の思想ではない外来思想が支配的な役割を担ってきたのであった。
受難期の民族の思想を、朝鮮の建国神話に顕われる思想によって説明することは難しい。むしろ、朝鮮民族が平和愛好的であることは、歴史上、他の民族や国を侵略したことがなかったという点に認めることができる。しかし、それも朝鮮の隣接国家、すなわち中国・日本・ロシアがすべて強大国であったため、朝鮮民族がそれらの国に侵略不可能であったがゆえといった方が、説明としては

より真実に近いであろう。また朝鮮の民本思想も、朝鮮政治史に際立って顕われた思想であるとは、いまだ言い難い。朝鮮民族は思想的にも武力的にも他国から侵略され続けてきたのであり、そこから抜け出そうと民族を挙げて努力を傾けてきたのである。なおも国は分断状況にあり、理念を異にする二つの政権が民族を統治している。このような背景の下で、我々は現代朝鮮を解析しなければならない。

臆することなく事実を語れば、朝鮮には革命神話は存在しない。今日の朝鮮、二〇世紀の朝鮮には革命もなく、神話もない。ある人々は、朝鮮王朝末期より共和制が、二つ樹立されたことを革命的変化であると称しているが、これは革命という政治用語を誤用しているのである。朝鮮の変化は朝鮮人の革命によってもたらされたというよりは、朝鮮王朝を日本が植民地化せんと占領統治を行ったことによるといった方が真実に近い。また解放後、民主革命や共産革命が起こり、朝鮮民族が国を両分し二つの政権を建てたというよりは、第二次大戦後の戦勝国である米国とソ連が朝鮮半島を両分し、自己の主義・主張を支持する二つの政権を建てたといった方が正しい解釈というものであろう。

しからば、ここでいう革命神話とは、いかなる意味を内包するのか。ここでいう革命とは朝鮮独立運動、すなわち抗日運動を意味する。朝鮮民族には、日本帝国主義が朝鮮を侵略し征服したその境遇より独立し、民族と国家を取り戻そうと努力した抗日独立運動があった。このような独立運動が革命的であったというのは、朝鮮の独立運動家たちが朝鮮王朝の再建運動ではなく、共和国を打

ち建てようとしたところによって立つのである。しかし朝鮮の独立運動家は、その多くの犠牲と長期の粘り強い抗日闘争に成功したとは言えない。朝鮮独立のために、強力かつ侵略的な日本軍に対抗し、素手同然で長い歳月を闘ったということは、朝鮮民族の愛国心と民族愛を基盤とした荘厳なる闘いであったと言うことはできる。しかし朝鮮独立運動はその組織や力量からしても、日本軍を退け朝鮮に解放をもたらすことはできなかった。解放された朝鮮に一つの共和国を樹立することもできなかった。

朝鮮の解放は、軍事的に日本を退けたアメリカとソ連がもたらし、与えてくれた。そしてその対価として、自分たちの軍事占領地に、自分たちの主義・主張を支持する政府を建てて立ち去った。南北に分けられた朝鮮民族は、この二つの政府が各々自己の政府が朝鮮半島の唯一の政府であると主張してきた。このような歴史的事実を分析すれば、朝鮮には真の革命はなかったのである。朝鮮人が朝鮮で革命をし国を建てたならば、現在のような二つの相反する共和国を樹立することはなかったであろう。また朝鮮王朝から共和国へと変化をもたらす革命について、詳細なる正当化の説明があったはずである。

このようなわけで、朝鮮民族は彼らの独立運動に限界を有し、荘厳なる抗日運動を行ったのだが成功しなかった。またこのような運動は、その組織・発展・歴史・思想などのあらゆる側面から見て、革命的変化をもたらしたとは言えない。二〇世紀の朝鮮の変化は、日本・米国そしてソ連という強大国がもたらしたものであり、朝鮮民族が革命を通して成し遂げたものではない。

このように革命のないところに、いかなる革命神話がありうるだろうか。ここで用いられる神話という言葉は、朝鮮の檀君神話のように存在しない史実を、あたかも存在したかのごとく言うという意味を含んでいる。ある意味では、朝鮮革命に仮託して用いられる語句であるとも言える。もちろん檀君神話を宗教化し信奉する人々には、檀君が実在した人物であり、朝鮮王国の創始者であるのみならず、朝鮮民族の起源であると信ぜられるのだろう。北朝鮮の人々は、最近、檀君の遺骨までを発見したと主張する。しかし、このような発掘の真意は史実に起因するものではない。このような面で金日成の革命神話というものも、彼の抗日独立運動のあらゆる逸話を神話のごとく捏造し、事実無根の伝説を北朝鮮人民に歴史的真実として信じこませようと努力するという意味なのである。

しかるに、北朝鮮は金日成教を信奉する国ではない。北朝鮮では政治的宣伝扇動事業を国家的に行ってはいるが、まったくの神話を捏造したわけではない。このような意味で、金日成の革命神話は神話ではない。あるいは、朝鮮が分断され、相互蔑視と軽蔑の応酬の中から、北朝鮮指導者の抗日運動を格下げしようと編み出された言葉であるとも解釈される。分断初期から長期間、韓国では金日成という人物を認めず、彼はソ連の懐刀であり、共産政権を樹立するために利用された立場の者で、朝鮮独立運動や抗日運動の業績は何もないと主張してきた。ゆえに彼の抗日運動は神話のようなものであり、彼の革命はすなわち革命神話だというわけである。つまり、北朝鮮において韓国のすべての政治指導者を、アメリカ帝国主義者の走狗であると格下げするのと同様である。これらは朝鮮半島の地理的分断のみならず、精神的かつ政治的分断から生じた言葉なのである。

金日成逝去後の中央追悼大会

金日成には、抗日運動に参加したという業績が明らかに存在する。彼の抗日武装闘争は神話ではない。彼の闘争経歴を神話のように誇張し、宣伝するという面はあるが、まったく事実無根の作り話なのではない。より重要なことは、彼と共に抗日運動を行った満洲原野の遊撃隊員たちが、金日成の半世紀にも及ぶ北朝鮮統治の支柱となったという点である。北朝鮮の権力を握った政治指導者たちは、自分たちの過去の抗日運動を北朝鮮政権の神話のように造り上げた。そして、それを北朝鮮に樹立された朝鮮民主主義人民共和国という国家の伝統と、朝鮮独立の基盤であると説明している。このような意味で、韓国の「金日成の革命神話」という言葉が正当化されることもありえよう。しかし金日成は間違いなく今世紀、すなわち朝鮮民族の受難期に朝鮮に生まれた朝鮮人として、国が日本によって植民地化されたことに反対し、抗日武装闘争を行った愛国者なのである。かつ、朝鮮半島の半分ではあるが、

朝鮮民族の三分の一を超える人口を半世紀のあいだ治めてきた指導者なのである。

時には、金日成を朝鮮の偉大な指導者として造り上げようとする北朝鮮の学者たちと、彼を完全に否定したり、彼の抗日運動を認めまいとする韓国の学者たちとの間では、互いに相反する物語が書かれる。我々は、北朝鮮で行われている作業、すなわち金日成を二〇世紀朝鮮の民族指導者として浮き彫りにしようとする意図も理解できる。同様に韓国で共産主義や社会主義を根絶すべく、金日成と彼のすべての仕事を反民族的行為として一蹴する試みも容易に把握しうる。しかしこのような解析方法は朝鮮民族の分断から生じたものであり、真実ではない。

しからば真実はいずこにあるのか？　金日成とは、はたしてどのような人物であり、彼の抗日運動はいかなるものであったのか？　そして彼の抗日運動は、朝鮮独立運動とどのような差異を有し、全朝鮮民族の抗日運動にいかほどの比重を占めているのだろうか？

1　金日成の少年時代

金日成は回顧録のなかで、平壌西南近郊、大同江の畔(ほとり)、万景台で一九一二年四月一五日に生まれたといっている。父金亨稷、母康盤石から生まれた三兄弟の長男であり、その出生当時の名前は金成柱であった。彼の二人の弟は金哲柱、金英柱という。彼の出生地は今日、朝鮮革命の聖地となっており、北朝鮮人民はもちろんのこと、北朝鮮を訪れる外国の国家元首を始め、観光客まで皆が見学する。この大同

江の畔の風光明媚な土地は、富農李平澤の土地であった。金日成がここで出生した由来は、小作人だった祖父金膺禹が李氏の先代の墓の墓守として雇われ、そこに移住したからだという。

金日成の本貫（男子単系血族発祥の地と姓。以下（ ）内は訳者注）は全州金氏であり、彼の一二代前の先祖が全羅北道から平壌に移住してきたという。彼の先祖のなにがしかが、朝鮮王朝時代に官職に就いていた、あるいは愛国運動に加わっていた等の歴史的な記録はない。金日成の先祖は農民である。彼の父親の代になって、初めて基礎的な教育を受けたようだ。父金亨稷は、一八九四年七月一〇日生まれで、一五歳の年の一九〇九年に、二歳年上の康盤石と結婚した。母康盤石は、一八九二年四月一二日生まれで、七谷（チルゴル）にある小学校校長の娘だった。彼女はクリスチャンの家庭に育ったのだが、金亨稷も当時、アメリカ人宣教師が建てたキリスト教系の崇実学校に通っていた。彼は故郷と農業に背を向け、当時朝鮮人が多数移住していた満洲に渡り、漢方薬材を扱う漢方医として暮らしていたが、一九二六年、三二歳の若さで世を去った。金日成の母も幼子たちを連れ、夫の後を追って満洲に移住していた。そして、夫の死後六年目の一九三二年に四〇歳の若さで死亡した。母をも失ったとき、金日成は既に二〇歳になっていたが、二人

金日成の家族（画）．左より長男・金成柱（金日成），父・金亨稷，三男・金英柱，次男・金哲柱，母・康盤石

解放前の万景台．金日成の出生地

の弟たちは幼くして父母をなくし、孤児の身の上になってしまった。金日成は回顧録のなかで、父の死後、母が二人の弟を連れていかに苦労したか、鮮やかに回想している。

彼自身も襤褸と飢餓の線上で、当てどもなくさすらったが、父母のキリスト教の関係で、父の親友孫貞道牧師の家に助けられたことを回顧している。孫貞道牧師は自分の息子・娘で手一杯であったが、行く当てのない襤褸の親友の子、金日成を自家に引き取り、寝食の面倒をみた。孫牧師は、朝鮮キリスト教会史に広く知られた人物である。また、そのキリスト教内での名声もさることながら、世間に有名な子女を持つことでさらに名高い。二人の息子のうち長男の孫元一は韓国の海軍提督で、国防部長官まで務めた人物である。彼と金日成はほぼ同じ年輩で、少年時代の金日成は彼の家で兄弟のように暮らしていた。孫元一提督は既に世にないが、アメリカに移民した孫牧師の次男、孫元泰はまだ生存している。そして金日成が実の姉のように回想している孫牧師の娘は、現在韓国で暮らしている。金日成はアメリカにいる孫元泰を数次にわたって平壌に招き、自分たちの少年時代をともに回想した。何としても少年時代に孫牧師の家族から受けた恩を返したい。ついては孫元泰の八〇歳の誕生日を平壌で盛大に催したい。金日成は平壌を訪れた孫元泰にそのように約束していた。しかし

金日成はこの約束を守ることができず、一九九四年七月に死去した。そこで金正日は父親の喪中であるにもかかわらず、孫元泰を平壌に招き、八〇歳の誕生日の宴を張ったという。このような事柄から見れば、韓国で金日成を本物と認めないことは、政治的言動ではあっても事実に悖る。

日本帝国主義植民地下の朝鮮人は、親日派でない限りは誰もが苦労した。金日成の一家も平壌での暮しが成り立たず、満洲に移住した。金日成はそこで早くに父母を失い、ひとり窮地に陥った。彼の父母は彼にいかなる手助けもしてやれなかった。父が一八歳、母が二〇歳のとき金日成が生まれ、父は金日成が一四歳のとき、母は彼が二〇歳のときに死去した。金日成の生涯の業績から見れば、彼は独力で一家を成したのであり、いわゆる朝鮮の諺の「溝のどぶ水から生まれ出た龍」(鳶が鷹を生む)といっても過言ではない。彼は後に、自分の父母をいかほどかの独立運動家に仕立て上げたが、それは金日成の父母に対する孝行の表現であるにしても、事実ではない。

金日成の受けた教育を見ると、彼は満洲と朝鮮を出たり入ったりしながら、小学校を二度も転校している。最初は満洲八道溝で、次は平壌近郊の彰徳小学校、そして、再び満洲へ戻って撫松第一優級小学校を卒業した。中等教育については、朝鮮独立運動家たちが建てた満洲樺田県の樺成義塾を経て、吉林の中国人学校、毓文中学の二年までで終わっている。彼はこの時すでに、ここで抗日団体に中学生として参加し、警察に捕まり投獄された。彼は正規の教育をいくらも受けられなかったが、朝鮮と中国を出入りしつつ、朝鮮と中国の学校に通った。吉林の毓文中学校も中国人の学校で、ここで抗日精神を培ったようである。彼は幼いとき既に打倒帝国主義をいう団体や、吉林にあった朝鮮共産党傘下の満洲総局

に中学生で参加し、一九二九年五月に一七歳の若さで逮捕投獄されたのだった。この時、金日成は既に父親をなくし、母親と二人の弟からも遠く離れて独立の生活を営んでいた。

監獄を出た後、金日成は学校へ戻ることができず、満洲全域に散在している様々な抗日救国団体に参加し、自己の名を金成柱から金日成へと変えた。ここで我々がよく聞く話は、金成柱が、金日成という朝鮮の有名な愛国者かつ伝説的な抗日闘士の名を騙(かた)ったというものである。しかし、これは金日成の一九三〇年代の抗日の業績を無視し、彼の抗日運動を否定しようとする政治的な意図から出た言説であり、事実ではない。

朝鮮独立運動史には、「キム・イルソン」という名を持つ人々がある。彼らの漢字名には金一成もあり、金日星もある。しかし、かの有名かつ伝説的で、誰もが知っている愛国闘士「キム・イルソン」は、その中のどの人物かと問うても、韓国のいかなる歴史学者も独立運動研究家も誰々であると指摘することはできない。そのような伝説的な抗日闘士が実在したとすれば、朝鮮人のみならず、独立運動を抑圧しようとした日本人にもよく知られていたはずである。そのような人間は実在しない。朝鮮独立運動において、キム・イルソンという名前を持つ人物としては、北朝鮮の金日成主席に比すべき抗日闘争歴をもつ人物は存在しない。

金日成主席の真の姿を教えてくれる記録も存在する。彼は、北朝鮮で語られるようには燦爛たる革命家族に生まれたわけでもなければ、韓国で語られているようには正体不明の人物なのでもない。このような論争は朝鮮の分断から生じたものであり、史実ではないのである。

2　旧満洲国における抗日運動

学校を退学させられ、出獄した金日成は、その当時、日本の満洲進出を阻もうと各地に散在していた抗日団体に加入した。満洲にあった中国の非合法団体は様々な名前で知られていた。中国政府や官公機関から見れば、彼らは匪賊であり、匪賊のなかでも馬賊・土匪・共匪・紅槍匪などと呼ばれる一種のテロ団体のようなものが多数存在していた。朝鮮独立運動系列の武力団体にもいくつかの派があった。このような一連の団体は一つの組織体に統合されることなく、あたかも一九二〇年代に中国全域に割拠していた軍閥のように、きわめて狭い領域内で活動していた。中国の東北地域、すなわち満洲には、一九三〇年代の初めに日本が侵略し張学良を放逐して満洲国という親日政府を樹立したが、このような政治的・軍事的変化に反対し、中国人と朝鮮民族は抗日運動を展開した。

金日成の抗日運動は、このような日本の朝鮮侵略、満洲侵略、後には中国本土侵略に対する反旗を掲げ、朝鮮の独立と、日本の中国侵略排撃を目標とする運動に参加したものであった。そもそも満洲における抗日運動は、中国共産党員楊靖宇が、一九三〇年代初めから満洲に散在する遊撃隊員たちの統合を始め、一九三三年九月一八日、日本の満洲侵略二周年の日に中国人民革命軍を発足させたことに端を発する。彼はこれを根幹に満洲のすべての抗日軍を再編成し、一九三六年二月二〇日に東北抗日聯軍という抗日遊撃軍を組織した。

楊靖宇はその戦死の一九四〇年まで、この抗日聯軍を率いて日本軍に対抗した。東北抗日聯軍は単純な遊撃軍隊組織ではなく、中国共産党の指令下に動いた共産軍であった。のみならずモスクワの国際共産主義連盟、すなわちコミンテルンとも連繋を結んでいた。

日本が、このような中朝両人民の反抗をそのまま見過ごすわけがなかった。中国本土侵略の後方物資補給に重要な満洲国の治安を確保するためにも、東北抗日聯軍の鎮圧をおろそかにはできなかった。東北抗日聯

右より野副昌徳少将，北部邦雄中佐，満洲国治安部大臣(于芷山)

軍の討伐に立ち上がったのは、関東軍所属の野副昌徳少将であった。彼は当時、満洲国の治安を担当していた于芷山や、共匪討伐で名高い北部邦雄中佐と共に、時の日本円で三〇〇〇万円の予算を確保し、一九三九年一〇月から一九四一年三月末までの約一年半以内に、満洲の共匪を完全に掃討するべく本格的な討伐を開始した。討伐軍は共匪を武力的に掃討する方法と共に、東北抗日聯軍内の思想的に不健全な者や、甚だしい生活苦に喘(あえ)ぐ者たちを帰順させる方法を併用した。そして予定よりも早く、一九四〇年冬と一九四一年初めの冬季作戦により討伐を成功裏に完遂した。

この討伐戦で東北抗日聯軍の指導者たち、すなわち総司令官楊靖宇を始めとする各軍長たちは殺害され、あるいは帰順し、東北抗日聯軍は組織された抗日軍としての役割に幕を下ろした。この時生き残っ

た聯軍指導者とパルチザンたちは満洲国を離れ、ソ連の沿海州に身を避けるのだが、彼らはそこでソ連共産党の極東軍傘下の別働部隊に再編成された。この部隊は、ハバロフスク近郊のビャーツクというところのソ連軍野営部隊に留まり、東北抗日聯軍の第五軍軍長であった中国共産党員周保中の指導下に軍事訓練を受けていた。そして、第二次世界大戦末期にソ連が日本に宣戦布告し、日本が連合軍に降伏した後、ソ連軍と共に中国人遊撃隊は満洲へ、朝鮮人遊撃隊は北朝鮮へと帰ったのである。

金日成の抗日運動とは、この東北抗日聯軍で行った運動のことである。ここで我々がいささか指摘しなければならないことがある。この聯軍は間違いなく共産軍であり、満洲国に住む漢族(中国人)と朝鮮族が中朝合同で抗日運動を行ったものだが、指導的な役割を担ったのは、何名かの例外を除けば、すべて中国人であったという事実である。

したがって、東北抗日聯軍は中国共産党の抗日運動であり、朝鮮独立運動の一部でもなければ、朝鮮の抗日運動でもなかった。この東北抗日聯軍には、中国に住む朝鮮族が主に参加しており、中国に対する彼らの要求は、中国に居住する朝鮮族の自治権であった。これは中国の共産革命が成功した後に実現され、その結果として今日、中国東北の朝鮮族自治州が存在しているわけである。

中朝混成の抗日聯軍には民族的葛藤と不信も数多く生じ、裏切り者も実際多かった。また東北抗日聯軍は結局、日本軍に敗北したが、日本が中国本土を侵略していた一九三七年頃には、相当規模の軍隊に組織され、傘下の軍は日本側の推計でも一万五〇〇〇名に達していたという。このような中国の漢族と朝鮮族の合同抗日闘争は、朝鮮独立運動に影響を与え、朝鮮の解放にも寄与した。しかしこれは朝鮮人

が中国延安や満洲で独自に朝鮮の独立のために戦った抗日運動ではなかった。中国で結成された朝鮮光復軍や朝鮮義勇軍と東北抗日聯軍では、性格が根本的に異なる。もちろんこれらの運動のすべてが成功するということはなかったが、間接的に日本の究極的な敗戦と朝鮮解放に、同様に寄与したことは事実である。しかし彼らのそれは、東北抗日聯軍とは根本的に区別されるべき闘争である。

東北抗日聯軍第1路軍の兵士たち

ここに問題が生じる。北朝鮮の歴史学者たちは、金日成の抗日運動が中国東北抗日聯軍内で行われたものではなく、朝鮮人民革命軍という抗日軍が造り出され、そこで行われたものだと主張する。そして中国共産党は革命に成功した後、中国共産党の抗日の歴史から北朝鮮の国家主席となった金日成の役割を全部削除してしまった。東北抗日聯軍第二路軍軍長であり、第五軍の軍長をも兼任し、一九四〇年代にソ連に退いた周保中の回顧録には、東北抗日聯軍における金日成の記録が散見される。しかし、中国共産党公認の抗日の歴史では、金日成の役割については言及されていない。これは、友邦国の主席が中国の革命に参加していたということを、あえて明らかにすまいとするものとも取れる。あるいは、金日成や北朝鮮の歴史ではこのような事実を明らかにしていないという意思を尊重し、公式の言及を差し控えているようで

もある。韓国の朝鮮独立運動に関する見解では、金日成が朝鮮共産党や朝鮮独立闘争に参加したことがないことを引き合いに出し、彼の抗日運動を「革命神話」と断定する。しかし事実を把握すれば、金日成の旧満洲国における抗日運動は容易に理解しうる。

もう一つの問題は、北朝鮮では自分たちの指導者金日成の抗日運動を朝鮮革命闘争の主軸と見なし、彼の闘争だけを全民族を挙げての抗日闘争の基礎となった運動であるとする。つまり、彼の過去のパルチザン運動を誇張して物語るのである。すでに彼の死後、出版された回顧録『世紀とともに』第六巻には、彼自らが東北抗日聯軍の中国人指導者たちといかなる連携を有していたかが明らかにされている。すなわち彼と魏拯民との関係や、程斌の裏切りにより最期を遂げた総司令官楊靖宇、そして彼がともに戦った中国人、馮仲雲・曹亜範・方振聲等々。彼は疑いもなく東北抗日聯軍第二軍第六師の師長だったのである。彼は金日成将軍、朝鮮語の「キム・イルソン・チャングンニム」ではなく、金司令すなわち中国語の「チン・スーリン」と呼ばれていたことが明らかである。しからば金日成の真の抗日闘争は実際どのようなものであったのか？　次に、ざっと考察してみることにしたい。

3　金日成の抗日闘争

金日成の抗日闘争は立派なものである。彼は朝鮮独立運動史に、朝鮮の一愛国志士として立派な抗日闘争の業績を残した。北朝鮮では、多年にわたり刊行された朝鮮労働党史に関する文献を総合・編纂し、

彼らの正史『朝鮮労働党歴史』(一九九一年)を編んだが、そこでは金日成の抗日闘争を、武装軍事活動のみならず、それらを支える政治、思想、そして組織運動にまで及ぶものと主張している。しかしこのような作業は、「革命神話」を造り出そうとするものであり、史実を記録せんとするものではない。このような歴史の捏造を添加せずとも、金日成の抗日闘争は充分に立派な抗日武装闘争である。

北朝鮮では金日成の革命運動を、一九二六年一〇月に彼が「打倒帝国主義同盟」を組織したところから始まったとする。そしてこの組織が地下組織であるため、「打倒」の朝鮮語「TADO」の頭文字をとって「ティー・ディー」と呼ぶ。一九二六年といえば、金日成は一四歳の少年であり、金成柱だった時で、金日成という名では知られてもいなかった。このような一四歳の少年が帝国主義打倒を叫んだところで、帝国主義が倒れるはずもなく、共産主義が伝播されていくはずもない。このようなことは、北朝鮮の青少年の愛国心を幼い頃から育てようとするところに起因するものである。彼が吉林の毓文中学時代、抗日団体に参加していたときにも、彼の名は金成柱と記録されている。そして、当時このような集会を指導していた人々は、金日成よりはるかに年上の共産党員や専門学校の学生たちであった。

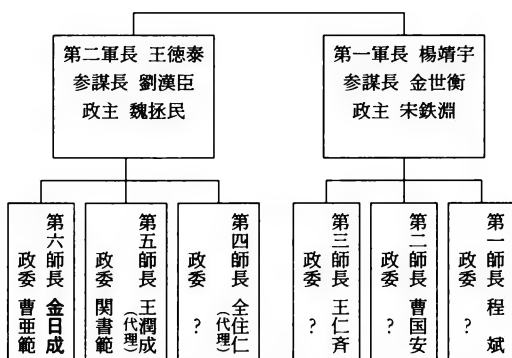
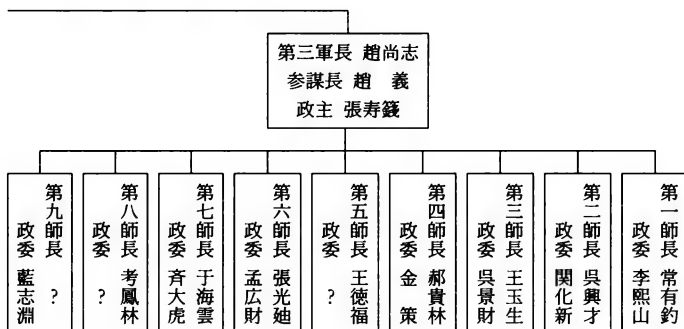
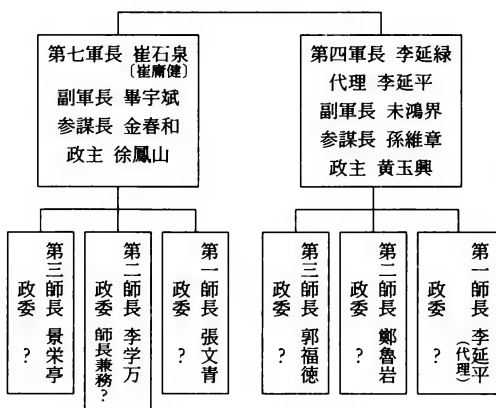
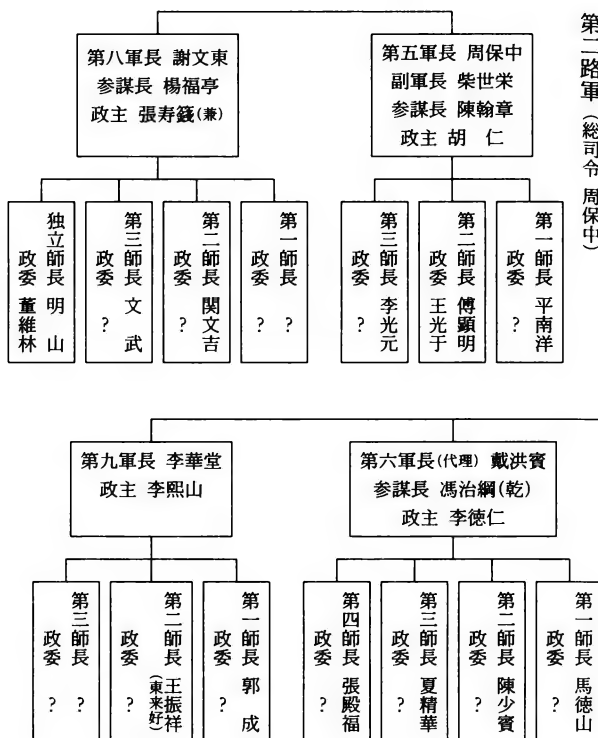
一九三〇年五月に彼が出獄し、卡倫近辺で教師をしていたとか、ある会議を主導していたという話も説得力がない。彼の最も大きな貢献はこのような些細な組織事業にはなく、抗日武装活動、すなわちパルチザン闘争にあるのであり、彼が並外れた戦いをしたということなのである。

彼がこのような少年期にすでに、民族の受難や共産主義に目覚め、武器を取って日本帝国主義の侵略に対抗しようとしたことは天晴れだと言える。おそらく彼の決心には、貧困な家族生活と父母の早期死

亡、当時の朝鮮人として生計を維持できず孤児となり、幼い弟たちを伴い社会の主流に入ることができなかったこと、また、毓文中学の中国人から受けた抗日教育などが大きな影響を及ぼしたものと思われる。

金日成の抗日武装闘争は、彼が二〇歳になった年、一九三二年四月二五日から開始されたという。北朝鮮では、金日成が遊撃隊を初め安図で組織し、近隣の都市、すなわち汪清・延吉・琿春・和龍・寧安・吉林・敦化・樺田等へと拡大・発展させたと主張する。これは、さきの打倒帝国主義の団体を組織したというのと同様の誇張である。しかし、金日成が二〇歳頃から武装活動を開始したということはほぼ認めることができる。彼は北朝鮮の言うように、初めから朝鮮人民革命軍の将軍だったのではなく、当時すでに年長の老練なる闘士たちの下で武装活動を始めていた青年であった。この頃、金日成が武装闘争を共に開始したと列挙している人物で、解放当時まで生存していた人物はほとんどいない。たとえば、金日成が武装闘争について夜を徹して討論し、共に始めるようになったという友、車光洙は、一九三二年七月に死亡している。また、金日成の部下で、北朝鮮に入って活躍していた林春秋も彼の回顧録『抗日武装闘争時期を回想して』のなかで、金日成が李英培・金哲熙と共に一九三二年春より武装闘争に入ったことを証言している。しかし、この二人のその後についてはいかなる言及もない。

ここで我々は一九三二年四月二五日という時点に注目したい。それは北朝鮮の人民軍が、自分たちの伝統を金日成の武装闘争運動の開始時点に遡り、創軍記念日を一九四八年二月八日から一九三二年四月二五日に変更したからである。朝鮮人民軍は一九七七年二月八日に創軍二九周年を記念した後、翌一九

第一路軍（総司令 楊靖宇）
第一軍長 楊靖宇
参謀長 金世衡
政主 宋鉄淵
第二軍長 王徳泰
参謀長 劉漢臣
政主 魏拯民
第一師長 程 斌
政委 ？
第二師長 曹国安
政委 ？
第三師長 王仁斉
政委 ？
第四師長 全住仁（代理）
政委 ？
第五師長 王潤成（代理）
政委 関書範
第六師長 金日成
政委 曹亜範
第三路軍（総司令 趙尚志）
第三軍長 趙尚志
参謀長 趙 義
政主 張寿籛
第一師長 常有釣
政委 李煕山
第二師長 呉興才
政委 関化新
第三師長 王玉生
政委 呉景財
第四師長 郝貴林
政委 金 策
第五師長 王徳福
政委 ？
第六師長 張光廸
政委 孟広財
第七師長 于海雲
政委 斉大虎
第八師長 考鳳林
政委 ？
第九師長 ？
政委 藍志淵
第四路軍（総司令 李延緑（代理）李延平）
第四軍長 李延緑
代理 李延平
副軍長 未鴻界
参謀長 孫継章
政主 黄玉興
第七軍長 崔石泉〔崔庸健〕
副軍長 畢宇斌
参謀長 金春和
政主 徐鳳山
第一師長 李延平（代理）
政委 ？
第二師長 鄭魯岩
政委 ？
第三師長 郭福徳
政委 ？
第一師長 張文青
政委 ？
第二師長 李学万
政委 師長兼務？
第三師長 景栄亭
政委 ？

東北抗日聯軍編成系統一覧表

司法省刑事局第五課・思想研究資料特輯第41号「満洲ニ於ケル共産主義運動」思想情勢視察報告集(4)，1938年5月

七八年に突如として創軍四六周年を主張し、四月二五日を記念日に定め変えたのである。それゆえ「一九三二年」という時点には、それなりの意味を看取することができる。

人民軍創軍日の遡行の方は、北朝鮮で造り上げられた話である。事実、金日成が武装闘争を行ったのは、朝鮮人民軍などではない。中朝混成の遊撃軍、中国人民革命軍であった。これは東北抗日聯軍の前身であり、第一路軍第二軍の活動地域は朝鮮人が多数住む南満洲であったため、おのずと朝鮮人が多く参加したのである。現在北朝鮮が、その存在を主張する朝鮮人民革命軍というものはなかった。また、金日成が始めからこのような中朝混成の軍隊に将軍として加わったのでもなく、この軍隊には金日成の同僚や上官にあたる朝鮮人もたくさんいた。たとえば、金日成が所属していた第一路軍の李紅光・朱鎮・全光や、他の地方で活躍していた李学万・崔庸健・金策・許亨植など様々な朝鮮の勇士たちが参加していた。しかし金日成は同僚や上官よりもよく戦い、東北抗日聯軍の末期には朝鮮人のなかで最も高い地位となった。日本人が彼の首にかけた賞金も最も高かった。

金日成は、彼が出獄した一九三〇年から様々な武装闘争を行ったものと信じられているが、その闘争の記録が日本や中国の文献に現れるのは、一九三四年末か、一九三五年の初めからである。これは中国人民革命軍第二軍が一九三四年三月に組織され、南満洲で活動を開始したのと時期的に符合する。金日成はまさにこの第二軍の所属であり、当時、第二軍軍長は朝鮮人朱鎮であった。朱鎮が民生団事件により、依蘭溝の日本警察に逮捕・処刑された後は、中国人王徳泰が軍長になった。一九三六年には第二軍と第五軍が共に戦ったことがあり、その時、金日成は第二軍の軍人として、第五軍の中国人軍長周保中

の下で戦った。このような中朝混成部隊には様々な問題があったが、そのなかでも重要なのは民生団事件という事件である。これは中国人が朝鮮民族を日本のスパイだとし、中国人民革命軍内で虐待した事件であった。

ここではこの事件について詳述しないが、民生団とは、満洲に住む朝鮮人たちが「共匪」の襲撃に耐えきれず、日本の憲兵と結託して日本軍の手先を中国人民革命軍に送り込み、彼らの動静と襲撃予定を調べあげるための団体であった。このようなスパイ行為が発覚するや、中国人は革命軍内の朝鮮人をすべて民生団員であると見なして差別し始めた。これは中朝合同の武力闘争に大なる悪影響を及ぼし、朝鮮人の立場を困難にした。金日成もスパイの嫌疑をかけられたが、彼が毓文中学という中国人学校に通っていたという経歴、それゆえに中国語に堪能であるという点などから、無事、苦境を脱しえた。その後、民生団事件は中国人民により、一九三五年三月汪清県大荒崴会議で討議され解決を見た。

それでは金日成の抗日武装闘争は、いかなるものだったのか。彼は満洲において、おおよそ一九三四年から一九四〇年までの約六年間を闘争した。東北抗日聯軍が日本の討伐軍に敗北した後は、一九四一年にソ連の沿海州に退き、そこで朝鮮の解放を迎えた。彼が行った重要な抗日戦闘は、ほぼ一九三七年から一九四〇年の間である。その最も大きな戦闘は、満洲で自分の遊撃隊を率い、朝鮮国境を越えて日本の警官を殺害した、一九三七年の普天堡戦闘であった。この戦闘は一九三七年六月に行われた。金日成が東北抗日聯軍第一路軍第二軍第六師師長のとき、自己の部隊員一〇〇名内外のパルチザンを率いて国境を越え、日本の国境守備隊警察を襲撃したものである。彼らは七名を殺害し、七名に重傷を負わせ、

一九三七年六月四日の夜をその地で明かし、翌朝、再び国境を越えて満洲に戻った。この戦闘に関し、過去北朝鮮で発表されたものには誇張がある。それは金日成の遊撃隊が一〇〇名を越える日本の警官を殺害し、六十余名を捕らえて捕虜としたというものであるが、もちろん事実に反する。金日成は回顧録『世紀とともに』第六巻で初めて、普天堡戦闘は大砲も戦車もなしで行われた、小さな戦いだったことを明らかにしている。

しかしこの普天堡戦闘の重要性は、金日成が満洲の東北抗日聯軍の一個師長として、武装した遊撃隊を率いて満洲から国境を越え、初めて朝鮮の地に攻め込んだというところにある。さらにこの戦闘は冒険的な遊撃隊員の日本人殺害ではない。当時、甲山地区の韓人祖国光復会との連繫の下に、権永壁・李悌淳・徐寅弘・池泰煥等の抗日闘士たちと協力して抗日闘争を行ったものである。いわば、朝鮮の独立を声高に叫んだ闘争であった。たとえ規模は小さくとも、日本の朝鮮治安を脅かし、朝鮮人の反日思想統制に大きな打撃を与えた戦闘であった。権永壁・李悌淳・徐寅弘・池泰煥およびその他の関係者が死刑に処せられ、日本側も当時の警察署長大川周一らが死亡した。この普天堡戦闘に関連して、金日成の遊撃隊を支援したとして逮捕・投獄され、解放後北朝鮮に住み、あるいは政治に参与した人物として、朴達・李松雲・朴金喆、朴緑金らを挙げることができる。

この戦闘以外にも、金日成は多くを戦った。普天堡に攻め込む前にも、彼と中国人曹国安の指揮する遊撃隊が、一九三七年二月に長白県の鯉明水で戦闘を展開した。そして日本軍の川田中尉とその部下一三名を殺害し、村上正茂中尉を含む一七名の兵士を捕虜にしたという。金日成はこの後も、一九三八年

から一九三九年にかけて南満洲で戦った。一九三八年四月の六道溝戦闘や、一九四〇年初め、日本討伐軍前田部隊と和龍県で戦った戦闘は、誇るに足るものであった。隊長前田武市を殺害したのみならず、自分を捕らえに来た日本の警官を五八名も射殺し、彼らの武器を奪い取った。金日成の名はこのような成功裏の戦闘により自然と広まり、彼の抗日運動は時には朝鮮内の新聞でも報道された。

金日成を逮捕せんとする日本の治安関係者と満洲国警察は、一時、一九三七年一一月の金日成部隊との激戦において彼を射殺したと思いこんだ。願望のなせる業である。彼らは「金司令死亡」と報じて、彼を倒したという兵士を表彰までしたという。しかし金日成は次の戦闘にも姿を現し、日本討伐軍を相手に戦った。これより五〇年後の一九八七年一一月、韓国でも金日成が死んだと国防部長官が国会で発表したことがあった。同じく願望のなせる業であった。彼は翌日、モンゴルの首相を迎えるため空港に現れた。金日成はつねに悪戦苦闘であったが、彼の闘い方はいつも神出鬼没であった。

金日成の抗日運動の最盛期には、二〇〇名ないし三〇〇名にものぼる配下を擁したといわれるが、彼の抗日戦闘は、普通は一〇〇名程度の部下を率いてなされたものである。もちろんここには朝鮮人も中国人もいたが、金日成は比較的部下をよく管理したという。一度日本の憲兵が、池順玉という女性を金日成の率いる部隊に送り込み、状況を探らせたことがあった。彼女は結婚後子供ができず、「共匪」に拉致された夫を捜すという名目で入隊した。彼女は暫しのあいだ夫に会いもしたが、同じ部隊にはいられず、金日成の指導する部隊内の裁縫と炊事担当の女性部隊に入り、約一年間働いた。彼女は仕事中に健康を害し、部隊の移動の際、迅速なる同行が困難と見なされてついに解放された。彼女は日本憲兵に

金日成部隊内の実情と日課をよく報告している。

この記録を読むと、金日成は日本や満洲国所有の林業木材所に押し入り、そこを守る日本警察や満洲警察と戦って武器と食糧を補充しつつ、夜には部隊で抗日運動と朝鮮独立に関する演説をし、兵士たちの士気を高めたという。また、日本人の討伐が頻繁なため、部隊は常に山中をさらなる奥山に分け入り移動した。食べ物が不足し、厳寒に衣類も思うにまかせぬまま抗日運動を行っていたと報じた。そして当時、金日成を補佐し共に戦った人物として、呉仲洽・崔賢・呉白龍・韓益洙などについて仔細に報告している。彼らは遊撃戦で武器を奪われもしたが、時には腐敗した満洲国軍警が麻薬や阿片を代価に持ちきたることもあったという。一九三九年一〇月にはソ連人が来て、いかほどかの武器と弾薬を金日成に売ったようだとも語っている。池順玉の報告によれば、金日成部隊は、時折、富農たちから物資と食糧を掠奪して命を繋いだ。部隊生活で最も辛いことは、日本軍警と戦うことより、満洲原野の酷寒、そして襤褸と空腹であったという。そしてこの部隊が最も恐れたのは、満洲国の治安隊ではなく、部隊内の隊員たちの裏切りと逃亡だったと伝えている。

ここで金日成の抗日戦闘や、彼が指導した部隊内の生活全般にわたって詳述することはできないが、彼が不屈の抗日精神を持ち、最後まで勇敢に戦ったということは事実である。東北抗日聯軍も数年間の抗日戦闘で多くの同志を失い、一九三八年一一月に生存者をもって組織を再編成した。抗日聯軍の第一路軍は、三個の方面軍から編成され、最高指導部の構成員は司令官に楊靖宇、副司令官に魏拯民、参謀長は方振聲、そして政治委員は朝鮮人全光であった。第一方面軍軍長は曹亜範、第二方面軍軍長は金日

成、第三方面軍軍長は陳翰章である。この東北抗日聯軍で朝鮮人が最も多かった第一路軍が再編成され、金日成は第二方面軍の軍長に昇格したわけである。この時、日本討伐隊の懸賞金は金日成と楊靖宇で同額だった。

日本と満洲国は共匪討伐を完遂させるべく、一九三九年一〇月に野副昌徳少将を満洲に派遣し、東北抗日聯軍の全面的な掃討を開始した。抗日聯軍が崩壊し始めたのは、戦闘に敗北したことにもよるが、より重要なことは聯軍指導部の人々の投降が始まったということにある。楊靖宇司令官の副官兼秘書として長らく戦った程斌は、日本警察に投降すると、警官を伴い、楊靖宇を捕らえるべく暗躍した。彼が敦化県濛江に行った楊靖宇を一週間ほど追跡した後、通化省警務庁長岸谷隆一郎の部下が襲撃を加えた。そして討伐隊の西谷喜代人が、一九四〇年二月二三日に楊靖宇を殺害した。かくして第一路軍の指導部は崩壊し始めた。彼の参謀長、方振聲も四〇年二月に日本警察に捕らえられ、死刑に処せられた。四月には第一方面軍軍長、曹亜範が軍内部に反乱が起こり部下によって殺害された。第三方面軍の軍長、陳翰章は一二月に戦死した。

第一路軍軍長楊靖宇の跡を継いだ魏拯民は、事態を収拾するべく、自分の部下と各方面軍長たちに討伐隊との正面衝突を控えるよう、また帰順者と投降者に注意するよう呼びかけた。しかし魏拯民も、一九四一年三月八日に樺甸で病死してしまった。

その間、東北抗日聯軍第一路軍において生き残っていた指導者は、朝鮮人の全光政治委員と、第二方面軍軍長金日成であった。全光は、朝鮮人で金日成の上官であるだけでなく、華麗な抗日経歴の持ち主

でもあった。彼の本名は呉成崙といい、上海で日本の首相田中義一を狙撃しようとして果たせず、捕らえられた朝鮮の愛国の志士であった。彼は上海から日本の神戸の監獄に護送される途中、脱走してソ連に赴き、再び満洲に戻って名を全光と改め、東北抗日聯軍に参加した人物である。全光は抗日聯軍においても立派な戦いぶりであったが、日本の討伐に抗しきれなかった。彼は第一路軍の指導者たちがほぼ戦死あるいは投降した頃、一九四一年一月三〇日に、ついに耐えきれず日本の帰順工作に釣られて投降した。もちろん、日本軍警は全光を利用し、一人残った第二方面軍軍長金日成の捕獲に乗り出した。

楊靖宇の場合、彼の部下程斌が先頭に立って手引きをしたが、金日成の場合には彼の上官全光が日本軍警の手先となって逮捕に向かった。金日成はこのような苦境にあっても捕まらず、一九四一年三月、琿春県の梅里というところを経て、ソ連沿海州へ渡った。東北抗日聯軍第一路軍において、中国人・朝鮮人を問わず、最後まで投降せずに生き残った指導者は金日成のみであった。このような点から見ても、金日成の抗日武装闘争は、たとえ中国人と共にした闘争ではあっても立派なものであった。金日成は、回顧録第六巻で第一路軍の同僚たち、楊靖宇・魏拯民・方振聲・曹亜範・陳翰章らを皆回顧しつつ、中国人の裏切り者程斌と、朝鮮民族の裏切り者全光についても言及している。同志の裏切りは、楊靖宇と金日成のみに限られたものではない。第二方面軍内でも、朝鮮人朴得範が一九四〇年九月に転向し、金日成と近しい同僚の崔賢を捕らえんと暗躍した。

金日成はソ連へ越境したとき、彼の五、六名の部下を率いていったという。彼は一九四一年三月にソ連に渡らなければ、間違いなく逮捕されるか、戦死していたことだろう。全光のような東北抗日聯軍の

指導者たちは、互いの隠れ家や戦闘方法、その他すべての情報に明るかったためである。金日成は、全光が一九四一年一月に投降すると、二カ月のあいだ身を隠していたが、その年の三月にソ連に渡った。彼は、東北抗日聯軍の第二路軍と第三路軍から沿海州に身を避けてきた他の指導者たちと合流し、ハバロフスク近辺のビャーツクというところで、ソ連極東軍傘下の特別部隊として八八特別旅団に加入、一九四一年から朝鮮が解放される時まで、その地でソ連軍の訓練を受けた。この部隊は、東北抗日聯軍の第二路軍軍長であった周保中が再編成したもので、東満洲と北満洲で闘争していた聯軍のパルチザンたちが集まっていた。南満洲で金日成と共に戦っていた彼の部下たちも漸次ここに至り、金日成夫人の金貞淑もやって来た。

東北抗日聯軍の生存者たちは、満洲で日本軍警に追われていた当時より、遥かに安全で余裕のある暮しをしていた。ここで金日成と彼の妻金貞淑の間に、長男金正日が生まれた。金正日は、両親がソ連に渡った一年後、ここ沿海州で生を享けたことになる。その幼名はロシア名ユーリ、愛称は「ユーラ」であった。金日成はここでソ連人から軍事訓練を受けつつ、満洲パルチザン時代の寒さと飢えからようやく自由になれた。また一九四四年には次男が生まれた。次男、金平一はロシア名をアレクサンドル、愛称で「シューラ」と呼ばれた。金日成は自分と共に戦った崔賢・安吉・姜健・金一・崔春国・李鳳洙らと再会し、第三軍の金策、第七軍の崔庸健(当時の名は崔石泉)とも出会い、彼らと共にここで軍事訓練を受けた。彼が受けた訓練については詳述しないが、落下傘部隊の訓練を受け、ロシア語も多少覚えたという。

金日成のこのような抗日闘争の経歴は、誇るに足るものである。北朝鮮では金日成の闘争を誇張し、彼の革命運動だけが朝鮮独立運動に寄与したかのごとく書き綴る。しかしこれは、逆に彼を損なうものである。彼の仕事をそのままに記録しても、独立運動の主義・主張はともかく、運動の途中で変節した者たちとは比較しえぬ愛国愛族的運動であった。

朝鮮独立運動は、解放後南北が二分されたようには、思想的に分断されたわけではない。三・一運動の後、朝鮮人亡命者によって、中国内に置かれた臨時政府を見ても、それは即看取される。そこでは米国で民主主義教育を受けた李承晩と、高麗共産党の初代党首李東輝が、大統領と国務総理にならんで選出された。また、臨時政府を運営してきた金九や、一九二五年ソウルに始まる朝鮮共産党の左翼運動、柳林の朝鮮無政府主義運動、それらすべてが朝鮮民族の抗日独立運動であった。一九三〇年に満洲の間島で起こった五・三〇事件も、共産主義運動というよりは抗日運動だった。朝鮮共産党が起こした六・一〇万歳事件も反日運動である。朝鮮共産党事件で逮捕された者たちが日本の法廷に立ったとき、彼らを弁護すべく立ち上がったのは、金炳魯のごとき民族主義者であった。彼は後に韓国初代大法院長となる。朝鮮独立運動は朝鮮民族の抗日救国運動だったのであり、民主主義や共産主義のための思想闘争ではなかった。つまり独立運動は、分断された南北に自己の思想を担う政府を樹立せんとする闘争でもない。ましてや朝鮮を解放してくれた国々の手先にならんとする闘争でもなかった。日本を打倒すべく、朝鮮独立のために戦った者は誰であれ皆、愛国闘士といえる。

解放後、南北に分けられたからとて、韓国におけるように金日成の独立闘争が過小評価されてよいは

ずはない。彼は、過去、日本刀をたばさみ独立運動を抑圧せんとした者や、日本におもねり投降・帰順した者、日本に忠誠を誓った、かつての植民地時代の指導者たちとは比ぶべくもない。金日成は初志一貫武器を取り、満洲とソ連で、中国やソ連の共産主義者と共に日本に対抗し、朝鮮の独立のために戦った愛国の闘士である。

金日成は本来有能な人物だが、与えられた機会と条件を巧みに利用して、北朝鮮の指導者になった。彼が満洲で東北抗日聯軍の一員として、中国人と抗日を共闘したこと。沿海州に追われ、そこでロシア人から訓練を受けたこと。これらは、解放後の朝鮮に帰国し、分断朝鮮の北半部で政治を行うとき、非常に有利な条件となった。彼の抗日闘争の経歴は「革命神話」ではない。分断された南北両者が彼の抗日闘争を「革命神話」に仕立て上げたのである。韓国では彼の抗日闘争を否定することにより、北朝鮮では逆に誇張することにより、「革命神話」を造り出した。金日成は朝鮮独立のために、力一杯戦った朝鮮人なのである。

第二章　解放と建国

我々は、朝鮮の「解放」という概念から正確に認識しなければならない。朝鮮独立運動は、朝鮮に独立も解放ももたらさなかった。もちろん独立運動を行ったすべての者は日本の軍国主義・帝国主義を打倒するのに貢献した。しかし、日本を敗北させたのは米国とソ連である。米ソ両国が朝鮮に与えてくれた解放は、あくまで解放であり、独立ではなかった。彼らは朝鮮半島を分断し、自国軍を駐屯させ、日本が降伏した後も出ていかなかった。軍政の実施、信託統治、後見制の採用等々、様々な方策を構想したが、朝鮮民族の独立はもたらさなかった。結局、彼らは朝鮮を二分したまま、自国を支持する、思想的に相反する二つの政府を建て、そして撤収したのであった。

二つの政府は自分こそ独立の国家であると主張し、互いに異なる政府を認めなかった。日本が国の独立を蹂躙し、植民地に造り上げたのは三五年間だった。しかし民族の方は、分かれて暮らすようになってから、既に半世紀を越えてしまった。朝鮮半島に一つの政府を持つ朝鮮独立国が誕生する日は、いまだ遼遠たるものがある。

もちろん朝鮮半島の分断については、戦勝国が戦後処理を誤った点もある。しかし、分断が半世紀以上続いていることは、全朝鮮民族にも責任がある。朝鮮民族は、その独立運動を思うように成就しえなかった。加えて、独立運動を行った人々も解放された祖国に戻り、民族を統合し、外勢を

退け、国を建てることに成功しなかった。そして、朝鮮半島の南北に駐屯した米軍とソ連軍が立ち去る前に、二つの政府を樹立し、それぞれ正統なる唯一の独立政府であると主張した。そして歳月は流れ、解放から五〇年が過ぎた今日、朝鮮の領土は日本統治時代と変わりないが、人口は解放当時の三〇〇〇万から二倍を越える七〇〇〇万近くにまで成長している。

しからば、北と南はいかなる国を建てたのか。南では、そこに駐屯した米国のような民主主義を信奉する国を、北では駐屯したソ連のような共産主義を信奉する国を建てようとした。しかし韓国では、米国で教育を受け、民主主義をよく知っているという李承晩が民主政治を行わなかった。彼が建てた政府は、ほぼ半世紀の間に民間独裁から軍事独裁へと変わっていった。北朝鮮においても、ソ連の共産主義を信奉する社会主義国家を建設しようとしたが、やはり一個人の独裁国家になってしまった。このような二つの政府を樹立し、争ったかつての独立闘士たちは、自分たちの非能力かつ非妥協的な余波を後世に残したまま世を去った。韓国では解放後五〇年経った今日、ようやく民主政治が芽吹こうとしているようである。北朝鮮では金日成の統治を基盤に、彼の息子が依然、社会主義社会建設に努力している。

歴史的な流れから見れば、分断朝鮮で自国をこの手に取り戻すことよりも、このような民主政治や社会主義政治が、なぜ、いかなる面で重要なことだったのか、合点が行かない。朝鮮人は単一民族である。一つの民族が一つの国にかたまることよりも、民主主義や社会主義が何故いっそう大事なことなのか。過去、国を取り戻そうと独立運動を行った人々は、解放が成ったならば、いかなる

国を立てるのか、自己の抱負も希望も一向闡明にしなかった。民族主義者や共産主義者を問わず、誰しもが五〇年もの分断を望みはしなかった。また、予想もできなかったはずである。解放後、南と北に樹立された政府は、朝鮮独立を行った人々が望んで建てたというよりは、日本を追い出し朝鮮を解放し、かつ駐屯した米ソ両国の意に沿って建てたものだと言えよう。二つの政府は朝鮮民族の独立を促進することより、二つの解放軍の意思を朝鮮に実現しなければならないと考えたようである。そして、分かれた朝鮮国民を統合し、朝鮮民族が一つの国を建てなければならないという一念よりは、互いに自己の政府が唯一の正統性を有するという主張に没頭したのであった。北朝鮮に建てられた朝鮮民主主義人民共和国も、このような歴史の流れのなかで分析しなければならない。そして金日成の北朝鮮における政治行為も、このような所与の条件を前提に考察すべきものと思われるのである。

金日成も、自分の抗日運動は朝鮮独立のためであり、分断された祖国の北半部に社会主義体制を建てるために戦ったのではないはずである。中国共産党の軍隊である東北抗日聯軍での戦いを通じ、中国共産党のように朝鮮においても共産国家を樹立しようと考えたはずである。しかし抗日独立運動をしていた当時は、それをあえて闡明にすることはなかった。彼の独立運動は、何としても朝鮮から日本を追い出すことであり、朝鮮に独立をもたらさんとする闘争であった。このような面から見れば、解放後、彼が北朝鮮で行ったすべての仕事は、独立運動時代の希望や抱負には及ばぬものだった。

韓国の李承晩にしても、北朝鮮の金日成にしても、誰も朝鮮を分断し、二つの政府を建てんと図ったわけではなかった。朝鮮臨時政府の主席だった金九は、このような面で自己の独立運動の目的が明確で、少しばかり内側の見える人物である。金九は南北に民族を分断する二つの政府や、国を分断するすべての行為を非民族的行為と見なし、これに反対した。韓国の政治参与も拒否し、北に赴き単独政府に反対することもした。二つの政府が樹立される年にも、彼は何としても南と北に単独政府を樹立せんとする人々を諭すべく南北連帯会議を開いた。しかしこのような民族主義の愛国闘士は朝鮮の独立を見ることなく、南と北の単独政府が正式に発足した後、暗殺されてしまった。

このような人物と比較すれば、金日成の政治は解放の真の姿に適応し、北朝鮮だけであっても社会主義政府を打ち建て、後に南朝鮮の民族を解放し、社会主義国家を樹立せんとする論理であったと説明することができる。もちろん李承晩も、南朝鮮に単独政府を建てるとき、同様な論理を打ち出し、自己の立場を正当化したものと思われる。しかしこれらの目的は、北においても南においても達成されなかった。とすれば、我々は彼らに分断の責任も問うべきなのだろうか。はたして金日成は、満洲原野で磨き上げた彼の軍事経験と、ソ

韓国大統領李承晩と朝鮮臨時政府主席金九(右).『白凡逸志』

――連で訓練を受けたすべての経験をどのように活用し、北朝鮮にいかなる国を建てんとしたのであろうか。

1 北朝鮮の解放

第二次世界大戦の終結と日本の敗北は、朝鮮民族にとって三五年間身に染みた恨(ハン)〔蓄積された被抑圧の無念〕の晴れる大事であった。しかし朝鮮人は、誰もが三五年の過去を悔い、解放の歓喜に浸るのみであり、解放された朝鮮の将来がいかほど険しいものか知る由もなかった。米国は一九四一年から日本と戦争をしてきたが、ソ連は欧州からドイツ・イタリアの勢力が駆逐されてから日本との戦いを始めた。ソ連は日本に宣戦布告するや、直ちに北朝鮮に入り、日本軍と交戦した。日本の降伏はソ連の参戦に起因するものではないが、ソ連の参戦から一週間で日本は降伏を宣言している。朝鮮の分割占領は終戦前に、あらかじめ米ソ間で合意されていたところだが、ソ連軍は米軍よりずっと早くから北朝鮮に進駐していた。そしてソ連は米国と同様、自国の思想に沿って、朝鮮民族を日本の軍国主義・侵略主義から解放した。

チスチャコフ大将は麾下のソ連軍第二五軍を率いて、八月二六日平壌に入城した。彼は朝鮮の解放を宣言し、朝鮮人民は自国を取り返した、自己の幸福を創造する者となれ、と述べた。この布告文は、日本と南朝鮮を占領したマッカーサー将軍のものとは対照的だった。マッカーサーのものは、朝鮮は解放

されたが、朝鮮人が国を建て自ら治めるようになるまで、南朝鮮に軍政を布くというものであった。言葉ではソ連の方が自由に見える。しかし、いかなる国も自国の政治文化を無視することはできない。言葉では朝鮮人民を解放し、政権を朝鮮人民に与えたとはいえ、ソ連軍は駐屯の間、自国内におけるように北朝鮮のすべてを独裁的な方法で処理した。他方、米国は南朝鮮に軍政を布いたが、自国のように民主主義的な原則を固守し、建国事業を推進させた。

解放を迎えた朝鮮民族は、当時このような米ソ両国の差異点や、彼らとどのように交渉し、国の独立を取り戻すのか深く研究することをしなかった。日本が降伏した後は、米ソ両軍が進んで朝鮮から退くという愚かな思いに満たされていた。しかし解放の希望は速やかに消え去った。米・ソが朝鮮に五年間の信託統治を行うという案が、一九四五年一二月に出されたのである。米・ソは第二次世界大戦の連合国であり、朝鮮半島を占領する際、両国はいずれも朝鮮で互いに思想的に対立するなどとは思いもよらなかった。占領した当時においては、日本軍を武装解除するという目的のほか、何ら特別な事前準備もなしに進駐したのである。朝鮮の現実や独立運動の経緯、朝鮮民族の民族性などについて、彼らには知る由もなかった。

信託統治案が出されるや、米軍が占領していた南朝鮮では、民衆と政治指導者の大部分が絶対反対を自由に表明したが、北朝鮮ではソ連軍政の指示下にこれを支持した。このような問題を解決すべく作られた米ソ共同委員会は、朝鮮の独立問題を解決するどころか、戦後の米・ソの思想的対立、そして冷戦の導火線へと変じてしまった。

当時朝鮮民族の指導者たちが、このような世界の潮流を把握しえなかったことは容易に理解できる。たとえば、米・ソが南北を占領していたとき、これを臨時の終戦直後の現状と考え、朝鮮の政治家たちは皆ソウルに集まっていた。ソウルは朝鮮王朝五〇〇年の京であり、日本統治の首都でもある。朝鮮の政治はソウルから発される。独立運動をした闘士たちは、解放後自分の故郷に戻ったが、政治に欲のある者たちはソウルに集まった。かくして、共産主義者の南朝鮮人朴憲永でさえ、米軍の統治区域であるソウルに朝鮮共産党を再建した。

他方、民族主義者かつキリスト教の長老である北朝鮮人曺晩植は、ソ連軍占領区域の平壌で、平安南道人民委員会委員長の資格でソ連人に対していた。もちろん、朝鮮共産党は米軍占領下で順調なる工作を行うことはできなかった。同様、キリスト教長老の曺晩植も共産主義のソ連軍と円満に仕事をすることは叶わなかった。彼らのみならず、朝鮮人は、ソ連が北に軍政を樹立したのだからといって共産主義者たちは北に行こうとせず、米軍が南を占領したのだからといって民族主義者たちは南に行こうとはしなかったのである。いわば朝鮮の解放は、朝鮮民族の政治的将来を混乱状態へと陥れたのであった。

2　金日成の帰国と政治闘争

金日成は、平壌の出身なので自然に北朝鮮に帰ってきた。ハバロフスクの八八特別旅団中、中国人パルチザンたちは自分の国である中国東北地方(満洲)へと戻った。そして金日成と行動を共にした朝鮮パ

ルチザンたちは、解放の年の九月一九日に船で元山に入港した。金日成は、満洲と沿海州で抗日運動の輝かしい戦歴を持つ。しかし、中国共産党指導の中国人部隊である東北抗日聯軍と、沿海州のソ連八八特別旅団での闘争歴である。朝鮮国内では広く知られてはいなかった。しかるに、ソ連で四年間の訓練を受けてきたお陰で、金日成はソ連軍によって選ばれたのである。それは彼らが自分たちの占領政策を履行するためであった。

ソ連が朝鮮のすべての革命家や独立闘士のなかから金日成を選抜したことについては、様々な論争が起きている。そのうちで最も重要な理由は、一九三〇年代から四〇年代に至る間、朝鮮共産党とソ連共産党との関係が断絶していたこと。また、一九三〇年代にコミンテルンと連繋していた朝鮮人も、スターリンに粛清されるかソ連に帰化していたことが挙げられる。つまり、一九四五年八月に朝鮮が解放されるときまで、スターリンやソ連共産党に、朝鮮共産党の指導者として知られた人物がいなかったのである。加えて「偉大なソ連赤軍」が朝鮮の北半部を日本から解放したにもかかわらず、朝鮮共産党は米軍の駐屯区域のソウルで再建された。朝鮮共産党の委員長に選出された朴憲永はソ連軍を訪ねることさえしなかったのである。朝鮮共産党を代表し、チスチャコフ大将を訪問した人物は玄駿爀だが、彼は金日成が帰国する以前、九月三日に既に暗殺されていた。

ソ連軍は彼らから訓練を受けた金日成に白羽の矢を立てたが、当時の独立運動家として広く知られていた李承晩や金九に比べると、金日成は大物ではなかった。時に、朝鮮の信託統治問題、また米ソ共同委員会の決裂により、南北間の葛藤が深刻になるや、ソ連はさらに確固として金日成を支持し、南では

彼に対する非難の声がいっそう高まった。

金日成は、朝鮮人の独立運動団体として上海や重慶で活動していた、朝鮮臨時政府や朝鮮光復軍、あるいは中国延安で中国共産党と共に戦った朝鮮義勇軍とも繋がりを有しない。また朝鮮国内に潜伏し地下運動を行った国内共産主義者とも無縁であった。満洲の戦歴と沿海州での活動のみのため、朝鮮国内の民族主義系の独立運動家や共産主義者にも金日成は広く知られてはいなかった。

このような事情から、ソ連占領軍の圧倒的な支持を受けてはいたものの、帰国した弱冠三三歳の青二才金日成を、朝鮮人は愛国独立闘士としては生半(なまなか)には受け入れなかった。当時の朝鮮人は誰もがこう言ったものである。金日成は偽物だ。ソ連が解放された朝鮮に共産主義政権を建てるために連れてきた人物だ。朝鮮分断のためのソ連の道具だ、と彼らは中傷した。

このような立場に置かれた金日成は、ソ連人の政策を忠実に履行した。ソ連駐屯軍も、ソ連がいったん選んだ指導者は無条件に支持した。反面、朝鮮の名高い独立運動家は全部ソウルに集まり、ソ連駐屯軍を訪ねるものといえば、ソ連が受け入れえないキリスト教徒曺晩植や、北朝鮮が故郷の共産主義者、呉淇燮、そして金鎔範程度に過ぎなかった。これらに比べれば、革命戦歴からも、ソ連軍との関係からも、金日成はソ連駐屯軍にとって遥かに有用な人材であった。

最近、ソ連と韓国が国交を結んだのを機会に、ソ連駐屯軍で北朝鮮の建国事業に携わったソ連の老将たちが、金日成の選択と支持・後援について証言し、自分たちの役割を強調している。しかし事実は、金日成をある特定の個人が選択したのではない。朝鮮でソ連の国益を、誰が最もよく履行するかという

ことを基準に、彼が選定されたのである。ちなみに、金日成を後押しし、指導したソ連軍の政治将校たちは、韓ソ国交樹立以前に皆死亡している。金日成を最も指導した人物は、ソ連駐屯軍の民政官ロマネンコ将軍であり、その麾下で通信・財政・農業・保険・保安等を担当したソ連の高級将校たちであった。金日成のすべての政治的事業を担ったのは、イグナチェフ大佐である。彼はソ連駐屯軍が撤収した後にも、ソ連大使の顧問として平壌に残り金日成を指導したが、朝鮮戦争時に米軍の空襲に遭ってここで死亡した。

金日成はソ連人から多くの助けを得ている。彼はソ連人に選ばれこそしたが、国内の独立運動家や海外の独立運動団体には広く知られていなかったため、北朝鮮での前途は険しかった。解放されたその年から、一九四八年に北朝鮮に社会主義国家が成立するまで、彼が解放朝鮮の北半部にいかなる国家を打ち建てるか深く熟考し、抗日運動時の念願を実施に移したとは言い難い。むしろ彼は、見知らぬ祖国に戻り、未知の朝鮮独立闘士たちを率いて、ソ連が望む衛星国家を造り上げたのだといっても過言ではない。

このような作業は大変困難なものであったが、金日成にそれが成し遂げられた理由には二つ挙げられる。一つは、ソ連が終始一貫、彼を絶対的に支持したことである。ソ連人には、自分たちの気質で、いったんある者を選抜すると最後まで押し通す性向がある。また、金日成以外に、自分たちが統率でき、信ずるに足る人物もいなかった。もう一つは、朝鮮半島の分断が長期化したという点にある。南北の分断が、比較的有能な指導者たちを皆、ソウルにとどめてしまった。北朝鮮には故郷を訪ねてきた者や、

過去共産主義運動を行った者たちはいたが、彼らは朝鮮共産主義運動の主流となる人物ではなかった。

しからば解放された北朝鮮には、どのような人物がいて、金日成は彼らといかに闘争し、ソ連人から与えられた指導的地位を生かし、強化したのだろうか。解放後の北朝鮮には、我々が確実に区分しうる四つの政治団体があった。

第一は、故郷が北朝鮮の国内共産主義者で、平壌に朝鮮共産党北朝鮮分局を組織したグループである。彼らは、ソウルに再建された朝鮮共産党の正統性を認め、朴憲永を指導者としていた。中心人物としては、咸鏡道の呉淇燮・鄭達憲・崔容達・李舜根などがいた。

第二は、中国の延安で、中国共産党傘下で抗日運動を行った延安派である。彼らは華北朝鮮独立同盟を組織し、金枓奉が指導者であった。彼らは朝鮮人のみで構成される朝鮮義勇軍を組織し、その総司令は金元鳳だった。また中国共産軍と共に戦った武亭、中国共産党に参与していた朴一禹・崔昌益のような抗日独立運動家もいた。

第三は、金日成同様、朝鮮国内で広く知られていない者たちである。ソ連居住の朝鮮人で、ソ連軍が北朝鮮を占領し駐屯した後、北朝鮮に入ってきたソ連派である。彼らの指導者として登場したのは、許可而を始めとして、方学世・朴昌玉・韓一武・金烈・南日など。朝鮮人が聞いたこともない名前の持ち主のグループだった。彼らはロシア語を話し、ソ連軍政に近く、絶対に無視できない存在であった。しかし彼らは朝鮮に縁もゆかりもなく、長い間ソ連に居住していた人々であった。

第四はもちろん、金日成と東北抗日聯軍で武装闘争をしたパルチザンたちである。このグループは数

こそ少なかったが、全員が武装闘争の経歴の持ち主だった。

この四グループは、各々その特色と弱点とをもっていた。国内共産主義者はその主流が南半部にあるため活動には不便であったが、数的にはもっとも優勢だった。彼らは、一九二五年頃から種蒔かれた朝鮮共産主義運動の伝統を受け継ぐグループであった。延安派は朝鮮に知られた独立運動団体で、中国共産党と関係を持つ。しかし、中国大陸ではいまだ中国共産党が成功しておらず、内戦中のため、中国からは何の援助も期待できなかった。延安派には抗日闘争をした朝鮮義勇軍の軍人たちもいたが、朝鮮のインテリも多かった。彼らは北朝鮮に入り、新民党を組織したが、その支部をソウルに設立するなど、いかほどにもならぬ己の力をあえて分散させてしまった。ソ連派はソ連軍の強大なる支持を得ていたが、その反面、ソ連軍政が望む仕事をせねばならなかった。彼らは北朝鮮を共産化するために、新聞報道関係の仕事を担当し、また政治家たちを監視する情報組織に従事した。彼らは、ソ連駐屯軍が金日成を指導者として押し立てる軍政に携わるため、系列は異なっていても金日成を支持したのであった。

このような条件下で、金日成はいかなる政治闘争を行ったのだろうか。彼は満洲の原野で日本軍警と戦ったときには、中国人の支持を取り付けた。そのように、ここ北朝鮮ではソ連人の圧倒的支持を得、イグナチェフ大佐の指導の下で能力を発揮し、闘争したのである。金日成の過去の抗日闘争の経験からみて、彼が北朝鮮に入り実施した一連の改革は、もちろん彼の考案ではない。ソ連軍政の支持を得て履行したものである。すなわち、土地改革・産業国有化・男女平等法・労働法・農業現物税・選挙法などの民主改革は、ソ連が東ヨーロッパの占領地で実施した政策を手本としたものであった。イグナチェフ

大佐は金日成に、これらを北朝鮮においても実施させたのである。そのためソ連軍政は、金日成に北朝鮮臨時人民委員会委員長や後の北朝鮮人民委員会委員長などの行政職を与えた。金日成は、スターリン大元帥を「朝鮮の親代わり」とまで呼び、ソ連の指示を忠実に執行したのであった。

しかし金日成の担った仕事は、愉快なものでもなければ、たやすいものでもない。彼の率いるパルチザンの数は少なく、他方、国内派の共産主義者たちの数は多かった。ソ連の助けもあったが、北朝鮮についに政府が樹立されたとき、金日成が指導者として刻印され、国を治めることになったのも、与えられた条件をうまく利用し、悪条件を克服して成し遂げた結果なのである。このような点を考慮すれば、金日成は有能な指導者であったと言える。

イグナチェフ大佐の指導で、彼が手始めに行った政治闘争は、朝鮮共産党北朝鮮分局にまつわることであった。解放直後、朝鮮共産党員たちは内部闘争をある程度収拾し、ソウルに党本部を再建し、平壌に北朝鮮分局を設立した。これは一九四五年一〇月一〇日から一三日にかけての会合でなされ、当時、北朝鮮で国内派の共産主義者として知られていた金溶範が、分局の委員長として選出された。現在の朝鮮労働党は、この会合が始まった日を党創立記念日としている。

しかし金日成の目的は、このような南朝鮮に本部を置いた共産党の分局ではなかった。彼はむしろ、ソウルから独立した北朝鮮共産党の設立を主張した。一九四五年一二月一七日、第三次朝鮮共産党北朝鮮分局の中央委員会拡大会議において、金日成は金溶範を退け分局委員長の座についた。翌四六年二月には、北朝鮮分局の名称を北朝鮮共産党に変え、ソウルから独立させたのである。しかし金日成にとっ

ては、一個の政党にすぎない共産党を率いることが目的なのではなかった。

ソ連軍政が東欧で行ったのと同様、イグナチェフ大佐は北朝鮮においても、共産党よりは、すべての社会主義系列の団体と組織を網羅する大衆党を作るべしと指示した。これより金日成は北朝鮮共産党を代表し、延安派がすでに組織した新民党と合党し、北朝鮮労働党を作った。彼は北朝鮮共産党の委員長になってより六カ月後の四六年八月に、北朝鮮労働党を組織したことになる。委員長には新民党の党首であった金科奉を戴き、金日成と国内派の代表朱寧河が副委員長に選出された。

このような政治工作で金日成が成し遂げたのは、外からやって来たにもかかわらず、ソ連の後押しで国内の政治組織に根を下ろしたということである。彼の目的は明らかであった。自分は副委員長であったが、委員長の金科奉に己を誉め讃えさせた。かくして、国内派共産主義者のみならず、中国やソ連からやって来た者たちも金日成を指導者として認めるようになったのである。

またソ連は、ポーランドや東独で大衆政党を作る動きを青年組織から始めたが、この発想から朝鮮共産青年会も民主青年会に改編し、すべての若者を網羅させた。

このような変化が起きたのは、解放後一年たった頃だった。米ソ共同委員会の失敗とともに、朝鮮の分断が短時日のうちに解決されないことが予測され、朝鮮のすべての左翼はこの大衆党、すなわち朝鮮労働党に統合されていったのである。

北朝鮮労働党創立大会において、金日成は南朝鮮の左翼団体も統合し、南朝鮮労働党を組織すべきであると訴えた。南朝鮮労働党は、その年の一一月に発足した。これは、南朝鮮にあった朝鮮共産党、新

民党、そして人民党が合わさったものであった。

このような大衆党の創建はいかなる結果を招来するのであろうか。それは解放後の朝鮮で、左翼の指導権が朝鮮共産党から朝鮮労働党に移ったということ、つまり主勢力が漸次ソウルから平壌に移ったということを意味する。

この変化に反対したのは、もちろん朝鮮共産党北朝鮮分局の国内派共産主義者たちであった。そこで金日成は彼らに対抗した。一九四八年三月に開催された北朝鮮労働党第二回全党大会において、ソ連派の許可而・朴昌玉・韓一武らは金日成と力を合わせ、国内派の指導者たちに攻撃を集中した。国内派の呉淇燮・鄭達憲らは、大衆党組織の意義を理解できずにこれに反対したと批判されたのであった。朝鮮での運動歴の長い国内派にしてみれば、金日成やソ連派は、自分の家にやって来た客が勝手な振る舞いをしているかのごとくに見える。ところが当時は逆に、国内派の朝鮮共産党指導者たちが米軍政下で虐待されて本部のソウルを追われ、多く金日成の食客になっていた。そのような状況下では、彼らも強く反抗することができなかったのである。

朝鮮の分断が固定化すると、南朝鮮を故郷とする共産主義者を除けば、左翼系列の指導者たちは米軍政下では耐えられずに越北するようになる。南朝鮮労働党も、地下運動を指揮する党員以外は北朝鮮にやって来た。そして南北朝鮮に各々の単独政府が樹立されると、南朝鮮労働党員たちは北朝鮮単独政府に加担した。一九四九年六月には、南朝鮮労働党と北朝鮮労働党が合党し、金日成は朝鮮労働党の党首として選出された。

金日成はこのように彼の政治闘争を成功裏に推し進めた。彼は多くの努力を払ったが、また与えられた条件も有意義に活用したのである。与えられた好条件とはもちろん、ソ連軍が圧倒的に彼を支持したことであった。イグナチェフ大佐が顧問として彼を指導したこと。またソ連から来た朝鮮人たちがソ連軍政に絶対服従し、金日成を支持した点。繰り返しになるが、これらは天与の好条件であったと言える。加えて、中国からの延安派も北朝鮮では強力にはなれなかった。延安派系列の抗日闘士と彼らの軍隊は満洲に留まり、大戦後、国共内戦に突入した中国共産党を支援するため、解放後直ちに北朝鮮に帰ることができないでいたからである。

そのようなわけで、金日成が直面した政治闘争の相手は、主として朝鮮と日本にあって地下運動をしていた朝鮮共産党系列の人々であった。このグループに対し、金日成は叶う限り最善の施策を練った。国内派に比して、たしかに金日成のパルチザン派は、数においても国内での知名度においても遥かに見劣りがした。しかし金日成のパルチザン派は、誰に限らず皆、抗日武装闘争を行った人物たちであった。金日成は自派の二百余名にしかならぬパルチザン全員を政治活動に参加させるより、社会安全部門、すなわち警察と北朝鮮人民軍の前身である警備隊など、軍系統に指導者として投入したのであった。このような処置は、金日成がなしうる唯一の方法であったとも言えるが、彼が政治基盤をしっかりと突き固める重要な施策でもあった。

3 建国

朝鮮半島に二つの政府が樹立されたことは、米国とソ連の解放後三年間にわたる交渉の失敗を意味している。それは朝鮮民族の独立を象徴するものではもちろんない。米ソ両国は、一つの独立国家を朝鮮に建てようと自分なりに努力はした。しかし結果的に朝鮮半島を二分し、二つの政府を建てて軍政を終えた。

このような二つの政府が建ったことについては、米・ソの責任もある。が、しかし朝鮮民族と朝鮮独立運動の指導者たちにも責任がある。当時、彼らはそれぞれの単独政府をいったん建てながらも、一方では米ソ両軍が撤収した後は、どのような方法であれ互いにまとまり、一つの国・一つの政府を樹立することができるという意図を内心に含んでいた。言い換えれば、たとえ米・ソの合意がなくとも、彼らさえ出て行けば朝鮮民族は南北を統合し、国を建てるのに大きな問題はないだろうと踏んでいたのである。そして過去五〇年のあいだ、朝鮮民族はこの民族的課題を解決しようとしてきたが、失敗した。すなわち政府は二つ建てたが、建国はできなかったわけである。

解放後満三年を過ぎた一九四八年八月一五日、南では大韓民国が樹立された。それから二五日たった九月九日、北に朝鮮民主主義人民共和国という社会主義政府が誕生した。北朝鮮が、韓国より二五日ほど遅れて政府樹立を公表したからといって、分断の責任がないとも少ないとも言えない。南も北も自己

の単独政府を打ち建てたならば、民族分裂の責任を負い、民族統合の課題を成し遂げなければならなかった。にもかかわらず、北朝鮮と韓国は民族統合が困難になると、互いに自政府の正統性を主張して譲らず、半世紀のあいだ争ってきた。朝鮮民族にとっては、どちらの政府であれ、民族の統合に成功した政府に正統性があるのである。このような民族的課題を成就しえない政府は、分断時代の過渡期の政府であり、民族の伝統を有する政府たりえない。

南北朝鮮に二つの政府が成立したとき、双方どちらも自分たちの政府を正統化する主張を繰り返し、互いに異なる政府を非難する文章を漏出した。北朝鮮では、政府樹立は南の方が早かったといい、分断の責任をあげつらった。しかし北朝鮮も単独政府樹立の準備を以前からしていたのである。

一九四八年当時、韓国政府は国連監視下に世界列強の許諾を得て樹立されたことを掲げ、朝鮮民主主義人民共和国をソ連共産主義の衛星国家だと決めつけた。北朝鮮は、南に建った政府は米帝国主義の傀儡政府であると応酬した。しかしこのような相互誹謗は、すべて民族意識を忘却した発言である。

朝鮮民主主義人民共和国を見れば、たとえ金日成がソ連の指示下に建てた単独政府ではあっても、朝鮮独立運動を行った愛国者たちが多数参加していた。金日成と共に満洲で戦った金策・崔庸健などのパルチザンを始め、朝鮮共産党の指導者、朴憲永・李承燁・朴文奎らもいた。また延安派の金元鳳・崔昌益・朴一禹・許貞淑、そして民族的指導者洪命憙と李克魯。さらには白南雲のような知識人や、かつて李朝高宗王の密書をハーグ会議に携えた李儁の息子、李鏞など、ソウルに建てられた大韓民国の初代内閣にひけをとらない人物が集まって政府を構成していたのである。

彼らは解放後の北朝鮮に、ソ連の衛星国家を作ろうとしたわけではない。むしろ自分の信念に従い、搾取階級の存在しない、無産者のための、社会主義国家を建てんと試みたのであった。憲法を定め、国旗と国歌を新たに作り、新しい朝鮮を創造しようとしたのである。たしかに解放後の北朝鮮では、彼らの政府は、政治団体の指導者や人民を代表する単独政府だったと言っても言い過ぎではないであろう。

このような政府の継続を保障するため、様々な施策と方法が考案されたが、そのうちでも二つの施策が重要である。

一つは、ソ連政府が北朝鮮に社会主義体制を保障するため、自分たちの政治顧問を配置したことである。公式的にはソ連の初代大使として軍政時から平壌に駐在したスチコフ将軍と、彼の政治顧問として金日成を指導したイグナチェフ大佐がある。彼らは北朝鮮に大衆党を組織するため、ソ連から来た許可而を党組織事業に配置した。

ソ連派の人々は、このような大衆党、すなわち朝鮮労働党の思想統制のために、党機関紙『労働新聞』や党機関誌『勤労者』などを、太成洙・奇石福のような自派の人物に任せた。またソ連派は、朝鮮人民にとってまったく遠い存在であったために、金日成内閣の長官(相)には一人も登用されなかった。しかし長官を補佐しながら実質的には統制力を行使しうる次官(副相)のポストには、多数配置された。

このようなソ連の処置を肯定的に評価すれば、ソ連は自分たち流の社会主義政治体制を扶植するために、朝鮮の共産主義者や社会主義者を指導し、北朝鮮社会主義政治体制を建て、持続させようとしたということができる。否定的に見れば、北朝鮮をソ連の衛星国家に造り上げ、維持しようとしたとも言え

る。しかしこのような処置は、いずれの面からにせよ、朝鮮人が朝鮮に建てんとした社会主義国家建設の手助けにはならなかった。

もう一つの重要施策は、金日成が自己の指導者としての地位を確固たるものにするために、パルチザン派を利用し、北朝鮮の軍部を掌握したことである。金日成は自分の政治手腕も十二分に発揮したが、解放当時、元来軍人の彼が最も得意としたことは、軍隊作りによる、社会の治安確保であった。

彼が平壌に戻って、何よりも優先して建てた教育機関も、政治幹部と軍の将校を養成する「平壌学院」であった。この学校は、一九四五年一一月に建てられ、東北抗日聯軍第三軍の政治委員であった金策が校長になった。一九四六年二月に作られた北朝鮮臨時人民委員会の保安局は、北満のパルチザン崔庸健が担当した。同年八月、中央保安幹部学校が設立されると、やはりパルチザン出身の安吉が責任者に選ばれた。保安幹部学校は平安南北道や咸鏡南北道などにも設立され、約二万人の軍隊を指揮する仕官を養成した。

この頃から北朝鮮では、ソ連占領軍が一部撤収するたびに、自前の軍隊を増やしていった。ソ連軍は一九四七年三月より撤収を開始し、一九四八年九月九日に北朝鮮に政府が樹立された後、同年一二月に撤収を完了した。金日成は、北朝鮮に単独政府が建つ以前の、四八年二月八日に、朝鮮人民軍を創った。この時、朝鮮人民軍の総司令官には姜健が就任した。彼は金日成の抗日聯軍時代の、直属の部下だった。朝鮮民主主義人民共和国が樹立されたとき、民族保衛相は崔庸健で、副相もパルチザン出身の金一であった。

ソ連軍が完全に撤収したとき、北朝鮮の人民軍は四万人を上回り、毎年増加していった。一九四九年には六万名ほどであったが、これが三個師団に編成された。第一師団は崔光、第二師団は崔賢、第三師団は金光俠が師団長を務めた。彼らはすべて東北抗日聯軍のパルチザンであった。このような正規軍以外に朝鮮民主主義人民共和国内務省に社会の治安のための保安警察があった。これは二万名に近い正規警察、思想警察、秘密警察で構成されていた。初代の内務相は延安派の朴一禹であったが、副相はソ連帰りで秘密警察出身の方学世だった。しかし保安警察も後に、池京洙と石山など、金日成のパルチザンの部下たちが皆、指導者として任命された。

以上二つの施策で朝鮮民主主義人民共和国の維持を保障したのだが、ソ連軍撤収の後には、ソ連軍政が植え込んでいった副相級のソ連派は、漸次政府から党へと移されていった。そして金日成配下のパルチザンたちは、朝鮮人民軍と保安警察機関を完全に掌握したのであった。

北朝鮮政府の発展過程を見ると、ソ連の影響力が漸次減少し、金日成の政府が強化され、彼の権力の軍事的基盤が確固たるものとなっていく。このような面で、金日成の軍事革命は朝鮮戦争開始前に、すでに完遂していたと言ってもよいであろう。このように金日成政権の軍事的基盤がしっかりしていたため、いかなる派も軍事的に挑戦することができず、金日成は政治的安定を維持することができた。また、金日成が熱心に軍隊を養成し、彼らの支持を受けていたために、朝鮮戦争を計画することができたと言っても過言ではない。

このような意味で、朝鮮民主主義人民共和国は朝鮮民族が社会主義国家を建国したものというよりは、

朝鮮半島北部に建てられた単独政府なのである。また、それは「労働者・農民が建てた、搾取と圧迫のない無産者たちの政権」というよりは、金日成と彼のパルチザンたちが建てた軍事政権といった方が事実に近いと言えよう。金日成は、満洲の原野で磨いた巧みな指導力をもって、厳格に北朝鮮新政府を導き、その人民を治めていったのである。

第三章　朝鮮戦争

南北朝鮮が将来和合し、統一が達成されれば、それはいうまでもなく大事件である。同様の地平で、分断時代の朝鮮民族にとって最大の事件といえば、それは朝鮮戦争であったといえる。朝鮮戦争は朝鮮民族が自国を取りもどさんと、統一を目指した戦争であった。しかし、そのために南も北も己の立場を貫かんとし、同族を殺害した、同族相食む戦いでもあった。またここに、第二次大戦後に作られた国際機構、国際連合が参戦したのみならず、米国を始めとする一六カ国が南側を支援した。北側としては、大陸を制覇し新共産政権を樹立すること一年にも満たない中華人民共和国が参戦した。

我々が朝鮮戦争を論じる際、人は普通これを東西冷戦の延長線上にあり、大戦後の米・ソ両国と民主・共産両陣営の対立であると解する。そして国連軍の参戦は共産陣営の膨張主義に対して、国連が初めて試みた国際警察行為であったという。学者間の研究もこの範疇内にあった。スターリンが自己の衛星国家北朝鮮をいかに動かし、中国共産党が中国大陸を統一したごとくに、朝鮮半島を自己の影響圏内に引き入れんと南を侵略したのか？　新生の国際機構が、これにどのように対応したのか？　米国が共産陣営の膨張政策をどのように牽制したのか？　云々。このような点に焦点が当てられ、研究が行われてきた。朝鮮戦争については、米国の外交政策やソ連共産主義の意図、あ

るいは米・中両軍の対決などの研究が多い。

また朝鮮戦争の終結過程について、ある戦争研究家はこの戦いが、勃発後三年で勝者も敗者もなく休戦で終わったという点に着目した。これを第二次世界大戦以後現れた「制限された目的を持った制限戦」と解し、侵略に対する新たな解決法と見なし、研究を行ったものがある。

また、国連軍の総司令官として任命された米国の老将マッカーサーを、政治基盤のいまだ惰弱であったトルーマン大統領が、いかように罷免したのか？ アメリカ民主政治の軍統制原則を立証したのだ、など。あるいは中国の猛将彭徳懐が人海戦術を使って、軍備と武力に優勢な国連軍を撃退することができた、云々。このような研究はたくさんある。しかし朝鮮戦争は、朝鮮人にとっていかなる戦いであったのか？ そのような研究は、容易には見出し難い。

その理由は、以下にある。すなわち、これまで朝鮮戦争について文をものした人々が朝鮮人でなかったこと。そのため、それを朝鮮半島の問題として理解し、解決しようとする立場から見るのではなく、それが国際社会にいかなる影響を及ぼしたのかというところに重点を置いて解釈しようとしたことである。もちろん朝鮮戦争は、勃発六カ月以内にその主導権が両サイドの朝鮮人を離れ、

開戦にあたって放送演説をする金日成．1950 年 6 月 26 日．『労働新聞』1994 年 7 月 14 日

中国人と米国人に移ってしまった。しかしこの戦争は、朝鮮の地において、朝鮮人たちが、朝鮮のために戦った戦いであった。中国義勇軍の総司令官彭徳懐は、中国の志願兵を率いて金日成に向かい、この戦いは自分とマッカーサーの戦いであり、金日成は口出し無用、とまで言ったという。またマッカーサーも戦争勃発後、李承晩に会い、自分が北朝鮮の侵略者を撃退してやるから安心せよと語ったという。このような点に鑑みれば、朝鮮戦争は当初より国際戦の様相を呈し、戦争の当事者や後の研究者においてさえ、この戦争の目的に関する認識が希薄であったと思われるのである。ゆえに、ここでは朝鮮戦争が朝鮮人にとって、いかなる意味を有するのかをまず考えてみたい。

第一に、朝鮮戦争は何故引き起こされたのか？　また、この戦争の目的は何か？　第二に、戦争が国際化したとき、北朝鮮内部ではいかなる政治闘争が繰り広げられていたのか？　そして戦争責任追及の政治的挑戦に、金日成はどのように対処したのか？　第三に、朝鮮戦争は朝鮮に多大な影響を及ぼしたが、金日成はこれを北朝鮮国内において、いかなる方向に発展せしめたのか？　これらを考察することとする。

1　戦争の目的

厳密にいえば、朝鮮戦争は戦争ではない。我々が国際法上、戦争行為と規定する範疇に入らないからである。朝鮮戦争に参戦した、どの主権国家も宣戦布告をしていない。国連も自己の参戦を、北朝鮮の

侵略を防ぎ、平和維持のための警察行為であると規定した。
朝鮮戦争は満三年を費やしたが、南北が向き合って戦ったのは一九五〇年六月末からの約六カ月間にすぎない。残りの二年半は北緯三八度線の近辺で、休戦協定を結ぶべく準備しつつ戦ったのであった。その間、各々が休戦協定において有利な位置に立たんと、前方に一寸の土地でも余計に確保すべく戦った。負傷者も多く、戦死者も出した。しかし、戦争初期の六カ月のように洛東江から鴨緑江を上下する巨大な進軍も後退もなかった。このような点から朝鮮戦争を解釈すれば、北朝鮮で金日成が主張する、「自由と独立のための朝鮮人民の正義の祖国解放戦争」という言葉にも語弊がある。朝鮮民主主義人民共和国は大韓民国や米国、いわんや国連に対しても宣戦布告を行ったことはない。
朝鮮戦争を語ろうとする韓国人は誰でも、この戦争がどちらによって始められたものかというところから説き始める。このような問題は、誰が侵略者なのかを決定しようとするところから生じるのである。これが、なおも問題として生き続ける理由は、北朝鮮が一九五〇年六月二五日に南朝鮮を「解放」しようとしたということを認めまいとする点に起因している。
また、戦争には必ず勝者と敗者があり、敗者が戦争のすべての責任を負うのが常である。しかし朝鮮戦争は、勝者も敗者もなく終わってしまった。ゆえに北朝鮮は、戦争を仕掛けたのは自分たちではなく、かつ祖国解放戦争に勝利したのだと主張するのである。
人類史上、戦勝国が戦争挑発の責任を負った事例はない。北朝鮮は一九九三年に、「祖国解放戦争勝利四〇周年記念」事業として三巻の朝鮮戦争史(『偉大な首領金日成同志が領導なさった朝鮮人民の正義の祖国解

「祖国解放戦争勝利」を平壌市民に宣言する金日成．1953年7月28日．『統一新報』1995年7月8日

放戦争史』」を刊行したが、ここでも米国が戦争挑発を行ったと書かれている。しかし、これらすべての北朝鮮の主張には根拠がない。

ここでは、北朝鮮が朝鮮戦争を惹起したことを立証しようとは思わない。金日成が北で軍隊を訓練し南侵したことについては、既に厖大な資料と圧倒的な証拠が明らかにされている。北朝鮮や金日成自身が南侵を否認するのは、彼らが始めた「朝鮮人民の正義の祖国解放戦争」が、成功しなかった点に起因するものと思われる。金日成は南侵が成功裏に推し進められていた一九五〇年九月一一日に、北朝鮮のラジオ放送を通じて自分が戦争を始めたことを正当化しようとした。彼はこのとき、朝鮮人民の自由と独立のための正義の戦いを、誰が侵略者呼ばわりするのか、と述べたのであった。

誰が戦争を始めたのかという責任追及以上に重要なことは、一九四八年に南北に二つの政府が樹立された直後から五〇年の戦争勃発時まで、双方どちらにも軍事的に国を統一しようという意思があったということである。李承晩の統一スローガンは「北進統一」であり、「滅共統一」であった。ただ南側は米軍が軍備を統制し、武器供給を行わなかったため、武力による北進滅共が不可能であったにすぎない。韓国にも武力で北進統一する意図は充分にあった。当時、韓国では、平和統一を主張するものは容共

主義者としてパージされもした。
さて、李承晩は軍人でもなければ、軍の経験もない七〇代の老人であった。他方、金日成は満洲の原野で名を馳せた若きパルチザンである。この事実の知りうる先は戦いであった。金日成が北朝鮮に入ってまず第一に作った工場は、武器製造工場であった。彼は軍人を養成し、南の軍人数の二倍以上の軍隊を備える。彼の武力統一の目的は、もちろん祖国統一であった。当時は南北を問わず、手段と方法を選ばず、朝鮮人であれば誰しも、いざ分断された国を統一せん、という風潮が澎湃として沸き起こっていた。

一九五三年七月、朝鮮戦争の休戦書類に大韓民国が調印しなかった理由も、このような同族相食む戦争まで惹き起こし、民族が統一されないままの休戦など到底考えられなかったためである。米軍や国連軍がことごとく撤収しても、大韓民国は武力統一してみせるという意志があったから、あのような行動に出たのであった。以上の意味で、朝鮮戦争の目的は民族統一から生じたのであり、今日我々が北朝鮮を戦争挑発者として断罪するごとくに善悪の確定されたものではなかったのである。

もちろん朝鮮民族が戦争に及ばず、平和的に統一しようとしていたというならば、戦争を起こした人物の失策は覆うべくもないが、今も当時も平和統一など、たやすく解決のつく問題ではなかった。北朝鮮では平和統一すべく、一九四九年に民主主義民族統一戦線を樹立したと主張する。しかし朝鮮戦争を正確に研究した者ならば誰でもが知っているように、これは自己の南侵を正当化するための手段であり、この戦線をもって朝鮮民族を平和的に統一しようとしたわけではなかった。

朝鮮戦争が終わり、長い歳月を経た今日に至って、修正主義学者たちは北朝鮮の侵略を過小評価する。彼らは朝鮮戦争の挑発者や北朝鮮の南侵が重要なのではなく、朝鮮半島を解放した米国とソ連が無責任に国を分断し、一つの民族に二つの政府を樹立したことに戦争の原因を求めようとする。ときには米・ソが朝鮮を二分し、各々の軍隊を駐屯させて軍政を実施した際、既に朝鮮戦争の種が蒔かれたのだと主張するのである。しかし、このような漠然とした説明よりは、朝鮮戦争の目的は朝鮮民族が統一を熱望したという所にあるというのが、快刀乱麻を断つ説明なのではあるまいか。

2　戦争と責任論争

大韓民国とソ連が国交を結び、ソ連の共産政権が崩壊した後、新ロシア政府は自らの北朝鮮駐屯当時と朝鮮戦争に関する多くの史料を韓国に提供している。これらの史料は、ソ連が共産圏膨張のために金日成を使嗾(しそう)して朝鮮戦争を惹起したのではなかったことを書類により立証した。スターリンが金日成に南侵させたのではなく、武力統一しようとする金日成をスターリンが押しとどめた書類が出てきたのである。

もちろんこれは、ロシアが旧ソ連や現政府の利益に反しない文献を一部公開して、朝鮮戦争の責任を全面的に北朝鮮に転嫁せんとするものである。しかし、金日成がソ連の衛星国家の主席として、戦争計画についてスターリンと議論したことは事実なのである。より重要なことは、ソ連が武器を始めとして

戦争に必要な物資を提供したということである。たとえ金日成が北朝鮮で決定し戦争を始めたとしても、スターリンの許諾なしにはそれを始めることはできなかった。

一九四九年の三月と四月に、金日成が朴憲永・洪命憙・鄭俊澤・張時雨・金正柱・白南雲を伴いスターリンを訪問した際、朝鮮とソ連の経済文化協定が締結された。このとき武力で南を解放しようとする金日成に、それができないよう押しとどめたという。

しかしその後、中国で毛沢東の共産軍が大陸を統制し国家を樹立、米国が極東アジアでの自分なりの防衛線を発表した。そして、そこに韓国が入っていないことを知った後、すなわち一九五〇年正月頃、スターリンは金日成の南侵計画を承認したのだという。

金日成が南侵を遂行できるだけの条件は、対内的にも対外的にも整っていた。戦争物資はソ連から約束を取り付けていた。また兵力は中国から補充することになっていた。金日成は毛沢東に、国共内戦に参戦していた朝鮮人部隊を返してくれるよう要請し、過去、抗日武装闘争に参加していた延辺自治州の朝鮮人を北朝鮮人民軍に入隊させるよう許諾を得ていた。北朝鮮内の政治グループは、この戦争が民族解放戦争であり、正義の戦いであると見なし支持した。ソ連派はもちろん、スターリンが許諾したが故に支持し、延安派も中国大陸が共産化され、共産政権が樹立されたのであるから、朝鮮半島も社会主義や共産主義の思想下に統一されることは当然であると見なした。また金日成のパルチザンたちは、軍隊の主導権を掌握していたのみでなく、金日成に対し完全に忠実なる存在であった。

朴憲永と朝鮮共産党、すなわち南労党系列の国内派も、北朝鮮が南を武力統一すれば故郷に帰ること

ができ、首都がソウルに移されれば自分たちの活動がしやすい。朝鮮労働党内においても、他のグループに対する競争力がさらに強化されるであろうと考え、積極的に支持した。朴憲永は、金日成に南の解放は難しくないと語ったという。北朝鮮の軍が優勢である上に、南労党系列の地下組織を動員すれば南の労働者・農民が蜂起し、北朝鮮を支持するであろう。それにより、米国の傀儡政権は容易に崩壊するであろうと主張したという。

このように金日成はスターリンと毛沢東の承諾と支援を得、北朝鮮内部の支持を受けて戦争を始めたのである。彼の目的は民族統一であったが、それ以外に苦境に陥った北朝鮮の経済難を打開しようという意図もあった。

北朝鮮は一九四七年と四八年に、自己の経済を立て直すべく一カ年経済計画を二度遂行し、経済発展を期した。これらは成功したが、次の一九四九年から五〇年の二カ年経済計画には失敗した。これは北朝鮮の戦争準備にも起因するが、分断された北朝鮮の経済発展に多くの問題があったのである。たとえば、農地の多い南を除外し、北朝鮮のみで産業発展を計画することには限界があった。ゆえに金日成は、朝鮮民族全体の「正しい」経済発展のためにも、国を統一しなければならないと考えたのであった。

金日成は自分の民族解放運動が、中国共産党が中国本土において勝利したように、短い期日の内に完遂されるだろうと思っていた。彼は一九五〇年六月二五日に開戦し、八月一五日の解放記念日を、ソウルで朝鮮の統一独立日として祝賀することを計画していた。しかし彼が予測できなかったのは、米国の朝鮮戦争介入であった。米国が参戦するや、情勢は北朝鮮に完全に不利となった。金日成は共産主義陣

営の宗主国ソ連に参戦を要請したが、ソ連は聞き入れなかった。国連軍は三八度線まで北朝鮮軍を退け、ここで進撃を止めることなく、鴨緑江付近まで北朝鮮軍を撃退した。金日成自身が人民の自由と独立のために南を解放するのではなく、いまや米帝とその「走狗」たちが北朝鮮を解放するべく、中国国境にまで進軍してきた形となった。金日成は北京に特使を送り、中国共産党の援助を要請した。中国の義勇軍、つまり志願兵たちが朝鮮戦争を引き継ぐこととなった。

金日成は満洲でパルチザン運動をしている時もそうであったように、自己にとって不利な事態をいち早く収拾し、次の段階へと移って行った。一九五〇年一〇月に中国義勇軍が朝鮮に入った後、戦争は彭徳懐に任せ、金日成は国内の政治的状況に注意を振り向けた。第一の問題はもちろん、戦争の責任問題であった。誰がどこで失策を演じたのかというところに重きが置かれた。一九五〇年一二月二一日、朝鮮労働党は中央委員会を開き、不利になった戦争の責任を追及し始めた。金日成は米国の朝鮮戦争介入は予測できなかったことであると処理し、戦線司令官たちの作戦計画と戦争遂行が北朝鮮に不利に展開されているというところから彼らの調査を開始した。

北朝鮮軍はパルチザン派が動かしていたため、この派出身の多くの司令官が叱責を受けた。金一・崔光・林春秋等、金日成の腹心の部下を始めとし、延安派の武亭・金漢中、そして国内派からは軍人として出世した許成澤・朴光熙等がすべて批判の対象となった。朝鮮戦争が進行中であった一九五一年一一月と一九五二年一二月に、金日成は党中央委員会を二度重ね、軍高官と党幹部の規律逸脱に対し責任を追及し続けた。しかしこれらは金日成が自己の立場を固守せんとしたものであり、戦線司令官や後方の

党組織の責任を問うものではなかったと思われる。前方の司令官や後方組織が最善を尽くしたとしても、国連軍の北朝鮮攻撃に対し、持ちこたえられるはずはなかった。責任は金日成にあったが、それを他に転嫁するものであった。

3 挑戦と権力闘争

戦争中、金日成の指導力に直接挑戦したのは、ソ連出身の許可而であった。ソ連派の指導者を自認する許可而は、政府要職にはついてはいなかった。しかし、国家主席兼党総秘書の金日成と、最高人民会議常任委員会委員長かつ労働党の初代党首であった金枓奉に次ぐ第三の地位にあった。それは許可而が北朝鮮の党組織に責任を有し、党検閲委員長でもあったからである。彼は戦争中、党員たちの党性（党に対する忠実性）を再検討し、新たな党証を交付する事業に着手した。これは国連軍と南の国軍が北朝鮮を一時占領したあいだの、多くの帰順者または投降者を炙り出すためであった。これは党中央委員会で討議されたことで、金日成も命じたところである。しかし金日成は、朝鮮労働党は大衆党であるから、党員を調査する時には寛大にせよと指示していた。

許可而はこのような命令と党の支持を無視し、一九五一年に戦争が三八度線付近で膠着状態に入ると、全党員の忠誠心を検討すべく調査を開始した。その結果、一九五一年の一年間に党員六〇万名中、四五万名が除名処分を受けた。また新入党員に対しても厳格な規則を適用し、多くの入党志願書を否決して

新党員を入党させなかった。つまり許可而は朝鮮労働党を、大衆党からソ連や中国の共産党のような「エリート」党、すなわち「レーニン」党に再組織しようとしたのであった。これは朝鮮労働党の創党原則に違反するのみではない。金日成の命令を無視し、彼の指導権に真っ向から挑戦するものであった。許可而は金日成に、朝鮮労働党も党員数を六〇万名程度にし、彼らを鉄のごとき党性で武装させ、北朝鮮を統治すべきであると主張した。金日成は許可而の、党の性格を変化させせんとする意図が、単に忠実性を欠く党員を除名することにあるのではなく、自分に挑戦するものであると判断し、彼を党から追放した。そして許可而によって処分された党員を再入党させた。一九五二年に許可而が追放された後、朝鮮労働党は一〇〇万の党員に増大した。かくして再入党した党員も新たに入党した党員も、誰もが金日成を支持した。

許可而は粛清されて地方に配置換えになったが、そこでの仕事を円満に行えず自殺した。彼の死については様々な説があるが、金日成が殺害したという説は信じ難い。朝鮮戦争でソ連軍が援助しなかったことに加えて、ソ連派の最高指導者として知られた許可而が自殺すると、北朝鮮の政界や軍部でソ連派の地位が揺らぎ始めた。金日成は許可而が「党博士」を自称し、党について自分のみがことごとく知るかのごとく振る舞うが、朝鮮語も自由でないのに何を判定しうるのかと批判した。

許可而の挑戦は容易に退けた。しかし続いて、金日成と共に戦争を計画した朴憲永とその国内派が金日成の除去を企てたことは深刻な挑戦であり、権力闘争であった。金日成に比べると、朴憲永は朝鮮共産主義運動の主流である。たとえソ連軍政が金日成を朝鮮人民の指導者として選択したとはいえ、今や

情勢は大なる変化を蒙っていた。ソ連は朝鮮戦争に参戦しなかった。金日成を支持していたスターリンも死去した。そしてソ連の初代大使スチコフも交替し、金日成を直接指導し指示していたイグナチェフ大佐は米軍の平壌爆撃の際に死亡していた。朝鮮共産党系列の指導者たち、李承燁・李康国・林和らは、戦争が勝敗を決することなく終わるものと判断。金日成を除去し、自分たちのリーダー朴憲永を北朝鮮政府の指導者とし、朝鮮労働党を消し去り、朝鮮共産党を再建しようと謀議したのであった。

彼らの金日成除去の動きは机上の空論ではなかった。朝鮮戦争中の一九五一年八月に、対南地下工作のため黄海北道瑞興郡に南の出身者で構成された「金剛政治学院」が設立された。ここの指導者は南朝鮮系列の人々から成り、みな朴憲永の支持者であった。院長は金應彬、前ソウル政治学院院長の宋乙秀が副院長だった。ここには約一五〇〇名の学院生が在籍した。一九五二年三月には南延白に、新ゲリラ部隊を作ったが、これを南朝鮮出身者かつ金剛政治学院で訓練を受けた孟鍾鎬に指導させた。

金日成除去工作の首謀者李承燁は、金日成内閣の司法相であった。彼は一九五二年一一月までに約四〇〇〇名の地下工作員を確保し、彼らを平壌に投入し、金日成とその一党を除去するつもりだった。このような軍事工作に先立ち、李承燁は朴憲永を国家首班とする新政府の閣僚までも決めていたという。陰謀は朴憲永には知らされず、彼を主席とし、副主席は張時雨、内務相に朴勝源、外務相に李康国、国防相に金應彬、宣伝相に趙一明、教育相に林和、労働相に裵哲、そして商業相に尹淳達を選定していたという。一九五三年の初めに軍隊を動員し、平壌に攻め寄せたものの、彼らは金日成のパルチザン派により全員逮捕された。

彼らは休戦宣布の三日後、一九五三年七月三〇日に、北朝鮮最高裁判所において国家転覆罪により起訴され死刑を言い渡された。当時、彼らを起訴した検事は李松雲である。彼は、かつて東北抗日聯軍が普天堡を襲撃した際、金日成に合流したが日本警察に逮捕されてしまったパルチザンであった。最高裁判所の所長も金日成パルチザン出身の金翊善だった。陰謀の加担者たちは、パルチザンがすべてを取りしきる法廷で身動きもならず処罰されたのである。

金日成のパルチザンに対抗した国内派の軍事反乱には、当初から勝ち目はなかった。法廷で李松雲が裵哲を審問する。国内派の指導者がどのような軍事訓練を受け、いかなる戦闘経験を持ち、このような大事を企てたのか？　自分たちには何の経験もなかったと彼は答えた。

彼らは、それぞれ一五年、一二年の懲役刑を宣告された尹淳達と李源朝を除いて、全員死刑となり、李源朝も獄中で死亡した。朴憲永は彼らとは別途に、一九五五年一二月に死刑判決を受け処刑された。

このように金日成は自らに挑戦する者とそのグループをことごとく退け、朝鮮戦争終了後、自己の権力基盤をいっそう強化した。これはあたかも満洲原野において、日本討伐軍の襲撃に遭うも生き残り、いっそう力強く戦った昔日の彼のごときである。朝鮮戦争を惹起するも成功せず、あれほど頼ったソ連には見離されながらも挑戦者を退け、自己の地位をさらにいっそう確固として築き上げた。これは金日成の才能だと言いうる。またソ連軍政時期に金日成が、パルチザンたちをして北朝鮮の軍部を掌握せしめたことの意味が、ここで明らかになった。それは、彼を北朝鮮から朝鮮人の武力で除去することがもはや不可能だという事実である。金日成は戦争の目的を達成することはできなかったが、自己の権力基

盤をいっそう強化させたのだといっても過言ではない。

4　戦争の及ぼした影響

朝鮮戦争は朝鮮民族にとって致命的な戦争であった。南北に分かれ戦争を惹き起こし、以前同様分かれたまま終わった。今日ではさらに、地理的に分かれているのみならず、民族的にも南北の人心を分かち始めている。

朝鮮戦争が北朝鮮に及ぼした影響として幾つかを挙げることができる。第一に、朝鮮の統一は朝鮮人だけの武力では不可能だということ。朝鮮の分断問題は朝鮮問題であるのみならず、東西冷戦の最前線に置かれているという点である。第二に、ソ連と中国に対する北朝鮮の理解に変化が生じ始めたという点である。第三に、米軍の爆撃で廃墟と化した北朝鮮の復旧事業を通じ、人民が金日成を唯一の指導者として認め、彼に対するいかなる挑戦も許容されなかったという点である。以下詳論しよう。

まず第一の点である。朝鮮戦争は、第二次世界大戦の戦勝国が解決できなかった分断問題を、朝鮮民族が自らの手で解決しようとし、失敗した戦争であると言える。朝鮮戦争を惹き起こして初めて、朝鮮民族は自身の愛国愛族心と国際的現実のあいだに大きな乖離のあることを悟った。金日成はソ連人に忠誠を尽くすべく、スターリンを朝鮮民族の親代わりと呼び、東西冷戦のさなか、北朝鮮は社会主義陣営の突撃隊であると誇らしげに語りもした。しかし我々はもう少し冷静に彼の態度を分析してみよう。金

日成がソ連人に選ばれた指導者であるがゆえに、スターリンやソ連政府におもねった点はよく理解できる。だが彼も満洲原野で抗日運動をしていたときには、朝鮮の独立のために命を投げ出して戦った闘士であった。彼は自分にできるやり方、すなわち武力で、分断された民族と分裂した国家を統一してみせようとした。結局、このような信念は挫折したが、朝鮮戦争は彼に大きな教訓をもたらした。韓国の李承晩においても、彼の信頼するアメリカが韓国政府の崩壊直前に同盟国軍を率いて彼を救出してくれた。しかし朝鮮半島の分断問題は未解決に終わってしまった。李承晩は朝鮮人の手で戦争を継続し、分断問題を解決することを望んだが、アメリカはそれさえ許さなかった。

このような意味で、金日成・李承晩を問わず、朝鮮戦争は朝鮮人が自国の解放と独立、そして分断問題解決のために努力した戦争だったと言える。

またこの戦争の教訓は、どちらが侵略しどちらがされたかという論争よりは、分断の固定化と国際化に、より重点を置いて生かされた。以後、南側は米国と西側諸国にいっそう密着し、北側は武力などの方法で統合する意図を放棄した。北側は、朝鮮民主主義人民共和国を発展させなければならないという意図を強く抱くようになった。第二次大戦後、米・ソが朝鮮半島を日本軍の降伏と武装解除のために臨時に分断したのだとすれば、朝鮮戦争はこの分断を固着化させたものと言えよう。

第二に朝鮮戦争の経験は、北朝鮮の社会主義友邦国に対する態度を漸次変化させていった。金日成はかつてソ連を鉄壁のごとく信じ依拠していた。ところが、彼が鴨緑江の畔まで追い詰められ助けを請うたとき、スターリンは頑なにこれを拒んだ。金日成が南侵の許諾を受けにきたときから、スターリンは

朝鮮の統一戦争にはソ連軍を派遣しないことを明らかにしていた。よしんば北朝鮮の政権が倒れることがあっても、ソ連軍が直接介入することはないと釘をさした。戦争中にスターリンは死去したが、後継者たちも彼の政策を固守した。最近になり、若干のソ連空軍が朝鮮戦争に参戦したことと、ソ連軍事顧問団が北朝鮮で活躍した事実が明らかにされた。しかしこれは、アメリカや国連が、南が侵略されたのだといって、これを積極的に援助したのとでは性格が異なる。

北朝鮮を支援したのは、ソ連やスターリンではなく中国だった。中国は「抗米援朝」のスローガンを掲げ、莫大な軍備と軍隊を動員し、倒れんばかりの北朝鮮政権を救ったのである。当時、中国共産党は国民党との内戦に勝利し、中華人民共和国を樹立してから、ようやく一年になろうとしていた。そのような時点で、党と国家の存亡も顧みず、世界の最強国アメリカと、世界唯一の国際機構である国連を相手に戦争に臨んだのである。

金日成は敗戦直前であり、誰が助けてくれても黙して救いを甘受する立場にあった。それが、自分が抗日運動をした際、ともに戦った中国共産党であったため、なおのこと満足に思えた。中国は北朝鮮と国境を同じくする社会主義友邦国である。のみならず、同じ東洋人として西洋人の米国や国連軍に対抗するという考えに彼は浸った。またかつての抗日闘争の際の遊撃戦とは規模も目的も異なってはいたが、ふたたび中国人とともに、今度は自己の祖国内で戦うということにも意義があると考えた。金日成はロシア語はできなかったが、少なくとも中国語には熟達していた。彼は軍の作戦上、彭徳懐の辱めを受けもしたが、北朝鮮政府の興亡を左右する支援であるからと甘受したのであった。

このように対照的なソ連と中国の態度を見て、金日成は自己の奉ずる社会主義諸国家の再評価を始めた。すなわち、朝鮮戦争から金日成の反ソ・親中イデオロギーが芽生えたのである。北朝鮮はソ連邦を社会主義陣営の宗主国と認め、思想的にも技術・文化、そして軍事的にも最も先んじた国であると考えてきた。ところが自分が必要なときに、血を流し助けてくれる国はソ連ではなく、中国であることを悟った。このような反ソ・親中イデオロギーは、後に北朝鮮の重要な思想的基盤に発展した。この起点を用意したことは、朝鮮戦争が北朝鮮に及ぼした影響の一つである。

三番目に入ろう。朝鮮戦争が朝鮮の分断を固定化したため、北も南も自分たちの政府が統一後に一つの政府が建つまでの臨時政府なのだ、という認識に変化が生じた。いまや各々が各々の政府を永久化する。すなわち北朝鮮では、金日成が朝鮮民主主義人民共和国を強固にし、朝鮮を代表する社会主義国家として発展せしめるのである。いわば、戦争前までは南北に二つの政府が設立されていようとも、両者が一国一政府を創出しようと努力してきた。しかし、戦後はこのような統一に対する執念より、自己の政府の発展と繁栄に重きが置かれた。以後南北は、朝鮮戦争から二〇年を過ぎるまで統一について対話することがなかったのである。

このような状況下で、金日成は北朝鮮を再建し、自己の権力に挑戦するいかなるリーダーもグループも無慈悲に処断した。彼は、戦争中に許可而の挑戦を退け、戦後には朴憲永と李承燁の国内派の反乱を難なく鎮圧した。金日成にとっての当面の課題は、戦争中アメリカ空軍の止めどない爆撃で廃墟となった北朝鮮を再建するという大事であった。

彼は、戦争中のソ連の態度を見て、これまでのようにソ連に大きく依存することはなくなったが、北朝鮮の経済復旧のためにはソ連に援助してもらわないわけにいかなかった。東欧の社会主義陣営の諸国家も、みな北朝鮮を経済的に支援してくれた。中国は戦争中に志願兵で戦闘を助けてくれたばかりでなく、終戦後も五年間、志願兵は北朝鮮に残り、経済復旧に参与した。

このような中国の援助は北朝鮮再建に大きな影響を及ぼした。またここで特記すべきことは、中国は終戦後五年間の北朝鮮駐屯時、北朝鮮の内政に一切干渉しなかったことである。特に延安で中国共産党と共に戦った朝鮮人たちが北朝鮮にもどり、金日成との関係で不利な立場にあったが、これを意に介さなかった。北朝鮮を一つの社会主義友邦国として助けた。戦争中にも、中国義勇軍の指導層と親しい人間関係にあった武亭が、金日成から批判され追放されても、中国は北朝鮮の内政に干渉することはなかった。

実際、朝鮮戦争に軍隊を送らなかったにもかかわらず、引き続き北朝鮮で問題を惹起していたのはソ連だった。ソ連はスターリンの死後、いくつかの段階を経てフルシチョフが指導者として登場した。フルシチョフは修正主義を唱えつつ、スターリンの格下げ運動を開始した。ソ連でスターリンのような一人独裁政治を清算し、集体的指導体制を打ち建て、党と政府の指導者を分離し、集体的にソ連を統治するというのである。戦争が終わり、初めて召集された朝鮮労働党第三回全党大会にソ連はブレジネフを送り込んできた。彼は、ソ連共産党第二〇回党大会で根本的な変化があったと伝え、朝鮮労働党も上下を問わずすべての党機関で集体的指導方法を適用すべきことを促した。

権力分散を意味する、このような集体的指導体制の提案は、金日成や毛沢東のようなスターリン型の指導者には受け入れることのできないものだった。金日成は第三回全党大会で表面的には首肯したように語ったが、内容的にはソ連で起こっている修正主義的傾向に反対し、北朝鮮がソ連から自立すべきことを暗示した。それのみではない。このとき以来、金日成は自分の過去を明らかにし、自己の満洲での抗日闘争が朝鮮独立運動の主軸たる運動であると語り始めたのである。

これに反対し、ソ連の修正主義に従い、金日成の独裁政治に反旗を翻したグループが、崔昌益を主とする延安派であった。彼らは、ソ連派としてなお党の要職に残っていた朴昌玉等と共にソ連の指示を汲み、北朝鮮においても集体的指導方法を実施すべきだと主張した。彼らはこの原則を党と政府だけでなく、社会・文化・軍事面でも適用させるべきであるといい、金日成の政治指導権に直接の挑戦を試みたのであった。

かつて呉淇燮が主張したのと同様に、延安派の徐輝は、労働者が自己の労働条件が悪化したときにはストライキを行使する権利があるといった。尹公欽は、次第に甚だしくなりつつある金日成の個人崇拝傾向を非社会主義的であると批判した。また延安派の金乙奎は、満洲で抗日闘争をした金日成のパルチザン運動のみが朝鮮人民軍の伝統ではなく、朝鮮独立運動の伝統は各地に見出すことができると主張した。

金日成はこのような挑戦を、一九五六年から五七年にかけて完全に退けた。中国延安から帰国した延安派の指導者たちは再び中国にもどった。いわば、ソ連から来た朝鮮人たちは北朝鮮でソ連の立場が不

利になったためソ連に帰り、中国から来た朝鮮人たちは自己の立場が不利になるや中国に帰ったのである。金日成は、戦後どこにも帰る所のない国内派を自己のパルチザン派を利用して粛清したことになる。かくして金日成と彼のパルチザン派だけが北朝鮮の指導層として残った。

金日成は、一九五六年四月に開かれた朝鮮労働党第三回全党大会と、一九五七年九月からの第二期最高人民会議を通じ、解放後北朝鮮に割拠していた派閥グループの痕跡を拭い去り、自己のパルチザンのみを唯一のグループに結束させた。他のグループに残っていた者たちは、皆なす術もなく金日成に忠誠を誓い、パルチザンたちの顔色を窺うようになった。一九五八年三月、中国義勇軍が北朝鮮から完全に撤収するときまでに、金日成は国内のいかなる者であれグループであれ、彼の政治指導権に挑戦できなくさせたのであった。

金日成は朝鮮戦争で祖国統一の目的を達成できず、朝鮮分断を固定化してしまった。また彼は北朝鮮で自己の政治指導権を固定化した。戦争中も戦後も、北朝鮮の政治闘争において金日成は常ならざる能力を発揮した。たとえ自分が始めた朝鮮戦争を成功裏に終結できず、軍事的に国を統一できなくとも、彼は北朝鮮国内の自己に挑戦する政治グループや政治家をことごとく払拭したのである。

かくして金日成はソ連人たちが北朝鮮に扶植した指導者であっても、朝鮮戦争後にはソ連人や中国人の幇助なく自己の政治的地位を維持しえた。金日成に比べれば、彼に挑戦したすべての他のグループ指導者たちは無能であった。金日成は与えられた運を活用し、朝鮮戦争の失敗を北朝鮮国内政治において自らに有利に展開したのである。このような意味で、彼は有能な指導者であると言える。また彼は自己

の政治基盤を確固として突き固め、北朝鮮に対する中国とソ連の影響力を減らし、自主路線を創案したのであった。

第四章　中ソ紛争と自主路線

金日成は解放以前より朝鮮独立のために抗日運動を行い、国が解放され、さらに分断されるや、得意の方法、すなわち武力で朝鮮を統合し独立させようと試みた。自分としては勝算ありとみて朝鮮戦争を開始したが、失敗した。

終戦後、北朝鮮の幾つかの派閥が彼の権力基盤を攻撃し、彼を除去しようとした。金日成は破壊された国の再建を推進する一方、自己に反対する人々を粛清し、自分の政権を確固たるものに築き上げた。しかしこれらの事の成った後、金日成は北朝鮮にいかなる政治体制を打ち建てようとしたのか？

朝鮮の北半部ではあるが、彼はここに民主基地を構築し、韓国を社会主義政治体制に統合しようとした。もちろん朝鮮半島の分断五〇年間に、彼はこの仕事を成就しえずに死亡した。しかし、彼は北朝鮮にはたして社会主義政治体制を作ったのだろうか？　また南北朝鮮を統合するに足る政治構造を作ったのだろうか？　そう問うのなら、とてもそのようには思われない。

彼は終戦後も、南朝鮮に強硬なる政策をもって対し、南北の分断を助長した。朝鮮民族の自由と独立のためよりは、北朝鮮での自己の政権を維持・確保していくことに多くの努力を傾けた。そして執権が長期にわたるほど、自己の政権や改革に対する批判を許さず、独裁政治を押し通した。抗

日独立運動をしていた頃、彼はこのような分断の独裁者たることを望んではいなかったはずである。一国と一民族を回復せんと朝鮮戦争を起こしたときも、自分個人が独裁政治をなしうる国家を建てようとしたわけではなかった。しかしすべてに失敗し、北朝鮮のみでも社会主義体制を築こうとしたのだが、それさえも順調にはいかなかった。

また、国際環境も大きく変化した。北朝鮮を解放してくれた国、ソ連も再評価された。自分を選び権力の座に上せてくれたスターリンも死去した。かつてともに戦った中国共産党も朝鮮戦争時には助けてくれたが、朝鮮半島の統一に固執せず、戦後経済復興を援助し、そして去っていった。

金日成はこの二カ国から、個人的にも国家的にも多くの恩恵を受けた人物である。しかし戦後、自家を整え、いかなる北朝鮮を造り上げるべきか？　それはこの二カ国に依存する問題というよりは、彼と北朝鮮人民が解決しなければならないことであった。

戦後の経済復興のために、金日成は多くの社会主義同盟諸国の援助を請い、それを受けた。しかし彼の根本的な態度は、朝鮮人が自国を自らの手で、戦争の廃墟から立ち上がらせるということであり、そのような原則を立てた。

彼個人としては北朝鮮人民の指導者として、「以身作則」の原則を立てた。自らが身をもって経験してから規則を作り、他の人々を働かせるのだと言った。金日成は絶対に怠慢な人ではない。彼は「現地指導」という名目で北朝鮮の津々浦々を訪ね、労働者・農民を激励した。また労働者が物資を節約し、生産を増加させるよう、様々な増産運動を展開した。

鴨緑江の建設現場を現地指導する金日成．1960年5月．『労働新聞』1994年8月2日

一日に千里を駆けるという馬の故事に倣った千里馬（チョルリマ）運動が、降仙製鉄所で開始された。彼は、千里馬騎手・千里馬作業班・二重千里馬作業班などという称号を与え、労働者を激励した。農業分野では平壌近郊の青山里へ行き、青山里方法を打ち出し、農業を奨励した。また大安電気工場へ行っては大安作業班を作り、工業を奨励した。

彼は北朝鮮に新しい共産主義者を創りだした。新しい共産主義者は政府に不平不満を言わず、国に対する愛国心と忠誠心を物質的報償の代わりとし、腹一杯食べずとも最大限の労働力を捧げる人物である。このような人々の努力を引き出そうと、金日成自身も多くの努力を重ね、それを自己の現地指導で示した。

朝鮮労働党第四回全党大会が開かれた一九六一年九月までに、北朝鮮は戦争から立ち直った。金日成は自己の千里馬運動が成功したのだといった。これより北朝鮮は七カ年経済計画を立て、経済復旧から経済発展へと歩みだす。このとき金日成は朝鮮戦争の悪夢から醒め、南北統一よりは北朝鮮の発展にいっそう力を注いだ。不幸な結末に終わった南の李承晩政権や、学生運動と軍事クーデターで混乱に陥った南朝鮮に比べ、北朝鮮では社会主義が勝利したのだと、彼は語った。

北朝鮮の国内政治は金日成のパルチザン派が完全に掌握していた。他のグループは皆崩壊し、それぞれの何名かの指導者たちが残っていた。彼らは、なおも一つの集団として健在なパルチザン派に忠誠を誓った。たとえば、ソ連派として朝鮮戦争の休戦協定の北朝鮮代表だった南日がいる。彼は、他のソ連派の人々がソ連に帰ったときも北朝鮮に残り、金日成に忠誠を捧げた。延安派では派の指導者たち、すなわち崔昌益・尹公欽・金科奉らが金日成に粛清されたとき、金昌満のような主要メンバーが同僚を告発してパルチザン派におもねった。国内派では、まずまずの指導メンバーは、戦争中と戦争直後に皆処刑されてしまった。しかし派の人数がそもそも多いので、特別な技術を持った者は国内派出身でも金日成に引き続き登用された。その代表的な人物が朝鮮農業の専門家朴文奎であった。彼は北朝鮮で死亡したが、死ぬまで金日成と北朝鮮社会主義建設に忠誠を尽くした。

このような例外はあるが、北朝鮮政治の主流は金日成であり、彼を支持する唯一のグループは彼と共に満洲の原野で戦ったパルチザンたちだった。一九六一年、朝鮮労働党第四回全党大会時の指導的人物や主要機関の責任者たちは、皆パルチザンだと見て差し支えないほどである。そして金日成と、彼らの東北抗日聯軍の闘争記録が、朝鮮独立運動の主流となり始めた。東北抗日聯軍の名が朝鮮人民革命軍に変じた。さしたる期間でもないパルチザン運動期の生き残り闘士たちが、民族の英雄へと変貌を遂げた。

このように戦争から立ち直り、政敵を退け、人民の愛国心と忠誠心を束ね、北朝鮮は再建された。だが、金日成のパルチザンたちの政治進出には幾つかの根本的な問題が内包されていた。第一に、

彼らの大部分が軍人や軍人出身であった。彼らが一九六〇年代に政治に進出するや、北朝鮮では軍人たちが勢力を持ち始めた。それは北朝鮮で軍部が重要となったのみではない。彼らが政界に登場し、朝鮮労働党の政治委員会を牛耳るようになったのである。一九六八年の朝鮮人民軍創軍二〇周年記念では、軍人が跳梁する現象が生じた。

第二に、パルチザン自身が、ほとんど正規の教育を受けられなかった人々であった。人民を鞭打って労働に駆り立てたものの、人民の教育の方はおろそかにされたのである。北朝鮮では対外関係や科学発展においても一律に立ち遅れた。多様な先進国の技術を導入するのではなく、ごく少数の留学生をソ連に送り、その大部分は思想と言語教育程度で終わっている。国内では労働と忠誠心に重きが置かれて教育がなされ、人民の文化水準や政治参与は立ち遅れた。

第三に、金日成が完全な独裁者になり始めたことである。パルチザン派が他派を除去し、唯一の政治グループとなったために、パルチザンたちの金日成に対する忠誠心は保証された。しかし、自分たちの指導者が完全な独裁者になろうとも、彼らにはそれを批判することができなかった。金日成はこれを利用し、ソ連衛星国家の一配下から偉大なる指導者、民族の「首領」（朝鮮語で政治集団の長の意）に自らを変貌させた。彼が法を無視し、国が法治国家から一人独裁国家に変じようとも、これを正すことができなかった。そして彼らはまた、正そうともしなかった。

パルチザンと彼らの領導者金日成の登場は、以上のような余波を残した。しかしとりあえず、一九六〇年代の北朝鮮の直面する課題は、このような国内の問題解決よりは、国際的な問題の方がよ

り大きく浮上してきた。それは国際社会主義陣営の根本的な理論問題をめぐる中ソ紛争であった。

1　中ソ紛争

北朝鮮の境遇においては、中ソ紛争は他の諸国よりもいっそう大きな意味合いを含んでいた。ソ連は朝鮮を日本から解放し、朝鮮民主主義人民共和国を作り上げた国である。また中国は志願兵を以て外国勢力と戦い、朝鮮戦争で崩壊前夜にあった北朝鮮政権を救い出してくれた国である。この二つの国が社会主義発展の方向と理論的な問題で互いに紛争を惹き起こしたとき、北朝鮮はどちらに付くべきなのだろうか？　金日成は中ソ紛争の真意を把握すべく、ソ連と中国を何度も訪問した。ソ連には第二〇回ソ連共産党大会以来、ほとんど毎年の党大会に参席している。中国にも数年間は毎年必ず一、二度訪問した。

金日成は中ソ紛争について、公式的には中立を守ると何度か語った。しかしその実、彼は中ソ紛争の基本理論を把握していた。ソ連の平和共存的な側面は、間違いなく修正主義を主張するものである。金日成にとって、社会主義陣営と資本主義陣営の平和共存は許容しうるものではなかった。朝鮮のように南北が分断された国としては、労働者・農民の社会主義国家が、無産者を搾取する資本主義社会と平和裏に共存するというのは納得のいかないことであった。特に、資本主義国の米国を首班とする諸国と戦争し、なお統一が資本主義諸国家のために成し遂げられぬ北朝鮮。そのような国として、韓国の資本主

義政権と平和裏に共存するということは、理論と実践のいずれにおいても受け入れ難いことであった。
ソ連と中国は一九六一年に、朝鮮労働党第四回全党大会へ各々の共産党代表を送り込み、北朝鮮に自己の立場を説明した。ソ連からはコズロフがやって来た。彼は、ソ連の宇宙船スプートニクの発射成功を誇り、平和共存政策による西独との国交正常化について説明した。中国からは、中ソ紛争で中国を代表してソ連人たちと論争を繰り広げた、鄧小平がやって来た。彼は中国共産党を代表して述べた。平和共存の理論は理解できる。しかし、アジアは西洋と異なり、朝鮮半島は分断されており、ベトナムも分断されている。のみならず、中国にも台湾問題がある。また、カンボジアやラオスのような国もある。加えてアジアでは、いまだ資本主義を代表する米国が日本に軍事基地を有し、虎視眈々と社会主義諸国家を狙っている。
このような理論的対立については、北朝鮮も中立路線を論争の場で繰り広げることもできた。しかし実質的な面では、北朝鮮の立場は中国に片寄らざるをえなかったのである。もちろん、かつてソ連も北朝鮮政権樹立後に軍を完全撤収したし、中国も朝鮮戦争後に自軍を退いた。しかし中国の義勇軍は朝鮮戦争時と戦後復興に力を貸したが、ソ連は何もしなかった。ここから反ソ・親中の感情が芽生え始めた。ソ連軍と共にやって来たソ連派も、今やほとんどがソ連に帰るか、北朝鮮の政界からは除去されていた。新たに勢力を得たパルチザン派は満洲で中国共産党と共に戦い、中国語を操る者たちであり、ロシア語の話せるソ連留学組でもなかった。
ときに毛沢東は金日成を北京に招待した。しかしそれは、中ソ紛争での北朝鮮の立場に疑念を抱いた

からではない。中国と北朝鮮との血で結ばれた関係を再確認するためであった。毛沢東の設けた公式晩餐には、中国共産党の指導者たちのみならず、朝鮮戦争で武勲を立てた将軍たち、かつて満洲で闘争した東北抗日聯軍の生き残りの将軍たちが呼ばれていた。その中には、金日成のかつての上官であった周保中将軍も含まれていた。周保中将軍は満洲で抗日闘争をしていたときも、一九四一年にソ連に渡り八八特別旅団にいたときも、金日成の直属の上官であった。歳月は流れ、金日成は北朝鮮の国家元首として、毛沢東と共に晩餐会の上席に座ることになった。上官であり戦友であった周保中は、中国共産党の序列に従い、末席についていたという。このとき金日成は、まず昔の上官であった周保中のところに出向き、敬意を表してから自分の席に座ったという話である。

中国を訪問し毛沢東主席と会う金日成．1958年11月．
For Friendship and Solidarity

このように金日成と中国には、朝鮮独立運動と抗日運動から朝鮮戦争時を貫く、血で結ばれた歴史的関係がある。またその日の晩餐会の席上は、朝中間の長い共同闘争を讃え、中国の莫大な犠牲と援助を想起させる場でもあった。毛沢東は自分の息子を朝鮮戦争で失っていた。金日成と彼の伴ったパルチザン出身の指導者たちは、このような朝中関係に立脚していた。中ソ紛争で中国を見捨てソ連を支持することは、想像だにできないことであった。中ソ紛争

で北朝鮮は、ソ連と外交上は親善関係を維持しつつも、理論的にも、実際の政治上でも、中国を完璧に支持した。

金日成は北朝鮮と直接利害関係のない中ソ紛争問題については、細心の注意で身を処した。ソ連がキューバにミサイルを設置せんとして撤回することになったときも、北朝鮮はソ連を非難しなかった。米国に反対し、キューバを支持した。また中国とインドが国境問題で戦ったときも、北朝鮮は中国を完全に支持した。しかしソ連がインドを支持したからといって非難することもなかった。このような立場を永遠に維持することはできない。ついに北朝鮮は、中ソ紛争が最も甚だしかった一九六二年から一九六四年まで、反ソ・親中の立場を国際的に示した。またこのとき、北朝鮮とソ連との紛争が開始されたのである。

2 朝ソ紛争

北朝鮮とソ連の紛争は、北朝鮮のソ連への挑戦や、ソ連の北朝鮮に対する直接的な抑圧から生じたのではない。中・ソの関係が悪化し、北朝鮮の立場が中国に傾くや生じた。それは東欧のソ連衛星諸国が北朝鮮に圧力を加えることから開始されたのである。

一九六二年一二月、チェコスロバキア共産党第一二回党大会に、北朝鮮を代表して李周淵が参加した。彼は、東欧のソ連支持の衛星国家が北朝鮮の中国支持に不快感を抱いていることを明白に感じ取った。

その翌月、一九六三年正月には、東独の党大会に北朝鮮代表として参席した李孝淳は、準備してきた演説原稿を読むことすらできなかった。東独の党大会を祝賀する彼の演説文も、参席者に配布することを禁じられた。李孝淳は、中ソ紛争により欧州とアジアの共産主義者が分立してしまったと慨嘆した。そして、ユーゴスラビアのような修正主義の党代表は東独党大会で演説できたのに、北朝鮮・ベトナム・インドネシアなどのアジアの共産党代表には演説の機会が与えられなかったと述べた。

このような不祥事の後、北朝鮮と中国との関係はいっそう接近した。ソ連からの援助は中断され、北朝鮮は中国の自力更生の原則に倣い、自力の経済発展を試みた。さらに崔庸健を始めとするパルチザンたちが中国をしばしば訪ね、中国からも劉少奇とその他の高位党幹部たちが北朝鮮を訪問した。朝・ソの対立はこのように政治外交的なものであり、直接論争しあう体のものではなかった。北朝鮮はあくまでも、中ソ紛争ではうわべは中立を守るかのごとく語った。中ソ対決で北朝鮮はどちらを支持するのかという問いに、北朝鮮はソ連と中国が領導する社会主義陣営を支持すると答えた。

しかし内実は、北朝鮮は中国を支持していた。そしてソ連の修正主義に反対していた。このことは、北朝鮮が二つの問題についてソ連を攻撃したことによく現れている。そのうちの一つは、ソ連が朝鮮の歴史を正しく理解していないという学問的な攻撃であり、いま一つは、ソ連が平壌で開催されたアジア経済会議を非難したことに対する北朝鮮の反応であった。

一九六三年に劉少奇が北朝鮮を訪問したときのことである。北朝鮮の著名な史学者三人、金錫亨・金煕一・孫永鐘が、ソ連科学院で出版された世界史中の朝鮮史の記述を批判する文を『労働新聞』に大書

特筆した。彼らは朝鮮史の叙述において、古代史から現代史に至るまで、ソ連の科学者たちがいかなる誤謬を犯しているかを詳細に述べた。もちろん朝鮮史の史実内容は、ソ連人より北朝鮮人の方が、自分たちの歴史であるぶん詳しく知っているはずである。そこでソ連の学者たちの誤りを指摘したのであった。しかし、ソ連科学院から出された朝鮮史に関するところは、世界史記述の一部分である。ソ連人が新たに朝鮮史を研究して書いたものではない。この世界史はシリーズ本として一九五五年から始まり、一九八三年までに一三巻が書き継がれた厖大なる世界史であり、朝鮮史が特別に問題になったわけではなかった。

振り返れば、北朝鮮がこれを問題として取り上げたのは、劉少奇の北朝鮮訪問時に北朝鮮の反ソ的立場を示したものと言える。ここでは北朝鮮の史学者が指摘した、ソ連の朝鮮史記述の誤りをあえて紹介はしない。これは『労働新聞』一九六三年九月二〇日付と、朝鮮労働党機関誌『勤労者』一九六三年九月号に掲載され、よく記録をとどめている。ただこのような記録で、北朝鮮はソ連の学者たちが朝鮮史を叙述するにあたって、日本人の書いた朝鮮史を書き写したとも、朝鮮における社会主義建設を等閑視したとも言っている。このような攻撃に対し、ソ連政府やロシアの学者たちは一言半句の回答もしなかった。

第二は、一九六四年六月に平壌で開催された第二回国際アジア経済会議であった。ソ連はこの会議がキプロスのニコシアで開かれることになっていたのに、その場所を中国人が平壌に変え、アジア経済に無知な者たちが集まり、アジア経済について討論したものだと非難した。この会議は、アジア諸国はソ

連式の経済発展より中国式の経済発展をせよという、中国の宣伝扇動会議だとソ連はいった。またこの会議で、アジア諸国に対するソ連の経済援助を受けることは、アジア諸国の主権を侵害されることだと中国が扇動したといい、ソ連は共産党機関紙『プラウダ』紙上で中国と北朝鮮を一纏めに攻撃した。

これに対し北朝鮮は、平壌で開催された国際会議を正当化した。アジアの経済発展会議はアジアですべきである。何ぞ東欧においてをや。アジアのすべての問題はアジア人がより多くを知っていると述べた。ソ連の経済援助については各国の代表が否定的な発言をしたが、北朝鮮は条理を貫いた。すなわち朝鮮戦争後、ソ連が平壌紡織工場と興南肥料工場などを再建するに当たり援助してくれたことを明らかにし、これに感謝を表した。また、経済援助と技術援助が戦後の経済復旧に役立ったことを認めた。実際は朝鮮戦争後、中国がソ連の数倍の経済援助を無償でしてくれたのだが、これについては言及しなかった。

しかしソ連の経済援助と関連し、北朝鮮は初めてソ連を非難した。解放後、ソ連が北朝鮮に入り、日本人が残していった産業施設を持ち去ったこと。援助物資としてくれたものもあるが、建築資材などを北朝鮮に売るときには、国際市場価格よりはるかに高い値段で売却したこと。また彼らは北朝鮮に駐屯しているあいだに、北朝鮮から大量の金塊や鉱山資源を持ち出した。彼らはそれを買収するときには、国際市場価格よりずっと安い値段で買い取ったという。ソ連に比べると、中国の志願兵たちはソ連駐屯軍の二倍を越える八年という長い歳月を北朝鮮で過ごした。しかし、中国は北朝鮮を経済的に搾取せず、戦後経済建設に助力したと述べた。

ソ連はこの問題についてもまた言及しなかった。それ以後も北朝鮮と中国との関係が深くなる反面、ソ連との関係は悪化した。北朝鮮は、ソ連がアジア人とその国家を無視し、民族的に差別していると言った。アジア諸民族はソ連の経済援助がなくとも、自分たち自身で経済発展を成し遂げることができるとも述べた。しかし北朝鮮の対ソ攻撃には、金日成は加わらなかった。朝ソ紛争の第一線で、ソ連を断固として批判したのは金昌満であった。彼は元来、延安派に属し、ソ連をよく知らない人物である。のみならず、金昌満は自分と同僚の延安派の人々を金日成に告発し、生き残った人物でもあった。

北朝鮮を友好訪問したコスイギン・ソ連首相と会う金日成. 1965年2月. *For Friendship and Solidarity*

このような金昌満の攻撃に対し、ソ連はいかなる反応も示さなかった。この面では、朝ソ紛争は中ソ紛争とはその性格を異にしていたと言える。何らかの思想的、あるいは政策的差異も垣間見られず、互いを直接非難することもなかった。たしかに両国の関係は悪化したが、北朝鮮は従来のような上下関係からは抜け出した。そして朝ソ関係は根本的な差異点よりも形式的な舌戦であったため、和解もそれほど困難なものではなかった。

フルシチョフ失脚後の一九六四年一〇月、北朝鮮はソ連との関係改善を図った。その年の一一月に開

催された第四七回ソ連一〇月革命祝賀大会に、北朝鮮を代表して金一が参加した。ソ連からもその後、新首相に選ばれたコスイギンが、一九六五年二月に平壌を訪問した。この他にもソ連からはシェレーピン、ノヴィコフなどが北朝鮮を訪問した。他方、一九六五年には崔光が、一九六六年には崔庸健がソ連を訪問した。北朝鮮は韓国との軍事対決で、ソ連の先進武器導入が緊要であったため、紛争を長引かせることはできなかったのである。特にこの当時、韓国は米国と結託して韓国軍をベトナムに派兵していたので、北朝鮮にはソ連との関係改善が必要であった。

3　朝中紛争

ソ連との紛争とは異なり、中国との紛争は北朝鮮に大なる影響を及ぼした。この紛争の原因は朝・中の関係から生じたというよりは、中国国内にあり、それが朝鮮に及んだのである。中国では一九六〇年代後半に文化大革命が起こった。それが朝中関係に及び、紛争となった。実際、北朝鮮は、中国で生じた文化大革命に格別な関心を払っていたわけではなかった。しかし中国の紅衛兵たちが北朝鮮を訪問し、北朝鮮の社会主義を批判したところから紛争が始まった。

一九六七年より中国の紅衛兵たちは、大字報（壁新聞）で金日成を非難し始めた。彼らは金日成をさして、フルシチョフのような修正主義者だといった。またこのような金日成を追い出すべく、北朝鮮では金光俠が金日成除去のために軍隊を動員した、あるいは別の将軍たちが金日成を逮捕したなどと、一連

の根拠のない流言を壁新聞に書き、張り出した。そして紅衛兵たちは言った。韓国がベトナムに派兵し、南ベトナムを助けているのに、北朝鮮は北ベトナムを助けていない。朝鮮戦争で中国が北朝鮮を支援したことを思い出せ、と。さらに紅衛兵が北朝鮮に行ってみると、そこは中国のようには文化大革命の火の手があがっていなかった。そこで、金日成は毛沢東に従わない人物だと非難したのである。

このような話はだんだんと甚だしくなり、広州で出版された『文革通旬』に「今日の朝修集団」と題する文章が載った。そこでは、金日成は反革命修正主義者である。彼は昔の朝鮮の皇帝のように、大門を五つ六つも通り抜けないと彼の皇室にたどり着けない。彼の宮殿は平壌だけでなく、金剛山・朱乙温泉・鴨緑江下流の新義州にもある。日本海側でも清津に別荘があり、このような別荘に金日成はいくらも滞在しないのに、北朝鮮の軍人たちが常に守っている。そして金日成は肥満し、昔の皇帝のようであり、社会主義革命をする闘士にはとても見えない。

このような紅衛兵たちの事実無根の攻撃で、北朝鮮は駐北京大使を召還し、平壌に駐在する中国大使も追放してしまった。ソ連との紛争では、両国ともに国家の基幹に関し言及することはしなかった。が、中国との紛争では金日成が非難の主たる対象になってしまった。

このような非難に対する反発だったのかもしれない。北朝鮮ではこのとき、一九六七年に、金日成は自己の父母に対する孝行心を表す記念碑と、その業績を讃える記念館を建立した。そして金日成は北朝鮮人民の首領と称した。

朝中紛争はこのように、金日成と彼の北朝鮮での政治指導力に対する批判問題が起点となった。しか

し実は、これよりいっそう重要な多くの問題が内包されていた。その中でも最大の問題は、朝・中の国境問題であり、中国の東北地方と朝鮮半島の最高峰、白頭山の境界に関する問題であった。ここで白頭山をめぐる朝・中間の昔年の論争を繰り返すことはしない。しかし両国の白頭山定界碑問題は、一七一二年にまで遡らねばならない。ここには李朝粛宗代、清国吉林捴管の穆克登と、朝鮮王朝を代表する接伴使朴権が登場する。彼らは鴨緑江と豆満江を境界とし、両江の発源地白頭山に両国の国境を示す定界碑を建てた。これが事の発端であった。

このように建てられた定界碑が一体どこにあったのか。歳月は流れ、その痕跡も失われた。中国と朝鮮の両国民は、どちらも白頭山を自分の国のものと思っている。中国では長白山と呼び、神話上の満洲族発祥の地域とされる。朝鮮人には白頭山といえば、朝鮮史上、常に朝鮮の最高峰と称されてきた。中国と北朝鮮との関係が良好なうちは、この高山の境界線は大した問題にならなかった。しかし一九六七年から六九年まで両国の関係が悪化すると、中国は俄かに白頭山全体が中国の領土であるといい、のみならず白頭山南側の朝鮮の地まで中国領内であると主張した。このような主張をもとに作製された地図を見るに及び、北朝鮮は白頭山全体が両江道の三池淵に属する「我が国の山」という地図を出版した。

このような領土問題は、中国と朝鮮がいつかは明確にしなければならない事柄であったが、朝中紛争がこの問題を浮かび上がらせたのである。ところが一九六九年に金日成が突然白頭山に登り、頂上の湖、天池を見おろす写真が広く報道された。これは、中国と北朝鮮がこの問題を既に解決したことを仄めかしていた。両国の国境を定立する文献は今日なお公開されていない。しかし白頭山と天池を二分し、中

白頭山に立つ金日成.『労働新聞』1995年7月8日

国と北朝鮮に国境を表示する碑が建てられ、北朝鮮側には金日成の白頭山登頂を記念する碑も建てられている。このような国境合意に反対したのは、台湾の国民党系列の学者たちであった。彼らは、中国の共匪が朝鮮の共匪に中国の聖山を半分くれてやったと非難した。この白頭山は朝鮮民族の起源を象徴するだけでなく、今日北朝鮮では金日成の抗日革命根拠地として聖地化されている。

一九七〇年四月に中国の周恩来が平壌を訪問したときまでには、朝中紛争のすべての問題は解決されていたものと思われる。しかし朝・中の和解は、両国間の何らかの合意でなされたというよりは、中国国内の変化に起因するものであった。すなわち、中国の文化大革命が幕を下ろし、北朝鮮との関係が改善されたのである。中華人民共和国二〇周年記念式典には朝鮮を代表して崔庸健が参席し、一九七〇年三月までには両国の大使が復帰した。このように正常的な関係が回復できたのは、中国の文化大革命が終わったことに大きな原因があることは上述した。が、加えて一九六九年一一月に日・米が協議のもと、米国がアジアから漸次手を引くべく、日本の役割を強調したことにも影響されたものと思われる。

4　自主路線

ソ連と中国との紛争を通じ、北朝鮮は両国に対する過去の従属的関係を清算し再出発した。この二カ国ほど北朝鮮に大きな影響を及ぼした国はない。ソ連は北朝鮮を解放し、そこに共産政権を作った。中国は、この政権が朝鮮戦争を起こしたものの、米国と国連軍の反撃で崩壊する直前に軍隊を送り、これを存立させた。しかし、それは一九四〇年代と五〇年代の話である。一九六〇年代に入ると、この二カ国は中ソ紛争という政治思想的・外交的葛藤で社会主義陣営を分裂させ、かつ北朝鮮との関係をも悪化させた。北朝鮮はこれらの恩人たちの争いのなかで円満なる外交を展開し、朝・ソならびに朝・中の国家間の問題を巧みに解決した。かくして、一九六〇年代末葉までには、この二カ国の影響下から脱し、北朝鮮は自分たちなりの自主路線を選択したのであった。

金日成は今やソ連衛星国家の某首長ではなく、社会主義陣営の某突撃隊長でもない。また彼は中国の紅衛兵が要求したような、毛沢東を崇慕する人物でもない。かつて東北抗日聯軍の一師長だったことも昔話になってしまった。一九六〇年代の末までには、中国共産党の東北抗日聯軍は北朝鮮自前の朝鮮人民革命軍へとすり替えられ、金日成は抗日聯軍の一師長から百戦百勝の朝鮮人民革命軍将軍へと変身した。朝鮮民主主義人民共和国はソ連と中国の影響圏から独立し、一個の第三世界非同盟国家となった。金日成はそのような独立国の首領に変じたのである。

インドネシアでスカルノ大統領の歓迎を受ける金日成．1965年4月．*For Friendship and Solidarity*

過去、ソ連と中国のみに慌ただしく行き来していた性根を変え、金日成は初めて一九六五年四月にインドネシアを訪問した。これは第三世界の概念を宣布した、インドネシアのバンドン会議一〇周年記念会議に参席するためであった。彼はこの会議で北朝鮮の自主路線を明らかにし、生まれて初めての名誉博士号をインドネシアで授与された。中学校を二年で中退し、パルチザンとして戦い、中・ソの共産党に主人に仕えるごとくに仕えてきた彼。名誉博士号は、五三歳になった金日成が初めて受けた誉れであった。それのみではない。ここでは貧困と襤褸のうちにも、第三世界諸国家が米国・ソ連・中国などの大国に仕えることなく、独立の姿勢を見せていた。金日成のように、長いあいだソ連と中国の機嫌を伺いながら生きてきた者にとって、このような自主性はとても羨ましいものであった。

国内では朝鮮労働党第二回代表者会議において、金日成は初めて中ソ紛争について言及した。そして北朝鮮の自主性を闡明にした。彼は社会主義陣営の修正主義と教条主義の葛藤を認め、北朝鮮の自主的な立場を語った。金日成はベトナム派兵問題についても、社会主義陣営が力を合わせ北ベトナムを助けることを提案した。また北朝鮮がこれに参与する用意のあることも明らかにした。しかし、ある一国が

他国に参戦を要求するということは大国主義である。それは内政干渉だと断定した。金日成は北朝鮮が大国主義の圧力を多く受けた国であることを自ら認めた。そして将来は、どちらか一方に片寄ることのない第三世界の国家になることを誓った。

金日成のこのような自主性宣言は軽視されるべきではない。そもそもこの朝鮮労働党第二回代表者会議は、一九六一年からの国家経済七カ年計画が予定通りにならなかったので開かれた。つまり完遂期間を三年間延長するために召集された会議だった。たとえ自分たちが建てた経済計画が不完全であることを是認しても、外国の援助は受けない。自主性を固守するのだという意味があった。また国家外交関係でも、ソ連の顔色を窺っていた姿勢を一掃した。ソ連派出身の南日を解任し、金日成自派のパルチザン派から朴成哲を外務相に任命した。そして北朝鮮の外交関係をソ連・中国そして東欧の社会主義諸国家から第三世界の各国へと発展させた。北朝鮮は朝鮮民主主義人民共和国として、かつてソ・中の影響力下にあったときには、一〇カ国にもならない社会主義諸国家と国交を結んでいた。それが今や第三世界に進出し、九九カ国にもなる諸国家と国交をもつようになった。

ユーゴスラビアを公式訪問したさい，チトー大統領と抱きあう金日成．1975年6月．*For Friendship and Solidarity*

このような国交関係を結ぶまでに、金日成は自分の過去

の誤りを正し始めた。たとえば中ソ紛争時に中国側に立ち、東独の党大会で修正主義国家と非難したユーゴスラビアに対する態度がそれである。金日成はこの国が中ソ紛争時の中立国であったことに気づいた。そしてチトーが非同盟運動の重要人物であることを知ったのである。金日成は過去に、チトーを資本主義の走狗といい、国際的反動修正主義者だといっていた。しかし自分が第三世界に入ると評価が変わった。金日成はユーゴスラビアを訪問し、チトーを国際社会主義運動と「ブロック不加担運動」(帝国主義と社会主義ブロックに加担しないという意味)の先駆者であり闘士であると述べた。そしてチトーを平壌に招待し、自分の近しい親友として紹介した。

このようなブロック不加担運動と第三世界との親交は、北朝鮮を世界に紹介する契機となった。また、これにより国連の多くの専門機構にも加入するようになった。そしてこのような関係を通じ、北朝鮮は一九七五年に世界非同盟国家会議に加入することに成功する。以後、アフリカと南米の国家首班たちが平壌を訪れるようになった。さらに金日成も、東アジアの小国北朝鮮の首領として世界に知られ始めた。スターリンや毛沢東に追従する、衛星国家の突撃隊長というイメージも次第に消えていった。

このように北朝鮮が自主路線を闡明にしたことは、北朝鮮がソ連や中国の大国主義の羈絆から解放され、第三世界に進出したことのみを意味するのではない。これにより金日成自身が、北朝鮮人民の首領へと自らを格上げしたのであった。今や北朝鮮人民は、スターリンや毛沢東のような外国人を世界的な指導者として欽慕するのではない。金日成は北朝鮮人民に、朝鮮人を世界の檜舞台に指導者として押し立てたという矜持を持たせたのである。いま一つの意義はここにあった。

5 パルチザン派の解散

北朝鮮の自主路線はその代価を伴っていた。たしかに金日成は中ソ紛争を通して朝ソ・朝中紛争を終わらせ、北朝鮮の独自性を闡明にした。しかし、北朝鮮は経済発展と軍事・安保問題で大打撃を蒙った。中ソ紛争時の中国に対してと同様、北朝鮮からもソ連のすべての技術者たちが、自分の設計図と計画書を持って帰国したのであった。北朝鮮の経済発展は当分のあいだ沈滞状態に陥り、完全な経済の回復は容易ではなかった。しかし、それは徐々に解決された。より大きな問題は北朝鮮の国防問題であった。韓国と軍事的に対峙しているため、ソ連の軍事援助なしでは安保問題に多大な支障をきたすのである。当時、韓国はアメリカと協力し、ベトナム戦に派兵することで軍備を近代化していた。それはかりではない。職業軍人の軍事クーデターの後、日本と国交を樹立し、日本の資本を誘致し本格的な経済開発を開始した。

このような韓国の経済・軍事発展に比べ、北朝鮮では、これまで社会主義陣営の一員としてソ連と中国からもらってきた恵みが途絶えた。自らの手で経済発展問題と軍事・安保問題を解決しないわけにいかなくなったのである。

一九六二年一二月一〇日、朝鮮労働党は第四期中央委員会第五次拡大会議を召集し、経済建設と国防建設の並進路線を採択した。そして「片手には銃を、もう片方の手には鎌とハンマーを!」という党の

新たな戦闘的スローガンを掲げた。金日成は経済建設と国防建設のどちらも弱化させることなく、同じ比重で人民が闘争し前進することを訴えた。しかし、このような経済建設と国防建設との並進は困難であった。

人は片手に銃を持ち、もう一方の手に鎌とハンマーを持てば、銃もろくに撃つことができない。農場や工場の運営も思うに任せない。人の手が二つしかないように、北朝鮮人民の労働力と軍事力にも限界がある。実際このような場合には、経済的基盤をまず固め、その上に軍事力が打ち立てられねばならない。しかるに北朝鮮は、これとは正反対に発展していった。北朝鮮の軍は金日成のパルチザンたちが完全に掌握していた。彼らは軍を強化するため、経済官僚を抑え込み、軍事施設と装備を増強した。金日成は、一九六四年二月二五日からの第四期中央委員会第八次全員会議の席上で、『社会主義農村問題に関するテーゼ』を発表し、軍と農民の関係向上および農民の水準を高めるため、農村における技術革命・文化革命・思想革命を徹底的に遂行することを促した。しかし北朝鮮の経済は発展しなかった。

パルチザン出身の将軍たちは自衛国防を徹底貫徹するためには、経済発展はある程度遅らせても、国家安保問題を解決せねばならないと主張した。韓国で一九六〇年代に経済開発が開始されたことに比べれば、北朝鮮では朝鮮戦争の戦後復旧を終え、一九六〇年代には韓国より比較的早く経済発展を成し遂げていた。しかしソ連および中国との紛争による打撃で、北朝鮮の経済は軍事の発展に遅れを取り始めていたのである。

金日成は国内政治において自己の政敵をことごとく処理し、一九六〇年代には、かつて自分を助けて

くれたソ連・中国から自立し、北朝鮮の自主路線を闡明にした。が、このような独立した朝鮮を支えるに足る経済力と軍事力が不足していた。北朝鮮の自主性を維持するには、北朝鮮の国民がよい暮らしをするより、軍事力を強化することの方がいっそう重要であった。かくして金日成は四大軍事路線を発表し、朝鮮労働党第二回代表者会議でこれを詳細に説明した。

北朝鮮の四大軍事路線とは、全人民の武装化・全国土の要塞化・全人民軍の幹部化・全軍の現代化をいう。全人民の武装化というのは、軍人・労働者・農民の区別なく、北朝鮮人民なら誰でも鉄壁のごき国防に貢献せよという意味である。このような軍事路線は労働者と農民からなる労農赤衛隊を作りだした。また正規の軍人だけでなく、青年たちを動員し、「赤い青年近衛隊」を創設した。この赤い青年近衛隊は、北朝鮮の子どもたちに軍事訓練を行うことが目的だった。

二番目の全国土の要塞化は、次のような内容である。まず北朝鮮のすべての産業で軍需物資が作れるようにすること。北朝鮮の地方の諸処に地下工場を作ること。地下に軍備を蓄えられるようにすること。そして北朝鮮が長期戦になっても、無理なく備えられるようにすることである。

三番目の全軍の幹部化は、北朝鮮の軍人であれば誰でも、自己に与えられた任務だけでなく、幹部に与えられた仕事までもやり遂げられるようにせよというものである。

第四の全軍の現代化は、朝鮮人民軍を、現代の先端技術を使って作られた武器で武装させること。のみならず、朝鮮人民軍の武器は朝鮮の地形に適合するように作り出さねばならないということ。かつ現代技術の武器のみで武装するのではなく、在来式の武器と現代的な武器を併用し、朝鮮で能率良く戦え

る武器で武装しなければならない、というものだった。

また、このような四大軍事路線の発表だけでなく、党内に軍事委員会を再建した。軍事委員会は朝鮮戦争時に存在し、休戦後に廃止されていた。これを、軍事問題を重視し始めてから再建し、軍事問題を専門に取り扱わせたのである。金日成自身も朝鮮人民軍の創軍記念日の二月八日には、五年ごとに軍を訪問し、重要な政策演説を行った。ときには金日成軍官学校の卒業式にも出向き、軍紀を正し、軍人の士気を高める激励の言葉を贈った。北朝鮮の軍は金日成のパルチザンたちが掌握していたので、彼の激励の辞はよく浸透し、軍人が勢力を得ていく端緒となった。このように北朝鮮は経済発展と国防建設を並進せんと目標を立てた。しかし軍人たちは彼らの士気の方を高めたのであった。かくして国防と軍事・安保に重きを置く傾向は、経済発展に大なる被害を与えたのである。

一九六六年、朝鮮労働党第二回代表者会議が召集された。その重要目標の一つは、一九六一年の朝鮮労働党第四回全党大会から開始された七カ年計画が、予定通りに終えられなくなったことにある。これを三年間、延期しようというのである。党代表者会議とは、全党大会と全党大会との間に重要な案件があるときに開かれる会議である。それは一九五八年に続き、二度目の開催であった。この第二回党代表者会議は、北朝鮮の一九六〇年代の政治発展状況をよく物語る会議であった。つまり、経済発展と国防建設の並進路線がいかなる結果をもたらしたかということである。経済発展はこの会議において、七カ年計画の三年間延長という形で、彼らの経済難をあらわにしたのである。しかしより重要なことは、国が軍事・安保と国防建設に重きを置いたため、軍人、すなわち金日成のパルチザン派が、党と政府にま

で進出するようになったことであった。

これまで金日成のパルチザンたちは大体において、軍関係の仕事に没頭し、党の責任ある職には就かなかった。が、ここでパルチザンの将軍たちは現役にありながら、党中央委員会で最も重要な政治委員会に進出するようになったのである。かくして第二回党代表者会議の後、政治委員会の全委員一一名がパルチザンやパルチザン関連の人物で構成されるようになった。当時、金日成・金一・崔庸健・朴金喆・金光侠は既にパルチザン派で政治委員として在任していた。李孝淳だけがパルチザンではなかったが、彼の兄李悌淳は金日成と共に戦って死亡したパルチザンであった。つまり彼もパルチザン系統の重要人物として登用されたのであり、パルチザンと変わりなかった。この六名のパルチザンが留任した。そして第二回代表者会議では、非パルチザン系列の政治委員五名が降格された。すなわち金昌満・朴正愛・鄭一龍・南日・李鍾玉である。そして彼らに代わり、五名が新たに政治委員に選出された。そのうち四名、すなわち金昌鳳・朴成哲・崔賢・李永鎬がパルチザンである。彼らは現役の将官ないし司令官であった。

このようなパルチザンたちの政界進出と、軍人たちの四大軍事路線重視は、中国やソ連からの自主性獲得の基盤を成したかもしれない。しかし、これにより経済成長の不振がもたらされ、軍人たちの跳梁は金日成の北朝鮮に不安な雰囲気を醸し出した。

この当時韓国では、朴正熙が日本と国交を樹立して日本資本を導入し、本格的な経済発展が始まっていた。またアメリカと結託し、韓国軍をベトナムに派兵することにより、軍の現代的装備がなされた。

経済援助も受け、技術も導入し、先端産業も発展の途についた。このような韓国の軍事的かつ経済的発展は、まさに北朝鮮がソ連や中国の手を借りず自主的に成し遂げんとしていたことであった。韓国はこれを日本とアメリカに依存し、彼らの力を借りて成功裏に成し遂げつつあったのである。実際、北朝鮮においては、韓国のような経済基盤構築と軍の現代装備化は、中国とソ連の助力を得ても困難であった。いわんや彼らから孤立し、かつて満洲原野で武装闘争をしていたパルチザンたちが指導したのだから言わずもがなである。

北朝鮮と韓国の発展の様相は次第に変じ、北では南に対する不安感を各方面で露わにするようになった。北朝鮮の対南政策もパルチザン出身の許鳳学が受け持ち、その間継続していた民族解放運動に拍車をかけた。これまでの地下工作はいっそう甚だしくなった。一九六八年一月には、韓国の朴正煕を殺害すべく暗殺団が送り込まれたが成功しなかった。この他にも北朝鮮の対南政策は、地下の民族解放運動を引き継ぎ、韓国の各地でゲリラ戦まがいの遊撃戦として繰り広げられた。北朝鮮の『労働新聞』は、韓国でも報道されない南側のゲリラ遊撃戦を報道し、朴正煕殺害と韓国の革命を誘発せんとしていた。このような北朝鮮の対南強硬政策は、朝鮮人民軍創軍二〇周年の一九六八年二月八日を前後して展開された。これは朝鮮労働党政治委員が全員軍人出身となり、金日成のパルチザンたちが政党に名を連ねて後に起こったことである。

パルチザンの軍人たちが仕出かしたことは、これにとどまらない。彼らは、日本海で北朝鮮情報を常時収集していた米海軍艦艇プエブロ号を拿捕した。北朝鮮が韓国にゲリラ団を送り込み、韓国の大統領

を暗殺しようとしたり、韓国で民族解放運動を工作したことなどはさておいても、米海軍艦艇の拿捕は朝鮮半島にふたたび戦争を招来する可能性が高かった。米国は航空母艦エンタープライズを日本海に送り、事態を収拾しようとした。この他にも北朝鮮は米空軍の諜報機を墜落させるなど、様々な軍事活動を行った。北朝鮮の軍人たちには、そのような軍事行動が北朝鮮の新たな軍事路線を実践に移したものと映じたかもしれない。しかし北朝鮮を統治するのは金日成である。彼には軍人たちの冒険主義が、北朝鮮の安保に不安を招くものに見えた。

北朝鮮ではパルチザンの将軍たちが、様々な面で軍事関係を越えて、非軍事的問題にまで言及するに至った。目に一丁字もないパルチザンの崔賢が、『労働新聞』紙上で一文をものにする。金光俠が北朝鮮の農村経営制度について長演説をぶつ。金日成は北朝鮮を維持するため、このように水火も辞さず冒険主義に浸るパルチザンたちを除去することにした。

まず対南政策を担当していた許鳳学が、軍人でない金仲麟に入れ替えられた。また政治委員を始めとする、政府や軍の高位幹部のパルチザン派将軍十余名が解任された。そこには金光俠・金昌鳳・崔光・李永鎬・石山らの錚々たるパルチザン将軍たちが含まれていた。

金日成は彼らの軍事政策を批判した。その当時国防相だった金昌鳳は、国庫を浪費して最先端の武器ばかり購入しようとした。また北朝鮮人民で組織された労農赤衛隊を無視したと批判された。二番目は、朝中紛争時に中国の紅衛兵たちが暗示した金光俠であった。紅衛兵の言うように、彼が北朝鮮の軍隊を掌握し、金日成を除去しようとしたか否かは明らかではない。しかし軍事・政治部門における彼の権力

は、金日成が許容しうる限界を超えていたことも事実である。彼ら以外にも崔民喆・鄭炳甲・金子麟・金昌徳など何名かのパルチザンが除去された。

このような軍の政治関係を整理した人物が呉振宇であった。彼は当時の国防相金昌鳳の罪状を羅列するなどした。自分自身もパルチザンであるが、他の同僚たちを除去し、金日成に忠誠を尽くしたといわれる。呉振宇はその後、金正日を後継者として推戴し、金日成・金正日に次ぐ指導者となった。その彼が、このとき頭角を現したのである。後に再び言及するが、この当時、金正日が父金日成に対する党内の陰謀を暴露し、不純分子を処理するのにも彼が貢献したという。

金光侠を頭目とし、パルチザンの将軍たちが金日成に挑戦したかどうかは確実でない。しかし、彼らパルチザンが除去されると、北朝鮮には金日成のパルチザン派さえいなくなり、金日成だけが残った。また彼らの除去は、北朝鮮の軍事政策に変化をもたらした。党と政府から職業軍人たちが除去されたのである。たしかに軍に対する政策が変わったからといって、北朝鮮の経済事情が俄に良くなるものでもない。が、政府では官僚たちのより多くが出世することができた。朝鮮革命の根幹をなす、抗日運動である東北抗日聯軍、今やそのパルチザンの万事万能の威信が奪われたのであった。その後、何人かのパルチザンたち、たとえば崔光のような軍人は再任用された。しかし大部分のパルチザンたちは再任されなかった。

かくして朝鮮の解放当時、北朝鮮に顕在した四つの政治グループはすべて消え去った。残ったのは金日成ただ一人である。政治的に金日成がいかなる主義・主張を打ち出しても、北朝鮮を統治することが

できた。今や彼が信じることができるのは、彼の親戚と、彼が教育し育成し、彼に忠誠を誓った若い指導者たちだった。そしてこのような次世代を代表するのが金正日だと彼には思われた。

北朝鮮の政治発展過程をかく分析すると、それは金日成という一個人が権力闘争に成功した過程であると言える。彼は北朝鮮に社会主義政府を樹立すべく闘争したのではないようだ。ただ社会主義の看板を掲げ、権力闘争を行ったのである。さらに朝鮮独立運動時の彼の意志や、独立闘士たちの朝鮮民族のための自由なる政治への渇望。それらは南北を問わず、朝鮮戦争以後、影を潜めてしまった。朝鮮戦争後、民族統一の念願は南北の競争に置き換えられた。南北は、一国を回復しようと努力しなかったようである。

南にしても北にしても、各自が自分たちもよく分からない民主主義や社会主義を看板に掲げ、その下で純粋なる政治権力闘争を繰り広げてきたものと思われる。特に北朝鮮では社会主義体制を創出するために、帰国した四グループが自派の利益を超えて政治発展を推進したかといえば、そうでもない。朝鮮戦争まではこれらのグループが同床異夢式に、分断された国を回復しようと、互いに協力し合い戦争準備をしていたのかもしれない。それが不成功となるや、互いに責任を追及し合い、戦った。このような過程で、北朝鮮から三つの政治グループが除去され、一つのグループのみが残った。それは何らかの朝鮮式の特色をもつ社会主義政治体制を作りだすためではなかった。単純な権力闘争に起因するものであった。

このような理由で、パルチザン派だけが生き残ったとき、北朝鮮は何らかの社会主義を実施する政治

体制というよりは、一個の軍閥となった。あるいはパルチザンたちが作りだした軍人国家となった。そして彼らは、自分たちなりに軍事的な冒険を行ったのである。

金日成も自分に向かってくるあらゆる挑戦を乗り越えてきた。それは何らかの社会主義革命と社会主義国家建設の名の下になされたというよりは、自分の権力基盤に対する挑戦に権力闘争の次元で対応したものであった。金日成に能力があり、彼の挑戦者が無能だったためか、彼は政治闘争で勝利し、北朝鮮を統治した。しかしその国は社会主義国家ではない。金日成の国になった。また金日成は、何らかの社会主義政権国家の、社会主義原則を守り錬磨する人民の指導者というよりは、自分自らを首領と呼ぶ一個の独裁者となった。

一九六〇年代の中国・ソ連との紛争において、北朝鮮がこれら二カ国の大国主義、そして修正主義や教条主義に巻き込まれることなく、自主路線を選択したことは、金日成の政治能力として賞賛するに値することである。北朝鮮に建てられた政府は、これら二カ国に大きな恩恵を負う政府である。しかし彼らが自国の国益のために互いに争っているとき、北朝鮮はそこから脱して自主路線を闡明にし、新しい友人を第三世界に求めた。もちろん北朝鮮が新たに作った友人たちは、中国やソ連のように大国ではなく、経済力や軍事力も別段たいした国ではなかった。が、彼らは互いに結束し、世界の強大国を相手に国際的な影響力をもっていた。彼らは中国やソ連のように、北朝鮮の経済発展や政治発展に役立ちはしなかったが、金日成が自主路線を樹立するのには大きな助けとなった。

第三世界の新生諸国家は、ある程度北朝鮮の経験と類似の過去をもつため、彼らとは呼吸が合った。

また開発途上の国家ゆえに、互いに多くの経験談を分かち合うことができた。しかし北朝鮮が、これらの開発途上の第三世界諸国家とは根本的に異なる点もあった。それは朝鮮の分断である。また開発途上国は経済発展をしようにも、技術と能力が不足し、その国民の教育水準や技術導入に大きな問題があった。韓国を見ても分かるように、朝鮮民族ではそれは大きな問題にはならなかった。ただし韓国は、最高に発達した先進産業諸国家と協力して経済発展を成し遂げた。ソ連と中国から自立した北朝鮮は、教育も技術もない第三世界諸国に合流し、未開発国家という称号を免れなくなった。さらに北朝鮮は、韓国との経済競争に完全に敗北したという挫折感をも免れえなかったのである。

金日成は北朝鮮の政治闘争に勝利し、確固とした基盤に権力を打ち建てた。中・ソの抑圧から自立こそしたが、韓国との競争には敗れた。第三世界に友人を多く得たが、彼らからは満足感を得ることはできなかった。このように矛盾に満ちた北朝鮮の政治発展過程で、これを正当化し、金日成に自信と勇気を与えたのは、まさに彼が主唱した主体思想であった。この思想は北朝鮮に有用な思想として、仔細に知っておく必要があると思われる。

第五章　主体思想

金日成は自らの得た共産主義思想の根を、彼の通っていた満洲の毓文中学校にまで遡ろうとした。今日でも北朝鮮の革命博物館には、彼を教えたという中国の名のある学者、尚越の文が展示されている。金日成はこの学校に通い、尚越から共産主義について学んだことになっている。しかし彼はここに二年しか通っていない。それも二〇歳にもならない中学生時代である。知識の発達程度から見ても、共産主義について理解があったのかさえ疑わしいほどだ。彼が共産主義を学んだとすれば、それはごく初歩的な水準であっただろう。金日成が、その後何らかの学説や理論を体系的に研究したということはない。彼は行動派に属する人である。思索派に属する人物とは言えない。

それでは彼は、いかにして主体思想なる思想を作り出したのだろうか？　また、かく作りだされた思想はいかなるものだったのであろうか？　この思想は共産主義とどのような関係を有するのか。またこの思想は北朝鮮人民を統治する上で、あるいは北朝鮮の対外関係を扱う政策に対し、どのような役割を果したのだろうか？　このような問題には、主体思想の哲学的内容を否認してしまえば簡単に答えることができる。すなわち、主体思想は金日成が創案した単純な原理である。しかしそのように言っても、そこには様々な哲学的内容が添加されている。しかも、北朝鮮において創り出された思想として広く知られている。

今日、北朝鮮が世界を相手に伝播している主体思想は、その発生時の原型とは大なる差があり、その内容と実践目的にも大きな距離がある。その変遷は、あたかも金日成の革命伝統に類似する。金日成の抗日闘争は、そのまま語ったとしても立派なものである。しかし北朝鮮では、このような彼の抗日運動に事実ではない業績をあまた付加し、彼の抗日運動を革命神話に仕立て上げてしまった。同様に主体思想も、初めて出現した一九五〇年代の北朝鮮では単に政策段階にあった。それが一九六〇年代には思想的体系を形作った。そして今や、人々の一般的な思想真理として宣伝されている。誇張された金日成の革命伝統が、金日成や北朝鮮の歴史記録に対し害となるように、誇張された主体思想の宣伝は、主体思想それ自体に害をなすものと思われる。

金日成の抗日運動が朝鮮の独立運動に貢献したように、主体思想は北朝鮮の自主路線を追求する上で大きく寄与した、北朝鮮の政策である。その事実をそのまま紹介しても、何ら遜色のない理路整然たる理論である。しかしこれを、マルクス主義やレーニン主義のような一般的原理と称することには無理がある。どこでも誰にでも適用できる思想として持ち上げることは、主体思想にはそぐわないことである。

北朝鮮では、金日成の思想的創案能力と天才的指導力とを強調せんとする。ゆえに彼が毓文中学を中退し投獄された後、マルクス主義文献を耽読したという。また、その後卡倫に行き、国民学校の三年生と四年生に『資本論』と弁証法的唯物論を教授したとしている。このようなことは事実ではない。金日成のように中学校二年で中退した学生が共産主義を学習したからといって、それがど

れほどのものか。『資本論』を読んだからといって、それをどの程度理解できたものか。誰でも疑ってみることができる。それにしても、彼が卡倫のような満洲の僻村で国民学校三・四年生に、弁証法的唯物論を教えたというのは笑止である。幸いにも金日成自身は、彼の回顧録『世紀とともに』において、このような馬鹿馬鹿しいことを書き連ねてはいない。よしんばそうだからといって、金日成の哲学的な考え方や基本認識が高められるものでもない。貶められるものでもない。ただ金日成がその少年期に、共産主義思想やそのような思想をもつ人々と接触したということだけでも立派なことである。

どこの国もマルクスの思想を政治体制の基本理念として用いるときには、その国と政府に合うように直して用いる。あるいは通常、その国の指導者が自分の思想を添加して用いる。ロシア革命後、レーニンはマルクス主義を使い、国を治めようとした。ときに、マルクスが机上で考え出した哲学的原則では対処しきれない事が多々あった。これらを補充するために、レーニンは共産党をつくり、無産者を体系的に教育しようとした。政策決定過程でもマルクスが想像だにしなかった問題を解決せんとし、レーニン主義というものを作りだした。

また中国の毛沢東は、有産者に搾取される労働者が中国では少数であることに気づいた。彼は共産革命を農民を以て行い、マルクスがせよというままにはしなかった。別の共産政権を建てた。中国では歴史の長久さゆえ、中国人即漢族が考案したのではない思想は中国に合わない。それが中国の支配的思想になったことはないといわれる。中国でもマルクス主義の原理は利用されたが、中国

を治める支配的思想はマルクスの思想ではなく毛沢東思想である。また東アジアでは指導者が考案したものでなく、マルクス主義のみを原理とし、国を治めた指導者もいた。その良い例がベトナムの胡志明（ホーチミン）や、モンゴル人民革命党の歴代の指導者たちであった。

北朝鮮ではレーニンや毛沢東のように、金日成が自分の思想を創出した。マルクス主義の原理は利用したが、自分の思想で国を整え、民を治めた。それが主体思想である。このような意味で、主体思想はマルクスが作りだした哲学的原則ではない。毛沢東思想が中国でのみ有用であるように、主体思想は北朝鮮でのみ有用である。これは決して、世界のどこでも、誰にでも、いつでも適用できる類の一般的原理ではない。金日成の主体思想は、朝鮮の経験から朝鮮人が採り上げた政策から成ったものである。北朝鮮のような政治環境に置かれた人々に適合する思想である。開発途上国であれば、どの国にも使える思想といった類のものではない。

金日成はまず、自分自身の主体が何かという問題を提起する。そして朝鮮労働党の思想事業での主体は、我々が何をしているかに答えることによって明らかになるという。そこで彼は、自問自答する。「我々は何処かよその国の革命ではなく、まさに朝鮮革命をしているのです。この朝鮮革命こそ我が党思想事業の主体なのです。それゆえ、すべての思想事業は、必ず朝鮮革命の利益に沿っていなければなりません」（「思想事業で教条主義と形式主義を退治し、主体を確立することについて、一九五五年一二月二八日」『金日成選集』第四巻）と。ここに確かに表されているように、主体思想は朝鮮人の、朝鮮での、朝鮮の利益のための思想である。世界の他のいかなる開発途上国国民の指針でもない。

もちろんこのような朝鮮人の主体思想が、他国に影響を及ぼすこともありうるだろう。ある場合には有用かもしれない。しかしこれを、マルクス主義などの哲学的学説と見なし、世界の無産者の政治思想として際立たせようとする北朝鮮の努力は主体思想のためにならない。毛沢東思想が中国革命に有用であったように、主体思想は北朝鮮には有用であった。今日、北朝鮮は世界各国に主体思想研究所を設立し、その国の人々に主体思想を信奉させようと努力している。このようなことは余計なことである。それは金日成を北朝鮮の指導者から、世界的な指導者へと顕現させたいという努力にすぎない。そして、このような努力は成功しえない。

主体思想は朝鮮人に何を教えるのか？　まず「自分自身のもの」を誠実に研究し、それに通暁しなければならないという。また思想事業から教条主義と形式主義を退治し、主体を確立せよという。今日、北朝鮮が第三世界に主体思想を注入せんとすることは、主体思想の本質にそぐわないことである。第三世界の人々にとっては、北朝鮮の主体思想は「自分自身のもの」ではない。ときにはこれが、彼らにとって教条主義となり、形式主義となって伝達されることもありうるだろう。主体思想はこのようなことを退治せよと言ったのではなかったか。

主体思想は朝鮮人に有用な思想であった。金日成はこれを創案し、自己の施政指針とした。以下、この思想の源流と発展過程を辿ってみよう。

1 発展過程

主体思想の種は、朝鮮戦争から芽吹き始めた。

人であれ、国家であれ、自分が最も必要とするときに助けてくれる相手に感謝するものである。逆に助けを期待し、その要請が拒絶されれば、相手への評価を改めることにもなる。北朝鮮は朝鮮戦争を開始する頃までは、まだソ連を世界の労働者・農民の祖国として、スターリンを朝鮮人民の父代わりとして尊敬していた。ゆえに、金日成はスターリンから朝鮮戦争の許可を得ようと骨を折った。また許可を得た後には、戦争に必要な武器の供与も受けた。ところが、このように許可と支援を得て始められた「朝鮮民族解放」戦争で、北朝鮮は国連軍に駆逐され、鴨緑江まで追いつめられた。しかしスターリンとソ連は、金日成のソ連軍派兵の要請に応じなかった。

延安派の代表的人物、朴一禹を毛沢東に送り、中国の派兵を要請したところ、中国は義勇軍をもってこれに応じた。実は金日成は、中国や毛沢東よりソ連やスターリンを信じていた。韓国を支援しに来た一六個の軍は、米国が主たる軍であった。そのため、ソ連が相応に戦ってくれるはずだと考えていた。米・ソは東西冷戦の主軸であり、その対決は民主主義陣営と社会主義陣営の対決のはずであった。朝鮮がスターリンから「社会主義陣営の突撃隊」と称されたとき、金日成は非常な満足の思いで、社会主義陣営に貢献することを忠実に誓ったものだった。

金日成は朝鮮戦争も朝鮮民族を解放することにより、社会主義陣営を強化することだと意味づけていた。このような両陣営の衝突において、米国は国連軍を通じ、自分の同盟国を引き連れて韓国を助け、北朝鮮に押し寄せた。が、スターリンは東欧の社会主義諸国を動員もせず、金日成のソ連軍参戦要請も聞き入れなかった。中国人の助けで生き延びた後、金日成は北朝鮮とソ連の関係、そして東西冷戦について再考せざるをえなかった。また社会主義陣営内の団結力と、米国と資本主義社会内の関係とを比較しないわけにはいかなかった。

ソ連が朝鮮戦争に参戦しなかったのは、もちろんスターリンの決定であった。しかし戦時中にスターリンは死んだ。金日成と最も親しかったソ連大使スチコフは帰国した。金日成の政治顧問イグナチェフは、戦争の犠牲になった。新たなソ連大使は親しみのある人物ではない。ソ連ではスターリンを格下げし、修正主義に傾く気配を見せていた。金日成の対ソ感情には不信感と疎外感が芽生え始めていた。このような感情は、かつて満洲で共に戦った中国人との関係が良好になるにつれてさらに強まっていった。

戦争により廃墟となった北朝鮮を再建するためには、このような反ソ感情を表面化させることはできなかった。それでも、戦後の経済復旧でソ連と中国の支援には歴然とした差があった。金日成は一九五三年九月にモスクワを訪問し、経済援助を要請した。ときに、ソ連の新指導者たちは一〇億ルーブルを貸し与えたが、一九五四年と五五年にかけて返すようにといった。次にその年の一一月、金日成が北京を訪問し援助を請うと、中国は八兆元を中国貨で貸し与えた。のみならず、一九五〇年から五三年までのすべての経費を帳消しにしてくれた。そして中国はこの借金も後に容赦してくれた。が、ソ連は利子

を免除してくれたのみで、元金は全額回収していった。金日成の気持ちとしては、自己の立場はなおのこと、中国・ソ連と北朝鮮との関係を再考しないわけにはいかなかった。このような再評価の途中で、ソ連からやって来た許可而が朝鮮労働党の党権力を賭けて、金日成に刃向かったのである。金日成は迷わず彼を圧し潰した。金日成が主体思想を唱えるまでには、このような反ソ・親中の思いが、やがて芽吹く種のように深く打ち込まれていた。

金日成が主体思想について初めて言及したのは、一九五五年一二月二八日のことである。彼は政敵の許可而と、朴憲永とその国内派を粛清し、朝鮮労働党の宣伝扇動部幹部たちに、北朝鮮の思想活動について講じた。ここで金日成は、北朝鮮では今より教条主義と形式主義をなくそう、主体を打ち立てようと語った。すべては朝鮮革命を正しく行うことにその目的がある。我々がソ連共産党の歴史を研究するのも然り。中国の革命を研究するのも然り。マルクス・レーニン主義の一般的原理を研究するのも然りである。彼はそう語った。

朝鮮革命を知るには、朝鮮についてよく勉強すべきである。朝鮮の歴史・地理・文化・風俗を勉強せねばならない。朝鮮の労働者たちに朝鮮の歴史を正しく教えなければならない、と述べた。金日成はソ連から来た朴昌玉を例に挙げた。彼は朝鮮プロレタリア芸術同盟の作品を蔑ろにし、ソ連の物のみを良しとした。朝鮮史の勉強においても、光州学生事件や三・一運動、六・一〇万歳事件などを学ばない。外国の歴史の方を好む、と指摘した。またかつて一度、金日成は朝鮮人民軍休養所に行ったことがあった。そこの部屋には、シベリアの雪景色が描かれた絵が掛かっていた。金日成は言う。それらは我が国

の金剛山や妙香山に比肩しうるものではない。人民軍は自分の郷土と自己の祖国を愛さなければならない、と。

経済発展においても、ある地方ではソ連の五カ年計画の図表が貼ってあった。だが、自国の三カ年計画の図表はなかった。人民学校へ行くとソ連人のマヤコフスキー、プーシキンの肖像画が掛かっている。だが、朝鮮人の肖像画は一枚も見ることができない。それで子供たちにどうやって民族的自負心を悟らせるのか、と金日成は問いかける。また本一冊出版するのにも、ソ連式に目次が本の末尾に添付してある。教科書を作るときにもソ連の文学作品のみを引用し、我が国の作品を使おうともしない。このようなことは、形式のみを求め、内容のまったくないことである、と述べた。

外国の歴史ばかり学ぶのではなく、我々の歴史こそ学ぶべきである。朝鮮の歴史において革命家を論ずるときも然り。我が党が創建されてから既に一〇年を越えるのに、これについて学ぼうとしない、と批判した。このようなことは、宣伝活動において主体性がないために生じるのである。朝鮮のパルチザン伝統も勉強し、革命家たちについて勉強しなければならない。朝鮮の革命家と共産主義者たちは誰よりも道徳性があり、先輩を尊敬することをわきまえた人々である。彼らが朝鮮人民軍の中枢幹部になったため、朝鮮人民軍が強い軍隊たりえたのだ、と述べた。

金日成は以上に言及しつつ、自分が満洲で行った抗日闘争を朝鮮革命の歴史であると強調した。また、解放後北朝鮮で立てられた二〇カ条の政綱は、抗日闘争時の祖国光復会の綱領を発展させたものである、とも言った。加えて、マルクス・レーニン主義を実施するすべての国では、その原則から出発する。し

かし各国の政治形態や政綱は国ごとに異なるものである。たとえば北朝鮮では農業の協同化が早い速度で成し遂げられた。これをソ連人は妙だと言う。だが、我が国の農業革命の伝統から見れば、これは当然のことなのである、と述べた。

また金日成はソ連派の朴永彬を名指しする。彼はソ連より戻ってから、ソ連では国際緊張緩和のために反米のスローガンを降ろし、平和的に共存しようと言っている、と語った。これは我が人民の革命的警戒心を麻痺させることだ、と批判した。朝鮮戦争時、我が国を爆撃し灰燼に帰せしめたアメリカ帝国主義。彼らに対し、我々がいかに反米運動を弱体化しうるであろうか。またソ連派の朴昌玉を指し、日本の手先として名高い李光洙の如き親日反動作家を、才能ある作家のように造り上げたと非難した。

朝鮮戦争時も軍隊内で政治活動をめぐり、許可而はソ連式を、朴一禹は中国式を主張した。しかしこのように何式かをあげつらうのではいけない。我が国の実情に合った革命をしなければならない、と語った。マルクス・レーニン主義の真理を我が国の実情に適合させるべく勉強せよ。何式かを問う形式主義は必要ない。マルクス主義やレーニン主義を鵜呑みにするのではなく、外国から学ぶべきことは学び、それを我が国の実情に沿って適用せよ、と述べた。

金日成はまた、ソ連派の奇石福を名指しする。彼が『労働新聞』の主筆として新聞を作っていた頃、『労働新聞』がどうしてあのようにソ連の『プラウダ』の形式に似ていたのだろうか。甚だ妙だ。外国の形式にのみ従うことは、百害あって一利なしである。我が国人民の歴史と伝統を無視し、我が人民の覚醒度を慮らず、外国の経験を機械的に適用することは、教条主義の誤謬を犯すことである。我が国で

も中国のように整風運動を行うべきだ、と述べた。
マルクス・レーニン主義は何らかのドグマなのではない。行動方針であり、創意的学説である。ゆえに、各国ではこれを自国の事情に沿って創造的に適用しなければならない。我々はもちろん、兄弟党に学ばなければならない。だが、国際主義のみを主張し、自国を忘れるようではいけない。逆に、自国を愛する愛国主義ばかりを唱え、国際関係をおろそかにしてもいけない。朝鮮人は主体を打ち立てねばならない、と語った。
金日成は許可而の誤謬を指摘しつつ、戦争中、彼が労働党員を六〇万に制限しようとしたことを批判した。北朝鮮の人口は、朝鮮戦争当時一〇〇〇万であった。党員を一〇〇万としても、人口の一〇%にしかならない。これは南北を合わせた朝鮮人人口三〇〇〇万に比べれば、割合からいって大変少ない数字である。しかし、より重要なことは、許可而がソ連の党員制度をそのまま無意味に北朝鮮に導入しようとしたことである。朝鮮労働党の党員政策を無視したのだ、という。すなわち、北朝鮮では朝鮮の分断を考慮し、多くの人民を党員として入党させている。一〇〇万の党員が全部幹部になるわけでなく、そのなかから核心となる党員を選抜し、全体党員の教育に当たらせる。これが朝鮮労働党の方針である。許可而にはこれが理解できなかった。一〇〇万の全党員を幹部のように教育することはできない。しかし核心となる党員たちは、このような朝鮮労働党の特殊性を理解し、労働党の党勢を南北朝鮮に拡大すべく努めねばならない、と強調した。
以上見てきたように、金日成の主体思想についての演説は、明確に反ソ・イデオロギーから始まって

いる。その悪例のことごとくが、ソ連の悪影響を指して語られている。中国に対しては一言も悪く言うことがない。延安派の朴一禹が中国式を主張したことに言及したのは、許可而がソ連式を主張した点を強調すべく比較のために掲げられたにすぎない。何らかの中国式が朝鮮にとって良くないと、中国に対し言ったものではない。この初の演説で金日成は、中国に学ぶべきであり、北朝鮮でも中国のような整風運動を展開すべきである、と語っていた。

この整風運動についての言及は、その後この演説を載せたすべての出版物から削除されてしまった。しかし金日成は初めの演説では、中国に見習うべきことを何度か暗に示唆していた。また自分のパルチザン運動も朝鮮の運動なのだと強調していた。李承燁と朴憲永を除去したとき、彼らを米国のスパイとしたこと。それもこの演説では、満洲の東北抗日聯軍で中国人と共闘していた頃の、民生団問題の苦悩と比較して語っていた。

もちろん当時は、中国志願兵がなおも北朝鮮に駐屯し、北朝鮮の経済復旧を助けていた頃だった。とはいえ、金日成は一九五五年末に、勇敢にもこのような反ソ的態度を示したわけである。このとき既に、ソ連は修正主義路線に踏み出していた。しかし金日成はソ連の助けをなおも必要としていた。北朝鮮は経済的な援助のみならず、軍事的援助と技術導入においてソ連を必要としていた。

それゆえなのか、北朝鮮は金日成の演説文を長いあいだ公開しなかった。金日成は一九五〇年代、中ソ紛争が複雑な様相を呈している間は、主体について言及しなかった。それについての論文も発表しなかった。主体思想の発展過程は、中ソ紛争と、それに対する北朝鮮の立場に大きく関わっている。金日

成は一九六〇年代初めに至るまでの約八年間、主体思想について語らなかった。一九六一年九月の朝鮮労働党第四回全党大会にソ連と中国の代表が参席したのだが、このときも金日成は主体については言及しなかった。金日成が主体思想について再び語りだしたのは、彼が中ソ紛争を完全に理解し、北朝鮮の立場が完全に中国に傾いてからである。

金日成は朝鮮人民軍創軍第一五周年記念式で、軍人たちを前に主体に関する問題について再び語った。一九六三年二月八日のことである。ときに、北朝鮮とソ連は紛争中であった。ソ連が北朝鮮に対する軍装備費、並びに経済援助を中止した後でもある。金日成は朝鮮人民軍の創軍以来、五年ごとに軍と社会に関して重要な演説を行ってきた。その最初の五年目に当たる一九五三年二月八日には、朝鮮戦争がまだ終わっていなかった。それでも金日成は、「朝鮮人民軍最高司令官命令第七三号」という名目で、六カ条項の命令を下した。次の五年目、創軍第一〇周年記念式では、朝鮮独立運動の唯一の革命伝統は、満洲で行われた抗日パルチザン運動であると強調した。他の独立運動家たちの抗日運動は、朝鮮革命伝統の主流ではないと主張した。一九六三年二月の創軍第一五周年記念式では、金日成は軍人問題に言及した。その主要な内容は、軍人たちの階級的思想教育を強化せんとするものだった。朝鮮人民軍は抗日パルチザンの伝統を有する軍隊である。のみならず、労働階級の軍隊であると語った。彼のいう階級的思想教育の基本内容は、まず労働者の階級的自覚を高め、帝国主義を憎悪させることである。第二には、軍人と労働者が資本主義の腐敗性を把握し、社会主義の優越性に気づかねばならないというものであった。が、第三点目において、金日成は重要なことを語った。それは、階級的思想教育により軍人と労働

者を社会主義的愛国主義で武装させよというものだった。
社会主義的愛国主義については、後に北朝鮮で、様々な研究冊子が刊行された。それを簡単に要約すれば、民族主義を頭に植えつけようという話である。ここで社会主義的ということは、朝鮮民主主義人民共和国に対する愛国主義を指す。これはプロレタリア国際主義に相反するものではない。しかし、朝鮮に生まれた者は朝鮮で革命をしなければならない。朝鮮に打ち建てられた社会主義国家を愛し、守らなければならないというのである。いわば彼は、祖国無き国際共産主義運動に反対した。全世界の無産者の祖国がソ連だなどとは、共産主義運動時代の話である。社会主義国家が厳然と樹立されているときには、自分の国に対し社会主義的愛国心を発揮することにより、国際主義にも貢献することができるのだ。そのように言っているのである。祖国と自己の民族を忘れ、他国に依存し生きんとするは亡国の輩の途なり、と語ったのだった。
軍人と労働者にこのような社会主義的愛国心を植えつけるには、民族的自主性が最も大切だといい、金日成は主体について述べた。ここでは一九五五年一二月に語った、主体を打ち立てることについての講話を、少しばかり詳細に語ったのであった。主体を打ち立てるには、政治的に自主性を培い、経済的にも自立性を強調しなければならない。政治的自主性がないと修正主義に陥る。他人の指図のままに、あちらこちら引きずり回されることになる。この自主性を背後から支えるのが経済的自立であると指摘した。
政治的自主性と経済的自立性がなければ、自主独立国家になれない。自国の問題を自己の力で解決す

ることもできない。完全なる政治的自主性と経済的自立性を有する国を作り上げること。それが、軍人と労働者たちの義務である、と語った。ここにおいて初めて、金日成は政治的自主性は経済的自立なくしては成就しえず、これを確保してこそ朝鮮は中国とソ連の圧力から脱することができるのだと述べた。
この演説で金日成は、階級的教育における文学と芸術の役割、軍隊内の党活動強化などについても、他の問題と関連づけて説明している。ここでも彼は、八年前の一九五五年一二月に党宣伝扇動関係者たちにそうしたように、談話形式でじっくりと語った。当時、北朝鮮で作られた芸術作品についても言及している。どのような作品が良くできているか。どのような歌が耳に心地良いかなど。非常に細かいところまで口を挟んでいる。北朝鮮の記録映画では金剛山や七宝山の清流、突兀たる岩が多く見られる。しかし、工場や学校や病院で人々が働くところは多く見られない、と指摘している。
このような演説を、朝鮮人民軍創軍一五周年記念で行ったことは妙なことかもしれない。しかし、ここでは主体思想を打ち立て、これを政治的自主性と経済的自立性に分けて語った。そこに発言の重要性があると思われる。これは主体思想の発展過程を良く示してくれる。
もちろんこれは、人民軍創軍一五周年を記念して行われたものである。金日成が前方部隊を視察しつつ、行った演説である。そのため、軍人に対する重要な軍事的講話でもあった。しかしときに、北朝鮮とソ連との関係は悪化し、朝ソ紛争が熾烈に展開されていた。そこで主体を立てることが必要であり、政治的には自主、経済的には自立し、北朝鮮をソ連から独立した国にせんとした。しかし政治的独立を得るためには、北朝鮮の軍隊を強化しなければならない。ソ連の軍事的影響圏から脱しなければならな

かった。が、北朝鮮の人民軍は創軍以来、ソ連の援助を受け、軍備を補充していた。その維持もソ連がみな提供してきた。ゆえに関係悪化のなかで主体を打ち立て、金日成は軍人たちの自負心と独立心を鼓舞したのである。政治的自主性とそれを支える経済的自立。これらのすべてを完遂するには、軍事的にも自衛し、ソ連の軍事圏を離脱しなければならぬ、と。

金日成は人民軍創軍一五周年に当たる一九六三年二月に前線を訪問した。また、同年一〇月五日には金日成軍事大学第七期卒業式に参席した。そこで彼は、人民軍は国防において自衛の方針を貫徹せよと演説した。このとき北朝鮮は、朝ソ紛争でソ連の新鋭兵器の供給を受けられなくなっていた。経済援助も軍事援助も受けられず、武器も最新式でないならば、国防は我らの手でせねばならぬ、と強調した。

ソ連との紛争で、実質的に新兵器を購入できなくなった。軍隊が戦争するには武器さえ良ければ事足れりというものではない。それよりも軍人が思想的に武装することが大事だと述べた。ここで金日成は、自分がかつてパルチザン運動をしていた頃のことを語る。日本人の武器より悪い武器であったが、革命精神で武装していたので勝った。キューバのカストロも七丁の銃で革命を始めたと述べた。彼は例を次々と挙げた。中国義勇軍が朝鮮戦争で米軍と戦ったときも然り。ソ連が第二次世界大戦で独軍と戦ったときも、彼らの武器は彼らの敵にことごとく及ばなかった。しかし、精神的・思想的に階級革命意識で武装していたため勝利したのだ、と。

国防で自衛の方針で貫徹するには、全人民が武装しなければならない。軍人は人民のなかで生きねばならぬ、と語った。全人民を武装させるには、人民軍を幹部化し、全国を要塞化しなければならない。

このように軍事路線を明確に提示した。そして、ひとたび戦争が起これば、すべての人民経済を軍行動に服務させよ、と教唆した。

金日成は、これまで自分を助けてくれたソ連との間が悪くなると、ソ連から独立すべく多くの方法と改革を考案した。もちろん客観的に見れば、正しいことではない。しかし、一九六二年から一九六五年までの朝ソ紛争のさなか、そこに置かれた北朝鮮の立場としては不可避でもあった。このような反ソ政策と独立的な立場が一〇年ほどかけて体系化された。それが主体思想である。一九五五年頃の反ソ・イデオロギーから自立的に進み出て、このような自主的政治路線を堅持すべく、自立経済を主張し、究極的に自衛国防を叫ぶようになったのである。

以上の主体思想の発展過程は、金日成の創案にも拠る。しかし当時の社会主義陣営の政治環境が、このような独創的な思想を生ぜしめる条件ともなった。これは金日成にとって有利なことであった。すなわち、中ソ紛争では金日成は中立を表明した。が、ソ連と東欧は北朝鮮を中国寄りと見なした。しかしソ連は、東欧社会主義諸国に加えるごとき制裁をもってしては、北朝鮮を扱えなかった。これはソ連が朝鮮戦争に参戦しなかったからというよりは、中国との関係を慮り、そのように対することを無理と見たためである。またソ連が北朝鮮の経済関係を統制しようとするや、北朝鮮は自立経済を主張した。軍事関係で新兵器売却を断つや、北朝鮮は国防における自衛でかわした。

かく主体思想の発展過程を辿れば、金日成の主体思想はさして理解困難なものではない。ここで我々がとりわけ記録すべきことは、北朝鮮にこのような条件が提示されるや、金日成は機会を捉え、北朝鮮

に有利に新たなる思想体系を築き上げ、そして政治的独立を果たしたということである。他の社会主義国家のように隷属し、ソ連の衛星国として残るのでもない。ソ連と合わないからといって、中国の隷属国家になるのでもない。そのような意味で、中国の文化大革命は金日成に悪評を浴びせかけたが、その条件は彼の自主性に対する決心をさらに強固にし、主体思想の発展をいっそう確固たるものとさせたと言える。このような発展過程で、金日成は人より遥かに優秀な指導力を発揮したのであった。

2 主体思想

しからば、主体思想とは何ぞや？　金日成いわく、その発展過程を体系化し、思想的には主体性を確立し、政治的には自主性を堅持し、経済では自立的民族経済を樹立し、国防では自衛しなければならない。これが主体の「唯一思想体系」である。主体思想は人間を基礎とする思想である。すべての事物を決定付けるには、そもそも人間が主人とならねばならぬ。社会主義建設においては、主人は人民である。人民が革命と建設を担うことができる。人の運命を左右するのも人である。朝鮮人は朝鮮の革命と社会建設に臨み、マルクス・レーニン主義の純粋真理を、朝鮮の個別的状況に合わせねばならない。歴史・伝統・地理条件と朝鮮の実力を考慮し、それを朝鮮に有利に為すべく展開しなければならない。主体を立てるということは、革命と建設において他人に依存するのではなく、自己の力で自分の頭を使い、自己の力に合わせて進めていくということである。

主体思想はこのように、根本的に人間を主とする自主的な立場から出発している。金日成は政治・経済・国防について言及し、この三種をすべて自らすすんで達成しなければならない、と述べた。政治のすべての事業で自主的立場を持たねばならない。独立して事を処すべきである。他国の経験と先進国の長所を受け入れる際も、自国に合う速度で、また分を越えないようにしなければならない。経済発展においても独自の努力で達成せよ。他国の経済に依存したり従属してはならない。国を守ること、すなわち国防も、すすんで自衛しなければならないということだ。外国の軍隊に依存したり、外国勢力に左右されてはならないと語った。このような三つの原則を体系化したものが、金日成のいう「思想」である。この当為三つが主体思想であり、思想事業で主体を立て、かく総合的に体系化することを、北朝鮮では唯一思想体系と呼んだ。

金日成がこれを世間に公表したのは一九六五年四月のこと。インドネシアのアリ・アルハム社会科学院においてであった。金日成は主体思想を世界に宣言し、これまで大きく依存してきたソ連と中国からの借りを清算し、第三世界へと躍りでた。ときに、金日成が一九五五年一二月に初めて主体を提唱してから、ほぼ一〇年が過ぎ去ろうとしていた。その日ちょうど、金日成は五三歳の誕生日を迎えた。彼は主体思想を発表し、インドネシアで生涯初めての名誉博士号を授与された。中学校二年で投獄され、学ぶこともできなかった金日成であった。彼にとって、このような主体思想の宣言は、国家的にも個人的にも満足のいくことであったと思われる。

主体思想とは、このように長い年月をかけて発展してきた思想である。ソ連と中国の対北朝鮮影響力

を減少させ、北朝鮮の自主的な立場を全世界に宣言する上で大きな役割を果たした思想であった。二〇世紀の指導的思想となった民族主義とも、それは似通っている。しかし金日成は、これは絶対に民族主義ではないという。あえて何々主義と似た表現を取るならば、主体思想は社会主義的愛国主義だと彼はいう。金日成は、民族主義の概念は良いが、独善的で排他的な要素が多く、社会主義諸国家との国際関係や親善を図ることができないと語った。

しかし金日成は、民族主義と社会主義的愛国主義にいかなる差異があるのか、説明しなかった。社会主義的愛国主義が朝鮮民主主義人民共和国という国を愛することであるならば、そこにいかなる社会主義的要素があり、その要素とは何なのか。それも明らかにしなかった。ひいては、社会主義的愛国主義とは、各民族の人民がその国を愛することだという。とすれば、そこにどのような社会主義的要素が包摂されるのか。それも説明しようとはしなかった。

北朝鮮の学者たちは、社会主義的愛国主義を三つの要素に分けて説明している。第一は、自国の人民に奉仕することである。第二は、自国の労働階級に信念を持たせること。第三は、自国の党に忠誠を尽くすことだという。しかしこのような説明ならば、社会主義的愛国主義とは社会主義国家の民族主義だといって差し支えない。そのような説明では、どの民族主義の学者も、それが民族主義そのものであることを立証してしまうだろう。北朝鮮の学者たちは、金日成の指摘した民族主義の独善的・排他的・帝国主義的要素を、社会主義的愛国主義からいかに除去するのかを説明しない。そして彼らはいう。民族主義とは自己の民族の優秀性のみを主張し、他民族を蔑視するブルジョワ思想である、と。しかし、社

会主義的愛国主義はこのような民族主義的要素をどのように扱うのか、それも説明しない。

以上のように、主体思想が作りだされた過程は複雑ではない。主体思想を説明するのに、他の主義・主張と思想的に比較したり、また解釈を重ねるところに多くの問題があるのである。その中の一つに「首領論」というものがある。どこの国にも思想と行動の統一のために首領がいなければならない。この首領の思想をもって武装しなければならない。党と人民は首領を中心に結束すべきだ、と主張するものである。かつて金日成は解放後、スターリンをソ連の首領と呼び、毛沢東を中国の首領と呼んでいた。ところが金日成が主体を立て、主体思想を体系化しつつ自主路線を闡明にした後のこと、北朝鮮では金日成を首領と呼び始めた。ソ連でスターリンを、中国で毛沢東を奉るごとく、金日成に仕えるようになっていった。このような首領論は何らかの新しい理論というよりは、社会主義国家において専制政治を行う独裁者を正当化し、彼らの指導権を正当化する方策であると見るべきである。

主体思想は、後に金正日により、さらに発展させられることになる。しかし金日成の主体思想とは、本来このような発展過程と体系化から生じたものである。朝鮮民族をよその民族から分離させ、政治的には自主独立させ、経済的には自立させ、軍事的には自衛させる。そこに貢献した思想である。

3 評　価

主体思想は北朝鮮の政治発展に大きく貢献した思想であると言える。金日成は解放と朝鮮戦争を経て、

北朝鮮の指導者としてソ連の影響力をなくし、中国の大国主義から脱し、朝鮮の民族性を取り戻そうとした。要するに主体思想は、解放後、朝鮮民族の民族主義運動に貢献したと言うことができる。盲目的にソ連を崇拝するイデオロギーを一蹴し、自己の民族と革命の歴史を見出したことは望ましいことである。かく主体を立てる作業が、朝鮮戦争の教訓から始まったのか、スターリンの格下げ運動に対する反発から始まったものか、中ソ紛争の教訓によるものなのか？　いずれにしても、朝鮮人は朝鮮の伝統と革命を取り戻さねばならないというところに着眼したこと。それは朝鮮人が「朝鮮」を探し求めることにおいて、大きく貢献した、と見ることができる。主体思想は金日成が北朝鮮から外勢を退け、北朝鮮の朝鮮的政治発展を試みるに当たり、大いに役立った思想である。

しかし主体思想は、その発展過程において様々な問題を招来した。金正日が代を継いで発展させる主体思想とその問題点は別にしても、金日成治下の主体思想に対する批判は、大略三点に纏めることができる。

第一に、主体思想に対する過大評価である。それは金日成の革命神話に似ている。彼の抗日闘争は、ありのままでも立派なものであるのに、北朝鮮ではこれを大きく誇張した。事実ならざる事柄を捏造し、彼のイメージを膨らませたため、人々の不信感を助長した。彼の革命運動は革命神話に変じてしまったのである。これと同様、北朝鮮では、主体思想が自分たちに有益であると断定した後、誇張し、事実でない事柄を添加した。主体思想は、その発展過程やそれが北朝鮮に及ぼした影響をありのままに紹介しても立派な思想である。それは北朝鮮人民や金日成に有用な思想である。

ところが現在、北朝鮮では、一九三〇年六月三〇日に卡倫で開かれた会議において、金日成が初めて主体を提示したと主張している。当時、金日成は一八歳である。彼は一九三〇年五月に出獄した。その彼が、主体思想を創案し、闡明にすることのできた時期とは思われない。このような事を捏造しても、主体思想がさらに立派になり、成熟するわけでもない。実のところそのような主張をすれば、問題はさらに混乱し、主体思想の説明がいっそう困難になる。また、北朝鮮の哲学学徒は、主体思想を西洋の思想や思潮に繋げようとしている。主体思想はプラトンといかなる関係があるのかを説明しようとする。このような余計なことは、主体思想が欠如していることを物語っているものと言える。

簡潔に言おう。もし彼らが主張するように、主体思想が一九三〇年六月に創始されたとするならば、金日成が中国共産党の軍隊である東北抗日聯軍で戦っていたことを、どう説明するつもりなのか？　その後ソ連領に入り、主体性のない人間のように、中国のパルチザン服をソ連赤軍の肩章付きの軍服に着替えた。そしてソ連軍の訓練を受け、抗日運動をしていたことをどのように説明するのだろうか？　それにとどまらない。金日成は解放後、ソ連人の指示の下に党と軍を作り、政府を立て、スターリン大元帥を朝鮮人の父代わりと呼んだ。そのときの彼の主体思想、政治的自主性はどこに行ってしまったのか？　解放後、米・ソが朝鮮全土を信託統治せんとしたとき、これを支持して立った彼の自主性は何処にあったのか？　また、朝鮮戦争、彼の言う「朝鮮人民の正義の解放戦争」の時、ソ連と中国に派兵を要請した。そのとき、彼の国防の自衛性はなぜ発揮されなかったのか？　中国人たちが戦争の幕引きをした後も、戦後復旧で多くの社会主義友邦国から多額の経済援助を受けた。当時、北朝鮮の自立経済は

どうなっていたのだろうか？　このように不自然な事柄が次々に生起してしまう。その理由は、一九五五年でなく、一九三〇年に主体思想を創始したとする、要らぬ言説を押し通すからである。その創始を二五年遡ったからといって、主体思想が俄により立派になり意味深長になるわけでもない。ただ粗雑で余計な問題を惹起するのみである。

主体思想批判の二点目は、内容上の問題である。毛沢東思想が中国でそうであったように、主体思想はマルクス・レーニン主義の一般的真理を、北朝鮮の特殊事情に合わせて転用したものである。ところが北朝鮮では近来、ここから一歩踏み出すのである。主体思想を金日成主義と称し、マルクス・レーニン主義のような一般的真理と見なす。世界のどの国にも、どの民族にも、いついかなる時にも一般的に適用しうる純粋の哲学的真理であると主張する。しかしこれは、主体を立てられない人々にしか広まらない言説である。

毛沢東は中国で、マルクス・レーニン主義を漢民族の実情に合わせ、『矛盾論』を考案した。そして共産主義を中国に土着化させようとした。同様に金日成も、共産主義の一般的真理を朝鮮民族に土着化させようとした。政治の自主・経済の自立・国防の自衛は、共産主義の土着化における成功裏の発展過程と見ることができる。しかしこれを純粋な真理とし、第三世界の開発途上国に扶植しようとすることには大いに問題がある。

平壌に高く聳える主体塔は、北朝鮮人民が仰ぎ見るには有用な塔である。だが、その入口に名を連ねている世界各国の主体思想研究所は無用である。各国の政治発展過程はおのおの異なる。朝鮮は日本植

主体思想塔を視察する金日成・金正日ら．1982年4月．『労働新聞』1995年7月22日

民地から国土分断へと続き、東西冷戦に先立って同族相食む戦争を行った。北朝鮮はその後、社会主義の修正主義と教条主義とを退治し、主体を立てねばならなかった。そのような国はそうざらにはない。

北朝鮮の憲法を見ても、一九四八年九月に制定された初の憲法には主体という言葉がない。一九七二年の憲法では、マルクス・レーニン主義を我が国の実情に合わせ創造的に適用することが主体であると明記された。しかし、一九九二年の改憲では、マルクス・レーニン主義についての言及は削除され、主体思想に代替された。北朝鮮の現行憲法では、国家を人間中心の世界観で定義し、主体思想を自分たちの活動の指導的指針と見なす、と規定している。このように、長く尊重してきたマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義に関する言及は全部削除され、自主性の擁護に代替されたのであった。主体思想は北朝鮮にとって必要かつ有用な思想的指針である。しかしこれを一般的純粋真理と見なすことには、その内容上無理がある。

第三に、主体思想はその実践面でも多くの問題がある。ソ連を捨て、中国からも政治的独立を果たした北朝鮮は、自主路線を選択し、主体的な発展をしようとした。だが、ここに多くの問題があった。教

条主義と修正主義を排斥し、主体を立て、第三世界に突進したことはよい。しかし、第三世界諸国家は北朝鮮を自分たちと類似の開発途上国と見なした。経済的にも軍事・安保においても、何の助けにもならなかった。政治的には自主を謳ったが、世界の強大国はどこも認めてはくれなかった。非同盟国家会議の会員国としては認定された。だが、いくら自立経済を訴えようと、世界的に技術の発達した産業諸国家からは経済的援助を受けられなかった。自国の安保を気づかい、国防では自衛せんとした。しかし、かばかり努力して遠ざけたソ連や中国から武器を買い入れざるをえなかった。

また、このような自主路線を堅持しようとしたため、金日成は政治指導力を強化せざるをえなかった。この面で、単なる盲目的な独裁はせず、金日成は主体思想に「首領論」という観念を導入した。人民の虚無主義を退治し、新たな活気を与えようとした。このように立てられた「首領」は、外国のものなら何でもよく、自国のものを蔑ろにする虚無主義を退けた。そして復古主義、すなわち自国のよい点を探求させることにもなった。このような努力は、朝鮮人が朝鮮の長い歴史と文化を研究してきた結果でもある。しかし、人民が朝鮮の伝統に目を向ければ向けるほど、朝鮮の専制主義的政治体制が強化され、金日成の個人崇拝が甚だしくなっていった。このような現象の好例として、北朝鮮で出版された歴史書『朝鮮全史』を挙げることができる。復古主義を主張し、朝鮮史を研究したことはよい。しかし、数千年にわたる三四巻の朝鮮史の記述で、原始時代から李王朝の末葉までが一五巻に盛り込まれた。以降は、金日成の抗日独立運動と解放以後の北朝鮮の歴史が、一九巻に拡張して記録されている。これが主体の国で書かれた歴史だとするならば、その主体思想には多くの問題がある。

この他にも主体思想は様々な問題を抱えている。たとえて言えば、主体思想は朝鮮の固有の思想、すなわち弘益人間や民本思想を、朝鮮に再度復活させようという努力を一つもしなかったようである。しかし主体思想には肯定的な面も否定的な面もある。どちらか一方から解釈し論ずることはできない。また、主体思想は金日成時代で終わったわけではない。金正日がこの思想を代を継いで発展させ、自己の北朝鮮統治基盤となすべく努力している。これについては再び論ずることにしたい。

第六章　金日成と現代北朝鮮

金日成が作りだした現代北朝鮮とは、しからばいかなる国であろうか。二〇世紀の朝鮮民族受難期に、金日成は日本に掠奪された国を取り戻さんと独立運動を行った。しかるに、日本からは解放されたが国は二分され、主義・主張の異なる政府が樹立されてしまう。彼は、この分断された祖国を一つの国として独立させるべく、朝鮮戦争を起こしたが失敗した。その後、祖国の北半部だけでも社会主義政治体制を樹立すべく、自己の政敵を粛清した。さらには、北朝鮮に莫大な影響力を行使してきたソ連と中国から離脱した。自主路線を闡明にし、第三世界の一員として新たに一歩を踏み出した。また社会主義陣営の一国として、北朝鮮は教条主義と修正主義を退治する。そして主体思想を作りだし、完全独立の社会主義国家を自称した。しからば、このような北朝鮮とは一体いかなる国なのか？

ここでは、北朝鮮の政治体制や党組織、国家形態の分析よりも、北朝鮮の性格と金日成の指導者像、そして北朝鮮人民の役割等の考察を優先する。かくして、金日成が作りだした社会主義政府を評価せんとするものである。

1 北朝鮮の社会主義国家

まず、政府と国家の概念が、朝鮮でどのように変遷してきたのかを垣間見ることにしたい。一九四八年、朝鮮半島に二つの政府が樹立されたとき、朝鮮民族はこれらの政府は臨時的なもので、一つの民族下、一つの国家が建てられるだろうと考えた。しかるに過去五〇年間の状況を見ると、さにあらず。一つの民族下、二つの国家が樹立されたごときであった。政府樹立の初期より、韓国政府は自己の正統性を主張し、韓国領の北半部に不法な政府が立っていると述べた。他方、北朝鮮の憲法では、自分たちこそ朝鮮民族唯一の政府であり、共和国南半部は自分たちの領土であると主張した。つまり建て前は、一民族・一国家のはずであるがゆえに、おのおのが不法なる政府を一つずつ余計に持ったということになるのである。

このような状況を解決するには、どちらか一方が自滅するか、あるいは滅亡を招くかし、一国の失地を回復しなければならない。朝鮮戦争前後の朝鮮半島の南北関係は、こうした面から考えると理解可能である。韓国でいう滅共統一や勝共統一、北進統一のようなスローガン。北朝鮮のいう正義の祖国解放や民族解放などである。しかし過去の分断五〇年間、このような努力はことごとく失敗した。より厳然たる現実として顕在化したものは、朝鮮民族に二つの国家が生まれたということである。一つは自称社会主義国家。もう一つは民主主義国家だと言っている。しかし社会主義や民主主義の要素がいかばかり

作用しているのかは分からない。とくに北朝鮮では社会主義をしているとはいうが、国号は朝鮮民主主義人民共和国である。北朝鮮の、この共和国において、人民がどれほど民主主義をしているのか。知りうべくもない。

このような展開、すなわち一国に二つの国家が半世紀以上持続したということは、朝鮮民族に利するものではない。朝鮮民族は二つの政府を二つの国家とせず、一国をもって朝鮮固有の思想を取り戻すことが望ましい。外国勢力を排撃し、外来思想を朝鮮民族の民本主義思想のようなものに発展させる。そして国を現代化させることが正しい道である。今、南北は競争している。しかし、どちらも朝鮮の民族思想ならざる外来思想で武装し、互いを憎悪の対象としている。このような朝鮮民族の自己展開過程を念頭において、北朝鮮を検討しなければならない。

外面的には、北朝鮮は社会主義体制を整えたということができる。人民が主権を有し、土地や生産手段は国有化されている。人民には労働の対価として、国家から日常生活のすべてのものが配給される。失職者も搾取階級もいない国であるという。その国の政治体制も然り。人民を代表し、指導する朝鮮労働党がある。この党が政策を立てると、人民が選出した立法機関である最高人民会議が政府を構成し、国家主席・中央人民委員会・政務院、そして司法機関である国家検閲委員会と中央裁判所の要人が選出され、国が運営される。

このような国家機関と党を通じ、北朝鮮人民は最大限の愛国心を発揮することができるという。国家経済計画も立てられ、国の暮らしを豊かにすべく努力がなされる。また若い青年たちは、義務として国

家を防衛する朝鮮人民軍に奉仕する。彼らが社会主義国家体制を保衛するのだという。以上のような国家機関が設置されたのだ。人民は国に対し、忠誠をもって義務を履行すべし。さすれば、憲法に保障された権利を要求しうる社会主義国家なのだ。このような社会主義国家で、人民は自由を享受し、幸福に暮らす。よって、この世に羨むものは何もないという。

このような社会主義政治体制の枠内に暮らす北朝鮮人民の心情はいかばかりか？　はたして彼らは、彼らの称する地上の楽園に住み、羨むものとてないのだろうか？　現実はその言説とはあまりにも異なる。とくに北朝鮮の政治・経済・社会・文化の発展は、たやすく韓国と比較することができる。ゆえに、彼らの社会主義体制に対する自画自讃には限界がある。といって、韓国の国家発展の様相がそのまま朝鮮民族の典型だというのではない。韓国も様々な面で民主主義を試みたが、失敗した。軍人が躍りでて政治をするかと思えば、資本主義経済体制で一般国民から政府高官に至るまで、腐敗性が著しくあらわである。朝鮮民族の正統性を保有する政府であると自称するには問題がある、そう言わねばならぬほどである。北朝鮮の社会主義政治体制や国家発展の様相を批判しようとすれば、大見出しに筆を振るうことも可能である。しかしそのような批判や断罪が、この本の目的なのではない。当初、金日成と北朝鮮人民が求めていた社会主義体制から、現在の北朝鮮政府がどれほど乖離してしまったのか？　それが北朝鮮人民に、そしてまた金日成の政治指導力に、いかなる影響を及ぼしたのか？　それを考察せんとするものである。

北朝鮮は社会主義国家建設の理念を掲げ、建国以来、半世紀に及ぶ国家発展において、朝鮮民族に一

人独裁政権を無条件に支持させた。そのようにいっても過言ではない。北朝鮮の現在の政治と国家体制は、過去の過ちを正したとしても、全朝鮮民族の渇望する一国のモデルにはなりえないのである。その理由には様々ある。それは現在の北朝鮮という国家の性格を分析すれば、自ずと明らかになることだ。

2 北朝鮮の国家的性格

北朝鮮を指導する機関は朝鮮労働党である。朝鮮人民軍は党の軍隊であり、政府は党の政策を履行する行政機構である。このような党は北朝鮮労働階級と農民そして勤労インテリを構成成分とし、人民大衆と渾然一体をなす大衆党だという。しかし人民の主権を代表する最高人民会議ですら、この党を左右することはできない。

朝鮮労働党が、他の社会主義国家や他国の共産党と異なる点は、全人口に対する党員の比率が最も高いことである。過去のソ連共産党や現中国共産党も、党員数は人口に比し、約四％程に過ぎない。ところが朝鮮労働党は、人口の約一七％という膨大な数に達している。金日成はこのように多くの人々を党員として入党させた。しかし、この党員たちすべてがレーニンの言説どおりの共産主義者として、人民に共産主義や社会主義を教えるという指導的役割を果たすわけではない。党員たちの中から幹部を養成し、彼らに人民を善導させるというのだ。

ここでは朝鮮労働党の変遷過程については触れない。むしろ、朝鮮労働党が朝鮮で行ったことのうち、

二つの重要な余波について言及しておこう。まず、我々はよく北朝鮮は自由がない国だという。これはこのような莫大な数の労働党員が人民を監視し、日常の基本的な自由行動の発現を阻止しているからである。もう一つは、このような朝鮮労働党の党幹部たちが、北朝鮮を完全な階級社会に作り上げたということが挙げられる。北朝鮮は搾取と圧迫のない無産者の天国なのではない。党幹部と人民を区別する階級社会である。どのような社会であれ、人民の自由は基本的権利である。しかし、そのような人民の基本的権利が北朝鮮では保障されず、自由が存在しない。ところが彼らは、資本主義社会においては有産階級が生産手段を独占し、無産階級を搾取し、階級社会を形成したという。だが当の北朝鮮こそ、党の有権階級が一般民衆を抑圧し、党権力による階級社会を作りだしているのである。

北朝鮮には「党が決心すれば我々はやる」というスローガンがある。これは北朝鮮人民がどれほど党に忠誠を尽くし、服従心が強いかを示している。と同時に、党の政策決定過程において、一般人民の参与がいかに制限されているかを表す。「我々」という語は、その決定すなわち党幹部の政策決議を、行動化することに力を集中するという表現である。北朝鮮の現実は、このスローガンがよく語ってくれている。つまり、党の有権階級が決定すると、一般民衆は無条件に服従するという意味である。このような党幹部たちが金日成を支持し、彼を首領の座に置き、人民の自由を剥奪した。朝鮮労働党は実質的に北朝鮮唯一の政党である。うわべは、天道教青友党や国民党のような「政党」もあるが、それらは政治的装飾品である。本当の政党ではない。

北朝鮮の国家的性格として、もう一つ指摘できることがある。それは国家運営上で法を遵守しないと

いう点である。朝鮮民主主義人民共和国に、どこか他国の社会主義法を強制的に履行せよと言っているのではない。彼らが、自分たちの手で、自分たちのために、自分たちが作りだした法を守っていないという事実を指摘しているのである。国家運営における最も基本的な要素として、政治機構を社会主義の形式で整える以上のことがある。それは、人民を代表する国家指導者たちが、人民に自分たちの行動に対する責任を負い、任期が終われば人民が彼らを再評価しうる選挙が適宜行われることである。

北朝鮮の国家運営過程では、行政や立法機関の代議員選挙が、北朝鮮憲法に定められた通りに適宜実施されたことは一度もなかった。北朝鮮の国家主席やすべての行政官は最高人民会議で選出されることになっている。最高人民会議代議員と、彼らが選出した国家主席、各部署長官を含むすべての行政部責任者の任期は四年間である。一九四八年から一九九二年の現行憲法の改憲まで、金日成が国家主席として四年ごとに選出されたことはない。長いときには八年、短くは三年半で再選されたことはあった。最高人民会議の代議員選挙方法にも多くの問題があるが、それさえもきちんと実施されていない。一九四八年に最高人民会議が初めて開かれたときから、一九九四年の金日成の死亡まで、四六年間に九回しか開催されなかった。金日成の死後を見ても、第九期最高人民会議が一九九〇年五月から開催されたのだから、第一〇期最高人民会議が既に開かれていなければならない。しかしそれはまだ開かれていない。

金日成死亡の前後を問わず、北朝鮮は法治国家というより、一人統治国家である。法を守らず、首領だけを信じている国と言える。金日成の死後、金正日が首領の座につくまで、北朝鮮は無首領国家というわけだ。首領の不在は北朝鮮人民にとって大きな打撃かもしれない。しかし、それよりも北朝鮮が法

を守らないということの方が、より大きな問題だと言うことができる。このような法治国家になりきれぬ国を、朝鮮民族がどうして認めることができようか。

もう一つの北朝鮮の国家的性格は、費やされた人民の労働と国家の努力にもかかわらず、人民経済が発達しなかったということである。この問題はいろいろな面から説明することができる。が、北朝鮮の努力不足によるというのはあまり当たらない。むしろ、彼らの手段や方法が現実に不適合であったこと、外国との経済的交流が制限されていたことが挙げられる。また、党や法などの政治的な問題とは異なり、経済問題が北朝鮮の大きな問題として浮上した理由は、韓国との比較による。韓国では経済が急激に発展した。他方、北朝鮮では経済発展に根本的な問題があったため、そうはならなかった。

北朝鮮は一九四七年に、政府が樹立される前から一カ年計画を立て、経済発展を計画した。その後、一カ年、二カ年、三カ年、五カ年、七カ年、六カ年、第二次・第三次七カ年計画等を通じて経済発展を試みた。そしてこのような経済計画のために、人民を動員する方法を多様に考案した。千里馬運動・青山里方法・大安の事業体系・三大革命運動や赤旗争取運動。何とか高地占領だとか、二〇〇日速度戦など。みな党が指示したものだった。これらすべての増産運動の目的は、所与の条件下、いかにすれば人民から最大限の労働力を引き出せるかというところにあった。またこのような労力の代価として、報酬は最小限に絞られた。そして、ひたすら人民の愛国心に訴えかけたのであった。

北朝鮮の経済発展における根本的な問題は、行政府の経済官僚や経済専門家たちに経済政策を任せないことにある。経済についてよく知らない党幹部たちが、経済のすべての面、すなわち計画から工場や

協同農場に至るまで、すべての経済問題に介入し政治的に解決しようとする。このような情況は大部分の社会主義国家にも見られることではある。が、しかし北朝鮮はおそらく最も甚だしいものと思われる。それが極端にまで至ったのは一九七五年である。そのときの増産運動が三大革命赤旗争取運動であり、このときから北朝鮮の経済は下り坂に足を踏み入れてしまった。

北朝鮮経済発展のもう一つの根本的問題は、経済発展に対する彼らの意識にある。金日成を含めた北朝鮮指導層は、他国の経済発展に通暁していなかった。彼らが先進国家として知っていたのは、経済発展においてそれほどでもないソ連であった。世界の先端技術を保有する資本主義産業国家は、彼らの非難の対象になったのみである。彼らはそこから技術や産業施設等を学ぼうとはしなかった。このように局限された経済的視野にあって、北朝鮮はソ連との紛争を契機として自立経済を主唱して立ち上がった。資源がそもそも充分でない北朝鮮である。そこにおける、このような経済発展観は、彼らに致命的な打撃を与えた。

金日成は経済問題に言及するたびに、自己がかつて満洲原野で闘っていた頃の襤褸と空腹を回顧した。もう自分のときのような抗日闘争はしなくともよい。よって衣食住問題の解決こそ経済問題の解決であると語った。寒いときには暖かい服があり、空腹のときには食べる物があり、雨や雪を避けて眠ることのできる家があればよい。それで基本的な経済問題は解決されたと考えた。一歩踏みこめば、金日成式の経済発展とは絹の服を着、瓦屋根の家に住み、白い御飯に肉のスープの食事ができることであった。しかしこのような経済観は、北朝鮮の経済発展を衣食住問題の解決というレベルに封じこめてしまった。

金正日と人民軍将兵．錦繡山記念宮殿にて．『労働新聞』1995年7月20日

このように局限された経済発展に対する意識は、北朝鮮という国の性格だとも言える。これにより、北朝鮮は衣食住問題が解決されたとき、自立経済を達成したのだといった。そして、外国との交易や技術導入に大きな関心を持たなかった。また、彼らの交易国が社会主義陣営の国に局限されていたため、ソ連と東欧諸国が経済的に破産し、政治的に崩壊してしまったとき、北朝鮮の経済は再び衣食住問題を解決しなければならない状態に戻ってしまった。このような経済制度や発展様相では、朝鮮民族を代表する国家には発展しえないであろう。

北朝鮮の国家的性格を最も顕著に示すものは、彼らの軍隊である。既に言及したように、金日成はパルチザン出身であり、彼と共に抗日闘争をした人々が北朝鮮政権の基本政治勢力となった。そのため彼らの軍に対する配慮は、普通の人が思う

建設中の柳京ホテル

より遥かに強い。国家予算の莫大な部分を軍備に割り当てているだけではない。人口比でいえば、朝鮮人民軍は世界でも指折りの軍隊である。二〇〇〇万余りの人口に現役軍人が一〇〇万を越える。南では朝鮮戦争後も米軍が引き続き駐屯している。韓国軍の現代的装備は、北朝鮮の国防にも脅威的に見えるだろう。しかし北朝鮮軍の役割には国防もあるが、国内政治向けといったところもある。

一九五〇年の朝鮮戦争以後、朝鮮人民軍は対外的には大きな役割を果たしていない。パルチザン出身の将軍たちが跳梁した一九六八年は例外的である。このとき北朝鮮は米情報収集艦艇プエブロ号を拿捕し、アメリカの偵察機EC121を撃墜した。これらを除けば、北朝鮮軍が直接外国に対し軍事行動に出たことはない。北朝鮮の軍隊の役割としては、国内政治維持に、より大きく傾くようだ。北朝鮮は徴兵制で国民皆兵制だが、彼らは国家建設の労働力として多く動員される。たとえば、平壌にはアジア一高いという一〇五階建ての柳京ホテルがある。これは朝鮮人民軍第一〇五部隊が建てたものだ。そのほかにも人民軍が労働奉仕で建てたものは多い。

このような経済建設面での役割よりも、さらに重要なことがある。それは軍部が北朝鮮の国家維持の基本的な柱になっているという点である。建国初期に金日成が他の政治グループを根絶したとき、パル

チザンが後押しをした。そのように、以後の金日成の政権は朝鮮人民軍が後押しした。このような意味で、朝鮮人民軍は軍事面より、政治的な役割において、より重要な存在であると言える。金日成の個人崇拝は過去のスターリンや毛沢東を凌駕する境地に至ったが、これを支持し助長したのは党よりも軍である。後に仔細に説明するが、金日成の死後、金正日の政権創出にも大きな役割を果たしたのは朝鮮人民軍であった。

朝鮮民族の渇望する国軍は、国防に専念する軍である。それだけでよい。ところが北朝鮮の軍は政権維持に参与する。韓国では軍は政権を転覆し、軍人たちが政治を行った。どちらも望ましいことではない。朝鮮は小国である。ロシア・中国・日本のような隣接国家が強大国であるため、朝鮮の軍隊は侵略軍にはなりえない。過去の歴史から見ても望ましい姿は、朝鮮を取り囲む強大国が朝鮮に押し寄せた際に、それを撃退する役割をきちんと果たすことである。南も北も、国内政治で軍人たちが跳梁しないことが望ましい。また南では、北の軍が怖ろしくて米軍まで駐屯させている。かつ、韓国の軍隊が北朝鮮の攻撃から国を守ろうとせず、装甲車を駆って政府を転覆したということは、朝鮮民族の恥である。北朝鮮でも金日成の死後、金正日を支えているのは、北朝鮮人民というよりは朝鮮人民軍である。

この他にも北朝鮮の国家的性格を列挙せんとすれば、幾つか付け加えることも可能である。だが、このような国家の性格は、過去五〇年間にどのような変遷を経てきたのか？　これがはたして北朝鮮人民の渇望する社会主義国家だったのか？　またこれが、金日成が作りださんと試みた国の性格なのか？　おそらく金日成は肯定的に答えるかもしれない。北朝鮮人民には自由に表現する機会が与えられている

と。しかし当の人民の大部分は否定的に答えるであろう。このような国は朝鮮民族が渇望する国家ではない。またこのような国は分断祖国の北半部で分断を維持し、その政権を維持しようとするものである。民族が一つになり、朝鮮民族の祖国を取り戻さんとする政府ではないようである。金日成が北朝鮮に建てた国家は、その性格から見て、彼が独立運動の際、解放の暁に建てんとした国でもないようである。彼が政治権力を掌握し、生命を長らえようと作りだした国のごときである。

3　金日成と北朝鮮人民

金日成は生前には、自己の政治的指導力を誇張していた。自分は北朝鮮人民の首領であるばかりではない。南を含めた七〇〇〇万全朝鮮人民の首領であると自認した。このような主張は、金日成が自己の自尊心を満足させるためには有効かもしれない。が、もちろん事実ではない。韓国の民衆は、南の独裁者と軍人政治家の下で呻吟していた。しかし、金日成を自らの首領や指導者と呼んだものはほとんど居るまい。金日成は北朝鮮人民二〇〇〇万人余りの指導者である。北朝鮮人民は彼の独裁政治下に長い歳月をおくり、そして苦労した。

金日成は一九九四年七月、八二歳で生涯を終えた。彼は日本植民地下に平壌で生まれ、三三歳まで抗日運動を行った。朝鮮が日本から解放された後に帰国。北朝鮮を四九年間、すなわち約半世紀間治めた。彼の治下で、北朝鮮人民はいかなる暮らしを維持してきたのか？　金日成は朝鮮民族のためにどのよう

な働きをし、死去したのか？　死後、金日成の遺体は彼が執務していた主席宮に安置された。が、彼の定めた後継者は、二年が過ぎても法的な継承手続を踏んでいない。金日成は死後も北朝鮮を統治しているかのごときである。そして北朝鮮のメディアは、金日成が永遠に人民と共にいるのだという。金日成の一生の業績はかくも、とこしなえに人民に慕われるに足るものだったのであろうか？

金日成が死去したため、あたかも何事かに狂いが生じたごとく、北朝鮮人民は悲惨な境遇に陥ってしまった。我々の儒教的政治思想で比況するならば、天命を得て民を治めた王が崩じたかのように北朝鮮は甚だしい苦境に陥った。主体思想のいう自立経済はさておいても、金日成があれほど強調し発展させてきた基本的衣食住問題は解決されなかった。人民に配給されるべき食糧は不足し、世界各国からの食糧援助を受けざるをえない情況に立ち至った。

また金日成死去の翌年、北朝鮮は洪水に見舞われて基本的な農産物を失い、人民の苦渋はいや増した。金日成時代に同盟国であった社会主義陣営は既に瓦解していた。ソ連はロシアに変じ、東欧の社会主義国家は共産主義や社会主義を打ち捨て、資本主義体制へと移った。朝鮮民族同様に分断されていたドイツでは、社会主義の東独政府が、西独資本主義国家に呑み込まれた。北朝鮮の同盟国は一朝にして潰え去ったのである。アジアにも、かつて民族解放戦争に勝利したベトナムがあった。だが彼らは今や資本主義諸国と交易し、経済の回復を目指している。北朝鮮の唯一の旧友、隣国中国も市場経済を導入し、資本主義諸国からの金稼ぎに乗り出した。金日成のいない金日成の国は国際的に孤立し、国内的には空腹と襤褸の国になってしまった。

金日成も自分が五〇年間苦闘し磨き上げてきた国が、死後にこれほどまで苛酷な境遇に処せられるとは想像だにできなかったことであろう。はたして金日成が作り上げた朝鮮人民の国は、このような苦境から立ち直ることができるのだろうか？　それには、彼のしてきたことを客観的に分析する必要がある。指導者を喪ったからといって、過去半世紀にわたる朝鮮人民の粘り強い努力と闘争が一朝水泡に帰すことはありえないことではなかろうか。以下、金日成の業績を肯定的な面と否定的な面に分かち、考察を加えてみたい。

まず金日成の業績のなかで最も重要なものは、北朝鮮人民を新たな人間として、自負心を有する主体的人間として作り上げたことである。彼が洗脳作業で作りだしたものであろうと、新しい注入式教育方法を施したものであろうと構わない。ともかく、北朝鮮人民は辛い労働に明け暮れつつも、政権に反旗を翻さない。それどころか、金日成が指定した後継者を支持している。このような作業はたやすく成就しうるものではない。

このような民を作りだすには、金日成が抗日闘争で示したような確固たる愛国心がなければならぬ。彼は自分の闘争の歴史を誇張し宣伝しはしたが、それは事実無根なのではない。基本的に朝鮮独立のために闘った経歴が厳然として存する。さもなければ、このような民は生まれない。金日成は彼なりに、立派に抗日愛国独立運動を行った人物である。その抗日運動は認められねばならないし、称讃に値すべきことである。北朝鮮人民はそのことを知っている。彼らはまた、金日成将軍の歌を長く歌いつづける。歌詞のごとく、「万古のパルチザンが誰なのか。絶世の愛国者は誰なのか」、彼らはよく知っている。金

日成は変節したり、一時たりとも日本に狎れる行動を取ったことがなかった。終始一貫、銃を取り日本と戦ったのである。

また北朝鮮人民は完全なる祖国を取り戻すため、金日成と共に朝鮮戦争を戦った。そのような人民である。たしかに戦争は、外国勢力の介入で成功を見ずに終わった。しかし戦争を共に戦ったということは、生命を捧げて国を守ろうとする努力を共有したということである。既に戦争世代の多くは鬼籍にある。しかし北朝鮮人民には、この戦いで父母や兄弟を喪い、国に忠誠を誓った者たちがたくさんいる。このように戦争を共にした人々は、容易に国にそむいたり、背信行為に及ぶことはない。

ここで詳細に述べる余裕はないが、北朝鮮人民は終戦後多くの労苦に堪え、経済復旧を成し遂げた。彼らの言葉を借りれば、文字どおり「ベルトをきつく締めて」努力したのだ。戦後約一〇年間で、灰燼の中から立ち上がった人民である。このような労力を導きだしてきた人物が金日成なのである。彼は指導者として北朝鮮人民と苦楽を共にした人である。晩年になり、襤褸の人民のなかで独り人生の楽しみを享受した面もあるが、金日成は決して怠慢な人ではなかった。

彼は前述の「以身作則」の則を立てた。現地指導をすべく、北朝鮮の津々浦々、至らぬ所とてなかった。彼はまた、あらゆることに口を挟んだ。たとえ他の者が彼の演説原稿を書いたとしても、金日成は鉱山へ行き、どの鉱物を掘るにはどの道具を使うべきか、直接指導した。彼は青山里農場や大安機械工場にまで赴き、人民と共に働きながら現地指導を行った。彼は北朝鮮人民に自分が指導者であることを示した。そして、国のために働こうと力強く語ったのである。

北朝鮮が中ソ紛争で窮地に追い込まれたとき、金日成はソ連の修正主義も中国の教条主義も全部一蹴した。政治的に自立し、北朝鮮人民に民族的自負心を扶植した。ある衛星国の首長のように、各国で物乞いすることもなかった。彼は主体を立て、自主路線を闡明にした。北朝鮮人民は少しばかり苦労を余儀なくされたが、結果的には民族的自主性を確立することができた。一般の北朝鮮人民は、朝ソ紛争や朝中紛争の内容についてよくは知らなかった。だが、北朝鮮でソ連の威を借る者がソ連に帰り、中国から来た将軍たちが中国に戻るのを見ては痛快に思った。

このように万事に関わりつつ、金日成は北朝鮮人民に政治的安定感と継続性を保障したのである。北朝鮮人民の金日成に対する忠誠心は操られたものではない。たしかに彼にも過ちがあった。それを改め、国をいっそう立派に建て直す努力が為されるやもしれない。しかし、過去五〇年間金日成の歩んできた道が、完全に覆されることはもはやないであろう。

しからば金日成の行為のなかで、否定的評価を受けるべきものは何か？　その第一の大失策は対南政策である。彼は分断された祖国を統一すべく朝鮮戦争を起こした。だが、成功しえなかった。かくして彼は同族相食む戦争の責任を負うこととなった。このような戦争の責任は容易に転嫁されうるものではない。にもかかわらず、彼はこのような戦争は自分が始めたものではないという。しかし結局彼は、この戦争を勝利に導けなかったのであり、その責任は常に金日成と北朝鮮人民の頭上に巡っては帰するのである。

このような戦争責任の問題より、いっそう厳しく扱われるべき問題がある。それは、北朝鮮に朝鮮民

主主義人民共和国という政府を建てたところにある。もちろん金日成は南に政府が樹立されたのだから、つづいて北朝鮮にも政府を建てたのだというであろう。だが、このように二つの政府が建ったならば、戦争を通じてでも、平和的にでも、一つの国に作り上げねばならぬ責任がある。彼はそれを完遂することができなかった。

朝鮮戦争に勝てず、中国の力で北朝鮮政府は生き延びた。そして戦後の対南政策にも完全に失敗した。朝鮮戦争が終わってから約二〇年間、北朝鮮は朝鮮統一のために何もしなかった。その間金日成は強硬政策を主張し、南朝鮮人民の解放運動を叫び続けた。一九七二年七月、南北が初めて相対したとき、韓国は金日成の提案した統一の三大原則を受け入れた。すなわち、統一は朝鮮民族が自主的に行い、戦争ではなく平和的手段によって達成し、思想と理念を越えて民族が大団結しよう、という内容であった。これにより、南北対話が開始された。しかし金日成は自己の対南強硬政策を相変わらず堅持していた。韓国も七・四共同声明を発表した後、対北政策に変化を見せたわけではない。統一原則に対する合意で、南北関係が改善されることはついになかった。

実際、このような戦後二〇年ぶりの七・四共同声明という南北対話は、たちまち決裂してしまう。韓国では、第三共和国が維新体制に入り、反共思想はさらに強化された。北朝鮮でも、一九七二年一二月に憲法が改められ、北朝鮮政府が全朝鮮人民を代表しうる国家であるかのごとき態度が取られた。このように七・四共同声明の真意とは裏腹な、逆の環境が醸成されたのである。この時になり、金日成は自己の提案した統一の三大原則が何を意味していたのかを、ようやく明らかにした。

第一の原則。朝鮮民族が統一を自主的に行おうというのは、南朝鮮から米軍を追い出そうと言ったのである。第二の原則。平和的に統一しようというのは、北朝鮮が到底追いつけない韓国軍の現代的装備を中断させるためのものだった。第三に、朝鮮民族が思想と理念を超越し大団結しようという原則は、南朝鮮の民族解放運動と反政府運動を強化すべく打ち出したものだった、と説明した。このように北朝鮮では、韓国に対する政策を強硬政策を以て展開させていたのであった。

金日成はそれ以後も、統一の五大方針や、十大指針などといい、韓国が受け入れられない政策をいくつも提示した。一方では対話をしようといいつつ、他方では南の政府を転覆せんとした。韓国の大統領を殺害しようと試みた。また民間航空機を空中爆破させた。あるいは資金を送り韓国内に親北朝鮮勢力を扶植するかと思えば、学生と反政府運動家を利用して韓国に政治的混乱をもたらさんとした。

南北対話は中断を繰り返しながらも継続された。しかし南北が合意した事項は一つも実践に移されなかった。このような南北関係における北朝鮮の真意は、民族の和合を図るというところにはない。韓国政府を転覆し、北朝鮮式で統一せんとするところにあるのである。分断五〇年が過ぎた今日、韓国ももはや北朝鮮政府を転覆することはできない。北朝鮮も韓国政府を転覆することはできない。北朝鮮が南に送りこんだスパイや情報部員、テロ団の行為は、韓国国民に北朝鮮を憎悪の対象とさせてしまった。他方、韓国は国際的に北朝鮮を悪評し、民族の離間を醸成してしまった。

韓国が第一共和国時代から軍人たちが政治をしていた頃まで、北朝鮮人民には、韓国が民族の正統性を知り、かつ維持する国であるとは認められなかった。また北朝鮮も韓国国民に、金日成の共産主義や

社会主義政権が、民族の生きるべき道であることを説得しえなかった。北朝鮮は一人独裁の政府である。韓国の方は、何回か政府が転覆し交替した。朝鮮人にとっては、その経験から、政権と政策に関し、幾つかの選択肢がありえたはずだ。しかし南も北も朝鮮民族を回復し、一つの国を作りだそうとするよりは、各々が自分たちの現政権維持に汲々としてしまったようである。

事実、分断が五〇年も続いた今日、分断初期の解放当時よりは、民族和合がいっそう困難になったようだ。この面で、金日成は北朝鮮人民から統一の希望を剝奪し、民族分断を助長してしまった。そのように言いうる。朝鮮民族が和合し統一するには、北朝鮮は金日成が打ちだした強硬政策を変えねばならない。それを民族和合政策に代置しなければならない。全朝鮮民族の望みが統一だとすれば、金日成は北朝鮮人民に統一しうるという自負心を与えることができなかった。主体思想は北朝鮮政府が彼らの政治環境で生き、そこから派生した思想である。米軍がなおも駐屯している韓国、日・米との密接な関係で経済発展を成就した韓国、そこに適合する思想ではない。金日成が世を去った北朝鮮では早くこの点に気づき、対南政策を修正するべきである。

次の金日成の失策は、国際関係における外交政策に見ることができる。我々は一般に北朝鮮を孤立した国だと考えがちだ。しかしこれは思い違いである。北朝鮮は一二〇カ国余りと国交を結んでいる。ソ連と中国からは離脱し、自主路線を闡明にし、非同盟諸国と国交を打ち立てたため、彼らの視野は広まった。しかし北朝鮮はその関係を、社会主義陣営と第三世界諸国に局限してしまった。世界の先端技術を有し、資源と財力の大部分を占める資本主義産業国家との関係をおろそかにした。我々がよく北朝鮮

が孤立しているというのは、北朝鮮がこれらの国々から認定されず孤立しているという意味である。

金日成は自己の外交政策の基本理念は、自主・親善・平和であると主張していた。ところが、米国・英国・フランス・ドイツ・イタリア・カナダ・日本などの資本主義産業諸国家との交流は控えた。第三世界もよいことはよい。しかし、一九六五年に北朝鮮が自主路線を叫んだとき、技術が発達し資本の豊かな産業国家とも国交を結び、経済発展を図っていたならば、三〇年後の今日、北朝鮮経済はかくも凄惨な状況には立ち至らなかったはずである。

金日成自身も語ったごとく、自立経済とは、経済関係を社会主義国家にのみ限定せよ、というものではなかった。第三世界だけを相手にせよ、というものでもない。また、自立経済は資本主義国家と交易してはならない、というのでもない。自己の力に合わせ、他の国に依存したり、他の国の経済に従属した経済建設をしてはならない、ということである。一九六五年といえば、韓国が日本と国交を正常化し、日本の資本を導入し経済建設の基盤を作っていた頃であった。ところがこの時期、北朝鮮では、韓国の対日国交正常化に激しく反対していた。韓国が経済発展をしようとしたとき、北朝鮮も共にしているべきだったというのではない。一九七〇年代にでも資本主義産業国家と国交を結び、交易を始めていたならば、という意味である。さすれば北朝鮮も、衣食住問題を解決する初歩的な経済建設から産業国家へと発展可能であったかもしれぬ。その第一段階にすでに入っていたことだろう。そのような意味である。

外交政策がうまく行ったからとて、経済発展にそのまま連動するというわけではもちろんない。しかし外交関係がなく、親交がないところに経済発展がもたらされるはずがない。北朝鮮の人民は韓国の国

民と多く異なるわけではない。もともと一民族、一文化の民である。韓国のような飛躍的な経済発展は望めないかもしれない。それでも、北朝鮮人民にも機会が与えられたならば、南北の経済発展の格差は今日のように顕著なものにはならなかったであろう。金日成がソ連と中国から離れ、自主路線を選んだのは良かった。しかしその視野を第三世界に局限し、資本主義国家との外交を広げず、経済発展しなかったことは遺憾である。これは北朝鮮人民が繁栄する機会を奪ったに等しい。

最後に金日成の否定的な側面をもう一点指摘しておく。それは、彼が北朝鮮人民のための社会主義国家を建設しなかったという点である。金日成の長い執権の期間、彼が建てた北朝鮮という国は彼の王国になってしまった。それは社会主義の共和国ではない。北朝鮮は孤立した国ではないが、明らかに閉鎖的な国である。国境は塞がれ、人民は自由に往来できない。北朝鮮にある外国公館にしても然り。政府の樹立された初期に建てられたソ連大使館やハンガリー大使館、中国大使館は別である。だが、それ以外のすべての外国公館は同一構内に配置され、一般人民との接触は遮断されている。甚だしくは北朝鮮に留学している外国人学生も、北朝鮮の学生と共に受講できない。金日成総合大学に留学していても、講義は別々である。

北朝鮮人民は外国の情報に接することができない。新聞・放送・雑誌、その他すべての通信網が外部と断絶されている。彼らは外の世界がどのように動いているのか知らずに暮らしている。これは社会主義ではない。このように外国との交流を遮断し、金日成は自らを人民の首領だといった。前述したように金日成には多くの業績がある。しかし人民をかく封じこめ、己にのみ仕えさせるのでは、封建社会の

首長である。社会主義を行う民主主義人民共和国の首領ではない。北朝鮮人民は共和国憲法が要求する義務をすべて履行する。が、憲法が彼らに付与する権利を享受することはできない。彼らの参政権も憲法によって保障されている。しかし、党の統制を受けねばならない。国家機関の指導者を選挙する権利もある。だが、これも党が指名し定めた候補を支持すべく投票を強要される。

憲法では言論・集会・出版など様々な自由が保障されている。しかしそれらは条文上の保障にすぎない。実際にはいかなる自由もない。また宗教の自由もあるという。が、憲法条文には宗教に反対する自由も明示されており、国家的には宗教を奨励しない。金日成自身は、「我々はなぜ宗教に反対するのか」とかつて述べた言葉どおりに、宗教を迷信と断定し、反対した。社会主義国家であると称するがゆえか、働く自由はある。しかし働かない自由はない。ここで北朝鮮政府の国がなぜ社会主義国家たりえないか、証明することはさして難しいことではない。だが、それより重要なことは、北朝鮮人民の莫大な努力と労働力が、金日成とその親戚、そして有権階級に仕えることに費やされていることである。

北朝鮮人民は衣食住問題を解決すべく努力する。しかしその成果は、千を越える金日成の銅像や記念碑に結実するのである。このような個人崇拝の国は社会主義国家ではない。このような面で、金日成の業績がいかばかり多くとも、現在の北朝鮮人民の生活の最低水準も確保しえぬ。そのような指導者が、どうして首領として都大路を闊歩できようか。現在北朝鮮に住む人民、朝鮮の地に社会主義や共産主義国家を建てるべく命を捧げ闘った労働者・農民・知識人たちの希望と願い――金日成はそれらを裏切ったのである。そう言っても過言ではない。

金日成は自分がいなくなれば、自らの遺しおいたこの社会主義国家が、満足に後継者を選出できないものと信じた。そこで、自らの子を後継者に指定し、長いあいだ後見し育成した。自己の後継者を自分の世代からでなく、次の世代より夙に選び訓練を施した点は評価しうる。しかしこのようなことは、断じて社会主義政治体制の慣例ではない。北朝鮮人民が、代を継いで金日成一家に仕えねばならぬとは。これは否定的なものとして見る以外にないのである。

第七章　金正日の権力継承

金日成は、彼が建てた社会主義国家の法に則らず、手ずから後継者を選んだ。北朝鮮人民が制定した法に従い、次の指導者が選出されることはなかった。甚だ遺憾なことである。彼が建てた社会主義国家は、このような問題をなおざりにした。独立した立場の人民が、自立的に解決することなく、父が自分の子供を後継者に定めたのである。ここに北朝鮮政治体制の問題が存する。それは、北朝鮮人民の基本的権利を奪ったということにおいても大きな問題である。

このような後継者選定は、朝鮮民主主義人民共和国という国名中の、「民主主義」の社会ではもちろんありえない。金日成が長いあいだ手塩にかけて育てようとした、社会主義でもない。それは、人民の共和国がなすべきことではない。このような因習は、封建主義の王国や専制的独裁国家にのみ見られる事柄である。金正日の資質に関する賛否は問わないとしても、このような権力継承は、朝鮮民主主義人民共和国ではあってはならないことであった。

金日成に同調し事を成した指導層にも問題がある。だが、権力の継承を受けた金正日にも多くの問題がある。よしんば金正日が能力ある指導者であり、権力を継承されるに足る資格を有する人物であろうとも、である。誰もが金正日は、父の特別のよしみで選ばれたと思うだろう。能力をかわれたと思う者はまずいまい。このような権力継承は、人民の彼への認識に影を落とす。のみならず、

継承後の金正日の執権に問題が生じたとき、容易に挑戦を受ける要素となりうる。そこに問題がある。しからば、なぜこのような不利な権力継承を行ったのであろうか？

金日成は何も自分を封建社会の領主に見立てたわけではない。「実事求是」（事実にもとづき事物の真相を求める）の現実的政治家として、様々な方法の中からこのような後継者選定方法を選んだのである。自己の末年の権力維持、死後の自己の業績に対する評価、北朝鮮に建てた自分の国の政治文化と政治体制の継続性。これらを最もよく保障してくれるものとして、この方法を選んだに相違ない。金日成は存命中、スターリンの格下げ運動を始めとする、数多くの指導者たちの運命を見てきた。自分の死後の、北朝鮮人民の自己に対する評価も考慮に入れたはずである。準備としては、自分に背かない人物を選定せねばならない。自分の始めた仕事を継続してくれる人物を選定することが重要であった。金日成は、パルチザンの抗日運動時代から北朝鮮を統治した五〇年間を含め、数多くの者たちの裏切りと反抗を見てきた。そしてこの問題については沈思黙考し、長い期間を割いて準備作業を行ったのである。

しかし金日成のこのような決定過程において、我々は幾つか考慮せねばならぬことがある。まず第一に、それが政治的に最も効果的な決定であるにしても、その思考様式に内在するものが問われねばならぬ。それは、金日成が北朝鮮政府を自己の一企業のごとく、北朝鮮人民を自己の企業体で働く労務者のごとくに見なしたと思われる点である。自己の企業体のため、自分が老衰して働けなくなったがゆえに、息子を後継者として押し立てる。そして企業を経営させ、労務者たちを働かせ

ようとしたかの観がある。このような状況は、韓国の大企業ではありふれたことである。そして、これが朝鮮人の思考様式なのかは分からぬ。しかし北朝鮮人民は、本来主権を有する労働者・農民である。朝鮮民主主義人民共和国は企業ではない。このような視点に立つとき、金日成とその権力階層にある人々が、北朝鮮人民をいかに冒瀆しているかが分かるのである。

第二は、金正日自身の問題である。彼は朝鮮戦争で死んだ毛沢東の息子とも異なる。自分の父の蛮行を世界に露わにした、スターリンの娘とも異なる。孝行の誠ある息子、党と首領に忠誠を尽くす、金日成の息子である。金日成は金正日が単に自分の息子というだけで、彼を後継者と見なしたとは思われない。むしろ彼の能力をある程度認めたからこそ、後継者と見なしたのだと思う。金正日が、父を殺す輩に加担するような親不孝者で、指導者の息子であることを笠に着て放蕩し、国と人民に無関心であったならば、いかに金日成の息子であっても彼を選ばなかったはずである。また、自己の息子に富貴かつ華麗なる将来を約束する、父母の心情でもない。また金日成自身が死後の報いを慮ったとしても、それだけでは事は成らなかったはずである。金日成は金正日を後継者と定めた後も、長い歳月をかけて彼の忠孝心を観察し、彼の能力を試験していた。この点で満足を感じて後、はじめて金正日を完全に支持した。

第三に、我々はこのような後継者選定過程を批判することも、酷評することもできるが、それはあまりにたやすく、そして何らの効果もないということである。批判や酷評で後継者を変えられるならば別である。しかしそれは既成事実である。これからの為すべきことは、金正日をどのように

評価し、北朝鮮がどのように変化するかを見極めることである。かつてある人々は金日成を酷評し、彼を偽物だといったが、そのような見解はその後の北朝鮮理解に何の役にも立たなかった。彼らは、金日成が昔いかなる抗日の記録にもなく、独立運動もしなかった人物だと思いたかった。ソ連が自己のために利用せんと連れ込んだ人物であり、朝鮮の愛国の志士たちを屠り、勝手に指導者になったのだと批判した。しかし彼らの金日成像は、解放当時やその後の北朝鮮を理解する上で、何の助けにもならなかった。

いま、人は、金正日は北朝鮮社会主義制度が制度的に選出した指導者ではない、父の庇護で指導者になったのだと批判する。しかし、このような批判は批判にとどむべきである。金正日の北朝鮮を理解する助けにはならない。かつて我々は金日成の抗日運動を研究し、北朝鮮の執権グループを洗い出し、彼の政治的性格を少しでも深く知ろうとした。そのように我々は今、金正日について研究し、彼の政治的な未来をわずかでも明らかにすることが重要である。

このような作業において、金正日の行動を非難や讃辞で綴ることはあまり意味がない。人はよく彼のことを、酒好き女好きだという。遊興と演芸の方面を好み、父のような指導力もカリスマ性もない道楽者だという。これは事実ではないが、たとえ事実であっても我々にはどうでもよいことだ。有用価値の少ない悪評である。我々が知らねばならぬさらに重要なことは、彼が遊んでいる時のことではない。仕事をするとき、いかなる仕事をどのように行うかを知ることである。たしかに金正日は金日成の息子として、過去五〇年間、好きなことができる立場にあった。しかしこのようなこ

とを引き続きあげつらい、北朝鮮を評価しようとするのは正しくない。それは、韓国の第三共和国時代、朴正熙のことを酒好き女好きだと批判し、彼を罵ったのと同様である。朴正熙の第三共和国や維新体制を知るのに、彼の酒色を評することはあまり重要ではない。

我々は金正日について正確に知らねばならない。金日成は彼のどこを見込んで政権を委譲したのか。金正日とはいかなる人物で、父とはどのように異なるのか。もちろん金正日は、父親の世代とは異なる世代を代表する人物である。二一世紀の新しい朝鮮は、長老政治よりも、若者たちが新たな価値観で政治を行う方がより望ましいのかもしれない。二一世紀の朝鮮に金日成はふさわしくない。若い世代を代表し、金日成の伝統と革命の遺産を尊重する人物が必要であった。それが金正日だと判断したのだ。しからば金正日は金日成の息子だという事実以外に、いかなる人物なのか？いかなる成長過程を経、いかなる政治参与を通じ後継者に選出されたのであるか？またその後継者としての継承作業はどのように進められたのだろうか？以下、詳細に見ることにする。

1　金正日の出生と成長

北朝鮮で金正日を後継者に選出し、彼を民族的指導者として推戴せんとする作業が、かなり以前から始まっていた。かくして、北朝鮮の指導層、幹部たちは金日成を民族の首領に祭り上げたように、金正日を朝鮮の指導者にすべく、事実ならざる事どもを捏造し始めた。ここでは、このような彼らの過ちに

関わり合うことなく、事実を理解することがより肝要であると考える。
金正日は金日成と金貞淑の間に生まれた三人の子供のうちの長男である。一九四二年二月一六日、ソ連沿海州で産声を上げた。金貞淑は咸鏡北道会寧の出身である。金日成より七つ年下で、彼と似た背景をもつ女子パルチザンであった。金貞淑は幼い頃、母に連れられ父を尋ねて満洲へ渡った。そこで母が亡くなる。孤児となった彼女は、一九三五年弱冠一六歳で、パルチザン部隊に炊事婦として入隊した。後に東北抗日聯軍第二軍第六師の金日成師長の部隊付きとなった。このとき、日本人に逮捕されたり、戦いで負傷したこともあった。パルチザンたちの炊事のみでなく、服をしつらえたり、銃を取り戦場にもあった。東北抗日聯軍の抗日闘争が終焉を迎える頃、すなわち一九四〇年末頃、金貞淑は金日成と結婚した。そして、翌一九四一年三月に金日成と共にソ連国境を越えた。彼らはソ満国境の小邑、梅里というところから国境を越えて沿海州に入り、同年ハバロフスク近郊の極東ソ連軍八八特別旅団に加入した。この旅団の野営地、ビャーツクで一九四二年二月に金正日が生まれた。金正日はソ連で出生したため、当時の幼名はロシア語でユーラと称されていた。
金貞淑はビャーツクで次男も出産したが、その名はシューラであった。その朝鮮名を金平一という。後にこの子は平壌に戻るが、当時のソ連軍政の民政担当者レベジェフ少将の息子と噴水台で遊んでいる途中溺死した。日本からの朝鮮解放後、金日成夫妻は平壌に入り、長女金敬姫を生んだ。これが現在北朝鮮に残る金正日の唯一の同腹の兄弟である。金敬姫は長じて張成澤という党幹部と結婚し、現在、金正日を補佐している。金正日の母金貞淑は、金正日七歳の年、一九四九年九月二二日に子を出産する際、

白頭山の正日峰(山に文字が刻まれている)近くで生まれたとされる金正日の生家. *The Leader, Kim Jong Il*

その子と共に死亡した。

北朝鮮では、金正日を民族的指導者とするため、外国での出生を隠す。沿海州ビャーツクではなく、朝鮮民族の聖地白頭山で生まれたとする。そこは白頭山抗日遊撃隊のアジト、原始林の生い茂る小白水上流の谷間で、それも中国側ではなく朝鮮側、両江道三池淵郡で生まれたとする。これはもちろん、事実ではない。彼の名も、この世を正しく照らす太陽たれ、という意味で正日と名づけたという。このような瑣末なことには反論するのも煩わしい。金日成と金貞淑は、当時朝鮮には入れなかった。金日成自身も自分がソ連の沿海州に逃げ込んだ事実を認めようとしない。満洲で解放を迎えるまで、小部隊活動をしていたと主張した。しかし朝鮮に入っていたとは一言もいわなかった。八八特別旅団の一員としてビャーツクにいたという事実は、日本の情報文書にもある。また崔庸健・金策、彼らの中国人の上官周保中らと共に真新しいソ連軍の軍服を着て写した写真もある。

このような瑣末な出生地論争より、金正日が金日成と金貞淑のような抗日闘士を父母として生まれたという事実の方が、より重要である。このような父母の歴史は、金日成が自分の父母から受け継いだ

「革命伝統」よりも立派なものである。また金日成は幼い頃に父母を喪い、父母の助けなしに育った人物である。だが金正日は母を夙に喪ったとはいえ、国を治める立派な父の膝下に育った。母を七歳の折に喪ったため、穏やかな家庭生活は送れなかったであろうが、金日成の幼年時のように貧困に喘ぎつつ育ったわけではない。

朝鮮戦争は金正日が八歳のときに起こった。父が朝鮮人民軍の総司令官であったからではなく、戦争を避けるために、母なき兄弟は父のかつての戦闘地満洲に避難した。金正日は自分の母にたいそう憧れて育ったようである。成人し、後継者の条件が備わったと思われた一九七〇年代末、彼は母のために、咸鏡北道会寧に母の銅像と博物館を建てた。戦争当時、金正日は父が恋しくて何度も手紙を書き送った。普通に暮らしている、と綴られていた。避難してきた他のパルチザンの子供たちと共に、朝鮮革命家の遺族の子女を集めた革命学院に通っていたという。

ハバロフスク近辺のビャーツクでの八八特別旅団．前列右から2番目が金日成，3番目が周保中(中国人)．『朝鮮民主主義人民共和国』

朝鮮戦争が終わるや、金正日兄弟は他の革命家遺族の子女と共に、平壌に戻った。金正日ははじめ三石人民学校に通ったが、途中、編入で平壌第四人民学校に移ったという。ここで一九五四年に一二歳で小学校教育を終えた。その年、平壌第一初級中

金日成総合大学に入学した金正日. 1960年9月. *Kim Jong Il, The Leader of Youth Movement*

学校に進学し、ここを終えて南山高級中学校に入学、一九六〇年七月に卒業したという。北朝鮮の彼に関するすべての伝記は、金正日が小中学校時代に何らかの大きな指導力を発揮し、かつ業績を残したかのごとく書き連ねる。しかし、これらも誇張である。国家主席の息子として、中学校と高等学校をこのように無事に終えたということの方が重要である。

北朝鮮ではまた、初等教育時代に金正日が、既にマルクス・レーニン主義と弁証法的唯物論などを読んでいたという。また、父の主体思想も耽読したという。が、このようなことはつまらぬ宣伝である。これではまるで、金日成が毓文中学校時代にマルクス主義と弁証法的唯物論を読み、小学生たちに教えたというのと変わりない。金正日が自分の父から多くを学んだということは事実である。中高等学校を中退せず、正規の教育を終えた。しかし彼が読んだという父の主体思想は、一九五五年一二月二八日に、父がはじめて言及したことである。このとき金正日は一三歳。まだ高等学校にも入っていない。当時、北朝鮮は、朝鮮戦争後の経済復旧たけなわの頃。金正日も他の学生と共に、千里馬運動に参加し働いていたという方が、より真実に近いであろう。

金正日は父と異なり、大学を卒業した。自分の父の名を冠した大学であるが、そこは北朝鮮で最も立派だといわれる大学である。入学も容易ではない。金正日はここに一九六〇年九月に入学し、一九六四

年に卒業した。今日北朝鮮では、金正日がこのとき多くの業績を残したと主張している。入学の動機からして振るっている。金日成の息子として外国留学を望めば、いくらでも可能であった。にもかかわらず、それを一蹴、民族教育の重要性を強調し、平壌で学校に通ったのだという。このような点を挙げ、金正日は民族意識の強い朝鮮の指導者だというのである。

また金正日は大学時代に既に数編の論文を発表したという。とくに父の『我が国社会主義農村問題に関するテーゼ』を勉強し、農村問題における郡の役割を高めることについて、北朝鮮唯一の考察をものにした。金正日は郡の役割を高め、都市と農村の差異、労働階級と農民の差異をなくすことに着眼したという。ところで、父金日成の農村問題に関するテーゼは、朝鮮労働党第四期中央委員会第八次全員会議で発表されたものである。この会議は一九六四年二月二五日に開かれた。とすれば、金正日の卒業論文は一九六四年三月提出であるから、期間的に問題が生じてくる。

また金正日は大学時代に論文を書いていただけではない。生産実習として現場労働もし、政治活動もした。父の現地指導に付き従い、一般民衆の生活相を見、多くのことを学んだという。彼の大学時代は、金正日が自己の思想的・理論的土

金正日の大学時代．龍城道路工事に参加したときのもの．2列目中央．*Kim Jong Il and the Peaple*

台を積み上げる時期であった。現場実習を通じて労働者・農民の立場で物事を総体的に判断しうる力量を備えるための時期であったという。

この他にも、金正日は性格が良く、人間関係にゆとりがあり、円満なる人格の所有者であるという。これとは逆に、金正日は性格が悪く、人を面責したり恥じ入らせることを日課とするという酷評もある。いずれが事実なのか、あるいは相反する性質を合わせ持つものか？　分からぬ。金正日は幼い頃、自分の父が金日成だということを笠に着たであろうし、憎まれもしたであろうことは察しがつく。そのような幼年時代が、彼の壮年時代にいくばくかの影響を及ぼしたということも、様々に解釈しうる。そのような解釈も重要ではあろうが、それよりは確実に知られる事実を正確に把握することが必要である。

金正日は外国生まれであり、平壌で育った。幼い頃、弟と母を喪い、たった一人の妹と家のことを考える余裕もなく父の膝下に育った。母を喪い、一年も満たずに朝鮮戦争に遭い、妹と共に故郷を後にした。中国東北地方〔満洲〕でしばらく暮らして平壌に戻り、北朝鮮で得られる限りの最高の教育を受け、大学まで卒業した。このような幼年・青年時代は金正日を北朝鮮の政治風土に適応させ、父の為さんとした国事に夙に関心を持たせた。また母が七歳で亡くなったため、父と非常に近しかったと思われる。金日成に比べ、金正日は異域の孤児としてさすらうことはなかった。母こそいないが、父が国家元首であるがゆえに、彼の成長過程ではすべての条件が整っていた。金日成は結局再婚するが、一九六三年のことである。金正日は既に二〇歳を越えていた。彼は朝鮮の普通の子供がそうであるように、生母を思慕し、継母を嫌った。

大学を終え、金正日はすぐさま党に入党した。これは彼が朝鮮人民軍で服務しなかったということを意味する。ここに父と比べ顕著な差異がある。金日成は子供の頃からパルチザンであった。彼の名声は抗日武装闘争の闘士として轟いた。これに比し、金正日は徴兵で軍に入隊したこともなければ、正規軍人の訓練を受けたこともない。彼は今日北朝鮮の軍総司令官であるが、軍の経歴はまったくない人物である。

2　反党事件の摘発

金日成が亡くなる直前の一九九四年六月、北朝鮮では金正日の党事業開始三〇周年が祝われた。しからば金正日は一九六四年春に大学を卒業し、すぐさま六月に入党し仕事を始めたということになる。彼はこのとき、既に党の秘書局党組織指導部に配置され働いていたという。党での仕事始めは二二歳のとき。とすれば、彼は父の庇護を受けたものか、早速に党職を駆け昇ったことになる。

一九六五年には、父親の内閣首相室で働き、翌年には党に戻り、叔父の金英柱の下で働いた。このときから、党の宣伝扇動部で文化・芸術に関心を持ち、金策の子の金国泰と共に仕事をした。また思想部門にも関心があり、思想事業では楊亨燮と共に活動したという。当時、金正日は党の新参者であった。にもかかわらず、中堅幹部のごとき役割を様々果たしたと主張している。

金正日の党内進級状況では、特別待遇のようなものがあったであろうことは当然予想される。しかる

に北朝鮮で出された彼の伝記では、彼が党で働きはじめた初期から、すでに非常に重要な党内部の問題を解決し、大いにいさおしを立てたと言っている。このような主張は、一九六七年当時に発表されたものではもちろんない。金正日が後継者に選ばれて後、記録に残すに足る、大いなる事どもが彼の過去に存在したかのごとく偽装された。そのために主張されたものと思われる。これは看過すべき些細なこととは思われない。そこで以下、仔細に検討してみることにする。

北朝鮮は主張する。金正日は、一九六七年五月四日から八日まで開かれた、朝鮮労働党第四期中央委員会第一五次全員会議で、重要な役割を果たした。彼はそこで、ブルジョワならびに修正主義分子の反党・反革命的行動を暴露した。そして党の唯一思想体系を確立し、金日成を首領に奉ったというのである。このとき金正日の批判対象となった人々は、朴金喆・李孝淳であった。彼らはいわゆる甲山派の代表的人物である。昔、一九三七年に金日成が普天堡戦闘を行った際、朝鮮領内の朝鮮民族解放同盟、ならびに在満韓人祖国光復会の組織した甲山工作委員会と相謀って普天堡を攻撃したという。彼ら二人はそれらと関連のある者たちである。

朴金喆と李孝淳は六七年当時、北朝鮮で労働党の重要な職責を担っていた。しかるに党を利用し、個人英雄主義を画策したという。とくに朴金喆は、日本植民地時代に西大門刑務所で獄中生活を送ったことがあった。このとき自分の妻が赤心無比の良妻で、彼に尽くし苦労を重ねた。それを「一片丹心」という題の映画に撮り、広めようとしたという。この他にも、咸鏡北道人たちが地方色濃厚な「おらが里」(ネ・コヒャン)という演劇を演出した。李孝淳は党の人事政策で、咸鏡道出身者のみを登用し、党

内に派閥状況を醸成し始めたという。

金正日はこのようなセクト的行動を洗い出し、それらを暴露・処罰することに功績があった。そして、その後党内で、首領の指導力と唯一思想体系を強化することに貢献したのだという。この当時、朴金喆と李孝淳の甲山派粛清で除去された人々は、主に甲山工作委員会と咸鏡道系統の者たちであった。金道満・高赫・許錫瑄・李松雲・金曰龍・李性哲・許鶴松らである。金正日は一九六七年当時、二五歳。入党以来わずか二、三年にしてこのような大事を成し遂げたという。これが事実であれば、彼の功績は果たせるかな、大なりと言わざるをえまい。

このような主張は、あたかも金日成の業績の誇張を思わせる節がある。金日成が将軍として、一九三二年四月二五日に朝鮮人民軍を創建した云々。一九四五年八月一五日まで満洲国で日本と戦い勝利し、ついに朝鮮を解放した云々。これらの金日成の抗日闘争の誇張された物語と、それはよく似ている。金正日のこのような英雄的党内活動は、当時の党内事情より見てありえないことである。あたかも、金日成が中国抗日聯軍やソ連なくして抗日闘争を戦えなかったように、金正日は父の巨大な後押しなくしては、そのようなことは行いえなかっただけでなく、そのように主張することも難しい。金日成が日本から朝鮮を解放できなかったように、金正日は甲山派を粛清できなかったものと見るべきである。

この事件は事実を洗い出すことにより、問題の輪郭が浮かび上がってくる。一九六七年五月四日から八日まで開かれた、朝鮮労働党第四期中央委員会第一五次全員会議は秘密裏に開催された。その議事内容は発表されていない。これより二カ月も経ずして開かれた党第四期中央委員会第一六次全員会議も、

やはり秘密会議であり、議事内容は発表されなかった。党中央委員会の全員会議は一年に二回ずつ、約半年の間隔をあけて開かれるのが当時の慣例であった。ところが第一六次の会議は、第一五次会議の開かれた五月から二カ月にも満たぬ、六月二八日から七月三日まで開かれた。このような議事内容の公開もなく、秘密裏に開催された中央委員会は、もちろん党内の問題を非公開で片づけるということを意味する。

金日成の八〇歳を祝賀し、多年の研究成果を総合し整理した『朝鮮労働党歴史』は、次のように指摘する。一九六七年の党第四期中央委員会第一五次全員会議でブルジョワ分子・修正主義分子が党の路線と政策を歪曲し、革命伝統を中傷した。巧妙な方法で、党政策教化と革命伝統教化を妨害した。そして党内に、ブルジョワ思想・修正主義思想・封建儒教思想・教条主義・事大主義・セクト主義・地方主義・家族主義のごときあらゆる反党・反革命的思想を撒き散らし、党と人民を思想的に武装解除せんとした――と、書かれてある。

朝鮮労働党の正史は続ける。党は、このようなブルジョワ修正主義分子が撒き散らした思想的余毒を根こそぎにすべく努力し、全党挙げて闘争した。そして党内に唯一思想体系を確立し、強化しうるように、党学習綱領を改編し、党の教化網を再整備した。党幹部養成機関の事業を改善し、在職幹部たちのための一カ月講習体系を作り上げた、という。ここには金正日が何かをしたということは、一言半句も書かれていない。

一九六七年の党第四期中央委員会第一五次全員会議と、第一六次全員会議で起こったことを把握する

には、金正日が何名かの反党行為を摘発したか否かは問題ではない。むしろ当時の北朝鮮の政治環境を見ればよい。北朝鮮の置かれていた立場は以下のごとし。まず金日成は国内の政敵を全部整理し、中ソ紛争で中国を支持した。そのためソ連との関係が悪化したが、一九六二年から六四年まででソ連と北朝鮮の紛争を終わらせた。一九六五年、自主路線を闡明にし、第三世界に進出し始めた。しかし当時、中国では文化大革命が起き、中国の紅衛兵が北朝鮮にやって来て、北朝鮮と金日成を苦しめたときであった。

このとき北朝鮮では、ソ連の修正主義も中国の教条主義も必要ない、唯一思想体系を打ち立て、自主路線を歩むべきだとされていた時期であった。また金日成は国内のすべての政治グループを粛清し、自己のパルチザン派のみを残していた。まさにパルチザン万能時代といっても差し支えない。それほどに、パルチザンと少しの関係でもあれば、羽振りよく暮らせた時代でもあった。

この時流に乗じたのが、朴金喆と李孝淳だった。二人は当時、労働党権力の序列で第四位と第五位を占めていた人々である。時の朝鮮労働党中央委員会は、金日成・崔庸健・金一・朴金喆・李孝淳・金光俠という序列であった。朴金喆と李孝淳は、中央委員会の政治委員会と秘書局でも各々四位と五位を占めていた。このような人物たちが金日成に挑戦することはできない。彼らは金日成・崔庸健・金一とは異なり、パルチザン闘争時に銃を取って武装闘争した者ではないからである。金日成が普天堡戦闘のため、祖国光復会の設立した甲山付近の工作委員会と連携をとった。あるいは情報網を利用して、国内情報を探り軍事行動を起こした。そこの人々であり、かつて金日成のパルチザン戦闘を助けた人々である。

金日成のパルチザンの戦友や部下というわけではない。金日成が普天堡をたたいて戻った後、朴金喆は、そこの民族解放同盟そして祖国光復会員と共に、金日成の侵入に協力したという罪で日本側に逮捕された。すなわち権永壁・李悌淳・徐寅弘らと共に、である。このうち、金日成を助け情報を提供したのが権永壁や李悌淳らであり、死刑に処せられた。このとき無期懲役を言い渡されたのが、朴金喆である。彼は西大門刑務所に送られ、一九三七年から解放まで八年間ここに収監された。そして解放後、北朝鮮にもどり金日成と再会した。

李孝淳は、このとき死刑にされた李悌淳の実兄である。普天堡戦闘や金日成のパルチザンとは直接の関係はない。李悌淳の処刑後、妻の崔採蓮が生き残り、北朝鮮に戻った際、彼はその親戚としてパルチザンたちと親しくなった。それだけの関係であり、彼自身はパルチザンではない。朴金喆や李孝淳は咸鏡道人であり、李孝淳は朝鮮国内の咸鏡道で反日運動を行ったという。

このような人々が高位にあり、党事業であやまてば大事に至るが、金日成や崔庸健・金一に挑戦するようなことはしなかったはずである。彼らはパルチザンに対抗し、自己を組織化する経験も能力もない人々である。さらに巨視的な北朝鮮政治の動態から見れば、彼らの立場はより鮮明になる。一九六七年は、すなわち朝ソ紛争の真っ最中である。朝鮮労働党第二回代表者会議が開かれた、一九六六年一〇月以後の話である。この会議は、一九六一年九月の第四回全党大会から始まる七カ年人民経済計画が綺麗に収まりきらず、三年間延長すべく開かれた会議であった。この延長について金一が長広舌をふるった。金日成はといえばこの会議で、北朝鮮を中国・ソ連から独り立ちさせるべく自主路線を闡明にしたので

あった。

北朝鮮がこのような困難な状況に立ち至ったときである。朴金喆は党組織を担う秘書であった。少なからず動揺し、修正主義や教条主義に陥ったやもしれぬ。主体を党内に確立できなかったという罪状があったかもしれない。しかるに自己の甲山派を強化し、金日成に挑戦するなどということは想像だにできない。またこのとき、李孝淳は南の民族解放を担当する党秘書であった。彼はこの面でいかなる業績も上げることができなかった。韓国の強硬なる反共政策に対する対抗者の任を全うできず、犠牲に供されたかに見える。李孝淳が粛清された後、北朝鮮は軍人の許鳳学を任用し、対南政策責任者の首をすげ替えた。かくして一九六八年に入り、対南ゲリラを派遣し朴正煕を殺害せんとする事件が生じることとなった。

朝鮮労働党第四期中央委員会第一五次と第一六次全員会議時、すなわち一九六七年五月から七月の初めまでに、粛清の対象となった人々は以下のごときである。党秘書金道満・党文化芸術部長高赫・党教育部長許錫瑄・職業同盟委員長金曰龍・検察所長李松雲・黄海南道党委員長許鶴松らであった。このうち、李松雲検察所長は朝鮮戦争後、李承燁・李康国・林和などの国内派と朴憲永を起訴し、死刑に処した人物として名高い。彼は普天堡戦闘の際には、金日成が満洲に逃げた後、権永壁・李悌淳・朴金喆らと共に日本に逮捕され、獄中生活を送った人物である。後にソ連で法学を学んだという。

結局、彼らすべてが甲山派の下に結集しようとも、朝鮮労働党や金日成に挑戦する力たりえはしない。むしろ彼らの、党や金日成に対する忠誠心の瑕瑾が問われたのであろう。党の唯一思想体系を確立する

ことを怠った。言い換えれば、金日成を首領として奉じることに積極的に協力しなかった、ということが問題視された。それが事実に近いであろう。

このような党の中核たる高位級幹部を、入党三年ほどの学士金正日が粛清したのだと北朝鮮はいう。たとえ父が金日成だとしても、言語道断である。このような粛清は金日成自身にとっても力のいる仕事である。この後、金日成は、自己に不忠な冒険主義のパルチザン系列の将軍たちも粛清してしまう。

一九六〇年代後半期、中国との紛争時、北朝鮮の党と軍の内部には多くの問題があった。中国の紅衛兵たちがそれを大字報で報道した。北朝鮮では、金光俠が軍事動員をかけ、金日成を除去しようとしたという噂を書き立てた。金日成はもちろんパルチザン出身の金光俠を速やかに粛清し、一九七〇年一一月の第五回朝鮮労働党全党大会までに党内外を主体思想で完璧に武装した。一九九一年一二月に出版された朝鮮労働党正史はこの事件に触れつつも、金正日の役割についてはいかなる言及もしていない。このような事柄に、金正日はいささかも関わらなかったと見た方がよいであろう。大活躍したというのは、金正日の指導力を高く評価するための宣伝であり、事実ではない。

3　党事業

以上のような大事をなさずとも、金正日は大学を卒業し、党中央本部の中枢部門で仕事をしていた。たとえそれが父の庇護によるとしても、青年時代に他の者にはできないような経験をしたはずである。

しからば彼は大学卒業後、何をしていたのか？　自他ともに彼を後継者と認めることになる第六回全党大会まで、一体何をしていたのだろうか？

金正日は党中央委員会宣伝扇動部文化芸術指導課で働いていた。ここで働きつつ、党の唯一思想体系を打ち立てたという。金日成の唯一指導形態を体系化するため、金日成の書いたすべての作品を再編し出版した。全人民の政治思想的統一を強化したという。すなわち彼は、党と人民を金日成思想で武装させ、彼らを首領の指導下に団結せしめた。北朝鮮の建設に貢献すべく、三つの基本問題を解決しようとしたという。そのために党の革命史の研究組織を再編成した。また文化芸術部門を指導し、映画・歌劇・演劇・美術などを創作しうる機関を用意した。とりわけ、映画制作で様々な作品を広めた。一例を挙げても、一九六九年発表の「血の海」、一九七〇年の「一自衛団員の運命」、そして一九七二年の「花売る乙女」などがある。彼の指導下に制作された映画・演劇は数多い。しかしその大部分は、金日成と彼のパルチザンが過ぐる日、満洲で行った抗日運動の逸話を内容として作られたものである。いわば、北朝鮮人民の革命伝統を強調した作品である。

映画「花売る乙女」より

このような作品の制作を通じ、金正日は北朝鮮に文化芸術革命を巻き起こした。そして資本主義が残した古い思想と遺産を清算したという。その作業原則は、社会主義的内容を民族的形式に盛り込むことで

ある。この原則は金日成が主体を論じた際、すでに明らかにしたところであるが、これを金正日は強調し、作品化したのだと北朝鮮は主張する。かくして作られた作品群は金日成の認めるところとなり、金正日の能力を顕かにする重要な契機となったという。

俗に、金正日の芸術映画作品から芸術家たちとの頻繁な交際を窺い、その映画狂をあげつらい、酒色を好む権力者の息子との評を下す向きがある。が、それは全く不当な評価である。金正日の映画芸術論には、社会主義的内容が確固としてある。父の政治的地位を堅固にする宣伝扇動ともなっている。またこのような作品は、金正日が中央党内で、自己の地位を確保する方法としても使われた。自分が父にいかに忠誠を尽くしているかを示すという政治的意図も十分含まれている。このような関係で、金正日の映画制作事業を、遊興を好んだ若者の国庫浪費と見ることはできない。むしろ金正日は、一九六七年以来党内に確固として打ち立てられた党の唯一思想体系において、首領と党そして人民の相互関係を強調する作品を作りだした。そう見た方が正確であろう。

金正日は北朝鮮でいわれるような大事はなさなかった。一九六七年、既に党の不純分子を除去し、党の唯一思想体系を確立し、父を首領として奉じる。そのようなことはしなかった。しかし、若き党幹部として入党し、そして党の思想闘争の流れを理解した。彼が芸術部門で活躍しつつ、このような思潮をいっそう強化する仕事をしたことは重要な業績であると言えよう。またこのような努力は、金正日の党内の公的な職責以上に、彼の影響力を漸次高めることになったのである。

一九七〇年に開催された朝鮮労働党第五回全党大会では、金正日は中央委員会の正委員にも候補委員

にも選出されなかった。彼は当時二八歳。おそらく社会主義労働青年同盟にいる若手の党員だったであろう。金正日が労働党で頭角を現し始めるのは、全党大会の三年後、一九七三年九月の党第五期中央委員会第七次全員会議からである。このとき金正日は党秘書として選出されたのであった。そして翌年、一九七四年二月の同第五期第八次全員会議で党中央委員会政治委員の一人として選出された。これは当時、党で公開された文書には記録されていない。このような事実は、後に金正日について書かれた文章で初めて明らかにされたことである。しかし中央委員会委員になったという記録のない人物が、党中央委員会秘書や政治委員に俄に駆け昇るということは、党史にないことである。このような点に、金日成の息子という特権が行使されたことが見て取れる。党の規則や慣習を超越した、党の人事行政だと言えよう。しかし同時にこれは、目的意識的な登用でもあった。その目的の一つは、第五回全党大会で提示された三大革命、すなわち思想・技術・文化の三つの革命のためであった。これに青年を動員し、国の経済に活を入れる。金日成らの革命世代でない、次の世代を動員せんとしたわけである。そのため金正日が登用されたのであった。今一つの目的は、当時既に金正日を後継者に指名すべく基礎作業に入っていた。そこで彼を党の高位職に登用したのである。

金正日のこのような党内の活動と昇進は、むろん彼が金日成の長男であることに大きく与っている。しかしこの過程で、たとえ自己の息子でも無能であれば、後継者として選ぶはずもない。金日成総合大学卒業以来一〇年近く、金日成と彼の世代の指導者たちは、短い期間ではあるが、金正日を観察する機会を得ていた。そして彼の能力を認めたのである。

金正日の選定は、金日成と彼の世代の指導者たちの命令というべきか？　いな、むしろ金正日が大学卒業後の一〇年間、自分なりに父の評価を得ようと限りなく努力を積み重ねた結果と言えよう。金正日は全身全霊を尽くし、自己と党の唯一思想体系を支えた。父を唯一の首領と奉じ、忠誠と孝道を捧げ、自己を表現しつづけたのだと思う。たとえ映画などの芸術的方法であろうとも、それらを形で示し、父から能力を認められようと金正日は懸命に努めた。北朝鮮の金正日後継は、息子が願わずその気も見せなかったのではない。また、能力もないのに、父が自分の子だからというだけで選んだのでもない。むしろ金正日が多くの努力を払い、そして父から認められたのだということができる。このような金正日の努力は、一九七〇年代全体を通して、次第に激しくなったものと見られる。金正日が大学卒業後、党中央機関に入り行なったことは、ある程度肯定的に評価しうるのである。

4　後継準備作業

一九九一年一二月一五日に出版された『朝鮮労働党歴史』は、金日成の八〇歳の誕生日を記念して書かれたものである。この朝鮮労働党正史に曰く、

我が党は全党員と勤労者たちの切なる願いを入れ、親愛なる金正日同志を一九七三年九月の党中央委員会第五期第七次全員会議において党中央委員会秘書に推戴し、つづく一九七四年二月に開かれた党中央委員会第五期第八次全員会議では党中央委員会政治局委員に推戴し、敬愛する首領金日

成同志の唯一の後継者、主体偉業の偉大なる継承者、党と革命の英明なる指導者として高く推戴した。

この当時の中央委員会議事次第を見ると、このような重大なことを討論し、あるいは決定したという記録がない。他方、党史を見ると、一九七二年一二月に党第五期中央委員会第六次全員会議が開かれたとある。ここで、朝鮮民主主義人民共和国樹立後、初めて憲法が改正された。いわゆる一九七二年の新憲法である。そして第七次全員会議は九カ月後の、一九七三年九月に開かれた。このとき発表された議事次第は、第五回全党大会時に提示された三大革命、つまり思想・技術・文化の三大革命に対する討論であった。加えて、楊亨燮の大安事業方法での採算制に関する報告があった。引用にある第八次全員会議は、これより五カ月後の一九七四年二月に開かれた。このときには金日成の、社会主義建設のための人民大動員の演説があった。そして北朝鮮で税金を全廃すること、生産品に対する価格を低めることについて討論が行われた。

一九七四年は、金正日が三二歳の年である。引用によれば、このとき後継者として推戴されたという。しかし公式の発表はなかった。このような事実が公式に知らされたのは、一九八〇年一〇月の朝鮮労働党第六回全党大会開催時であった。事実上、北朝鮮では、このような金正日の後継準備作業を秘密裏に推し進めていた。彼の後継に自信がなかったものか、人民がそれをいかに受けとめるか不確実であったためか。また老幹部の反応を見ようとしたためか。金正日の後継が決定したという一九七四年から、一九八〇年の党大会までの六年間、金正日は「党中央」という仮名で事を行った。

後継者問題を誰がいつ金日成に提案したのか？　金日成自身がまず議論に上らせ、そして始まったものか？　知るべくもない。しかし金正日の伝記によれば、金日成のパルチザンの革命同志が提案したことになっている。誰がいつ、そうしたのかは問題でない。むしろ当時の、党の政治委員たちのほとんどがパルチザンであった。そのパルチザンたちが、自世代に金日成の後継者を求めることに反対した。それよりは次の世代にもっていき、金日成や彼のパルチザンたちが安心して訓練できる人物を推戴したということの方が重要である。

朝鮮労働党中央委員会では、世間に知らせない決定や討論をするときには、議事内容を発表しないのが慣例である。金正日を後継者に推戴したという、党第五期中央委員会第八次全員会議は一九七四年二月。つぎに公表された中央委員会の全員会議は、一年後の一九七五年二月であった。しかしこの一年の間に、党第五期中央委員会は第九次全員会議を秘密裏に開催した。この会議については、議事内容ばかりでなく、日付も発表されなかった。この党第五期中央委員会第九次全員会議で、金正日の後継者問題が討議されたと見るのが正しい。

また日付が発表されなかったため正確には言いきれないが、おそらく一九七四年中葉、あるいは四月頃にそれが開催されたものと見るのが正しいであろう。つまりこのときから、北朝鮮では金正日の党事業を、「党中央」の事業と語った。また党機関紙『労働新聞』でも、朝鮮の革命を「代を継いで」完遂せねばならぬと述べた。「党中央」という語と、「代を継いで」という語を併用し、後継者問題を間接的に暗示したのである。これは、朝鮮人民軍創軍四二周年を記念した、一九七四年四月二五日付の『労働

新聞』に見ることができる。

これ以後、最高人民会議において、あるいは公式出版物、すなわち党機関誌『勤労者』や、『朝鮮中央年鑑』などに、「党中央」という言及が生じる。そしてそれが金正日を意味することが、次第に明らかになっていった。日本にある北朝鮮の組織、朝鮮総連でも、このような用語が使われだした。金正日が勢いを得つつあるという証左が現れ始めたのである。また、咸鏡北道会寧に金正日の生母、金貞淑の銅像が立てられた。そして金日成の後妻の金聖愛が、金貞淑がいかに功労ある愛国闘士のパルチザンであったかを語り始めた。このような一連の出来事は、金正日が秘密裏に選出され、漸次彼の地位が露わになる過程でもあった。他方その間、彼の仕事は別処にあった。

金正日の後継準備作業は、三大革命小組運動であったと言いうる。これは党と国家機関の成員や技術者、青年インテリなどで構成される小グループの運動をいう。彼らは党や国家の高みから指示や訓辞を垂れるのではない。直接現地に降り、仕事をする。思想・技術・文化の三大革命に青年たちの新たな息吹を吹き込み、北朝鮮経済を再生させんとするものであった。この運動は、中国の下放運動や文化大革命のような運動ではない。金日成の在来式の経済発展方法を改造する。そして若者たちの新しい技術で生産をさらに伸ばすべく企図された。かくして中央から地方へと、政府・党の成員そして科学者・技術者・インテリたちが送り込まれたのであった。つまり経済発展を促そうとしたのである。この運動は漸次拡大され、三大革命赤旗争取運動へ発展した。

金正日の果敢なる増産運動は、経済を発展させる希望的側面もあった。しかし就中、この運動を通じ、

自己の政治的立場を強化し、人民のなかに自己の基盤を構築し、後継者の地位を確立するという意味があった。だが、この目論見は成功を見なかった。北朝鮮経済は発展しなかったのである。生産量は下降し始めた。北朝鮮の労働者・農民は金日成治下にも精一杯労働したが、いまや金正日の率いる若者たちが地方に下ってきた。彼らは地方の事情や地方の工場・農場の現実を知らずに、あれこれと指図をする。労働者・農民たちは言った。しからば、汝(なんじ)らがして見せよ、と。かくして、あらゆる生産面で経済が後退した。

金日成はこのような現状を見、三大革命小組の運動方針を批判した。若者たちは工場や農場へ行く。だが、そこで長いあいだ働いてきた大人たちを助け、増産しようとしない。生産を全部背負い込もうとする。そこに問題があるのだといった。労働者たちから学べ。彼らを助け、ともに働け、とたしなめた。また労働者・農民たちも、このような青年たちの監視下で働くのではなく、青年たちに仕事を教え、ともに働くべし、と語った。以後、金正日は、新技術で工場の生産量を高める企図を鞘におさめ、父譲りの労働動員方式を推し進めた。それが七〇日戦闘や技術革命突撃隊運動などである。しかし北朝鮮の経済は、もとのごとく沈滞したままであった。

北朝鮮人民も七〇年代末までには、金日成が自分の息子を後継者に押し立てたことに気づき、熱心に働いた。党や政府でも、金正日を指す「党中央」という語をおさめ、彼を後継者として押し立てた。このような後継者準備作業に反対する人々がいなかったはずはない。当時、金日成・金一に次ぐ権力序列第三位の金東奎は、一朝にして霞のごとく消え失せた。これは金正日が三大革命小組運動に失敗した、

翌一九七七年九月頃のことであった。このとき北朝鮮の公式行事に現れなくなった人々には、党秘書で政治委員だった金仲麟、同じく党秘書で政治委員会候補委員であった楊亨燮、そして李勇武将軍らがある。彼らが金正日後継準備作業に、いかばかり反対したのかは不明である。この後、金仲麟・楊亨燮は再登用され、重要な地位に就いた。金東奎のような指導者は粛清されてしまった。金正日は三大革命小組運動の間に、一九七五年共和国英雄の称号を授与された。彼の後継準備作業が終わりに近づく頃、一九七九年一二月には、今度は自分の父から金日成勲章第一号を授与された。

金正日の後継準備作業は公開されず、秘密裏に推進された。彼が初めて党で働いたときには、文芸系統で党の唯一思想体系をよく知る者としてあった。自己に能力があり、後継者としての資格を有することを明らかにした。しかし党事業を公式に担い、三大革命小組運動を行ったときには失敗したのだと思われる。彼のこのような失策を正したのは金日成だった。金日成がいったん決心し、金正日を後継者として押し立てたからには、誰も彼をその椅子から追い落とすことはできなかった。金東奎は金正日の仕事に不満を抱き、彼を批判したものと思われる。しかし金東奎は消えた。金正日は自己の地位をいっそう確固たるものとしたのであった。

第八章　金正日の党内活動と主体思想

一九八〇年一〇月一〇日から四日間、朝鮮労働党第六回全党大会が開かれた。この大会で、党中央委員会と党の各部署の委員が発表された。このとき、金正日が後継者であることが顕在化したのである。党中央委員会で、金正日は金日成・金一・呉振宇に次いで第四位であった。党秘書局では、金日成総書記に次いで第二位。また党政治局常務委員会でも、金日成・金一・呉振宇に次いで第四位。さらに党の軍事委員会では、金日成・呉振宇に次いで第三位に選出された。朝鮮労働党創党以来、このように多くの党ポストを一度に占めた人物は、他には金日成しかいない。

金正日が党内で父に次ぐ第二の存在として登場するまでには、彼自身の莫大な努力もあった。が、当然父の大きな心づかいもあった。金日成は朝鮮労働党を通して国を統治してきた。ところが、一九七二年一二月に憲法を改定した後、後継者を決定してから、党と政府との関係を再整理したようである。すなわち、党の事業は金正日に任せた。そして金日成の方は国の事業に重きを置く。金正日に、党での確固たる地位を築かせようとしたものと思われる。斯くしたところ、金正日は彼なりにうまくこなしたこともある。だが、失敗したことも多かった。そこで国の重要な事項は、政府で処理していくことにした。そのため、北朝鮮の党と政府の関係は以前と比べ、大きく変わったのである。

このような新たな党と政府の関係は容易に知ることができる。党中央委員会会議は年に二回程度開かれていた。それが一回しか開かれず、反面、政府の最高行政機関である中央人民委員会会議が開催頻度を増した。国の重要な施策は政府の中央人民委員会で決定され、党政治委員会はこれを是認する。その程度の会議しか開かれなくなった。たとえば第二次七カ年経済計画も、本来は党大会で決定し執行されるものであった。しかし党大会も開かれず、最高人民会議で可決され、通過した。党はこれを是認する程度の役割であった。

朝鮮労働党第6回全党大会での金日成．1980年10月

経済計画のみではない。党政治委員会と政府の中央人民委員会の人選や会議開催の頻度、そして金日成の演説にも窺うことができる。最高人民会議は頻りに開催された。しかし、全党大会はほぼ一〇年経って開催された。このようなすべての準備作業は、第六回全党大会が開催され、金正日を高い地位に浮上させることでいったん整理がついたものと思われる。とりわけ第六回全党大会では、政治局を拡大強化したようである。すなわち、党政治局の常務委員会を置き、そこに北朝鮮の最高指導者五名のみを配した。金日成・金一・呉振宇・金正日・李鍾玉である。政治局の正委員は一九名、候補委員には一五名も配した。第六回全党大会、第六期中央委員会は一四五名の正委員と、一〇三名の候

補委員から構成され、軍事委員には一九名が選出された。

このような党機関により、金正日は自己の党内活動を強化した。父に忠誠を尽くし、自己の指導力を確立し、父の思想を継承する。彼は、北朝鮮の次代の指導者として立ち現れたのであった。この後継者選出と指導者の創出には、北朝鮮人民の役割は一つもない。金正日は老い衰えゆく父に代わり、北朝鮮人民を指導すべく父に忠誠を尽くしたのである。自分が父と異なり、北朝鮮人民にいかに奉仕するのか、という話や公約はなかったようである。金日成は北朝鮮人民を半世紀も統治しながら、最後にこう告白した。自分は人民の力なくしては、何事も成し遂げえなかった、と。彼は自分が窮地に陥ったとき、いつも人民の力を借り、再び立ち上がった。自己の八〇歳の誕生日祝賀会においても、自分が人民の愛と信頼を受けていることを誇りに思う、と語った。だが、彼は人民のために何をしたか。それについては明白には語らなかった。

金日成が半世紀も統治してきた北朝鮮人民は、彼の息子を代を継いで奉じることとなった。このような連続性は人民の政治的安定を保障するかもしれない。しかし、彼ら人民がいかほどの恩恵を受けられるものか、疑問である。金日成が人民のために働いたというより、人民が金日成のために働いた。そのように言う方が、より真実に近いのかもしれない。そして金正日が後継者として選ばれた。彼は自分が人民のためにいかなる仕事を為すべきかより、父にいかに忠孝を尽くすべきかをまず考えた。父の思想をどのように人民に新たに注入し、国を治めるか。それがいっそう重要な事柄として浮かび上がったかに思われる。しからば金正日は後継者として公式に認められた後、何に

もっぱら力を注いだのか、調べてみよう。もちろん彼が為した仕事は多い。だが彼の父への忠誠は、彼の後継者としての立場をより確固たるものにする作業でもあった。今一つは、金正日の第六回全党大会以後の党内活動、そして彼の主体思想の発展と理解である。以下、これについて考察してみたい。

1　金正日の忠誠

金正日は巨大記念建造物を建て始めた。それは、父の後継者指名に対する心変わりを懸念してか。あるいは、自己の後継者としての立場をより堅固なものにするためなのか。はたまた、真心から父親の業績を永遠に記念しようとしたのか。はっきりとはしない。彼には、平壌を社会主義的面貌をそなえた首都に作り上げようという目的もあった。だが、人民には何の物質的恵沢もない。象徴的で非生産的な多くの建設を行った。そのなかで、金日成の七〇歳の誕生日を祝うために建てられた主体思想塔と凱旋門は、その好例である。

主体思想塔は巨大な石塔である。金日成の思想を記念するために大同江の畔に建てられた。高さは一七〇メートル。一三〇ヘクタール余りの敷地に建てられた世界一高い石塔である。これは一九七九年三月に金正日が直接指導し、父の七〇歳の誕生日までに完遂させたものである。高さ一五〇メートルの塔身に、高さ二〇メートルの不滅の松明を載せている。石塔は金日成の七〇歳を象徴すべく、七〇の段か

ら成っている。一九一二年四月一五日より一九八二年の同日まで、金日成の生きてきた日数を計算し、二万五五五〇個の花崗岩を積み上げた。この石塔に登ると、平壌の全景を一望の下に見おろすことができる。

凱旋門

凱旋門もやはり、金日成の七〇歳の誕生日を祝うために建てられたものである。一九四五年一〇月一四日、彼は抗日闘争を終えて帰国後、平壌市民を前に演説した。その場所に建てられた。高さ六〇メートル、幅五二・五メートル。花崗岩一万五〇〇〇個で築かれている。彼の七〇歳の誕生日を象徴し、七〇輪の躑躅(つつじ)の彫刻板が、塡め込まれている。また「金日成将軍の歌」の一、二節が門の上、前後に刻まれている。形はフランス、パリの凱旋門同様で、規格はそれよりもさらに大きく建てられた。

これら以外にも、金正日は自己の忠誠心を父に示すため多くのことを行った。道一つ作るにもそれに忠誠通りと名付け、運動場を作れば、それはすなわち金日成競技場であった。金正日はこのような風習を、金日成の還暦時、平壌に建てられた革命博物館と、その前に屹立する高さ二〇メートルの金日成の銅像を見て学んだようである。北朝鮮には数千カ所に及ぶ金日成の大小銅像と史跡碑がある。金正日はこのように、多くの人民の忠誠心を凌駕する忠誠の証を父に示し、後継者の地位を堅固たらしめんとし

たようである。
　このような物質的なもの以外にも様々ある。金正日は一九八〇年代に入ってからは、自己が唯一の後継者であることを党幹部たちに語らせ、父からもそれについての言及が頻繁であることを期待した。金日成は一九八五年六月にも朝鮮統一について語ったが、自分に祖国統一ができなければ、金正日時代になってからでもすると語っていた。そして党内においても、後継者問題に言及した。党が自らの役割を果たすには、後継者問題をきちんと解決しなければならない。朝鮮労働党では、革命偉業の継承問題において、満足のいく解決がなされたと何回か語った。

革命博物館と金日成の銅像

　金正日はまた後継者らしく、北朝鮮社会全般に関し様々な政策演説を行った。職業同盟・保健事業・青年たちの任務・労働行政・体育の大衆化・科学技術発展・教育事業などである。多くの問題をいかに扱うべきか。また、いかなる問題について何を強化すべきか。彼は、それを語った。このような政策演説のなかで、金正日は父と異なり、人民の生活を向上させることについても語った。一九八四年二月一六日、自分の四二歳の誕生日を記念し、人民の生活を向上させようと述べた。そして生活消費品生産工場を視察し、指示した。このような金正日の人民の生活に対する関

心は、人民への特別配給に表れたのみではない。労働者の賃金引き上げなど、一般的な消費経済に重点を置いたものであった。これは、一九八七年からの第三次七カ年経済計画の一重要課題として提示されたようである。

金正日の後継は、父に対する忠誠のみをもって成就するものではない。金正日は人民の生活難を解決しようとする努力も見せた。しかし人民の支持を得て、民主主義的に党と政府の首班となり、国を導かんとする気が強くあったとは思われない。北朝鮮の政治過程は、そのようなものでは到底ない。父の死後、彼が北朝鮮の権力を掌握し国を導くには、自分の息のかかった者たちで朝鮮労働党内部を再整理せねばならない。父の監視と指導下で、このような党内活動は倦むことなく続けられていた。

2 党内活動

朝鮮労働党第六回全党大会が開かれた一九八〇年一〇月より、金日成死去の一九九四年七月まで、約一四年間にわたり、朝鮮労働党は党大会を開かなかった。しかしこの長い期間、党内に変化がなかったわけではない。金正日は党中央委員会を通じ、党指導層を金日成の元老世代から自己の若い世代に替えていった。このような変化は、党中央委員会会議に顕著に現れている。党中央委員会は拡大会議をも含め、平均毎年一ないし二回開催されている。一九九〇年代に入ってからは、毎年一二月に一回全員会議をもった。一九八〇年の全党大会より、金日成死去の一九九四年七月まで、党中央委員会全員会議は全

部で二一回開催されている。そのうち、一九八〇年の全党大会時に開かれた第六期中央委員会第一次全員会議より、一九八二年四月の金日成の七〇歳の誕生日に開かれた第六期第五次全員会議までは、党大会の時に選出された委員と幹部たちで党が運営されてきた。

党大会では中央委員一四五名、候補委員一〇三名が党指導部の幹部として選出された。秘書局では総秘書を含めて一〇名、政治局では常務委員五名、委員一九名、候補委員一五名が選出された。軍事委員は一九名、検閲委員七名、中央検査委員一五名が選出された。権力の世代交替は、死亡したパルチザン元老の座を埋める形で自然と始まった。このとき、金日成の最も近しい戦友のパルチザン崔賢が、金日成の七〇歳の誕生日を迎える四月に死亡した。このような機会を利用し、党最高指導部に変化をもたらしたものと思われる。一九八二年四月に金日成の誕生日をすませた後、その年の八月に第六期中央委員会第六次全員会議が開かれた。そこで崔永林と徐允錫が政治局候補委員から委員に昇進し、全秉鎬と金斗南が政治局候補委員として新たに補塡された。

金正日は一九八三年になると、党の「組織問題」を広範に扱い出した。その年の第六期第七次と第八次全員会議で、政治局ならびに秘書局、そして中央委員会と検査委員会に至るまで、全部で二〇名を交替させた。つづいて、一九八四年には一九名を新たに選出した。一九八五年には党中央委員会会議をまったく開かなかった。一九八六年には秘書局秘書の任命と召還、政治局委員・同候補委員、そして中央委員会委員・同候補委員、検査委員まで含め、およそ七八名に達する党内最高位の人事異動があった。一九八五年と同様、一九八七年には、一年間党中央委員会は開かれなかった。

一九八八年には会議を三度も召集し、五〇名の新たな指導者たちを起用した。金正日はこのような党指導者の交替作業を継続した。一九八九年には八名、一九九〇年には二〇名、一九九一年には一七名、一九九二年には二三名、一九九三年一二月には一九名を登用した。表1と表2に見られるように、このような変化は党中央委員会にとって重要なことである。第六回全党大会時には、中央委員一四五名と候補委員一〇三名、総数二四八名であった。第六期中央委員会の全員会議全体では、それを越える二六一件の人事異動があったのである。

このようなすべての変化は金正日がもたらしたものである。その規模は広範囲で、変化は不規則である。一九九三年一二月以降、一九九五年一二月までの二年間は何の変化もない。会議も開かれなかった。金日成と党の運営方法をこれに比べると、金日成は時宜、必要に応じて中央委員会を開いた。が、ある程度規則的であった。一年に二度ずつ会議を開催し、場合によっては会議を秘密裏に行った。議事は発表しなかったが、会議の日時と回数は発表した。金正日の一九八〇年代と一九九〇年代の党中央委員会運営方法では、自己の必要に応じて、一度ならず二度三度と開いている。必要がないと思えば、一九八五年や一九八七年のように、一度も開かない。

会議を開く方法がどのようであれ、金正日は父の死亡する一九九四年七月までに、朝鮮労働党中央委員会の構成員を、党大会なしにほとんど全部替えた。このような党内活動は、金正日が父の死亡前、既に新進指導者たちによって自己の基盤を確固たるものにしていたことを意味する。そういっても過言ではない。

表1　朝鮮労働党第6期中央委員会全員会議と「組織問題」の取扱い状況

何次会議	年月	「組織問題」で変動のあった党機関	人数
1	1980.10	中央委員会(正委員/候補委員)	145/103
2	1980.12		0
3	1981. 4		0
4	1981.10		0
5	1982. 4		0
6	1982. 8	政治局	4
7	1983. 6	秘書局 中央委員会	6
8	1983.11	政治局 中央委員会 検査委員会	14
9	1984. 7	中央委員会 検査委員会	7
10	1984.12	秘書局 中央委員会 検査委員会	12
11	1986. 2	政治局 秘書局 中央委員会 検査委員会	37
12	1986.12	政治局 秘書局 中央委員会 検査委員会	41
13	1988. 3	政治局 中央委員会 検査委員会	36
14	1988.11	政治局 秘書局 中央委員会 検査委員会	11
15	1988.12	政治局 秘書局 中央委員会	5
16	1989. 6	中央委員会 検査委員会	8
17	1990. 1	秘書局 中央委員会	10
18	1990. 5	政治局 秘書局 中央委員会	11
19	1991.12	(軍総司令官*) 中央委員会	17
20	1992.12	政治局 秘書局 中央委員会 検査委員会	23
21	1993.12	政治局 中央委員会	19
第6次以下の総計			261

＊第19次会議の「軍総司令官」は，金正日が朝鮮人民軍総司令官に任命されたことを示す．

表 2　朝鮮労働党中央委員会の交替状況，第 6 期第 1 次会議から第 21 次会議まで(1980.10-1993.12)

何次会議	政治局			秘書局		中央委員会		検査委員会委員	その他	総計
(年月)	正委員	候補委員	解任	任命	召還	正委員	候補委員			
1　(1980.10)						145	103			248
2　(1980.12)										0
3　(1981. 4)										0
4　(1981.10)										0
5　(1982. 4)										0
6　(1982. 8)	2	2								4
7　(1983. 6)				2	2	2				6
8　(1983.11)	1	3				1	7	2		14
9　(1984. 7)						4	2	1		7
10　(1984.12)				1		3	6	2		12
11　(1986. 2)		2	3	3	3	8	15	2	1	37
12　(1986.12)	2			4	3	13	17	2		41
13　(1988. 3)	1					13	21	1		36
14　(1988.11)	1	1		2		1	5	1		11
15　(1988.12)			1	1	1	1			1	5
16　(1989. 6)						5	2	1		8
17　(1990. 1)				1		1	8			10
18　(1990. 5)	2	3		1	1	1	3			11
19　(1991.12)						8	9			17
20　(1992.12)		2		2		9	9	1		23
21　(1993.12)	1	2				9	7			19
第6次以下の総計	10	15	4	17	10	79	111	13	2	261

金正日の党内人事行政に、さらに立ち入ってみよう。彼は人を中央委員として任命するとき、党の候補委員ではない者を、直接中央委員として任命する。それが二九名にもなる。候補委員から昇進して委員になった者が六三名。新たに候補委員として任命された者は、第六回全党大会当時の候補委員一〇三名を越える、計一一一名の若手たちであった。政治局・秘書局、検閲委員長など、それに労働新聞の主筆まで新人に置き換えた。

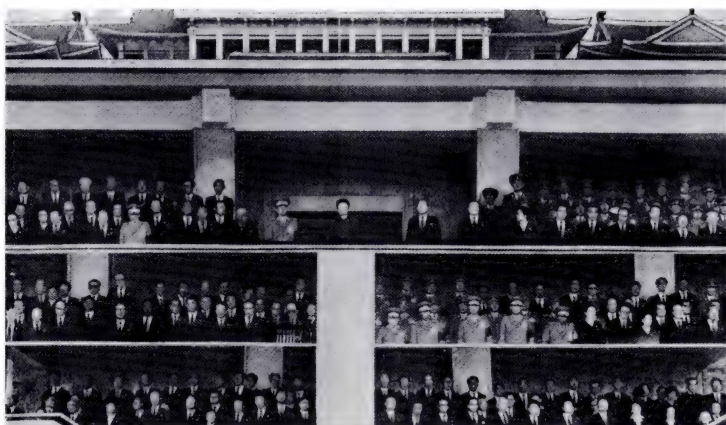
このような党内活動から、金正日は自己の権力基盤を父の世代から自己世代に移し替えることに成功したのだと見ることができる。だが、この党内活動だけでは物足りなかったものか、金正日は一九九一年一二月、党第六期中央委員会第一九次全員会議で朝鮮人民軍総司令官に推戴された。一九九一年一二月に、このようなことをあえて推し進めたのは、金日成が高齢で八〇歳に近づいていたということもある。一九九二年四月二五日は朝鮮人民軍の創軍六〇周年である。すなわち父は八〇歳を迎え、彼が作った朝鮮人民軍も還暦を迎えるというわけである。かくして、この慶賀すべき年を目前に、最高司令官職は金日成から金正日に移譲されることとなった。

このような措置はその当時、憲法に違反することであった。しかし、後にそれを正当化するため憲法を改定した。そもそも朝鮮人民軍創軍記念日も、もとは一九四八年二月八日であった。しかるにいつしか人民軍の伝統は、パルチザンの抗日運動にその起源を有するとされた。かくして、金日成が初めてパルチザン部隊を組織したといわれる、一九三二年四月二五日に変更されたのである。このときから遡って計算すれば、朝鮮人民軍の還暦は一九九二年四月二五日となる。

表3　国家葬儀委員会の構成員

資　　格	充員時期 年　月	総人員(a)	葬儀委員会 抜擢者数(b)	百分比 %(b/a)
中央委員	1980.10	145	80	55
候補委員	同　上	103	53	51
検査委員	同　上	15	5	33
中央委員 又は 候補委員	1983. 6 から 1993.12	190	100	53
そ の 他	同　上		35	

金正日はこのような機会を逃すことなく、最高司令官として軍隊を掌握した。創軍六〇周年を迎える日、自分自身は元帥となった。そして父のパルチザンたち九名には元帥および次帥の称号を授与した。人民武力部長呉振宇は元帥となった。崔光・李乙雪・朱道日・崔仁徳・白鶴林・李斗益・金奉律・金光鎮は次帥に任命された。彼らは金日成のパルチザンの部下たちだった。たとえば高齢の老将朱道日は、一九九四年七月、金日成より先に死亡した。彼らにとって、これは金正日の下で軍を統率する職というより、死ぬ前に最後に与えられた栄誉であった。このような形式的な昇進は表彰にすぎないものであった。が、軍を掌握する方法としては実務的に活用された。金正日は一六名の上将を大将に、二八名の中将を上将に、九六名の少将を中将にした。そしておよそ五二四名の大佐級将校を少将に進級させ、任命した。このような党内活動と軍を掌握する過程で、金正日は父が死去する一、二年前に北朝鮮の後継者としての権力基盤を完全に確保したものと思われる。

金日成が死亡した一九九四年七月、北朝鮮の指導層の人物はほとんど皆、金日成の葬儀委員会名簿に名を連ねた。二七三名で構成されたこの葬儀委員会は、金日成時代に貢献した人物と、金正日世代の新指導者とで成り立っていた。それを表3で見ることができる。一九八〇年一〇月第六回全党大会当時、

金日成の中央追悼会の主席壇.『労働新聞』1994 年 7 月 21 日

中央委員だった一四五名中八〇名がいる。また候補委員一〇三名中五三名が残っていた。当時の検査委員一五名中では五名が葬儀委員であった。このような抜擢者率を見ると、金日成時代に重きを成した中央委員の約半数は死亡したか、あるいは葬儀委員会に参加することができないほどに左遷されてしまった。

これとは反対に、一九八三年六月から一九九三年一二月まで、金正日が新たに任命した中央委員や候補委員一九〇名のうち、一〇〇名が抜擢された。つまり約五三%の新人が選ばれたことになる。この表の、その他三五人の人物には、北朝鮮で重要な地位にはあるが、権力機関である朝鮮労働党と関係のない人々が含まれている。すなわち、天道教青友党代表の柳美英や、国家副主席だが労働党員でない金炳植などがその例である。加えて、まだ中央委員になっていない党員たちがいる。たとえば金日成総合大学総長朴官五、主体科学院長李智秀などが挙げられる。

ちなみに、一九九五年二月に死亡した元帥呉振宇の葬儀

委員を見ると、金日成の葬儀委員二七三名より三三名少ない二四〇名で構成されている。その間に死亡した人物何名かを除いては、国家指導者層に大きな変動はない。これは金日成の死後にも、金正日の指導層には何ら動揺がないということを意味する。

第六回労働党全党大会当時、北朝鮮の最高指導者に選出された党政治局常務委員五名は、金日成・金一・呉振宇・金正日・李鍾玉。そのうち金日成・金一・呉振宇の三名が死亡した。李鍾玉は国家副主席であり、行政府の代表者として働いていた。党には金正日一人が残った。金正日は党内活動により、自己の権力基盤を確固たるものに築き上げたのである。

3 金正日の主体思想

金正日は忠誠を尽くし、父から後継者として認定され、党と軍を掌握した。彼はこのような後継を、思想的に支えようとした。しかし主体思想塔や凱旋門を築くことより、その仕事は容易ではなかった。その思想は、自己の後継を正当化し、父の主体思想を発展させ、自己の政権維持のために使うことができなければならない。もちろん金正日は主体思想を捨てることはできない。この思想をいかに発展させ、次の世代の要求に合致するよう活性化させるか。それが彼の課題であった。

先に主体思想について論じたように、この思想は金日成がソ連や中国の大国主義から離脱し、修正主義や教条主義を退治し、一九六〇年代に北朝鮮の自己路線を求めるのに大きく貢献した思想である。し

かしこのように実用的な思想を、別の目的のために使うのは容易なことではなかった。すなわち、金正日の後継作業や、彼の新たな権力の維持を正当化するものとして、である。

そこで金正日は主体思想について多くを学び、多くの論文を書いた。彼の主体思想関係の論文は一〇編余りにのぼる。彼は、一九七四年から二〇年余り勉強し、論文を発表したのである。

金日成は一九四八年九月、朝鮮民主主義人民共和国が樹立された当時、その政府の指導理念をマルクス・レーニン主義であると憲法に明記した。その後、彼が主体思想を唱えた一九六〇年代が過ぎ去る。そして一九七二年、政府が新しい憲法を制定したときには、マルクス・レーニン主義は一般的な純粋の原理であることが認定された。このような原理を朝鮮の現実に合うように創造的に適用すること、すなわち主体思想こそを、朝鮮労働党は己の活動の指導的指針と見なすに至った。しかし金正日世代になると、マルクス・レーニン主義は憲法から完全に削除されてしまう。一九九二年四月の改憲では、主体思想のみが国の指導理念として残された。マルクス・レーニン主義を、北朝鮮の現実に見合うように、創造的に適用するという文言は削除されてしまった。

このような思想の発展には様々な困難があった。それは金正日の主体思想学習過程であったとも言える。彼は父が作り出した思想の偉大さを、忠誠心により示そうと努力した。だが究極的には、この思想を自己の世代にいかに適用できるか考え続けていたのである。

かくして、金正日は主体思想を一般的な純粋原理に造り上げようと図る。マルクスの思想はマルクス主義。レーニンの思想はレーニン主義。そうであるごとく、金日成の主体思想を金日成主義と呼び始め

た。これは金日成が考え出した主体思想とは異なる語彙である。マルクス主義やレーニン主義を、朝鮮に創造的に適用するのではない。主体思想もマルクス主義やレーニン主義のような純粋な原理だと主張するのである。いわば主体思想を、いつでもどこでも誰にでも適用できる原理に格上げせんとするものであった。これは金正日の父に対する忠誠心から来たものだったのかもしれない。しかし思想的には、正当化しえない主張である。

金正日は一九七四年二月、全国党宣伝員講習会において、全社会を金日成主義化せよと語った。このとき金正日は、主体思想を金日成主義として定式化せよと言った。自分たちの時代は、他の時代とは区別される、新たな主体の時代である。主体時代は人民大衆が自主的に、創造的に歴史を開拓し、自己の運命を切り開いていく時代である。金日成主義は主体時代の要求を反映し登場した、新たな独創的革命思想であり、指導理論であり、指導方法であると語った。彼はさらに、金日成主義はその構成体系が、マルクス・レーニン主義の枠内では解釈できない、独創的な思想であるとした。

このような論理は政策的な要素を帯びたものである。主体哲学の原理とは隔たりがある。その点を注意したものか、あるいはその誤謬に気づいたものか、一九七〇年代後半に至っては、金日成主義という言葉を用いず、主体思想にもどった。金日成主義という言葉の不都合さを悟ったものか。あたかも、彼の三大革命小組運動の失敗と、そこからの多くの学習が、彼をして何かを悟らしめたがごとくであった。そして金正日は、再び主体思想学習の途上にもどった。

一九八二年、金日成の七〇歳記念に、平壌で全国主体思想討論会が開催された。金正日はこのとき、

「主体思想について」という論文を発表した。この論文は主体思想の創始より筆を起こし、その哲学と社会歴史的原理を明らかにし、主体思想の指導的原則について研究したものである。この発表の後、一九八五年には『偉大な主体思想叢書』全一〇巻を刊行した。ここでは、主体思想の哲学的原理・社会歴史原理・指導的原理・民主主義と社会主義革命・共産主義と社会主義建設理論・人間改造論・経済建設理論・文化建設理論・領導体系と領導芸術などが総括されていた。

しかしこのような金正日の努力も、彼の後継を思想的に正当化することはできなかった。これを正当化したのは金正日ではなく、金日成である。一九八六年五月、金日成は金日成高級党学校創立四〇周年記念に当たり、朝鮮労働党建設における歴史的経験について語った。朝鮮労働党が党建設において堅持する基本的原則は、以下のごとし。「第一に、党内に唯一思想体系を打ち立てることであり、第二に、党が大衆と渾然一体を成すことであり、第三に、党建設において継承性を保障することです」(「朝鮮労働党建設の歴史的経験、一九八六年五月三一日」『金日成著作選集』第九巻)と、彼は明確に語った。金日成は続ける。第三の問題で、党の偉業を代を継いで正しく継承して行かなければならない。政治的な首領の後継者問題を正しく解決しなければならない。党事業を正しく継承するには、後継者を押し立てることも重要である。だが、まず彼の領導を実現することのできるよう、組織思想的基礎を固め、領導体系を徹底的に打ち立てねばならない。彼はそう述べた。そして最後に金日成は、「我が党では革命偉業の継承問題は満足のいく解決をみた」と、結論を下したのである。

このような金日成の後継者に対する結論が出され、ようやく金正日は自己の主体思想についての「革

命的首領観」と、主体思想の「革命観」を打ち出すことができるようになった。一九八六年七月、金正日は主体思想教化について講話を行った。一九八七年一〇月には、党中央責任幹部たちに主体の革命観について語った。かくして彼は、自己が用いることのできる主体思想を体系化した。すなわち北朝鮮の独自的な社会主義建設を主張する形で、党の政治路線を総括したのである。

金正日はこの首領観で、革命の主体は首領・党・大衆の統一体だと言う。金正日は一種の有機体国家論を打ち出したのである。「人民大衆は党の領導のもと、首領を中心とし、組織思想的に結束することにより、永生の自主的生命力を帯びた、一つの社会政治的生命体を成すことになる」(「主体思想教養で提起されるいくつかの問題について、一九八六年七月一五日」『勤労者』通巻五四三号)と述べたのである。

この論理は以下のごとし。つまり、「社会政治的生命体」は永遠のものである。だが、これに比して個別的人間の肉体的生命は有限のものである。このような個別的人間の生命は、社会政治的生命体に結束してこそ、永遠たりうるということである。この論理は、既存の個人の自由と平等を無視する。そして革命的義理と同志愛(抗日パルチザンの伝統を踏まえた同志間の義侠心と愛情)で、社会政治的生命体に参加せよという。つまり、永遠の生命体を指導するという首領を中心に、人民が団結すべきであると強調しているのである。

首領もやはり、大衆を離れては首領たりえないという。党も人民を離れては人民の党たりえない。しかし、このような単純な理論より重要なことが背後にある。それは、人民は首領の教示と党の方針に対し、無条件に絶対的に服従せねばならないという一種の強要である。このような論理は宗教的性格を帯

び、首領の独裁政治を支える理論たりうる。

金正日はここから一歩進んで、主体の革命観について論じた。が、これは北朝鮮のごとき主体で、革命をいかに為すべきかという話ではもちろんない。金正日は革命の主体は首領・党・大衆の統一体であると述べた。そうであるからには、革命観を打ち立てんとすれば、首領観・組織観・群衆観から正しく打ち立てねばならなくなる。主体の革命観は、義理と同志愛に始まり、生死苦楽を共にする革命道徳観により、武装しなければならないという言説になる。

金正日の主体思想解釈を見ると、このようになる。主体を唯一の思想として信奉する国には首領がいなくてはならない。首領は社会政治的生命体の最高指導者であり、脳髄である。人民は脳髄たる首領に、無条件に服従しなければならない。またこのような社会では、首領と大衆を繋ぐすべての社会政治的組織は党が領導する。この組織を離れては、誰も首領と繋がることができず、永生する社会政治的生命体の一員たりえない。そのような言説である。

また革命的群衆観では、人民大衆を革命の主人と見、人民の力を信じ、その力に依拠して革命を行わなければならないとする。しかし、このような人民大衆は、党の領導なくしては、自己の威力を発揮できないとしている。党の領導を離れるとき、人民は個人主義的になり、実用主義を試みようとするのだという。さらに主体思想を有する社会の道徳観を語る。そこでは個人の生命より、社会政治的集団の生命の方がより貴重であると見なす。個人の利益より、党と人民の利益の方がより貴重だと考える、という。すなわち、人民は首領・党、そして社会政治的生命体に忠実でなければならない。そうすべきこと

は、法的な義務というよりは、道徳的義務であると主張する。

以上のような金正日の主体思想において、その骨格的な内容は何か？　彼の構想する唯一思想体系によって主体が打ち立てられる。それには首領・党・人民がいなくてはならない。首領が中心になり、党は人民を善導する。首領・党・大衆は義理と同志愛で結合する。かくして一つの永遠の社会政治的生命体を成すというのである。金正日は、このような社会主義社会を指して、ウリ式（「ウリ」は朝鮮語で「自分たち」の意）の社会主義社会だという。このように主体思想を体系化したのだという。

金正日のこのような主体思想の理論的発展は、金日成が初めて案出した主体思想とは、その用途や思想的発展過程が決定的に異なっている。主体思想は、北朝鮮がソ連と中国の修正主義と教条主義から脱し、主体を打ち立て、自主路線を歩まんとして作りだされた一個の政策指針である。これを国内政治に利用し、何事においても自己の手で自己の問題を解決していこうとする。政治では自主、経済では自立、国防では自衛など。みな充分に理解できる問題である。

しかし金正日は、このような思想を純粋な思想とし、金日成主義に仕立て上げんとする。このような思想を、息子が父から権力を承継するために利用する。それは、主体を打ち立てた者のすることではない。より深刻な問題は、このような思想をもって、民主主義でも社会主義でもない不当な政治体制を正当化するところにある。笑うべしと言うほかない。金正日の主体思想の体系化を見ると、それが分かる。これは首領制を作り、父の過去の独裁政治を弁明するために使われる。のみならず、自己の統治に無条件に服従せよという意味がある。党が人民を統制することを思想的に強要する。人民はただ義理と愛に

より、永遠の社会政治的生命体内で個人を殺し、ひたすら奉仕せよということである。

このような永遠の社会政治的生命体とは、宗教的な境地から独裁国家の政治を正当化せんとする思想と見ることができる。このような制度下では、人民には何の権利もなく、無条件に服従しなければならない。党の指導の下に、首領に仕えねばならない。朝鮮労働党は北朝鮮唯一の政治団体として、金正日の独裁政治を支えよという意味である。金正日はどこかの封建社会の領主か、はたまた邪教の教主のごとく、独り自己の領土や信者を統治する。そのような社会、すなわち社会政治的生命体を永遠に率いていくであろう、というわけである。このような金正日の主体思想が彼の統治の指針になっているのでは、北朝鮮は円満な社会に発展することはできない。

金正日の主体思想の解釈方法は、彼が父親の過去の統治を後世に伝えんがために、その長期の統治を主体思想で体系化し説明したものだとすれば、ある程度肯定的に評価することはできる。金日成は自称首領であった。彼の政権維持には労働党が唯一の党として組織された。人民は無条件に服従し、このような服従も義理と愛をもってせよというものだった。北朝鮮を長く統治してきた金日成に、人民が忠誠心を示すことは理解できる。金正日が自分の父親に孝道を尽くすことも理解できる。しかし、主体思想という概念でこれを説明せんとする。そのための体系化は理解し難いことである。

もちろん主体思想によって後継者を選定することは、主体を有する人々のすることではない。金正日は忠孝を尽くし、父から後継者として認定された。彼は将来北朝鮮を統治するとき、このような主体思想を用いて治めるのか。首領と党と人民の団結で、永生の社会政治的生命体のために服務するというこ

とか。それは望ましいことではない。このような主体思想の変態発展は、その限界を越えているように思われる。金正日も金日成の死後、この思想の有用価値を再考することが望ましい。金日成の主体思想はそのままで有用だった。しかし金正日はこの思想の理解を誤り、間違った方向へと発展させたのだと思われる。このような意味で、主体思想は純粋な原理や一般的真理ではない。

主体思想は、他国が朝鮮に対しあれこれと命じたときに力を発揮する。朝鮮のことは朝鮮人の頭で考える。朝鮮人が、朝鮮人のために、朝鮮式に問題を解決していこうという思想である。このような思想を利用し、金日成は北朝鮮の自主路線を求めた。金正日がこのような思想を引き継いだのはよい。しかし彼には、一九六〇年代、金日成の朝鮮に存在したような外国の圧力もなく、あるはずもない。今は世代が変わった。主体思想は、いつの世にも使うことのできる原理ではない。

第九章　金正日と朝鮮の将来

一九九四年七月、金日成は死去した。北朝鮮は今や、彼の息子、金正日に譲られた。後継の準備は既に二〇年余りに及んでいた。そのためか金日成の死後、大きな政治的混乱は起こらなかった。金正日の後継準備作業は、うまく行ったかに思われる。しからば、金正日を指導者として奉じる、北朝鮮人民の将来やいかに？　金正日は父から継承した遺産をどのように管理し、どのように発展させるのか？　父が完遂しえなかった事どもを解決し、父が失敗した事業を成功に導かんとするのだろうか？　また、彼はこのような事を、なしうるに足る人材なのか？　父が遺しおいた党・政府・その他政治社会機関。それらをいかに利用し、かつ発展せしめ、己の達成せんとする目的のために働かせることができるのであろうか？

金正日が父から譲り受けた遺産のなかで、捨てられぬもの、捨ててはならぬ伝統とは何か？　逆に完全に改革し、北朝鮮を少しでも立派な国になしうるところのものとは何なのか？　金正日が独創的に始められるものは何か？　長期の計画よりも、短時日に解決すべき問題は何か？　彼の構想している政治体制とはいかなるものか？　またそれが、新たなる作業により便利であるのは何故か？

このようなあらゆる問題を解決するために、金正日は様々な計画を立てたはずである。そしてそ

れらを何回か変更し、熟慮したことであろう。しかし金正日には、そもそも二つの課題がある。一つは、彼がいかに北朝鮮の政府、朝鮮民主主義人民共和国という国を治めるかという課題。もう一つは自分の世代のうちに、朝鮮民族の根本的な分裂問題にいかにアプローチし、それを解決するかという課題である。

第一の問題は、金正日がどのような人々を登用し、どのような組織と法で、どのように人民に経済的に豊かな暮らしをさせられるかということである。またその間、北朝鮮の軍事・安保問題をいかに解決し、国防を安定させるかという問題でもある。この問題は自分の政権維持と直結する問題である。第二の問題は、朝鮮民族全体の将来を構想する課題である。父の世代においては、戦争で同族の血が流された。その後は各々が相手側を解放しようと躍起になった。彼の世代では、朝鮮民族和合の問題をいかに解決するかという課題となる。

この二つの課題は相互に密接に関連している。ある人は、この二つの課題がその目的において、互いに相反すると思うかもしれない。しかしそうではない。韓国では、金正日の失政、国の滅亡、民族の統一というプロットを描く人がいる。あるいは北朝鮮では、金正日が国をうまく治め、父のできなかった南の統合を成し遂げる可能性を語るかもしれない。しかし私の言は、そのような意味を内包するものではない。金正日の二つの課題は、その目的において相反するものではない。彼が北朝鮮で失政したとしても、北朝鮮が滅びるのではない。金正日が失政すれば、北朝鮮人民は金正日を新たな指導者に取り替える。そして自分たちの政治体制を維持するであろう。彼が除去されて

も、死亡しても、北朝鮮人民が国を挙げて南の懐に飛び込むということはない。また金正日がいかにうまく政治を行おうとも、北朝鮮が自他ともに認める自由で豊かな国になったとしても、大韓民国国民が自己の政府と自分たちの指導者を捨て、金正日サイドに走ることもない。

この二つの課題は、あくまでも金正日が北朝鮮でなすべきことを語っているのである。北朝鮮の新しい指導者として国をうまく治め、立派な国家を作ることが第一の課題である。次に北朝鮮が良くなろうとなるまいと、全朝鮮民族から見ればそれが一個の単独政府であることに変わりはない。それを認めることである。

南北に一つずつ単独政府がある。それらがいくら良い政府を作ろうとも、朝鮮民族全体の要求をことごとく聞き入れてくれるわけではない。そのことを理解しなければならない。民族の統合を構想し、南北が互いに同意し協力し、民族が一つになることが第二の課題である。

金正日がまず為すべきこと。これより数年間、全身全霊を傾けて為すべきことは、もちろん第一の課題の解決である。北朝鮮という国にどのように手を入れ、どのように治めるか。それが急務である。彼の世代の希望と抱負を生かし、朝鮮民族の前途を思い、民族統一の課題を国の大仕事と見なすべきである。しからば金正日指導下の朝鮮半島の将来はいかなるものになるのか？　以下考えてみよう。

1 ウリ式社会主義

ソ連と東欧の社会主義国が崩壊した一九九一年五月、金正日は朝鮮労働党中央委員会責任幹部たちを集め講話を行った。その題目は、「人民大衆中心のウリ式社会主義は必勝不敗である」であった。これは社会主義諸国家が倒れても、北朝鮮で実施されている社会主義は倒れない。人民大衆を中心として行われているウリ式社会主義であるから倒れない、というものだった。

北朝鮮の「ウリ式」(自分たちの方式)の社会主義では、北朝鮮人民がどの程度この制度の中心なのか分からない。しかし金正日のウリ式社会主義の概念は、主体思想を具現する社会主義だという。自主的立場と創造的立場を基本原則として打ち出している。そして、この講話で金正日は、北朝鮮社会主義が崩壊しない理由を幾つか提示した。その内容は北朝鮮の現実からあまりにも乖離した話であった。しかしその理由はどうであれ、北朝鮮の政権が倒れないということは事実である。彼らのいう社会主義が、彼らのやり方で行われている社会主義であることも事実である。

金正日は人民中心の概念を社会主義的民主主義だという。資本主義社会の民主主義はブルジョワ階級が背後で操っている。そのため真の民主主義たりえないという。また社会主義では人権が法的に保障されている。経済生活では私的所有を認めず、社会的所有制度を実施しているという。このような社会主義経済は市場経済ではなく、計画経済である。隷属経済ではなく、自立経済であると述べた。またウリ

式社会主義で再度論じられるのは、首領・党・人民大衆による一心団結の社会主義である、と主張した。
このような金正日の主張は、北朝鮮の実情とはあまりにもかけ離れている。北朝鮮の人民は、国で最も重要な組織である朝鮮労働党の中央委員を、一〇年余りも選出できないでいる。また彼らの社会政治的生命体の脳髄たる首領を、五〇年間ろくに選挙したことがない。このような人民がどこの中心たりうるのだろうか。また北朝鮮式の社会主義的民主主義は、ブルジョワ階級が背後から操ってはいないが、党幹部たちが背後で乱舞している。社会主義的民主主義どころか、自分流の主義・主張が何かも分からない。北朝鮮の人権が憲法で保障されているというのは正しい。しかし法を守らぬ国での人権の保障はいかなる意味もない。飢餓と襤褸の人民には、生産手段の所有権がどこにあるのか、独立した自立経済が市場経済に比べ、いかばかり立派であるかはどうでもよい。金日成が常に言っていた、衣食住問題の解決が急務である。金正日が語る、首領・党・人民の団結した社会政治的生命体で、最も苦労しているのは党や首領ではない。人民であろう。
このようなウリ式社会主義は、韓国の第三・第四共和国(朴正熙政権)時代の軍人たちが、ただの独裁政治を行いつつ、それを韓国式民主主義だと主張したのと類似している。軍人独裁政治を、韓国式に民主主義が土着化したものである云々と言い張ったのである。韓国では非道がまかり通り、非民主主義的な戒厳令が布かれ、人権が蹂躙された。しかし少なくとも経済は発展した。ウリ式社会主義では経済さえ自らの仕掛けた陥穽にはまったのである。
この講話の八カ月後、一九九二年一月、金正日は再び朝鮮労働党中央委員会責任幹部を前に講話を行

った。社会主義諸国家の崩壊から我々は何を学ぶべきか、我が党の総路線とは何かについてであった。これを、「社会主義建設の歴史的教訓と我が党の総路線」と題して語った。この頃は、ソ連と東欧の社会主義諸国が雪崩を打って崩れ去ったときであった。

金正日は東欧の社会主義諸国の崩壊は、人民大衆を中心に据えなかったがゆえに生じたと語った。また、人間改造事業に失敗したがために、経済建設もうまくいかなかった。社会のあらゆる分野が沈滞状態に陥ったのだと診断した。思想的変質は社会主義の没落をもたらす。修正主義・教条主義・事大主義のごとき危険思想が浸透した結果、裏切り者を生んだのだと主張した。もう一つの理由は、党を強化しなかったためである。そこで社会主義に資本主義が染み込み、腐敗の要因となったのだと述べた。社会主義陣営が挫折状態に陥ったわけは、自主性に基づく社会主義国家の国際的連帯性がなかったためだと語った。

この一九九二年一月の講話が、ソ連・東欧諸国家の崩壊原因を、それなりに把握して為されたものなのか否かは知らぬ。ただこれが当時の北朝鮮を、うまく描写していたことだけは確かだと思われる。北朝鮮こそ人民大衆を中心とせず、思想的には社会主義的民主主義を離れている。党は人民の基本的な組織団体というよりは、人民を抑圧する団体として発展した。国際的には社会主義諸国との連帯性を全く失ってしまった。しからば北朝鮮は、このような条件下において何故に崩壊しないのか。それは首領と党が、人民を主体思想で武装したからだというのである。

金正日は父を受け継ぎ、人民を束ねて押し立て、ウリ式社会主義を行うつもりである。彼が打ち出し

た北朝鮮の総路線は、彼の父が提唱した政策である。すなわち、国内的にはウリ式社会主義で完全に闘い抜き、対南政策は自主・平和・民族大団結の三大原則で行う。対外政策は、自主・平和・親善の三大方針で推進しようというのである。このような政策には大きな問題が付きまとう。ウリ式社会主義は人民に忠孝一心（忠孝一致運動）を強要している。しかし為政者は、仁徳政治を行っているというのである。現在北朝鮮では、国内で朝鮮伝統の儒教道徳を活性化させている。仁徳や忠孝というのは道徳面での話である。それは政治概念ではない。ウリ式社会主義のいう人民中心の政治体制とは、金正日が紙の上に描いた論理である。北朝鮮の現実との差異は余りにも大きい。また父が立てた対南政策三原則も二〇年余り使い古され、事を成しえなかった原則である。対外政策も原則はよいかもしれない。しかし、北朝鮮を世界の舞台に押し上げることのできぬ原則である。

2　金正日の課題

金正日の立場は、父の執政当時とは異なる。彼は既に五〇代の半ばにある。将来長期の執政を行おうとも、二〇年余りの期間しかない。金正日には彼の父に与えられたほどの長い時間はないのである。また、彼の所与の条件も父とは異なる。金日成は他の政治グループと競争し、政権を闘い取った。が、金正日は政権を譲り受けた。このように譲られた政権には長所も短所も含まれる。政権は容易に得たが、受け継いだ伝統を維持しなければならず、取り替えることができない。金正日が自分の政権を維持する

には、父の革命伝統や主体思想を変えることができないのである。また、過去五〇年間父が行ってきたことを補完し、その使命を全うしなければならない。過去を否定し、新たに方向を転換するということができない。

金正日が譲り受けた遺産のなかで最も重要なものは、彼が常に口の端にのぼらせる、人民である。北朝鮮の人民は、彼の父が新たな共産主義者に改造して逝った。ゆえに首領に忠誠を誓う。襤褸でも、空腹でもベルトをきつく締め、国を愛し、働く人民である。経済的に貧困にあろうとも、政府の政策に挑戦することのない人民である。彼らは国が法治国家であるよりは、首領が仁徳政治を施すことを願う人々である。このような人々は、首領が自分の息子を後継者とし、指導者にさせても、忠誠を尽くすであろう。

このような条件下で、もちろん金正日は後継者として成功裏に政権を譲り受けた。だが、その後の彼の政権維持は、彼が政治をいかほどうまく運営するか否かに掛かっていると見るべきであろう。いくら従順な人民とはいえ、無能なる暴君であったならば、いつまでも支持することはできない。金正日は今世紀内に、自分が真に人民の指導者たりうることを、彼の政策で立証せねばならない。それを立証するには、政治・思想・法律・経済・外交問題などの様々な分野で、新たなる出発の準備をしなければならない。このような準備の幾つかについてのみ、以下考えてみたい。

第一に北朝鮮の政治を改編しなければならない。金正日は「ウリ式社会主義は必勝不敗である」とい

う論文のなかで、人民と政府の関係は忠誠心と仁徳政治云々であるという。そして宗教的な表現で愛や慈しみなどを語る。しかし彼の後継作業を保障するためには、強力な政治的措置が取られた。彼は父親が死去する前に軍を掌握し、北朝鮮の最高司令官となった。このようなことは、党と政府の最高権威者であった金日成が死亡しても、軍が北朝鮮内の社会的安定を保障しうるということを意味する。このような安定から、かなり以前より計画されていた後継作業が成功裏に導き出されたという論理である。金日成死亡後二年を越えても、継承の法的手続きが踏まれなかった。それでも北朝鮮は軍が社会の安定性を保障するというやり方である。このような措置は、あたかも韓国が戒厳令を布き、政権交代や政権維持の危機を処理したのと、方法としては同じである。

このような側面から見るとき、金正日は思想のみを叫び、理想的な仁徳政治を語る理想主義者ではない。むしろ父と同様の、絶対的な実事求是の実践論者だと言えよう。もちろん金正日の課題は、自己の政治基盤を完璧にすること、すなわち自己の後継や新政策に反対する個人やグループ勢力を、完全に除去する作業であろう。ここで金正日が俄に民主主義政治を行うということは、期待し難いことである。しからば金正日はいかなる人々を引き連れ、いかなる政治構造へと自己の政治基盤を磨き上げるのか？いかなる政治的作業に足を踏み出すのであろうか？

金日成が死亡したときの葬儀委員二七三名が、一九九四年七月時点の北朝鮮の指導層だと言える。この葬儀委員会は序列通り秩序正しく編成されていた。当時の党政治局員・国家副主席・党秘書と各部長・中央人民委員会委員・道党ならびに市党委員長・中央軍事委員会委員・朝鮮人民軍将軍・政務院閣

僚・党中央委員会委員ならびに候補委員・検査委員、そしてその他の指導者たちから構成されていた。この指導者群像は、人民武力部長呉振宇が死亡した翌年も変わらなかった。これらの人々が、父が子に譲り渡した指導者たちである。またこの中には、一九八〇年代の約一〇年間あまり、金正日が党中央委員会に委員として入会させ、昇進させた者たちも多く含まれている。

この葬儀委員会委員には、金正日の新世代といかなる関係もない人々も混じっていた。李志燦・鄭斗煥・金會一・全文燮・金国勲・黄順姫・太炳烈などである。将来、金正日を補佐し、新世代を率いる人々はこのような人たちではない。新たに浮かび上がる若い群像である。たとえ李鍾玉・朴成哲・崔光などの父の世代の人々が残っていても、これらは後継体制を正統化する象徴的な人々にすぎない。実際に働く人々ではない。もちろん金正日の新しい指導者群像は、朝鮮労働党第七回全党大会が開かれ、中央委員会と指導部署の名簿が発表されるまでは正確には分からない。しかし一九八〇年の第六回全党大会の、中央委員会委員の半分以上が、この時までに失脚・格下げ・引退で去っていた。逆に一度も中央委員会委員や候補委員に選出されたことのない人々が、この葬儀委員会の最も大きな部分を占めていた。とくにこのような新進の者たちの中で、葬儀委員会の序列一〇〇位以内に入っている者が二三名にもなる。そのなかで、崔泰福・洪錫亨・金福信・朴南基・金敬姫などは五〇位以内に入っていた。

金正日の指導者群像は、旧世代から新世代へと確実に変化している。人民武力部長呉振宇の死後、その後任に崔光を任命するなどのことは、臨時的な措置である。究極的には若い世代の人々に、みな入れ

替わるものと思われる。金正日は父の世代の指導者たちを漸次入れ替える。一斉に退陣させるようなことはしないであろう。彼らは象徴的な地位に留まるはずである。

金正日は党の位置を、もう少し強く押し立てるであろう。彼の権力維持のためにもそうするはずである。彼の父が一九七〇年代、彼を党で働かせ訓練させるときに、党と政府との関係を替えて政府の役割を強化した。彼はこれを再整理し、朝鮮労働党の位置を高めるであろう。その目的は党と政府との関係のみにあるのではない。金正日が党の総秘書職に昇り、国家主席職を他の誰かに与え、集体的指導方法を適用するときにも有用な措置である。彼は北朝鮮の最高指導者として、父のように党・政・軍を名実ともに掌握せずとも、人民の首領として安泰に過ごせると思われる。政府の首班を数年ごとに交替させる。そして金正日は党と軍を掌握し、権力の最高執権者たりうる。集体的指導方法の有利な点はそこにある。このような方法を採用すれば、党と政府機関を大幅に変更し、再組織する必要はないであろう。

金正日は自己が最高執権者として登場するとき、このような幾つかの変化をもたらし、新進の指導者たちに実務権限を与える。元老たちは象徴的な地位に置く。そして党を強化し、自分が党総秘書となり、政府は朝鮮労働党の政策執行機構として集体的指導方法に任せる。かくして新たな国を治めるのが望ましいと思われる。

金正日の新たな出発準備の第二は、指導思想の問題を解決しなければならないということである。これは主体思想を破棄せよというのではない。主体思想は、金日成時代に有用に使われた思想である。金

正日の時代に入っても、有用に用いることのできる思想である。しかしこの思想の有用度は次第に下落していく。もちろん北朝鮮は自主性を高め、独立した主体を打ち立て、生きていくべきである。しかし金正日は自己の後継と執権のために、主体思想を主体思想らしからぬものに発展せしめた。

彼が語るウリ式社会主義や首領論・忠孝一心・仁徳政治・永生の社会政治的生命体云々は、主体思想と関係希薄な論理である。このような論の展開は主体思想から生じたというよりは、父子継承を正当化し、独裁政治を継続せんとする論理に近いと見る。資本主義は悪であり、社会主義のみが無産者のためのものであるとの論は、いまや信憑性を失った論理である。金日成が主体を打ち立てたのは、東西冷戦と朝鮮戦争、そして中ソ紛争に起因する。今日、社会主義陣営が崩壊し、ソ連もなくなった。このような世の中で、なおも昔日の自主性を求めるのは、二一世紀の朝鮮人には相応しくないことである。主体を捨てることなく、金正日は自己が用いることのできる思想指針を考案し、二一世紀の朝鮮政治に合致させるべく、それを用いることが望ましい。

金正日は主体思想を論じつつ、人民大衆中心のウリ式社会主義云々、人民のための永遠の社会政治的生命体云々という。そして北朝鮮人民が、あたかも真に主権を有するかのごとく語る。金日成時代にも、金日成は自分は生涯人民のために奉仕したいといい、人民に愛されることを好んだ。金正日は父とは異なり、真に人民のために働かねばならない。北朝鮮では人民が最も哀れである。

北朝鮮人民は自己の生涯を労働動員生活で送り、衣食住問題を辛うじて解決しうるや否やの線上で、

世界一の首領を五〇年間も奉った。そしてこれより二一世紀に入り、代を継いで親愛なる指導者に仕えよといわれる。北朝鮮人民はひだるい。彼らは政治的自由を剝奪されている。のみならず、いまや労働する気力さえ失っている。彼らには金正日に対し反抗する自由も力もない。このような北朝鮮人民のことを、金正日は主体性と自主性を堅持する人民だという。彼らのために金正日は服務し、彼らは「ウリ式」の社会主義体制内で生きているという。このような実情を、金正日は改めねばならないと思う。

金正日は新たに執権しつつも、北朝鮮の現実を冷静に把握しなければならない。人民の愛や忠誠を求めることなく、主体思想を用いず、人民のために働くべきである。その時点では主体思想も必要ない。資本主義も必要ない。朝鮮は南北に分かれているため、南北の人民は容易に比較しうる。金正日は北朝鮮人民の生活水準を高めねばならない。南の労働者は生産手段もなく、搾取されていると彼はいう。北の労働者の生活水準を、そのような南の労働者ほどに高めてから、彼は思想の問題を論ずればよい。主体思想は二一世紀には、さらに必要のない思想になるであろう。北朝鮮や朝鮮民族にとって、関連希薄な思想になるだろう。北朝鮮を政治的にも思想的にも脅迫する国々がなくなってしまったからである。ゆえに、この思想自体にも変化が訪れねばならない。

第三には、北朝鮮の経済問題を解決しなければならない。金日成死亡前後の北朝鮮の経済問題については、誰の説明も要らない。世間がみな知っている事実である。一九九五年の水害により、民生の塗炭は極度に達した。穀物の救援を受け入れざるをえぬほどに悪化した。しかしこのような経済難は、近年

突如として生じたものではない。ことごとく水害に起因するものでもない。この経済難は長い歳月をかけて形作られたものである。すなわち主体思想の自主経済を唱えつつ、貧しい第三世界の国々とのみ交易した。そして人民の経済生活を、衣食住問題の解決という線上に放置し続けたがゆえに生じたのである。

金正日は、金日成の過去の経済発展の方向を根本的に転換しなければならないだろう。朝鮮労働党中央委員会が最後に開かれた、一九九三年一二月の第二一次全員会議で、姜成山が、北朝鮮の経済は発展の速度と均衡を失っている、第三次七カ年経済計画は失敗したと報告した。この時この計画の完遂期を三年延長し、一九九六年完了とした。また彼は、この期間における農業第一主義・軽工業第一主義・貿易第一主義の方針を打ち出した。北朝鮮の経済難は、在来式の経済発展方式では回復しえない。軍人・兵士を動員し、毎年二〇〇日戦闘や速度戦などの人海戦術を繰り返していたのでは、経済の沈滞から抜け出すことはできないであろう。

金正日は経済発展の目標から変えねばならない。衣食住問題はもちろんのことである。しかしそれ以上に、資本誘致を考えるべきである。先端技術を利用し、北朝鮮の物が世界市場で競争しうるように、国の経済政策を根本的に変えねばならない。もちろん一朝にして叶うことではない。一日も早く開始されなければならないということである。金正日の経済事業は政務院で行われるべきであろう。金日成治下では、党が主となり経済発展事業を推進した。これは党が人民の愛国心に訴え、たとえ労賃は安くとも、労働力を惜しまず捧げよという政治事業の要請に因るものであった。将来、金正日は経済問題は経

済問題として解決すべきである。政治的に解決しないことが賢明である。
経済問題を経済的に解決するには、経済をよく知らぬ党幹部たちを、経済問題に関与させないことである。政務院で、あらゆる分野の経済官僚たちに任せるべきである。そして彼らに経済発展をさせ、行政府に責任を負わせるのが妥当である。かくすれば、党の政治的スローガンで人民たちに、「世界に羨むものなし」などと叫ばせずにすむ。経済的に、人民が自ら祖国を好み、世界に羨むものがないというようになるのが正しいと思われる。このように経済発展するには、行政府に責任を負わせ、行政府が担いきれなかったときには国家主席や国務総理、経済担当相級の者たちを入れ替える。さすればより良い人材が求められる。このような面でも、集体的指導方法が新政府ではいっそう望ましいのである。
北朝鮮では既に、日本海に油田があり、外国と共同で開発しようといっている。このような共同開発は、開発国が社会主義国であろうと、資本主義国であろうと意に介せず、原油発掘技術のある国と手を結ばねばならない。また近年に至り、北朝鮮は羅津と先鋒を自由経済貿易地帯に選定した。そして他国の資本を誘致せんと努力している。このような努力も、実際に資本を有する資本主義諸国を誘致するのがいっそう望ましい。
金正日はいかなる手段と方法を用いようとも、北朝鮮の経済を再興しなければならない。主義・主張を越えて、首領・党・人民が皆、経済発展に努めねばならぬ。二一世紀は、某が某を抑え付け、某が某の領土を侵害する時代ではない。大国主義や修正主義を論ずる時代ではないのである。ある国の個人所得はいかばかりか、その国の先端技術はどの程度のものか、そして人民は働き、残余の時間をどのよう

な運動や遊興に費やすのか、それを論じる時代である。いくら自立経済を唱えようと、衣食住問題を解決すべき線上に喘ぐ民族。その民族がいくら主義・主張を声高に叫ぼうと、耳を傾ける人はいない。
北朝鮮はいかなる国と経済交流をしようとも、その国の思想的動向より、それが北朝鮮経済をどのように発展させてくれるかに重点を置くべきである。北朝鮮の人々は、長いあいだ自分たちが資本主義国家から被害を受けてきたという先入観をもっている。もちろん、社会主義国に対してもそうである。ゆえに自主性を強調し、排他的態度を育ててきた。二一世紀はそのような世紀ではない。主義・主張や思想の好悪を問わず、あらゆる人々が手を取り合って働き、よりよい暮らしを志向する。このようなときに、北朝鮮の人々が国際社会に貢献すべきことがあるはずだ。自主性を強調することはよい。だが国際社会の救済対象国になってはならない。金正日は自分の父からたいそう貧しい国を引き継いだ。その最大の課題は、北朝鮮人民の経済生活を向上させ、国を経済発展させることである。

新たな出帆の第四は、外交を革新させることである。金日成は朝鮮労働党第六回全党大会で、北朝鮮外交の三大政策を打ち出した。すなわち、それは自主・親善・平和を基本理念とするものである。この三大政策には何も問題はない。しかし原則のみでは、多様な外交問題を解決することは難しい。北朝鮮外交は、かつて一方的に社会主義陣営に片寄っていた。それが六〇年代の半ばに至り、はじめて自主路線を求めた。中国やソ連から独り立ちし、第三世界にそれを求めた。しかしそのような外交は、過去の発展過程において、不可避的なものであったにすぎない。これからは、世界の先端技術を有し、発展す

る資本主義産業諸国家と外交を持つべきである。世界の総生産額の九〇％以上を占める彼らとの関係樹立が望ましい。二一世紀を発展する国々とともに生き抜くならば、このような外交は必須である。実際このような外交接触は、もう始まっていなければならない。社会主義陣営が崩壊した後では、既に遅きに失した感がある。

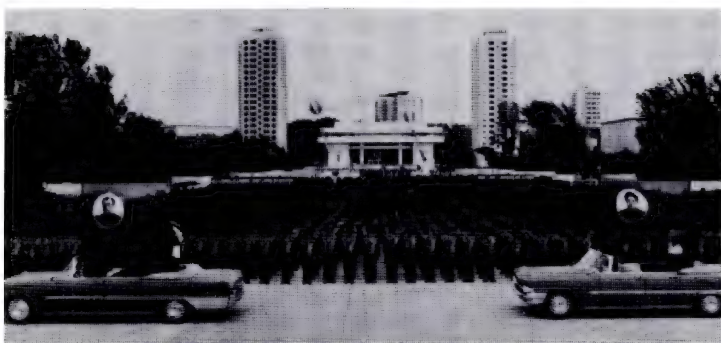
社会主義ならびに資本主義陣営が政治的に分裂し、経済的に競争する時代は終わった。どちらが勝ち、どちらが負けたのか、どちらの主義・主張が正しく、どちらが間違っていたのか、このような競争はもはやなくなった。今日、「ウリ式社会主義」がどんなに正しく、思想論理的に完璧な原理であろうとも、誰も関心を寄せない。今の世の人々は、みなよい暮らしを求めている。そのようなときに襤褸と飢えに苛まれ、他国の援助を受ける立場にある。そこで自国の社会主義は一番優秀だと唱えたとて、何の甲斐があろう。世はまさに二一世紀に入りつつある。二一世紀の世界には新たな秩序が打ち立てられるであろう。このようなときに北朝鮮は、自己の優秀性や自主性の正しさのみを主張せず、北朝鮮の経済発展や国際関係に有益だと思われれば、いかなる国とも外交すべきである。

もちろんこのような外交も、自主・親善・平和の原則で、その内容を豊かにすることができる。問題は外交原則にのみこだわらないことである。北朝鮮の国益の助けになれば、そのような国々と外交し国交を結べということである。金日成の死去前、一九九〇年代はじめに、北朝鮮は日本・米国と国交を結ぶべく打診を試みたことがあった。しかしこれは、自己の同盟国であるソ連・中国が韓国と国交を正常化した後であったため、問題が入り組んでしまった。反共感情のあれほど強い韓国も、共産国家のソ連

や中国と国交を樹立し、貿易し金を稼いだ。たとえ北朝鮮が純粋の社会主義国で、日本や米国が腐敗した資本主義国であろうとも、国交を結び交易を図ることは金正日の使命である。

金正日は西側資本主義諸国と国交を樹立し、貿易すべきであろう。米国や日本はもちろん、英国・カナダ・フランス・ドイツ・イタリアなどの資本主義諸国と交易し、親善を図らねばならない。近年の日本・米国との外交交渉で、北朝鮮にはそれがたやすくないことが初めてわかるようになった。それまで北朝鮮は、彼らの称する腐敗した資本主義国と親交を持たなかったが、自分たちがいったん交流を決めれば、問題ないと思った。それまで彼らは、マルクスや金日成の教えたように、米国などの資本主義諸国は北朝鮮を経済的に搾取し、政治的に植民地化すると思い込んでいたのだ。現代資本主義を知らないということもあるが、米国という国を全く理解できずにいるのである。

金正日時代の外交には革新的な改革が必要である。北朝鮮が発展した資本主義国と国交を樹立するには、その突破口を米国より日本に求めなければならない。米国は全世界の指導的立場にある国である。米国にとって北朝鮮という国は、さして重要な位置にある国ではない。朝鮮戦争時のように韓国の存在を脅かし、核兵器を作って日本の国防を再考させ、国際的に国家テロを行えば問題である。それを懼(おそ)れ警戒するのみである。その他に北朝鮮という国は、米国といかなる関係もないと思われる。このような米国の立場は、北朝鮮人民を驚愕せしめるだろう。しかしこれは事実である。北朝鮮が米国と俄に国交を結ばんとしても、米国が北朝鮮を助ける理由はない。米国と韓国との関係は、過去五〇年間軍事同盟関係であったため、密接なる友好関係を維持してきた。米国は北朝鮮との関係でも、韓国との関係継続

を維持するであろう。この関係に害を及ぼすことはしないはずである。
韓国が中国・ソ連と国交を正常化させたとき、中国もソ連も韓国から経済的な恩恵を受ければ、国益に利すると判断し国交を樹立したのであった。米国が北朝鮮から得るものがあるとは思われない。あったとしても、それは米国の国益に充てるに急務ではない。だが、日本の立場は若干異なる。日本は地理的にも北朝鮮に近い国である。また朝鮮は日本にとって過去の植民地でもある。時に、日本の漁船は北朝鮮に拿捕される。北朝鮮の男子と結婚し、北朝鮮に住む日本女性もたくさんいる。また日本には、北朝鮮を支持する団体もある。この団体の指導下に生きる在日朝鮮人も少なくない。なによりも、日本は北朝鮮と共に東アジアの一国家である。米国より遥かに近い関係を有する国である。北朝鮮の核兵器が米国を脅かすことはありえない。しかし日本には莫大な影響力を及ぼす。
北朝鮮が日本と国交を正常化すれば、日本は過去に朝鮮を植民地化した賠償を支払うであろう。日本が交易を開始すれば、北朝鮮の経済の助けになる。のみならず、他の産業国家にも朝鮮を紹介することができる。友邦国として、産業技術や貿易でも多くの助けを得ることができる。金日成はかつて独立運動のため、日本にあらがい、そして戦った。ゆえに、彼の日本に対する否定的な感情は理解できる。しかし金正日時代では、日本に対する態度を変えるべきである。日本帝国主義、そういわれた時代の残滓は今の日本に残ってはいても、全体から見てごく少数である。それは現代日本の主流たりえない。日本は変わったが、北朝鮮は変わらないままである。それが将来日本の主人公になる新世代の青年たちに、よくない印象を与えている。以上のような点で、金正日時代には北朝鮮の外交を革新し、新たな世界秩

朝鮮人民軍陸海空軍の将兵たち.「朝鮮戦争勝利」42周年集会にて.
『労働新聞』1995年7月27日

序中の一員として、世界のあらゆる国と交易し国益を求めるべきであろう。

五番目は北朝鮮の軍事問題である。北朝鮮の軍隊は、金正日の権力継承を保障した。そして、金日成の死後から金正日が党と政府機関の職位を占めるまで、北朝鮮の秩序と国防、そして人民の治安を担ってきた重要なる機関である。また朝鮮人民軍は、金日成の抗日闘争の伝統を受け継ぎ、朝鮮戦争を遂行した人民の軍隊である。一九九二年四月の朝鮮民主主義人民共和国憲法の改定は、とくに北朝鮮の軍の役割を重視するものであった。また北朝鮮の軍隊は人口比で見れば、世界屈指の大軍隊である。

北朝鮮の軍部には二つの大きな使命がある。一つは、国を外国勢力から防衛する国防の役割。もう一つは、人民に金日成・金正日と続く指導を支持せしむるよう、国内の政治体制を維持する役割である。朝鮮戦争の後、東西冷戦が甚だしくなり、南北の軍が現代的装備化の問題で競争した際、北朝鮮の軍隊は多くの貢献を為した。しかしこのような国際的な東西対立は、ソ連の崩壊で霧

消した。朝鮮半島ではなおも南北が軍事的に対立しているが、金正日時代ではこれを直さねばならない。軍の国内的役割も、金正日の指導体制が確立し、人民が彼を支持したときには漸次減少させるべきである。

金正日は父の時代とは異なる安保体制を作り出さなければならない。北朝鮮の軍部が現在担っている国防の役割を捨てよというのではない。父の時代には国防を自衛といい、韓国と競争しつつ、ソ連から精鋭なる新兵器を買い入れ、国防を強化していた。しかしこのような南北の武器の現代的装備化競争は終わった。先端技術による精鋭なる新兵器の保有者である資本主義諸国家が、北朝鮮にそれらを売ることはない。のみならず、北朝鮮には、もはやそれらを導入する財政的余裕もない。また導入する必要もない。米国を含む世界の人々は皆、北朝鮮が南を再度侵略し、ふたたび朝鮮に戦争を惹き起こすことを憂慮するのみである。米国や日本が北朝鮮に雪崩込む準備をしているわけがない。

いわば、朝鮮半島をめぐる軍事・安保環境が変化したということなのである。東西対決は終わった。北朝鮮に祖国を武力で統一する意図がないならば、北朝鮮の軍隊は大きすぎる。軍を縮小し、軍備を減らし、軍隊を経済建設に動員するのでなく、軍人を除隊させる。そして立派な労働者・技術者を養成することが望ましいだろう。今日、北朝鮮で経済が不振である大きな理由の一つには、軍隊を維持し経営する費用が掛かりすぎるということが挙げられる。

このような軍備の現代的装備化を継続するため、核兵器の開発を試みたのかもしれない。しかし二一世紀の金正日時代では、北朝鮮のような小国に核兵器は必要ない。金正日時代の北朝鮮には、経済発展

が急務である。民族和合は長期の目的であり、核兵器製造はこの目的にそぐわない。北朝鮮は核兵器を過去に作ったこともなく、今も作らない。将来も作らないであろうと、今日語っている。彼らは自己の核兵器開発事業を発電用であると言い繕っている。しかし、米国・日本・韓国は、北朝鮮のこのような核兵器開発を中止させるために、KEDO(The Korean Peninsula Energy Development Organization〔朝鮮半島エネルギー開発機構〕)という組織を作り、経済援助を行っている。

金正日時代にはこのような疑惑を解き、軍事問題は軍事問題として、経済問題は経済問題として解決しなければならない。金正日は、もちろん国の国防を保障すべきである。それには新たな軍事協定を結び、二一世紀の防衛体制に適応することが望ましい。軍事問題や新兵器の問題を経済援助に結びつけたり、軍人を労働者として動員することは、金正日自身が見直すべき問題である。たとえKEDOの軽水炉が北朝鮮に建設され電力を供給しようとも、これは北朝鮮の国防問題を解決することにはならない。米国・日本・韓国は北朝鮮に軽水炉を作ってやることで、北朝鮮に核兵器製造を中止させるという軍事目的を達成した。しかしこれも北朝鮮の軍事問題を解決したことにはならない。

北朝鮮の国防はソ連や中国に多くを依存してきた。これらの同盟国が無力になったとき、金日成は我々の力で自衛しようと叫んだ。武器は悪くとも、精神さえしっかりと保てば勝てるのだと意地を張った。このような国防政策は根本的に見直すべきである。金正日は二一世紀の世界秩序を勉強し、このような過去の同盟国関係で国防問題を解決する方法を再考しなければならない。世界の思潮に逆行せずに、国を守る方法を考究すべきである。このような側面から見て、北朝鮮の核兵器というものは考えられな

い。

最後に、金正日の指導力と指導方法についての問題である。金正日が主体思想を発展させ、北朝鮮社会を永遠の社会政治的生命体だと規定したことは既に述べた。ここでは首領・党・人民が合体し、個々人の限られた生命を越えた、永生する社会が構築されたという。かく言う首領とは、金日成のことであり、金正日ではない。この首領が最高指導者という意味ならば、さして大きな問題ではない〔金正日も最高指導者だからである〕。だが、金日成が死すれば、金正日が金日成のごとく首領となるというのであれば、それは問題である。

金日成は長い歳月をかけて北朝鮮を治め、国家主席にも就任し、党総秘書としても働いた。国の最高司令官として戦争も行った。そして彼は、毛沢東を中国人たちの首領と呼び、スターリンをソ連人たちの首領と呼んだ。スターリンや毛沢東の死後に登場した、ソ連や中国の指導者たちを首領とは呼ばなかった。首領とは認定される称号であり、任命されるポストではない。金正日が首領となるには、北朝鮮人民のために奉仕し、そのような称号を受けるに足る働きをしなければならない。そのような功績もなく、そのまま代を継いで首領となることはできない。父の死後二年を過ぎても、北朝鮮人民が彼を金正日首領と呼ばないことが、そのよい証左である。

金日成死後、北朝鮮社会は首領なき永遠の社会政治的生命体となった。このような解釈にも問題がある。だが、北朝鮮式社会主義はさらに多くの問題を胚胎している。このような問題と混乱を防ぐために

も、金正日は社会的称号と法的職位を区別しなければならない。北朝鮮を法治国家にしなければならない。金正日時代の北朝鮮は適宜選挙を行い、憲法と党規約を守るべきである。ただ首領に盲目的に従うのではなく、党総書記であれば党規約に制定されたように適宜選出され、国家主席であれば憲法に則り、人民の意向を反映する選挙で任命されなければならない。代を継ぐのではなく、法によって選出され、任期の期間のみ務める。そのような法治国家を作り上げるべきである。

北朝鮮人民に忠孝を要求するのではなく、彼らに労働の代価を適時支払うこと。それが金正日の為すべき指導方法であろう。仁徳政治よりも、法治国家を作ること。人民や党や首領が法を遵守する国を作ること。それこそ金正日の課題である。金日成の死後、北朝鮮では万事が麻痺状態に陥ってしまった。党には総書記もいない。国家には主席もいない。党は一五年以上党大会を開かず、党中央委員会も二年以上会議を召集していない。最高人民会議も六年を越え、代議員選挙を行っていない。ただ一つ、金正日が国防委員会委員長資格で、朝鮮人民軍の総司令官として、軍人と共に国を治めているだけである。しからば戒厳令を布き、国を統治しなければならない。金正日の課題は山積している。しかし少なくともこのような問題は改革し、金正日時代を創出すべきである。

3　金正日と民族和合

金正日にとっては、自己の権力基盤を確立し、北朝鮮をうまく治めていくことが急務である。しかし

また、北朝鮮の指導者としての彼の最重要課題は、分断された民族をいかに統合するかという問題である。この問題のアプローチでは、金正日は父の世代がしてきたことを、自己の世代で繰り返してはならない。金日成が北朝鮮に単独政府を樹立したときには、この政府が全朝鮮人民の唯一の政府であると主張した。その領土は白頭山から済州島の漢拏山に至るまでだという。また北朝鮮に建てられた政府のみが正統性を有する政府であると、彼は主張した。そして南の単独政府を認めなかった。

このような立場から金日成は戦争を起こした。民族解放戦線を組織し、韓国に樹立された政府を除去し、国を統一しようと半世紀間、韓国に対し強硬政策を取った。自他共に認めるように、このような統一政策は成功しなかった。金正日は父の統一政策の失敗を認め、この政策に根本的な変化をもたらすべきである。金日成が提案した民族統一の三大原則、すなわち自主・平和・民族和合には何の問題もない。これは南北の七・四共同声明の基本となった。しかし金日成はこのような原理を打ち立てつつ、実際には米軍を撤収させんとし、韓国軍の現代的装備化を阻み、韓国の反政府運動勢力を強化しようとした。金日成の統一政策は終始一貫、韓国政府を打ち倒し、自分が樹立した単独政府を朝鮮の唯一の政府にしようとするものだった。このような政策は、北朝鮮人民の支持は得たかもしれない。だが、民族の三分の二を占める韓国国民の支持は得られなかった。もちろん統一もできなかった。

金正日はこのような民族統一政策を根本的に変えるべきであろう。新世代の指導者は、南であれ北であれ、三八度線の両側に建てられた政府が単独政府であることを是認すべきである。これらの単独政府は当時の事情により、正常な民族政府を設立できなかった。その関係で、臨時に立てられた政府であっ

た。朝鮮戦争の後は、三八度線の代わりに休戦ラインの両側に南北の政府が存続した。そして相変らず自分たちの政府が唯一の政府であると自認した。その後は、他方の政府がやがては崩壊し、自己の政府が真に朝鮮人を代表する国となると主張し、応酬を繰り返したのである。

金正日は戦争を惹起したことのない世代を代表し、このような思考様式を根本的に見直すべきである。南北どちらの政府も全朝鮮民族にとっては、なお単独政府にすぎないことを再認識する必要がある。このような単独政府は両者共に立派な政府となることが重要である。どちらか一方でも、全朝鮮民族を代表するに足る政府となることが望ましい。しかしこの二つの政府は、同時に朝鮮民族の和合の障害になりうるということを認めねばならない。とくにこの二つの政府は、朝鮮戦争を遂行した世代が指導してきたため、競争的で排他的な伝統が濃厚である。このような敵対心を助長するのではなく、根絶しなければならない。

金日成時代には「米帝」を南から追い出し、民族を解放し、統一しようとした。これは根本的に誤った考え方であった。南にいる朝鮮民族は、「米帝」に圧迫され嘆きつつ暮らしているわけではない。また、彼らがたとえ「米帝」から解放されたとしても、社会主義を主張する北の国には行かない。北朝鮮は外圧勢力がないのだといわれても、南の人民は欣喜雀躍(きんきじゃくやく)し北に跳んで行ったりはしない。朝鮮民族の和合は力で強要して成るものではないのである。

金正日時代には、南と北が分断の原因と歴史をよく理解すべきである。そして民族の和合と統一のために、両側の単独政府を解き放つ準備をしなければならない。その方法としては、一方が他方を屈服さ

せるより、双方が穏やかに説得し合い、和合を図ることがいっそう望ましい。このような統一を実現するには、一方が滅び他方が呑み込む形より、双方が合意する方がよいのである。一方の政府を基準にし、他方の政府をそれに適応させるより、双方が優れた点を互いに学び合い、やがて一つになる方がより道理に適っている。実際、両者はともに長い歳月を分裂状態で過ごしてきた。ゆえに、現時点ではこの問題を早急に解決しようとはせずに、漸次接近することが望ましい。民族の和合がなければ、統一の可能性はない。統一への道は前途遼遠なのである。

しからばこの民族和合の道とは、いかなるものか？　このような民族和合のためには、どのような政策を用い、何を為すべきか？　ここでは、北朝鮮が金正日体制の下で為しうる幾つかの政策について考究してみよう。もっともこのような構想は、金正日が後継者として成功し国の実権を握り、北朝鮮が発展の軌道に乗ることを前提としての話である。すでに言及したように、金正日にとっては、北朝鮮における自己の政権基盤を完璧なものにし、実権を掌握することが第一の急務である。北朝鮮に政治的混乱があるとすれば、民族和合はその分だけ遅れることになるだろう。民族統合の問題には、じっくりと取り組むことが望ましい。

南北の民族が和合するには、まず第一に互いが相手のことを知らねばならない。今のところ、南には北側の足りない点や悪い点しか見えぬ。また北には南側の宜(よろ)しからぬところしか分からない。互いに知らぬ間柄である。このような目的を達成するには、南北の単独政府は互いを独立の政府と認め、国交を

締結しなければならない。すなわち朝鮮民主主義人民共和国は大韓民国を、大韓民国は朝鮮民主主義人民共和国を国家と認め、国交を結ぶということである。このような提案には賛否両論、様々な意見がありうるだろう。だが、これが現実である。

韓国や北朝鮮が世界のあらゆる国と国交を結ぶとき、その当事国は大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国を、まず国家として認定し、国交を正常化するだろう。しからば韓国と北朝鮮は、互いに同族でありながら、相手を認定しないということがあろうか。ソ連や中国が韓国と国交を樹立したとき、彼らは朝鮮半島に二つの国を認定し国交を結んだ。また現在、北朝鮮は米国や日本と国交を正常化せんとしているが、これは米国と日本に朝鮮半島に二つの国家が存在することを認めよということなのである。南北が互いを認めないということは、自分は相手を認めない、しかし相手は自分を認めよと言っているのも同然なのである。自分がしないことを、なぜ他国にさせようとするのか。南北がしようとしないことを、世界の一〇〇カ国余りでは既にしている。すなわち南北をともに独立国家であると認定し、国交を樹立した国は一〇〇カ国を越える。近年、国際機構の国連も南北を二つの国として受け入れ、国連傘下にあるすべての特別国際機構が南北を二つの国と認定している。これは朝鮮民族自身のことである。しかるに、朝鮮民族はこのような厳然たる現実に直面しつつも解決を拒み、何故そっぽを向いているのだろうか。

このような提案を受け入れるには、南北が共に難儀な仕事に取り掛からねばならぬであろう。すなわち両者が共に、自己の政府が朝鮮民族の唯一の政府であるという項目を修正せねばならない。憲法を改

定し、自分たちの国土が白頭山から漢拏山までだと言わないことである。休戦ラインを国境と見なし、北朝鮮は鴨緑江と豆満江から休戦ラインまで、大韓民国は休戦ラインから漢拏山までとすべきである。それよりもさらに重要なことは、両政府がそれぞれ自己を朝鮮の正統性を備えた政府であると主張しないことである。事実そのままに、朝鮮半島が分断されたとき、南北にこのような二つの単独政府が設立されたのだと解すべきである。一九四八年の朝鮮民主主義人民共和国憲法では、首都はソウルとされていた。しかるに一九七二年の改憲の際には、その首都を平壌とした。このような改憲は現実を認めたものである。新世代ではすべての現実を現実のままに、その国の憲法に反映させることが望ましい。

諸外国は大韓民国ならびに朝鮮民主主義人民共和国と国交を樹立するに当たり、南北政府のこのような矛盾を黙認し、修好しているのである。どちらか一方の立場を支持しているのではない。東独と西独の分断でも、南北イエメンの分断でも、互いを独立した国家と認定していた。朝鮮の分断は、今の中国大陸と台湾のような分断形態になっている。本来ならば地理的にも政治的にも、朝鮮の分断は中国大陸と台湾の分断形態とは異なっているはずである。

とはいえ、以上のような提案に対し、あるいは朝鮮民族の永久分断を招来するものであると反対することもできよう。だが朝鮮民族は既に、このような分断のなかで半世紀を過ごしてしまったのである。このような受難の過去の困難さより、将来の解決が容易であるとは到底思われない。国の分断自体が悲痛であるのに、もはやかつての非現実的な主張を支持する必要はない。むしろ民族分断を認定し、互いに新たな和合の道を探ることがより望ましいのである。

現在北朝鮮では、米国・日本と国交を正常化しようとしている。それが困難な理由は、米国・日本の背後に、米韓・日韓の関係が作用しているからである。北朝鮮が韓国と国交を正常化すれば、米国と日本との国交正常化もその分容易になるだろう。韓国も米朝・日朝国交正常化に反対しないと口で言うのみでなく、実践に移し、朝鮮半島の二つの政府を認定し、名実ともに現実を反映する南北関係を築くことが望ましい。南北がこのように国交を正常化すれば、双方の政府どちらもが朝鮮民族のために少しずつ譲歩するようになるだろう。のみならず、南北交流のすべてが順調に運ばれるようになるはずである。

民族和合のための第二点は、金正日が南北間の対決と競争関係を、親善と協力の関係に変えることである。金日成の統治下では南北対話の機会にも、南の代表を、どこかの不法集団が偉大な首領様に朝貢すべくやってきたかのごとく取り扱った。加えて過去二〇年あまり、北は南について一言半句たりともよく言ったことがない。もちろんそこには、韓国側の誤りもあったはずである。だが、どうして四〇〇〇万韓国人が常に悪者たりえようか。これは過去の戦争当時から生じた分断が長く続き、甚だしい現状となっているのである。非現実的だと言わねばなるまい。

南北が互いに国交を樹立し大使を交換すれば、他の国々同様、その国の官僚や高官は彼を国の代表と認め、協議することだろう。国交を結べば、このような基本問題は解消する。だが法的な問題のみならず、民族的にも、あるいは人道的問題としても南北の対決はなくならねばならない。過去半世紀の対決が朝鮮民族にもたらしたものは、悲哀と憎悪でしかない。このような関係を親善と協力の関係に置き換

えることが望ましい。好例を挙げよう。南北対話で韓国が常に要求する離散家族の問題は、北朝鮮では受け入れ難い要求である。なぜならば離散家族とは、北朝鮮人が国の共産主義体制に反対し、父母妻子を捨てて南へ逃げたものである。その後彼らは、南で長いあいだ反共闘士として仕事をしていた。今や老い衰え、造物主のもとに逝く段となり、故郷を一目見て死にたいという。ところが、当時見捨てられた北朝鮮人としては受け入れ難いことである。これを人道的に考えることもできる。しかしこのような人々は、既に非人道的な別れをして北朝鮮を去った人々である。

金正日時代には、このような人々を許し、受け入れるべきだと言うのではない。親善と協力という言葉の意味は以下のごとし。金正日時代の人々、すなわち朝鮮戦争を知らない若者が主役である。とくに北朝鮮においては人民学校と高等中学校学生。そして韓国では初等学校と中高等学校学生。彼らを毎年交換し、南北の人々が同族であることをまず理解させる。そして彼らが成人し政策決定を担う頃には、いかばかりか深い理解ができるよう協力を図ろうというのである。

また文化的な交流も、どちらの誰がいかなる伝統をよりよく守ったとか、好手か拙劣かを争うような批判的な往来は好ましくない。朝鮮民族の文化遺産を互いに知り、そして学ぶ態度で親善を図らんとするのである。このような面でも金正日は機の熟したときには韓国を訪問し、民族の発展の様相を比較することが望ましい。

民族和合の第三点は、南北間の経済協力である。金正日は果敢に韓国との経済関係を樹立すべきであ

ろう。もちろん、直ちにせよというのではない。南北の国交が樹立され、北朝鮮の経済がある程度開発途上に及んだときの話である。金日成時代末葉には、南北の経済発展の格差が甚だしくなってしまった。南北の経済協力を論ずれば、それは経済援助を求めるがごときであった。しかしここでは、このような意味を含むのではない。ここに言う南北間の経済協力とは、南側の人と北側の人が共に働き、共に金を稼ごうということである。

北朝鮮人は韓国に行き、韓国人は北朝鮮へ行き、金を稼いで戻る。経済的に資本のある者は資本を、技術を有する者は技術を提供する。労働力を有する者は労働力を出し、経済的に協力せよということである。韓国では過去三〇年間、懸命に努力し、国力を上げ、そして豊かになった。北朝鮮には、なおも「貧しい」人民がたくさんいる。ここにいう経済協力とは、朝鮮民族から「貧しさ」を取り除くことを意味する。しかしより重要なことは、南と北の経済協力がある程度均等となって初めて、民族和合が可能となるということである。経済格差が甚だしいほど、民族和合は困難になる。

ここで言う経済協力は、南北の経済格差の甚だしい今日、北朝鮮が韓国と経済協力し、自己の当面の経済難を打開せよと言うのではない。ここでのそれは、そのような付け焼き刃ではない。朝鮮民族が末永く共に良い暮らしをしようということなのである。金正日の執政を契機に、北朝鮮人民の受難期に終止符を打ち、朝鮮民族の経済協力を始めようということである。

朝鮮民族は半世紀の間、分裂状態にあった。それがようやく、南でも北でも世代交代が始まった。民族和合に新たな努力を払うときが訪れたのだと思われる。また同時に、朝鮮民族にとっては苦難の世紀

であった二〇世紀が暮れようとしている。朝鮮の将来は、若い世代に確実に引き継がれつつある。彼らには、彼らの祖先が二〇世紀の受難を経てきたのとは対照的に、民族の和合を取りもどし、国を統一してほしい。彼らが明るい二一世紀に、良い暮らしが営めることを望みたい。金正日はこのような使命を有している。朝鮮の明るく、かつ繁栄する未来のためにも彼の努力は必須であると思われる。

著者あとがき

現代アジアの指導者群像研究の一環として、岩波書店から、北朝鮮の金日成と金正日についての著述の依頼を受けたとき、私には様々な思いが去来した。金日成については既に一書を書いている。金正日については、なおも研究すべき点が多く、この仕事のたやすからざることを思った。しかし岩波書店の望みでは、アカデミックな研究書ではないとのことである。彼ら二人の評伝よりは、この政治指導者たちがどのような環境と条件で、いかなる国を作り上げようとしたのか、その苦悩の軌跡と朝鮮の未来像について書いてほしいとのことであった。そしてさらに、独立運動や政治過程を学問的に扱う歴史概説書よりは、一般の読者に分かりやすく、朝鮮の特徴と前途について書いてほしいという。そこで私は勇気を出して書くことにした。

朝鮮半島は多くの問題を胚胎している。そのなかで最も大きなものは、朝鮮民族和合の問題である。朝鮮半島が分断されてから五〇年が過ぎ去った今日、韓国や北朝鮮の人々はこの問題が重要であることを認識しつつも、策がなく、手をこまねいている。現今でも韓国は北朝鮮を吸収しようと、その費用を計算し、北朝鮮はなおも南朝鮮の民族解放を叫んでいる。朝鮮半島の隣接諸国家も、いまでは朝鮮の分断を既成事実としている。朝鮮民族にとっては、この民族分断問題が、いかなる国際関係の問題よりもいっそう重要な問題である。二〇世紀末葉に至った今日、朝鮮民族の分断問題が、かつての日本の朝鮮

植民地化や、韓国・朝鮮人と日本人との日韓または日朝関係よりも、さらに大きな問題として浮かび上がってきたように思われる。また、アメリカと韓国との関係や中国と北朝鮮との関係、崩壊したソ連と北朝鮮との関係など、これらすべては朝鮮民族にとってはさしたる重要問題ではない。朝鮮民族には、自国を取り戻すことが急務である。

朝鮮戦争以後、南北関係では偏見がひどく増え、葛藤が甚だしくなった。韓国は経済発展を成し遂げたことで、南北競争に勝利したかのごとく自慢しているが、国と民族が分かれている状態で、いくら暮らしが良くなろうと何の意味があるのだろうか。同族の一方が良い暮らしをしていることが、どうして勝利に結びつくのであろうか。もちろん、貧しい暮らしよりは豊かな暮らしの方が良いに決まっている。しかし、それを主張するのは、自分の国にある金剛山や白頭山に行けないものが、「世界化」を主張するのと変わらない。北朝鮮も、漠然と朝鮮の正統性を独り主張するのではなく、北朝鮮人民総数の倍を越える韓国国民と朝鮮民族の将来のために和合するよう努力すべきであろう。民族解放運動は、もはや時代遅れである。韓国国民はアメリカに縛られて生きているのであり、韓国は北朝鮮が解放すべきだ、というほどの存在ではない。二一世紀は何よりも、朝鮮民族が自国を取りもどさねばならない世紀なのである。

朝鮮民族が一つになった時代から振り返ってみれば、今日の南韓と北朝鮮の歴史は分断史の一幕にすぎない。このような分断された二国の政権を一つにするには、韓国も北朝鮮も互いをよく知るべきである。今日韓国は開放され、開かれた社会になっているが、北朝鮮は閉鎖され、閉ざされた社会である。

事実、韓国は北朝鮮についてあまりにも知らなすぎる。そのため、韓国国民が北朝鮮について理性的に学ぶよりは、偏見が先立つことが多い。これはまた、北朝鮮が自らの社会を開放せず、国際社会の慣習から離脱することがあまりにも多いということにも起因する。韓国の大統領を殺害せんとするかと思えば、政府が国際的テロを試み、韓国の治安を攪乱したことも一度ならずあった。韓国軍の現代装備化に追いつけなくなると、自己の政権を維持保全しようと核兵器まで製造せんとする。これらすべては、朝鮮の分断を維持するには良い政策かも知れぬが、民族和合に背く行為である。

北朝鮮は最近になり、自分たちの指導者金日成を喪い、その息子金正日を新たな指導者として推戴した。彼自らが天命を得られぬためか、自然災害が引き続き起こっている。北朝鮮がいくら暮らしが貧しく、襤褸と飢えのなかにあろうとも、朝鮮民族の和合を成し遂げるためには、北朝鮮を研究し、理解し、よく知らねばならない。私は昔日の朝鮮独立運動と共産主義運動を偲び、北朝鮮の政治と指導者を研究した者である。私が北朝鮮について、他の人々より少しばかり理解しているとするならば、それをいかに、一般の読者に分かりやすく伝えることができるか、その思いで筆を執った。また、このような私の努力が、朝鮮民族の和合に少しでも寄与することができれば、筆者としてはこれ以上望むことはない。

この本を書こうと決心してからも、私にはなおも多くの込み入った問題があった。このような問題を解決していく上で、多くの人々の援助を賜った。幸いにも、一九九五年は私のサバティカルの年に当たるため、筆者の勤務するハワイ大学からは一年間の休暇を得ることができた。私はハワイ大学の朝鮮問題研究所を発展させ、育成しようと、二〇年あまりも働いてきたので、今回、このように校務に煩わさ

れず勉強できる時間は貴重なものであった。ハワイにそのまま居れば、どうしても校務に時間を奪われてしまうと思い、私は日本に来て勉強することにした。この本は、一九九五年、東京で著したものである。

筆者の日本滞在を積極的に援助して下さった方は、慶応大学の小此木政夫教授である。小此木教授のお世話で、私は慶応大学法学部訪問教授として招聘され、教育会館に研究室を得、この書を著すことができた。小此木教授とは旧知の仲だが、今回筆者が慶応大学を訪ねたとき、教授は同大学の地域研究センター所長に任命され、日本の学会の韓国および朝鮮問題の権威ある学者として広く知られていた。私がこの本を書くにおいて、多くのご援助を賜ったことに心から感謝の意を表したい。小此木教授の助けがなかったならば、この本を書き終えることができなかったかも知れない。

私のように外国から日本を訪れる者は、皆感じることではあるが、日本での生活は経済的に負担が大きい。この問題も小此木教授のお世話で、日韓交流基金から研究費を得ることで解決した。日韓交流基金の前田利一理事長と、私に多くの便宜を図って下さった安藤寿枝女史に格別の感謝の言葉をおくりたい。この基金は日本と韓国の学術交流を推進する上で大きく貢献している。両国の文化交流と親善とを図ることにおいても、この基金は役割上、大きな比重を占めている。さらに同基金では、多くの学者たちの優れた研究を支援している。

また小此木教授は、筆者の東京での生活を慮り、慶応インターナショナル・レジデンスに新たなアパートを御周旋くださった。私は宿舎が快適で、精神的な余裕を持って仕事をすることができた。常夏の

ハワイで暮らしてきた私にとって、東京の程良い冬の寒さは気分を爽快にさせ、精神を引き締めてくれた。この宿舎の親切な管理人、田口氏にも感謝したい。

この本を日本語に翻訳してくれた古田博司氏は、私の拙文を立派な日本語に置き換えてくれた。翻訳は新たなる創作であるという言葉は、この本のためにあるかのごときである。内容的な誤謬や至らぬ点は、もちろん著者の責任であるが、この本を日本人に分かりやすく訳出してくれたことは古田助教授の功労である。日本の若い朝鮮研究者として、古田氏ほど漢文と古典に通暁している人も多くはないと考える。また、彼の朝鮮思想史研究や朝鮮の宗教・習俗に関する論文は、韓国の哲学界や史学界、そのどこに出しても遜色のないものであると思う。彼の朝鮮語はいうまでもなく立派である。私はこのような日本の学者が、私の文を翻訳してくれたことに、満足のみならず誇らしく思い、古田博司氏に心から感謝するものである。

また、この本を著すにあたり、資料を集め、私の誤りを忌憚なく指摘してくれた鄭恵蘭君に謝意を表す。鄭君は北朝鮮の知識人について勉強している新進の研究員として、北朝鮮についての多くの資料を収集してくれた。自分自身の厖大な資料を、私に使いやすく整理してくれた。また、私の荒削りで筋の通らない韓国語の表現を直し、自身の勉強に奔走するさなか、私の全原稿をコンピュータに入力してくれた。このような学術的かつ献身的な助けに謝意を表したい。

この本の著述を初めて試みたときから脱稿まで、地道に懇切にお世話くださった岩波書店編集部の馬場公彦氏と坂巻克巳氏に感謝したい。この本の写真選定は、私が日本を離れて後、岩波書店でして下さ

り、最後の校正もここでして下さった。彼らと仕事を共にすることができたことは大変光栄であった。感謝の意を表したい。日本滞在中、私を支えてくれたすべての友人をここに挙げることはできないが、そのなかでも阪田恭代女史、坂井隆氏など、北朝鮮プロジェクトの研究会の友人たちに感謝したい。最後に韓国、西江大学の呉淇坪教授が、雨風もいとわず、昼夜も分かたず、この狭い東京の巷間を私と散歩を共にして下さったことを、ここに記しておく。

一九九六年八月

著者

主要参考文献

一　北朝鮮の文献(朝鮮語)

金日成による著述

『金日成選集』一巻―四巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九五三年―一九五四年。
『金日成選集』一巻―六巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九六〇年―一九六四年。
『金日成著作選集』一巻―一〇巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九六七年―一九九四年。
『金日成著作集』一巻―四二巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九七九年―一九九五年。
『自由と独立のための朝鮮人民の正義の祖国解放戦争』平壌、朝鮮労働党出版社、一九五四年。
『南朝鮮革命と祖国統一について』平壌、朝鮮労働党出版社、一九六九年。
『社会主義経済管理問題について』一巻―三巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九七〇年。
『主体思想について』平壌、朝鮮労働党出版社、一九七七年。
『世紀とともに』一巻―七巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九九二年―一九九六年。

歴史・年鑑

『朝鮮中央年鑑』一九五〇年版―一九九五年版、平壌、朝鮮中央通信社、一九五〇年―一九九五年。
社会科学院歴史研究所編『朝鮮全史』一巻―三四巻、平壌、科学・百科辞典出版社、一九七九年―一九九二年。
『偉大な首領金日成同志が領導なさった朝鮮人民の正義の祖国解放戦争史』一巻―三巻、平壌、科学・百科辞典総合出版社、一九九三年。
『朝鮮労働党歴史』平壌、朝鮮労働党出版社、一九九一年。

党会議関係資料

『北朝鮮労働党創立大会諸資料』平壌、北朝鮮労働党中央本部、一九四六年。
『北朝鮮労働党創立大会会議録』平壌、北朝鮮労働党中央本部、一九四六年。
『北朝鮮労働党第二次全党大会会議録』平壌、北朝鮮労働党中央委員会、一九四八年。
『北朝鮮人民会議会議録』平壌、北朝鮮人民会議常任委員会、一九四七年—一九四八年。

その他

『解放後一〇年日誌』平壌、朝鮮中央通信社、一九五五年。
『朝鮮民主主義人民共和国社会経済制度』平壌、朝鮮労働党出版社、一九五八年。
李羅英『朝鮮民族解放闘争史』平壌、朝鮮労働党出版社、一九五八年。
朝鮮労働党中央委員会直属党歴史研究所編『抗日パルチザン参加者たちの回想記』一巻—一二巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九五九年—一九六九年。
林春秋『抗日武装闘争時期を回想して』平壌、朝鮮労働党出版社、一九六〇年。
『抗日武装闘争戦跡地をたずねて』平壌、朝鮮労働党出版社、一九六〇年。
白峯『民族の太陽金日成将軍』一巻—二巻、平壌、人文科学社、一九六八年—一九六九年。
『赤い光輝(ヘッパル)のもと抗日革命二〇年』一巻—五巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九七九年。
『偉大な首領金日成同志伝記』一巻—三巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九八二年。
『人民の指導者』一巻—二巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九八二年—一九八四年。
金正日『金正日選集』一巻—二巻、平壌、朝鮮労働党出版社、一九九二年—一九九三年。

二　韓国の文献(朝鮮語)

『南北朝鮮諸政党社会団体代表者聯席会議重要資料集』ソウル、新興出版社、一九四八年。

呉泳鎮『一つの証言――作家の手記』ソウル、国民思想指導院、一九五二年。
金南植『実録南労党』ソウル、新現実社、一九七五年。
金俊燁・金昌順『韓国共産主義運動史』一巻―五巻、ソウル、亜細亜問題研究所、一九六七年―一九七六年。
北韓年鑑刊行委員会編輯『北韓総鑑(一九四五年―一九六八年)』ソウル、共産圏問題研究所、一九七六年。
『北韓全書』上・中・下巻、ソウル、極東問題研究所、一九七四年。
中央日報社附設東西問題研究所編著『北韓人名辞典』ソウル、中央日報社、一九八三年(修正増補版)。
国史編纂委員会編『北韓関係史料集』一巻―一四巻、ソウル、国史編纂委員会、一九八二年―一九八九年。
国土統一院調査研究室編『朝鮮労働党大会資料集』一巻―四巻、ソウル、国土統一院、一九八八年。
国土統一院調査研究室編『北韓最高人民会議資料集』一巻―四巻、ソウル、国土統一院、一九八八年。
李相禹『北韓四〇年、朝鮮民主主義人民共和国の特性と変遷過程』ソウル、乙酉文化社、一九八八年。
梁性喆『北韓政治論』ソウル、博英社、一九九一年。
朝鮮日報社編『北韓――その衝撃の実情』ソウル、『月刊朝鮮』新年号付録、一九九一年。
中央日報特別取材班『秘録、朝鮮民主主義人民共和国』上・下巻、ソウル、中央日報社、一九九二年―一九九三年。
中央日報特別取材班『金正日――韓半島折半の相続人』ソウル、中央日報社、一九九四年。
李チャンヘン『人間金正日、「首領」金正日――その時代と北韓社会』ソウル、ヨルリン・セーサン（開かれた世）、一九九四年。

三　中国の文献(中国語)

孫杰『東北抗日聯軍第四軍』巴黎、救国出版社、一九三六年。
雷丁『東北義勇軍運動史話』上海、天馬書店、一九三七年。
馮仲雲『東北抗日聯軍十四年苦闘簡史』哈爾濱、一九四六年。
紀雲龍『楊靖宇與抗連第一路軍』東北、一九四六年。
李杜・周保中『東北的黒暗與光明』上海、歴史資料供応社、一九四六年。

劉白羽『還行東北』上海、方生出版社、一九四六年。
黒竜江社会科学院地方党史研究所・東北烈士記念館編『東北烈士伝』一巻―三巻、哈爾濱、黒竜江人民出版社、一九八〇年―一九八一年。
姜念東他『偽満洲国史』長春、吉林人民出版社、一九八〇年。
周保中『戦闘在白山黒水』瀋陽、遼寧人民出版社、一九八三年。
中共中央党史資料征集委員会編『中共党史資料』第一輯―第五四輯、北京、中共党史資料出版社、一九八二年―一九九五年。

四　日本の文献(日本語)

朝鮮総督府警務局『最近に於ける朝鮮治安状況――昭和八年・十三年』京城、朝鮮総督府、一九三三年・一九三八年。
軍政部軍事部調査部『満洲共産匪の研究』第一輯―第二輯、新京、興亜印刷局、一九三六年―一九三七年。
司法省刑事局第五課『思想情勢視察報告集、其の四(満洲に於ける共産主義運動)』、一九三八年。
満洲国治安部警務司『満洲国警察史』上・下巻、一九四二年。
坪江汕二編『北鮮の解放十年――金日成独裁政権の実態』東京、日刊労働通信社、一九五六年。
金正明編『朝鮮独立運動』一巻―五巻、東京、原書房、一九六七年。
加藤豊隆『満洲国警察小史』一巻―三巻、松山、元在外公務員援護会、一九六八年・一九七四年・一九七六年。
満洲国軍刊行委員会編『満洲国軍』東京、蘭星会、一九七〇年。
金炳植『金日成首相の思想』東京、読売新聞社、一九七二年。
崔仁秀『人民の指導者、金正日書記』一巻―二巻、東京、雄山閣、一九八三年―一九八四年。
西村成雄『中国近代東北地域史研究』京都、法律文化社、一九八四年。
鐸木昌之『北朝鮮――社会主義と伝統の共鳴』東京、東京大学出版会、一九九二年。
和田春樹『金日成と満州抗日戦争』東京、一九九二年。
『金正日略伝』東京、雄山閣、一九九五年。

五　英語文献

Cumings, Bruce. *The Origins of the Korean War: Vol. I (1945-1947) and Vol. II (1947-1950)*. Princeton: Princeton University Press, 1981.

Koh, B. C. *The Foreign Policy Systems of North and South Korea.* Berkeley: University of California Press, 1984.

Lee, Chong-sik. *Revolutionary Struggle in Manchuria: Chinese Communism and the Soviet Interests, 1922-1945.* Berkeley: University of California Press, 1983.

Noble, Harold Joyce. *Embassy at War.* Seattle: University of Washington Press, 1975.

Scalapino, Robert A. and Chong-sik Lee. *Communism in Korea,* 2 vols. Berkeley: University of California Press, 1972.

Second Asian Seminar, 2 vols. Colombo: Asian Economic Bureau, 1972.

Suh, Dae-sook. *The Korean Communist Movement, 1918-1948.* Princeton: Princeton University Press, 1967.

Suh, Dae-sook. *Korean Communism, 1945-1980.* Honolulu: University of Hawaii Press, 1981.

Suh, Dae-sook. *Kim Il Sung: the North Korean Leader.* New York: Columbia University Press, 1988.

United States Department of State. *Foreign Relations of the United States, 1947, 1950.* Vols. 6 and 7, Far East. Washington, D. C.: Government Printing Office, 1972 and 1974.

United States Department of State. *North Korea: A Case Study in the Technique of Takeover.* Washington D. C.: GPO, 1961.

六　ロシア語文献

Chistiakov, Ivan M. *Osvobozhdenie Korei* [Korean Liberation]. Moscow: Akademii nauk, 1976.

Gribachev, Nikolai M. *Stikhotvireniia i poemy* [Verses and Poems]. Moscow: Gos. Izd., 1958.

Istoria Korei [Korean History], 2 vols. Moscow: Izd. Nauka, 1974.

Kim, G. F. "Ekonomicheskoe razvitie Koreiskoi Narodno-Demokraticheskoi Respubliki,"[Economic Development of the Democratic People's Republic of Korea] in *Voprosy Ekonomiki*, no. 8. 1955.

Otnosheniia Sovetskogo Soiuza s narodnoi Korei, 1945-1980: dokymentii i materiallii[Relations between the Soviet Union and the Korean People, 1945-1980: Documents and Materials]. Moscow: Izd. Nauka, 1981.

Lebedev, N. G., "S Soznaniem ispolnennogo dolga"[In Consciousness of Fulfilled Duty]in *Osvobozhdenie Korei*. Moscow: Akademii nauk, 1976.

Samsonov, A. M. *Stalingrad bitva*[Battle of Stalingrad]. Moscow: Izd. Nauka, 1968.

Sapozhnikov, B. G. "Iz istorii sovetsko-koreiskoi druzvy"[From the History of Soviet-Korean Friendship]in *Osvobozhdenie Korei*. Moscow: Akademii nauk, 1976.

Shabshina, F. I. *Narodnoe vosstanie 1919 goda v Koree*[The Popular Uprising of 1919 in Korea]. Moscow: Izd-vo. Akademii nauk, 1952.

年表

一九一二	四・一五	金日成、万景台にて金亨稷と康盤石の長男として生まれる。
一九二六	六・五	父、金亨稷死亡。
一九二七	一・一七	吉林毓文中学に入学。
一九二九	秋	吉林監獄に投獄される。
一九三〇	五	監獄より出獄。
一九三二	四・二五	金日成が安図で、初めて抗日遊撃隊を組織したといわれる。
	七・三一	母、康盤石死亡。
一九三六	二	東北抗日聯軍が創設され、楊靖宇が総司令に任命される。
	六・一〇	在満韓人祖国光復会が設立された。
一九三七	六・四	普天堡戦闘。
一九三八	一一	金日成、第二方面軍長に任命される。
一九四〇	末	金日成、金貞淑と結婚。翌年、満州からソ連沿海州にのがれる。
一九四二	二・一六	金正日、金日成と金貞淑の長男として沿海州に生まれる。
一九四五	八・一五	日本が降伏し、朝鮮が解放される。
	九・一九	金日成、帰国。元山港に上陸。
	一二・一七	金日成、朝鮮共産党北朝鮮分局委員長に選出される。
一九四六	二・八	金日成、北朝鮮臨時人民委員会委員長に選出される。
	八・二八	北朝鮮労働党創党大会開催。

一九四七	二・一七	第一回北朝鮮人民会議開催。
一九四八	二・八	朝鮮人民軍創軍。
	三・二七	北朝鮮労働党第二回全党大会開催。
	九・九	朝鮮民主主義人民共和国樹立。
一九四九	六・三〇	北朝鮮労働党と南朝鮮労働党が合党し、朝鮮労働党となる。
	九・二二	金日成の妻、金貞淑死亡。
一九五〇	六・二五	朝鮮戦争勃発。
	一〇・二五	中国義勇軍、朝鮮戦争に参戦。
一九五三	七・二七	休戦協定が調印され、朝鮮戦争終わる。
	九・一〇	金日成、経済援助を受けるため、ソ連を訪問。
	一一・一二	金日成、経済援助を受けるため、中国を訪問。
一九五五	一二・二八	金日成、主体思想について初めて言及する。
一九五六	四・二三	朝鮮労働党第三回全党大会開催。
一九五七	九・一八	第二期最高人民会議開催。
一九五八	三・三	第一回朝鮮労働党代表者会議開催。
一九六〇	二	金日成、青山里方法を発表。
	九	金正日、金日成総合大学政治経済学科に入学。
一九六一	九・一一	朝鮮労働党第四回全党大会開催。
一九六二	一〇・二二	第三期最高人民会議開催。
	一二	大安事業体系を樹立。
一九六三		金日成、金聖愛と再婚。
一九六四	三	金正日、金日成総合大学を卒業。
一九六五	四・一〇	金日成、インドネシアを訪問し、北朝鮮の自主路線を闡明にする。

一九六六	一〇・五	第二回朝鮮労働党代表者会議開催。
一九六七	一二・一四	第四期最高人民会議開催。
一九六八	一・一六	北朝鮮テロ団、朴正煕大統領の暗殺を企て、失敗。
	一・二三	北朝鮮、米国の情報艦艇プエブロ号を拿捕。
一九七〇	一一・二	朝鮮労働党第五回全党大会開催。
一九七二	七・四	南北七・四共同声明発表。統一の三大原則で合意。
	一二・二五	第五期最高人民会議開催。
	一二・二七	朝鮮民主主義人民共和国新憲法発布。
一九七三	六・二五	祖国統一五大方針発表。
一九七四		朝鮮労働党第五期中央委員会第九次全員会議を秘密裏に開催。金正日の後継問題を討議。
一九七五	一一	金正日、三大革命赤旗争取運動を発表。
一九七七	一二・一五	第六期最高人民会議開催。
一九八〇	一〇・一〇	朝鮮労働党第六回全党大会開催。金正日、公式に後継者となる。
一九八二	四・五	第七期最高人民会議開催。
一九八三	一〇・九	北朝鮮テロ団、全斗煥大統領暗殺を企て、失敗。
一九八四	二・一六	金正日、誕生日記念として「人民生活をさらに高めることについて」という論文を発表。
一九八五	九	南北代表一五一名が、ソウルと平壌を交換訪問し、文化交流を行う。
一九八六	一二・二九	第八期最高人民会議開催。
一九九〇	五・二四	第九期最高人民会議開催。
一九九一	一二	金正日、朝鮮人民軍総司令官に推戴される。
一九九二	四・八	一九七二年朝鮮民主主義人民共和国憲法を改憲。
	四・二五	金正日、朝鮮人民軍元帥に任命される。
一九九三	四・九	金正日、第九期最高人民会議第五次会議で国防委員長に選出される。

年	月日	事項
一九九四	七・八	金日成死亡。
一九九五	二・二五	呉振宇死亡。

訳者あとがき

本書は、ハワイ大学政治学・徐大粛教授が岩波書店の本シリーズのために書き下ろされた「金日成と金正日」の全訳である。同書店の依頼を受け、古田博司がこれを原稿に忠実に翻訳した。

著者について簡単に紹介するならば、徐大粛教授は朝鮮共産主義運動史、北朝鮮現代政治研究の分野で先駆者にして、今日斯学会の泰斗と称されるにふさわしい存在である。コロンビア大学で博士号を取得され、ハワイ大学朝鮮研究所所長を経て、現在はハワイ大学政治学教授として研究・教育・後継者育成に多忙な日々を送っておられる。この間、研究の主要なものだけでも、The Korean Communist Movement 1918-1948(Princeton: Princeton University Press, 1967); Documents of Korean Communism(Princeton: Princeton University Press, 1970); Communist Party Leadership: Political Leadership in Korea(Washington: University of Washington Press, 1976); Korean Communism, 1945-1980(Honolulu: University of Hawaii Press, 1981); Kim Il Sung: the North Korean Leader(New York: Columbia University Press, 1988)(日本での翻訳書は、第一については、金進訳『朝鮮共産主義運動史 一九一八―一九四八』コリア評論社、一九七〇年。第五については、林茂訳『金日成――思想と政治体制』お茶の水書房、一九九二年、がある)など、実に多くの労作を発表され、世界的に高い評価を得ている。

一九九〇年に、訳者が初めてお目にかかったときの徐教授の回顧談によれば、お生まれは満洲(現中国

東北地方）吉林省龍井、井戸より龍の出るごとく多くの名士を輩出した地とのことである。当地は「間島パルチザン」の本拠地であるが、徐教授の生家はキリスト教長老派の牧師であり、その故で解放後は南のソウルに渡られた。ソウル高等学校卒業後、延禧大学一学年で朝鮮戦争に遭われ、五二年に渡米、以後アメリカでの学究生活に入られた。訳者はその翌年の生まれであるから、著者とは師匠と弟子ほどの年の開きがある。

教授は、飄々とした大人の趣のある方で、瑣事に拘泥せず、しかるに発言なさるときは快刀乱麻を断つ迫力のある方、そのように訳者には見える。原稿もそのような朝鮮語で綴られている。韓国の、いわゆる文人体の「～にもかかわらず」「～のみならず」「なぜならば～」と、延々と行を連ねていく文体ではない。歯切れの良い簡潔な文が、短いセンテンスで続く。このような韓国に見られぬ軽快な文体を訳しえたことは、訳者にとっては貴重な体験であった。訳者はこれを、日本語でリズミカルに読めるように語音に配慮しつつ訳した。

本書の内容については、訳者は解説する立場にない。国も違い、年も違い、思想も異なる。ただ著者の筆から溢れ出る、爽快な「朝鮮精神」に惹かれて訳し終えたのである。

それは太古から、朝鮮民族が己のうちに培ってきたものなのかもしれない。国が南北に分かれようとも、著者の胸の中には常に真の朝鮮の姿というものが、熱くある。その純正の姿から見るとき、北も南も真なるものを全うしていない。北朝鮮の指導者、金日成・金正日に至るも然りである。著者はある時は彼らを誉め、ある時は叱ってしまう。これは日本の読者にとっては驚きかもしれない。政治的なるも

のからの離脱や、為政者からの距離を娯しむ、日本文人の筆とは明らかに異なるからである。
朝鮮の文人は為政者を自己から切り放さない。自己は常に政治的なるものの内側にいる。しかして為政者の施策に、あるいは慨嘆して胸を打ち、あるいは拍手喝采を送るのである。
為政者も文人から目を離さない。徐大粛教授が著書の日本語版『朝鮮共産主義運動史』を出されたとき、アメリカの学者としては初めて北朝鮮を訪れた。一九七四年のことという。このとき徐教授は金日成主席に会うのだが、金日成主席は既に徐教授の本を通読していたという。為政者と文人との間にこのような伝統を有するのが、朝鮮なのである。このような伝統は、同時に筆禍や士禍(文人の粛清)などの激しい歴史をこの国に刻んで今日に至っている。
徐大粛教授もこの伝統の線上にある人である。共産主義運動の研究者であるにもかかわらず、共産主義者と誤解され、長い間、韓国に入国することができなかった。後、朴正熙大統領に呼ばれ、ようやく入国がかなった。今では自由に北へも南へも往来できる著者ではあるが、当初はこのような試練があったと聞く。
読者はすぐに気づかれることと思うが、著者の筆にはハイパー・リアルなところがある。南にも北にも立脚点を置かず、それを越えたところから等距離で両者を見ている。偏狭な民族主義とはもとより無縁である。しかし著者により、民族の真の姿は常に問われている。その姿の実現にむけて、己の筆を貫くところ、そこに訳者は「朝鮮精神」を見ている。慨嘆するが、飄々と爽快であり、説教癖はあるが若者のようである。いつも胸に祖国に対する熱い思いがあり、それがふつふつとたぎっている。そしてこ

の本は間違いなく、北朝鮮で訳され、金正日書記の目に触れることになるであろう。北朝鮮の為政者が、その熱いものを著者と共有するであろうことを、訳者は願わずにはいられない。
最後に、この原稿を訳し終えた今、訳者は日本の対朝鮮認識を思っている。
現在中年の方はよく御存知と思われるが、かつて一九七〇年代では、南の韓国が「暗黒の独裁国」、北朝鮮が「人民の楽園」という構図が、日本の知識人の間で少なからず見られた。それが八〇年代の韓国の経済的隆盛とともに逆転していった。当初の間違ったものが逆転すれば、正しくなるというものではない。日本の朝鮮認識自体に、単純な善悪二元論が存在するかぎり、我々は朝鮮認識において誤り続けるのではないだろうか。
北朝鮮の国の成り立ち、その変遷過程、そして今日に至り派生してきた問題点など、本書は平易に一般読者に語りかけてくれる。本書はもとより、北朝鮮研究の第一級の研究者により書かれたものである。熱い著者の思いは、その積み重ねられた業績を裏打ちする、冷静なる歴史分析・現状分析の中で息づくものである。その歴史と現状の記述を通して、我々は北朝鮮という国とその為政者たちについて、ふたたび過つことのない深い認識を手に入れたいものである。
翻訳を終えるに当たり、訳者の訳出上の注意点について申し述べたい。まず原稿中にある著者の付加説明は、これを丸括弧で示した。訳者が日本の読者のために、さらに付加説明が必要と判断したところには、亀甲括弧でこれを示し、字体を小さくしてある。翻訳は直訳を重んじ、原稿を忠実に日本語に置き換えることを目指した。しかし、訳者の専門は朝鮮思想史ならびに北朝鮮の思想教化の分析であり、

北朝鮮初期の成立史や、その制度史についてはあまり詳しくない。この点で思わぬ誤訳があるやもしれない。真摯に読者諸兄のお教えを乞いたい。

また漢文調の文体は、訳者の専門ゆえの筆使いからきている。著者の原稿の文体は、訳者の文体より若々しい。

かつて某研究プロジェクトで徐大粛先生とご一緒したとき、先生が多くの日本人研究者たちに、自分は皆さんより先に日本語を覚えた、とおっしゃったことがあった。いうまでもなく、日本植民地時代に日本語を覚えた世代であることを、冗談めかしておっしゃったのである。しかし、と先生は続けられた。古田さんだけは私よりもっと先に、李朝時代あたりに覚えたのかもしれない、と言い添えられた。古田の文体が漢文調で、年寄りじみていることを、お得意のユーモアで指摘されたのである。

奇しき縁で、二〇歳以上も年の離れた古田が、先生の若々しい御原稿を金日成世代のように訳すこととなった。この間、訳出に当たり、訳者の翻訳の至らぬ点を辛抱強くお教え下さった徐大粛先生に、あらためて感謝の意を表したい。また、ここには列挙しないが、北朝鮮研究者の多くの友人たちにも深く感謝したい。岩波書店の坂巻克巳氏と馬場公彦氏には、訳者の遅筆で多大なご迷惑をかけた。お詫びとともに感謝の意を表したい。

最後に妻、金寿美子にあて、感謝の言葉をここに書き連ねることをお許し願いたい。妻は本翻訳の下訳を手伝ってくれた。彼女の内助の功がなければ、この翻訳は完成しなかっただろう。あらためて感謝したい。

我々の時代は、もうすぐ二一世紀である。隣国である朝鮮に対する我々の認識がいっそう深まり、本書を読み、朝鮮に関心を持つ人が一人でも増えてくれることを祈りつつ、訳者の筆を擱くこととする。

一九九六年八月

訳　者

金日成と金正日——革命神話と主体思想
現代アジアの肖像 6

1996年9月27日　第1刷発行

著　者　徐大粛（ソデスク）
訳　者　古田博司（ふるたひろし）

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電　話　案内 03-5210-4000

印刷・三秀舎　カバー・錦印刷　製本・三水舎

ISBN4-00-004861-9　Printed in Japan

ISBN4-00-004861-9 C0322 P2500E
定価2500円(本体2427円)